

九州横断自動車道関係

埋蔵文化財調査報告

—18—

朝倉郡朝倉町所在上の原遺跡の調査 I

1990

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—18—

朝倉郡朝倉町所在上の原遺跡の調査 I

序

本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託を受けて、昭和54年度から実施している九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

今回の報告書は、昭和60年度に調査した朝倉郡朝倉町上の原遺跡の第1冊目で、今後もその調査結果を順次報告していく予定であります。

発掘調査の報告としては、満足のいくものではありませんが、本書を通して地域の文化財ならびに歴史に対する認識と理解を深める一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり数々の御指導・御協力を頂いた地元の方々をはじめ、関係各位に対して心から感謝申し上げます。

平成2年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 御手洗 康

例　　言

1. 本書は、昭和60年度に福岡県教育委員会が、日本道路公団から委託を受けて、九州横断自動車道建設に伴い破壊される遺跡の発掘調査を実施した上の原遺跡の第1冊目の報告書で、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書の第18冊目にあたる。
2. 遺構の実測は、井上裕弘・木村幾多郎が主にあたり、高田一弘・平嶋文博・田中康信・中村光恵・渡辺輝子・後藤カミヨ・矢野静子・牟田サエ子・萩原瑞江氏の協力を得た。写真撮影は井上と木村が行った。
3. 出土遺物の整理は、岩瀬正信氏の指導のもとに九州歴史資料館と文化課甘木発掘調査事務所で行った。また、鉄器の処理は九州歴史資料館の横田義章氏が行った。
4. 出土遺物の写真撮影は、九州歴史資料館石丸洋・矢野明美・須原悦子氏が行った。実測は井上・木村の他に、文化課甘木発掘調査事務所の松嶋邦子・原田和枝・高瀬照美・渡辺輝子氏の多大な協力を得た。
5. 製図は井上・木村の他に、文化課甘木調査事務所の塩足里美氏の協力を得た。
6. 貯蔵穴番号については、報告時に変更したため、調査時の番号との対照は表1～4に示した。
7. 本書の執筆は、井上と木村が分担し、それぞれ文末に記した。
8. 本書の編集は、井上が行った。

本文目次

上の原遺跡の貯蔵穴群の調査

I 調査の経過	(井上) 1
II 位置と環境	(井上) 6
III 貯蔵穴と出土遺物	(井上・木村) 9
IV おわりに	162
1. 貯蔵穴について	(木村) 162
2. 貯蔵穴出土の土器群について	(井上) 169
3. 円盤状土器片について	(木村) 171
4. イイダコ壺形土製品	(木村) 173

図版目次

本文対照頁

図版 1	(1) 上の原遺跡周辺航空写真.....	1
	(2) 上の原遺跡貯蔵穴群全景気球写真.....	9
図版 2	(1) 1~6号貯蔵穴群全景(北西から).....	9
	(2) 1号貯蔵穴(右)・土礫(北から).....	9
図版 3	(1) 3号貯蔵穴(南西から).....	13
	(2) 4号貯蔵穴(南西から).....	17
図版 4	(1) 5号貯蔵穴(南西から).....	17
	(2) 6号貯蔵穴(南西から).....	17
図版 5	(1) 8~24号貯蔵穴群全景(北から).....	21
	(2) 13~20号貯蔵穴群(北から).....	24
図版 6	(1) 13号貯蔵穴(北から).....	24
	(2) 14号貯蔵穴(北から).....	26
図版 7	(1) 17号貯蔵穴(東から).....	26
	(2) 14~20号貯蔵穴群(北から).....	26
図版 8	(1) 19号貯蔵穴(東から).....	28
	(2) 20~24号貯蔵穴群(北東から).....	29
図版 9	(1) 21号貯蔵穴(西から).....	29
	(2) 22~24号貯蔵穴群(北から).....	29
図版 10	(1) 26号貯蔵穴(北から).....	32
	(2) 27号貯蔵穴(北から).....	36
図版 11	(1) 28号貯蔵穴(南東から).....	39
	(2) 28号貯蔵穴内土器出土状態(北から).....	39
図版 12	(1) 29号貯蔵穴(北から).....	42
	(2) 30号貯蔵穴(南から).....	45
図版 13	(1) 31・32号貯蔵穴(北から).....	45
	(2) 33号貯蔵穴(北から).....	47
図版 14	(1) 35号貯蔵穴(南から).....	50
	(2) 36号貯蔵穴(北から).....	53
図版 15	(1) 37号貯蔵穴(東から).....	53
	(2) 40号貯蔵穴(北東から).....	56

図版 16	(1) 42~55号貯蔵穴群 (北東から)	57
	(2) 42~44号貯蔵穴群 (北から)	57
図版 17	(1) 44号貯蔵穴 (北東から)	59
	(2) 44~55号貯蔵穴群 (北東から)	59
図版 18	(1) 46号貯蔵穴 (東から)	63
	(2) 47号貯蔵穴 (東から)	63
図版 19	(1) 49・50号貯蔵穴 (北東から)	66
	(2) 51・52・54号貯蔵穴群 (北東から)	66
図版 20	(1) 51・52号貯蔵穴 (北から)	66
	(2) 49~51・54・55号貯蔵穴群 (北から)	66
図版 21	(1) 54号貯蔵穴 (北から)	68
	(2) 50~57号貯蔵穴群 (北から)	70
図版 22	(1) 56・57号貯蔵穴 (北東から)	70
	(2) 62号貯蔵穴 (東から)	75
図版 23	(1) 63号貯蔵穴 (東から)	78
	(2) 65号貯蔵穴 (北から)	79
図版 24	(1) 66・67号貯蔵穴 (東から)	79
	(2) 68・69号貯蔵穴と 6・16号竪穴 (西から)	81
図版 25	(1) 70号貯蔵穴 (北から)	84
	(2) 71号貯蔵穴 (北から)	84
図版 26	(1) 72号貯蔵穴 (北東から)	84
	(2) 72号貯蔵穴内土器出土状態 (西から)	84
図版 27	(1) 73号貯蔵穴 (北から)	85
	(2) 74~77号貯蔵穴群 (北から)	87
図版 28	(1) 78~80号貯蔵穴群 (北東から)	93
	(2) 81号貯蔵穴 (北東から)	98
図版 29	(1) 84号貯蔵穴 (東から)	101
	(2) 84号貯蔵穴内土器出土状態 (北から)	101
図版 30	(1) 85号貯蔵穴 (北西から)	101
	(2) 88・89号貯蔵穴と 15号土壤 (南から)	104
図版 31	(1) 90号貯蔵穴 (東から)	104
	(2) 91号貯蔵穴 (東から)	104
図版 32	(1) 93号貯蔵穴 (東から)	106

	(2) 94・95号貯蔵穴（北から）	106
図版 33	(1) 96号貯蔵穴（北から）	109
	(2) 97・98号貯蔵穴（北から）	112
図版 34	(1) 99号貯蔵穴（北から）	112
	(2) 100号貯蔵穴（東から）	112
図版 35	(1) 101～104号貯蔵穴群（東から）	115
	(2) 101号貯蔵穴（南から）	115
図版 36	(1) 106号貯蔵穴（北東から）	119
	(2) 107号貯蔵穴（北東から）	121
図版 37	(1) 108号貯蔵穴（北から）	122
	(2) 113号貯蔵穴（北から）	124
図版 38	110～133号貯蔵穴群全景（北西から）	124
図版 39	(1) 123～125号貯蔵穴群と190号住居跡（東から）	138
	(2) 128～132号貯蔵穴群（北東から）	148
図版 40	(1) 138号貯蔵穴（南から）	157
	(2) 139号貯蔵穴（北から）	157
図版 41	貯蔵穴出土土器 1	11
図版 42	貯蔵穴出土土器 2	64
図版 43	貯蔵穴出土土器 3	88
図版 44	貯蔵穴出土土器 4	100
図版 45	貯蔵穴出土土器 5	113
図版 46	貯蔵穴出土土器 6	129
図版 47	貯蔵穴出土土器 7	139
図版 48	(1) 貯蔵穴出土土器 8	156
	(2) 貯蔵穴出土石器	53
図版 49	(1) 貯蔵穴出土石器 1	20
	(2) 貯蔵穴出土石器 2	40
図版 50	(1) 貯蔵穴出土土製品 1	52
	(2) 貯蔵穴出土土器 9	52
図版 51	(1) 貯蔵穴出土土製品 2	35
	(2) 貯蔵穴出土土製品 3	35
図版 52	(1) 貯蔵穴出土土製品 4	15
	(2) 貯蔵穴出土土製品 5	16

図 版 53 (1) 貯蔵穴出土鉄器.....	78
(2) 縄文土器.....	25

挿 図 目 次

第 1 図 九州横断自動車道路線図.....	2
第 2 図 上の原遺跡とその周辺地形図 (1/10,000)	3
第 3 図 上の原遺跡とその周辺遺跡分布図 (1/50,000)	6
第 4 図 上の原遺跡調査地区と付近地形図 (1/3,000)	7
第 5 図 貯蔵穴配置図 (1/300)	9
第 6 図 1 ~ 3 号貯蔵穴実測図 (1/40)	10
第 7 図 1 ~ 2 号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	11
第 8 図 3 号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	12
第 9 図 3 ~ 4 号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	14
第 10 図 貯蔵穴出土土製品実測図 1 (1/2)	15
第 11 図 貯蔵穴出土土製品実測図 2 (1/2)	16
第 12 図 4 ~ 8 号貯蔵穴実測図 (1/40)	18
第 13 図 5 ~ 9 号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	19
第 14 図 貯蔵穴出土石器実測図 1 (1/2)	20
第 15 図 9 ~ 13号貯蔵穴実測図 (1/40)	22
第 16 図 10 ~ 15・17 ~ 19号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	23
第 17 図 貯蔵穴出土縄文土器実測図 (1/2・1/3)	25
第 18 図 14 ~ 18号貯蔵穴実測図 (1/40)	27
第 19 図 19 ~ 21号貯蔵穴実測図 (1/40)	28
第 20 図 22 ~ 25号貯蔵穴実測図 (1/40)	30
第 21 図 21・23 ~ 25号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	31
第 22 図 26 ~ 28号貯蔵穴実測図 (1/40)	33
第 23 図 26号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	34
第 24 図 貯蔵穴出土土製品実測図 3 (1/2)	35
第 25 図 27号貯蔵穴出土土器実測図 1 (1/4)	37
第 26 図 27号貯蔵穴出土土器実測図 2 (1/4)	38

第 27 図	貯藏穴出土石器実測図 2 (1/3)	40
第 28 図	28号貯藏穴出土土器実測図 1 (1/4)	41
第 29 図	28号貯藏穴出土土器実測図 2 (1/4)	42
第 30 図	29~32号貯藏穴実測図 (1/40)	43
第 31 図	29·30号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	44
第 32 図	32号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	46
第 33 図	32~34号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	48
第 34 図	33~36号貯藏穴実測図 (1/40)	49
第 35 図	35~37号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	51
第 36 図	貯藏穴出土土器製品実測図 4 (1/2·1/3)	52
第 37 図	37~40号貯藏穴実測図 (1/40)	54
第 38 図	38~43号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	55
第 39 図	41~44号貯藏穴実測図 (1/40)	58
第 40 図	44号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	60
第 41 図	45·46号貯藏穴実測図 (1/40)	61
第 42 図	45号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	62
第 43 図	46·47·49·51·52号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	64
第 44 図	47~50号貯藏穴実測図 (1/40)	65
第 45 図	51~55号貯藏穴実測図 (1/40)	67
第 46 図	54号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	69
第 47 図	55~57号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	71
第 48 図	56~59号貯藏穴実測図 (1/40)	72
第 49 図	58号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	74
第 50 図	59~65号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	76
第 51 図	60~63号貯藏穴実測図 (1/40)	77
第 52 図	貯藏穴出土鉄器実測図 (1/2)	78
第 53 図	64~68号貯藏穴実測図 (1/40)	80
第 54 図	66~71号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	82
第 55 図	69~71号貯藏穴実測図 (1/40)	83
第 56 図	72·73号貯藏穴実測図 (1/40)	86
第 57 図	72号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	87
第 58 図	73号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	88
第 59 図	74~77号貯藏穴実測図 (1/40)	90

第 60 図	74号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	91
第 61 図	75~77号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	92
第 62 図	78~81号貯藏穴実測図 (1/40)	95
第 63 図	78号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	96
第 64 図	79~80号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	97
第 65 図	82~84号貯藏穴実測図 (1/40)	99
第 66 図	81·83·84号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	100
第 67 図	85~89号貯藏穴実測図 (1/40)	102
第 68 図	85号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	103
第 69 図	88~90号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	105
第 70 図	90~93号貯藏穴実測図 (1/40)	107
第 71 図	91~93号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	108
第 72 図	94~98号貯藏穴実測図 (1/40)	110
第 73 図	94·95号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	111
第 74 図	96~100号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	113
第 75 図	99~101号貯藏穴実測図 (1/40)	114
第 76 図	101号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	116
第 77 図	101~105号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	117
第 78 図	102~105号貯藏穴実測図 (1/40)	118
第 79 図	106~109号貯藏穴実測図 (1/40)	120
第 80 図	106·107号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	121
第 81 図	108·110号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	123
第 82 図	110~113号貯藏穴実測図 (1/40)	125
第 83 図	112·113号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	126
第 84 図	114~119号貯藏穴実測図 (1/40)	128
第 85 図	114号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	129
第 86 図	114~117号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	130
第 87 図	118号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	132
第 88 図	119号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	134
第 89 図	119·120号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	135
第 90 図	120~123号貯藏穴実測図 (1/40)	137
第 91 図	121号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	139
第 92 図	122·123号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	140

第 93 図	124~127号貯蔵穴実測図 (1/40)	142
第 94 図	124号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	143
第 95 図	125号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	145
第 96 図	126号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	146
第 97 図	127号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	147
第 98 図	128~131号貯蔵穴実測図 (1/40)	149
第 99 図	128・129号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	150
第 100 図	130~132号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	151
第 101 図	132~135号貯蔵穴実測図 (1/40)	153
第 102 図	133号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	155
第 103 図	135号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	156
第 104 図	136~140号貯蔵穴実測図 (1/40)	158
第 105 図	137・138号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	159
第 106 図	139号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)	160
第 107 図	工事に追われた発掘調査	161
第 108 図	時期別貯蔵穴深度度数表	167
第 109 図	貯蔵穴の時期別分布図 (1/400)	167
第 110 図	貯蔵穴出土の弥生土器変遷図 (1/12)	169
第 111 図	円盤状土器片重量度数表	172
付 図	上の原遺跡遺構配置図 (1/200)	

表 目 次

表 1	貯蔵穴一覧表①	163
表 2	貯蔵穴一覧表②	164
表 3	貯蔵穴一覧表③	165
表 4	貯蔵穴一覧表④	166
表 5	円盤状土器片計測表	171

I 調査の経過

上の原遺跡は、当初、九州横断自動車道関係の第21地点（S T A 159+60～168+40）として登録されていた地点で、昭和58年度の試掘調査の結果、A～Dに区分されたD地区（S T A 166+20～168+50）にあたる。試掘調査の結果は、弥生時代の住居跡や壺棺をはじめ、古墳時代の住居跡など多数存在することが予想された。

調査は、昭和60年10月14日から開始し、調査が終了したのは年度末の昭和61年3月19日であった。調査面積は12,300m²となった。昭和62年3月の小郡～朝倉間供用開始に向けて、各工区とも本格的に工事が発注され、調査と工事が錯綜する状況を呈していた。上の原遺跡の調査も、二つのボックス工事を控えていたことと、供用開始というリミットを背負った調査であったため、調査の進行と工事工程が錯綜し、まさに戦場の様相を呈した。調査方法としては、望ましいことではないが、工程に合わせた分割調査をせざるを得なかった。

調査の結果は、遺跡東端部付近から140基にも及ぶ弥生時代前期から中期の貯蔵穴群が密集して検出され、その西側からは弥生中期の円形・楕円形・方形の竪穴住居跡73軒以上と多数の土塙などからなる弥生時代の大集落跡が発見された。また、集落の一角には壺棺墓27基と木棺墓4基からなる墓地も検出された。その他にも竪穴住居跡141軒、掘立柱建物跡11棟や多数の土塙などからなる奈良時代の大集落跡も発見されるなど、朝倉町内では最も密度の高い遺跡となつた。遺構は用地外にさらに拡大する広大な遺跡であり、出土遺物も莫大な量にのぼった。

今回の報告は、遺跡東端部付近から密集して検出された弥生時代前期から中期にわたる140基の貯蔵穴群の報告で、上の原遺跡調査報告書の第1冊目にあたる。

調査はボックス工事との関係で、遺跡東端部から開始した。東端部付近は地盤が疊層で、かつ遺構の重複が著しいため遺構検出や発掘に手間取った。また、分割調査の弊害による工程の上で最後の調査となつた東南端の一部が未調査部分を残す結果になってしまったことは惜しまれてならない。貯蔵穴群の調査が、いみじくも、上の原遺跡の調査の開始と最後を締めくくる調査となつた。小郡～朝倉間供用開始というタイムリミットに追われた苦しい調査であった。年度末の3月19日に全ての調査が完了できたことは、工事に追われた調査員の苦惱と努力はもとより、それに精一杯、手助けしてくれた補助員をはじめとする作業員の方々の努力によるものである。心より感謝いたします。

調査関係者は次の通りである。



第1図 九州横断自動車道路線図



第2図 上の原遺跡とその周辺地形図(1/10,000)

日本道路公团福岡建設局

局長	今村 浩二
総務部長	菱刈 庄二(前任)
管理課長	森 宏之
管理課長代理	佐伯 豊

日本道路公团福岡建設局廿木工事事務所

所長	乗松 紀三
副所長	西田 功
副所長(技術担当)	中村 義治
庶務課長	徳永 登
用地課長	岩下 剛
工務課長	後藤二郎彦
小郡工事区工事長	友田 義則
廿木工事区工事長	猪狩 宗雄
朝倉工事区工事長	平沢 正(前任)
杷木工事区工事長	小手川良和 山中 茂

福岡県教育委員会

総括

教育長	友野 隆
教育次長	安部 徹
管理部長	大鶴 英雄
文化課長	前田 栄一
文化課長補佐	平 球峰
文化課技術課長補佐	宮小路賀宏
文化課参事補佐	栗原 和彦

庶務

文化課庶務係長	平 球峰(兼任)
文化課事務主査	長谷川伸弘

調査

文化課調査第二係長	宮小路賀宏(兼任)
同 技術主査	井上 裕弘
同 主任技師	高橋 章(現京葉教育事務所技術主査)
同 主任技師	佐々木隆彦(現南筑後教育事務所技術主査)

同 技師 伊崎 俊秋
 同 技師 小田 和利
 同 文化財専門員 木村幾多郎
 同 臨時職員 日高 正幸(現文化財専門員)
 同 調査補助員 高田 一弘 平鷗 文博 田中 康信

発掘調査作業員

古賀 藤夫	浦塙 義則	石松又次郎	仲山 進	篠原 清彦
目 志一	緒方 仁造	大熊 勝造	國武 昌治	上野チエ子
上野ミツ子	古賀シズエ	古賀 チヅ	森 君子	井上シズエ
大盛アサ子	武内タツ子	福山 法子	吉松キヨ子	一の宮通子
仲山シズカ	大熊ミユキ	石松アサカ	本園セツ子	徳永タカヨ
大田ミヨ子	井上キヨノ	田中サツキ	関屋エミ子	日 広子
木下千寿子	大熊 ツマ	大熊キクエ	大熊カズエ	大熊ナミエ
緒方 邦江	藤田マスミ	柳原 札子	佐藤 道子	丸山 静子
丸山フミ子	丸山ハル子	丸山 久子	浦 ナルミ	浦 和子
浦 文子	手島 芳子	安岡よし子	半田 エツ	高瀬セツ子
高瀬シズエ	後藤カミヨ	中西ハル子	水田トヨノ	永田エツ子
矢野トラエ	矢野 静子	原島ミチヨ	柴山ミネ子	柴山ハツエ
本石セツ子	中村 光恵	窪山ヨシエ	窪山ヨネ子	森 キヨ子
牟田ヒロミ	牟田シズ子	牟田ヨリエ	牟田テル子	池田カオル
釜堀 玉来	釜堀エミ子	釜堀ヒサシ	釜堀シズエ	釜堀ミサヲ
荻野サカエ	渡辺 輝子	芹田恵美子	石井キヨミ	後藤 昭香
宮田 優子	宮田 芳子	鬼塚 孝子	佐野チヅ子	梅田 加代
釜堀 ツマ	釜堀セツ子	大楠 房枝	萩原 瑞江	牟田サエ子
谷村 京子	野田美知子			
遺物整理作業員				
九州歴史資料館	有馬 信子	鬼木美知子	植山 洋子	若松 和子
奥村千恵子	桑本 亜子	友清 光子	平石 史子	古賀 陽子
高畠美智子	砥上トシ子	武藤 瞳子		
甘木調査事務所	中塙麗リツ子	西 奇子	小島佐枝子	石井紀美子
尾花 道子	藤井カオル	塩足 里美	松鷗 邦子	原田 和枝
高瀬 照美	渡辺 輝子			

(井上)

II 位置と環境

上の原遺跡は、福岡県朝倉郡朝倉町大字大庭字上の原に所在する。

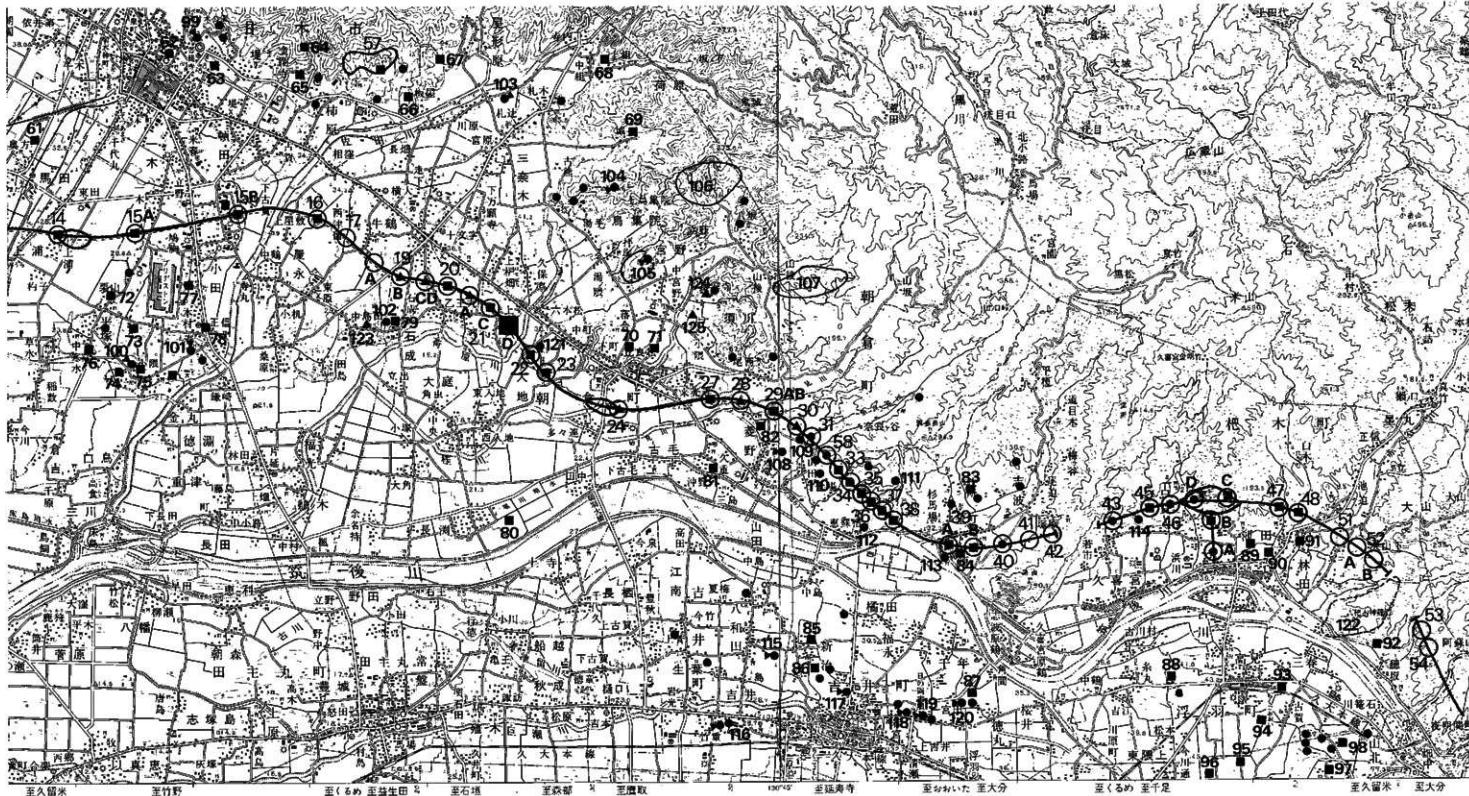
遺跡は、馬見山の南に連なる十石山・櫻岳・白石山・鳥屋山といった朝倉低山地に源を発する佐田川と荷原川により形成された広範な扇状台地上にある。当遺跡は、その扇状台地の東南端に形成された弥生時代と奈良時代を中心とした広大な集落遺跡である。この三奈木一文字一中島田にわたる台地上には、縄文・弥生・古墳・奈良時代といった時期の集落跡や墓地群等が多数、形成されている。特に、近年の九州横断自動車道建設に伴う事前の発掘調査により、この台地上一帯に弥生時代と奈良時代を中心とした大規模な集落遺跡が濃密に分布していることが明らかになった。

その中でも、この上の原遺跡が広大かつ濃密な遺跡で、弥生時代の遺構としては弥生前期から中期の貯蔵穴140基、中期から後期の堅穴住居跡73軒、壇棺墓27基と木棺墓4基からなる墓地、奈良時代の遺構は、堅穴住居跡141軒、掘立柱建物跡11棟以上という多数の遺構と夥しい量の遺物が検出された。

上の原遺跡の西側には、弥生中期から後期の墓地群と奈良時代の集落跡が発見された大庭久保遺跡をはじめ、弥生中期後半の25軒の堅穴住居跡群、奈良時代の堅穴住居跡34軒と掘立柱建物跡22棟からなる集落跡が検出された中道遺跡、奈良時代の大集落である西法寺遺跡や塔ノ上遺跡などがある。

また、荷原川を挟んだ対岸の台地上には、線刻壁画で知られる県指定の狐塚古墳があり、その北東の丘陵上には鳥集院1号墳・宮地獄古墳といった前方後円墳をはじめ、甘木・朝倉地方で最大の前方後円墳といわれる劍塚古墳(全長70.6m)などがある。鳥集院から山後、麻底良山へと続く低位な山丘上や山麓には、鳥集院古墳群をはじめ、北八坂古墳群、山後古墳群、妙見古墳群、山田古墳群、金場古墳群、上ノ宿古墳群、恵蘇八幡宮古墳群といった後期の群集墳が群在している。

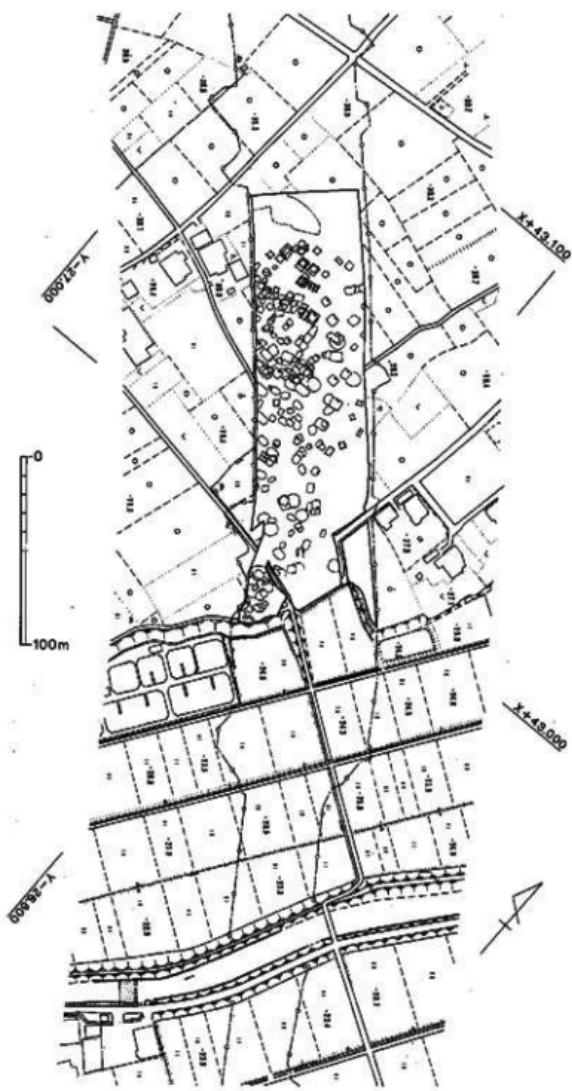
さらに、これら山麓からは旧石器から縄文・弥生・古墳・奈良時代といった各時代にわたる多数の複合遺跡が、横断道関係の発掘調査で新たに発見されている。弥生時代後期の墓地と奈良時代の大集落跡が検出された長島遺跡をはじめ、旧石器から奈良時代と連続と続く大規模な複合遺跡であった原の東遺跡、弥生前期の集落跡が検出された鎌塚遺跡や長田遺跡、中期から後期の壇棺墓・木棺墓・石棺墓からなる総数66基の墓地である上ノ宿遺跡などが発見された。小規模ではあるが、金場遺跡・大迫遺跡・外之隈遺跡・杷木宮原遺跡・中町裏遺跡でも弥生中期の集落跡が検出されている。また、杷木町大字池田の畠田遺跡からは、縄文晩期から弥生前



- 14 上下瀧澤通(先生、古墳集落)
 15A 下原瀧澤通(先生集落)
 15B 西原瀧澤通(經文、先生、古墳集落)
 16 高原瀧澤通(經文、先生、奈良集落)
 17 口ノ瀧澤通
 18 石門瀧澤通(旧石器、奈良集落)
 19A 大垣瀧澤通(桜塚集落、奈良盆地)
 19C 石底久瀧澤通(櫻文、奈良集落)
 20 中道瀧澤通(經文、先生、奈良集落)
 21A 西法等瀧澤通(奈良集落、中世)
 21B 大坂久瀧澤通(先生、奈良集落、奈良盆地)
 22 桜塚瀧澤通(奈良集落、奈良盆地)
 22C 鹿鳴瀧澤通(奈良集落、奈良盆地、中世)
 23 B 医治人瀧澤通(經文、先生、古墳集落)
 23 庵庭寺瀧澤通(生野集落、古墳)
 24 田畠瀧澤通(奈良、中世遺跡)

- | | | |
|----------|-----------------------|---------------------|
| 石室(占領) | 62 甘木(日野町御殿)(生糸集) | 79 石造道場(生糸集) |
| 中(占領地) | 63 梶原(生糸集) | 80 美浓乃万(生糸集) |
| 大(中松原地) | 64 大曾根(生糸集) | 81 長良(生糸集) |
| 後(集落) | 65 須坂(生糸集) | 82 [中庄故友] (生糸集) |
| (集落) | 66 郡山野(生糸集) | 83 故友道場(生糸、生糸集布地) |
| | 67 抱坂(生糸集) | 84 故友道場(生糸、生糸集布地) |
| | 68 佐久間通(生糸、生糸集) | 85 故友道場(生糸) |
| 秀(生糸集) | 69 鬼丸通(生糸、生糸集) | 86 故友道場(生糸) |
| | 70 下可原(生糸、古木模様地) | 87 故友道場(タリ・形押模出上) |
| | 71 佐久間(生糸集) | 88 故友道場(生糸、毫毛) |
| | 72 菊山通(生糸) | 89 光宗寺道場(生糸、毫毛) |
| | 73 小田道場(生糸、古庭屋敷) | 90 立原道場(生糸集) |
| 透(集落、古跡) | 74 伊勢屋(生糸集) | 91 朝日道場(生糸集) |
| | 75 道場山通(生糸、市井、草木、茅草集) | 92 鹿内道場(生糸集) |
| | 76 中家(中家御殿)(中國式制糸) | 93 亘天高尾道場(生糸、生糸集布地) |
| | 77 小田道場(生糸集、參) | 94 壱之助道場(生糸、生糸集) |
| 古(古集落) | 78 佐久間(生糸集) | 95 佐久間(生糸、生糸集) |

第3図 上の原遺跡とその周辺遺跡分布図(1/50,000)



第4図 上の原遺跡調査地区と付近地形図(1/3,000)

期にわたる堅穴住居跡84軒といった大集落と、この地域では珍しい支石墓4基、石棺墓2基が発見された。特に、稻作農耕開始期の大集落の発見は、内陸部という地理的位置もさることながら、今後、重要な遺跡として注目されるだろう。

一方、眼を転じてみると、古凧山・馬見山に源を発する小石原川が形成した「一つ木一小田」の扇状台地にも、多数の遺跡が密集している。前漢鏡や鉄戈・貝輪等が出土した大壹棺墓地として知られる栗山遺跡があり、その南には弥生後期から古墳時代前期の一大集落跡である小田道遺跡がある。北側には、弥生前期から後期まで続く大集落遺跡である小田遺跡や、弥生中期前葉の集落である下原遺跡や西原遺跡などが分布している。台地南端には、中国式銅劍が出土した中寒水屋敷遺跡があり、この地域一帯は弥生時代遺跡が密集した地域となっている。

また、この台地上には三角縁神獸鏡が副葬されていた発生期の前方後円墳として著名な神藏古墳や、かつて三角縁神獸鏡が出土したといわれる大願寺方形周溝墓、古式の横穴式石室をもち、武具・馬具など多数の副葬品が出土した小田茶臼塚前方後円墳など、この地方を支配した首長墓が築造されている。

さらに、北側の大平山山麓付近も遺跡が集中して形成された地域である。弥生中期の壹棺墓や後期の石棺墓・石蓋土壙墓が出土した宗原遺跡をはじめ、青銅器の埋納遺跡として知られる板屋田中原遺跡（銅戈）や荷原池辺遺跡（銅戈）などがある。また、宗原遺跡の北側には、三段築成で葺石をもつた前方後円墳である鬼枕古墳（全長56m）や、その東側の丘陵上には陶質土器や鉄器が多量に副葬された古寺・池の上墳墓群がある。一方、大平山南麓には、後期の群集墳である柿原古墳群や大岩東部・南部・西部といった古墳群が形成されている。

この地域における重要な遺跡の一つである齊明天皇（661）に百濟救援のため、齊明天皇の行宮として建設されたという有名な朝倉橋広庭宮推定地は、朝倉町須川にある。また、この朝倉宮の造営と関連する軍事的要塞とも考えられる杷木神籠石（国指定）は、大分県との県境である杷木町林田に所在している。

（井上）

参考文献

- 柳田康雄 「第二編 原始」「甘木市史」上巻 甘木市史編さん委員会 1982
柳田康雄・馬田弘稔他「甘木市史資料」考古編 甘木市史編さん委員会 1984
高山明「第二編 考古」「朝倉町史」朝倉町史刊行委員会 1986
新野正憲「第三編 古代」「朝倉町史」朝倉町史刊行委員会 1986
井手謙次郎「第二編 歴史」「杷木町史」杷木町史刊行委員会 1981



第 5 図 貯藏穴配置図(1/300)

0 30m

III 貯蔵穴と出土遺物

幅60mの路線内225mにわたって遺構が検出され、東南側は、比高差5mの低地（河川）となっている。遺物は、縄文時代早期押型文土器から奈良時代まで、各時代の物が出土しているが、遺構としては、弥生時代貯蔵穴140基、竪穴住居跡79軒、竪穴遺構30基、土壤121基（木棺墓も含む）壺棺墓27基、奈良時代遺構として竪穴住居跡141軒、掘立柱建物30棟（貯蔵穴以外はいずれも概数で、Ⅱ以降で変更される可能性がある）検出されている。そのうち、今回報告する貯蔵穴は、遺跡東南部に偏って群集している。貯蔵穴は、分布状況よりすると、調査地西側にさらに拡がっていると思われる。

1号貯蔵穴（図版2-2、第6図）

遺跡東北部にあり、1号から6号までの一群をなす。貯蔵穴上部は削平され、23cmの深さを残すのみである。底部平面形は、やや隅丸方形に近い円形をなし、155×140cmである。遺物は、甕形土器が数点出土している。

出土遺物（第7図）

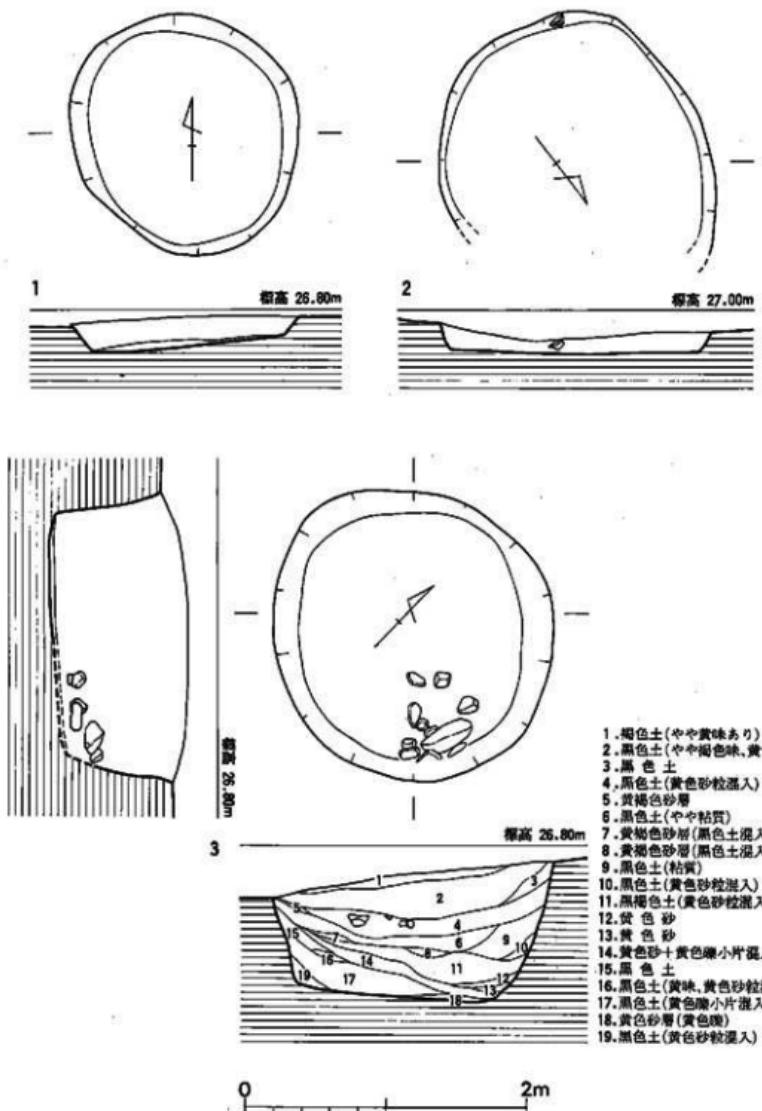
甕（1-4） 1-4はいずれも、口縁部片である。1は口縁端外面に粘土帯を貼付し、逆L字形に近い口縁をなし、頸部以下は刷毛目がナデ消されている。復原口縁内径23.3cmを測る。2は、ややT字形口縁に近く、口縁端面は外傾する。刷毛目痕は残らず、工具によるナデ調整が見られる。3は小形の甕の口縁、4は小形の甕または鉢の頸部片である。

2号貯蔵穴（図版2-1、第6図）

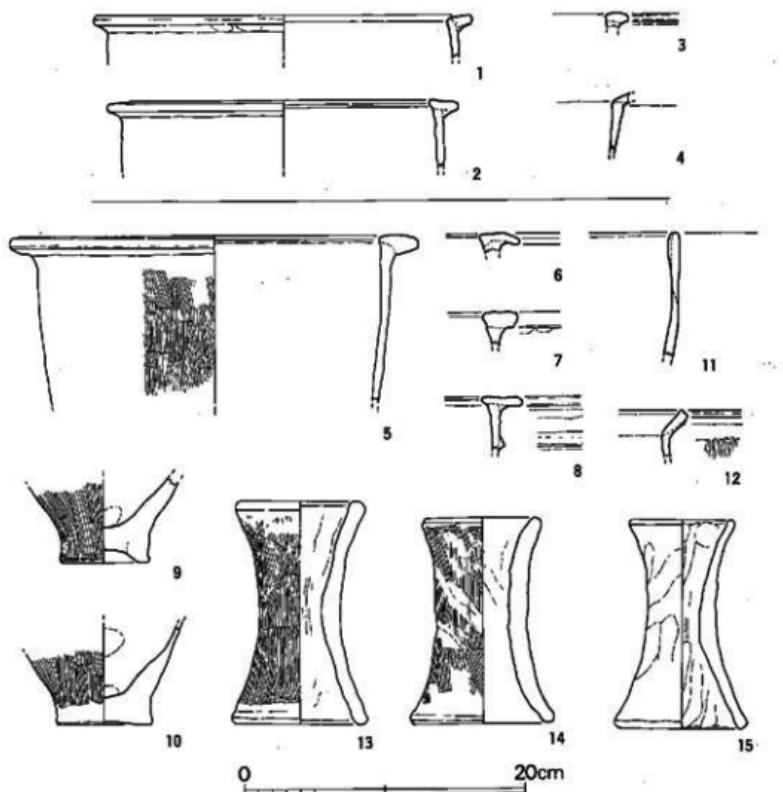
上面が削平されており、深さ約20cmの壁を残すのみである。北側は、他の遺構により切られているが、底部は平坦で、底部平面形は梢円形で約200×175cmになると思われる。土器片と不明土製品が出土している。

出土遺物（図版41、第7図）

甕（5-10・12） 5-7は、口縁部で、逆L字形をなす。5は復原口縁内径23.4cm、残存高11.8cmで、頸部は刷毛目をナデ消すが、以下は刷毛目（工具幅12mm）調整痕が残る。8は、T字形に近い口縁をなし、口縁下3.5cmに粘土貼付の断面三角形の刻目のない凸帯が一条めぐる。9・10は底部片で、9はやや上底になる。10は、平面図に示されている土器で、底部はやや凹む程度である。いずれも外面刷毛目調整痕が残る。口縁部は「く」字に外反し、端部が跳ね上がる。時期的には下り、おそらく混入品と思われる。



第6図 1~3号貯蔵穴実測図(1/40)

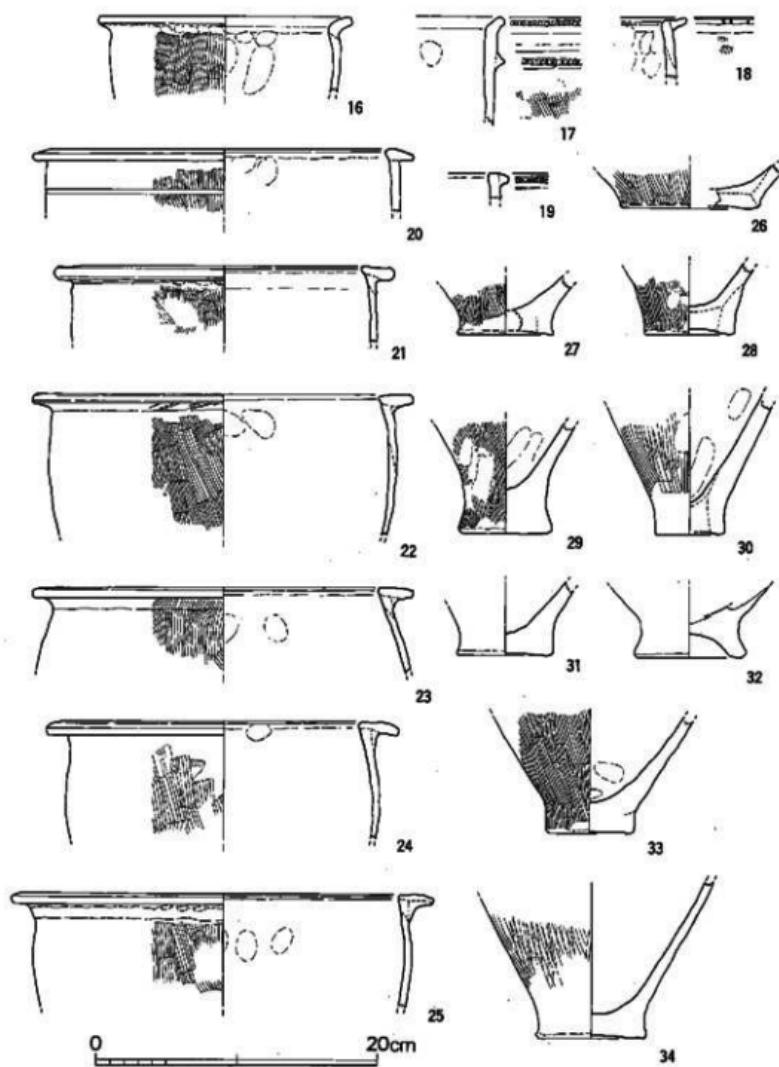


第7図 1・2号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

鉢(11) 直口の口縁をなし、端部は丸まる。内外面ともヘラ磨きがなされる。

器台(13~15) いずれも完形で、器高は13が15.6cm, 14が14.4cm, 15が14.6cmで、13・14は外面刷毛目調整痕が残り、15は、指ナデにより調整されている。

不明土製品(第10図29) 残存部5.7×3.5cmの楕円形で、厚さ2.6cmを測る粘土塊である。丁度手で握った程の粘土塊であるが、両面に不規則な浅い沈線が残り、周縁端部には、粘土塊を擦った痕がある。胎土は、土器を作る粘土と同じであり、土器作りの時余った粘土をまるめたものが、焼かれて残ったものか、本来この形態に意味があったのか判断できない。重量は、40.4gである。



第 8 図 3号貯藏大出土土器実測図(1/4)

3号貯蔵穴（図版3-1, 第6図）

底部平面形はやや隅丸方形気味の円形で、底径175×160cmを測る。壁は、底部よりややふくらみながら外に向かって開き、上面は削平されているが、深さ約96cmで、残存口径は200×206cmである。埋土はスリ鉢状に堆積し、土器の包含量が多い。底面近くに東側より投げ込まれたと思われる火形の礫が堆積している。出土遺物は、大量に投げ込まれた土器と、円板状の土製蓋、焼成された粘土塊が出土している。

出土遺物（図版50, 第8・9・11・36図）

壺（16～34） 16～25は、口縁部片であるが、17～19の如意形口縁及び、刻目の凸帯を持つものと、口縁が逆L字状になる20～25がある。17は如意形口縁端部下位に刻目をつけ、口縁端から3cm下位に断面三角形の刻み目のある粘土帯がめぐる。刷毛目調整痕は、口縁端と凸帯間と、凸帯下1.5cmの間がヨコナデにより消えている。18・19は、直口する口縁端外面に粘土帯を貼付したもので、刻目が施されている。20～25は、口縁が逆L字状をなす。20は、口縁下2.5cmに浅い沈線が、刷毛目調整の後、1本引かれている。復原口縁内径23cm。21～25は口縁端は水平または外に下り、胴部がややふくらむ。頸部は、指圧痕またはヨコナデで刷毛目は消えるが、以下は縦位の刷毛目調整痕が残る。復原口縁内径は、21が19.4cm、22が22.0cm、23が22.0cm、24が19.4cm、25が25.0cmである。26～34は底部で、やや凹むものもあるが平底に近く、底部がやや薄いもの（26・27・28・33・34）と、底部が厚く高いもの（29・30）、高台風に底部が高いもの（32）がある。

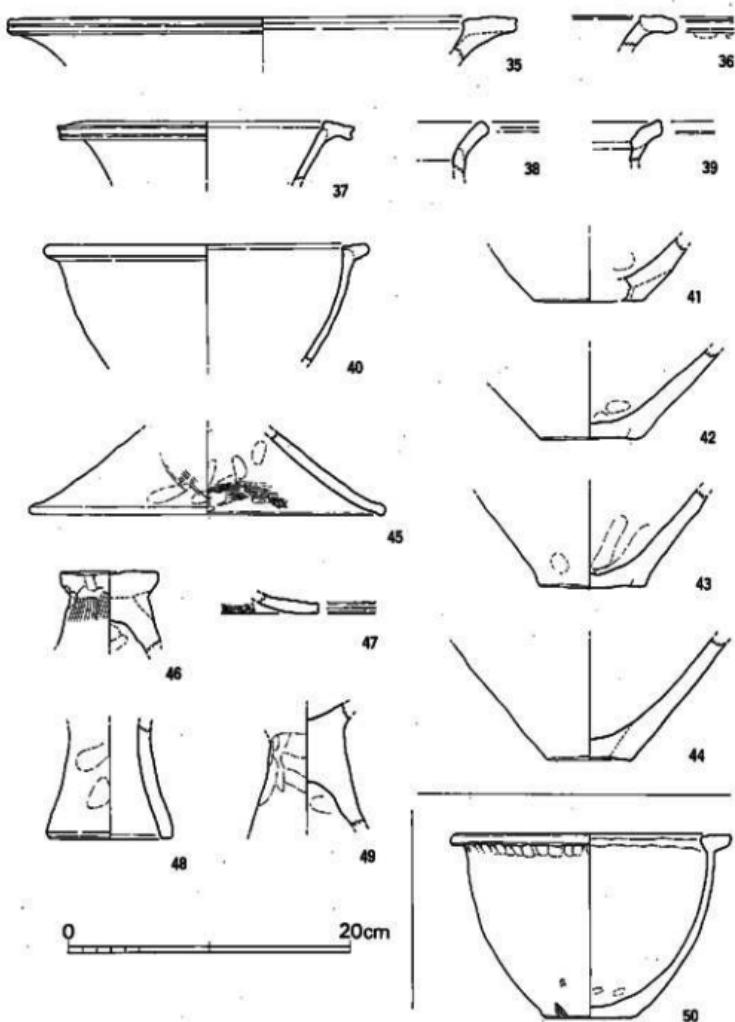
壺（35～39・41～44） 35～39は、口縁部片であり、38を除いて鋤先状口縁をなす。いずれも内外面とも、丁寧に研磨される。38は、頸部が内傾し、口縁部で折れて外反する壺の口縁小片と思われる。復原口縁内径は35が28.4cm、37が16.6cmである。41～44は底部片で、やや高台風に底部を縁取りしたもの（42・44）があるが、平底である。底部付近まで、ヘラ研磨の施されたもの（44）もあるが、多くは底部付近は工具ナデによる調整である。

高杯（40・49） 40は、杯部片で、内外面ともヘラ研磨が施される。復原口縁内径は、19.2cmで、杯部の深さは約8.5cmが残存する。49は、胸部片で、杯部は「ハ」の字状に立ち上る。胸部はやや開き気味で、外面はヘラナデが施される。

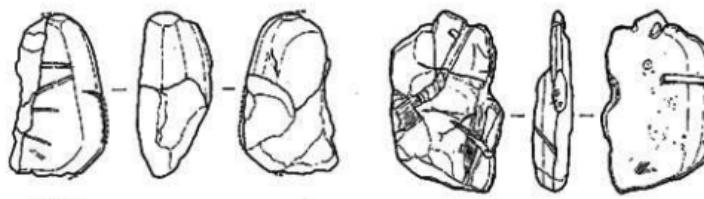
蓋（45～47） 46は、ツマミ部片で、頂部がくびれ、外面に刷毛目痕が残る。45・47は据部片である。裾部端内面は、4cmまで横位刷毛目が残る。外面は、ケズリに近い工具ナデ調整が行われている。

器台（48） 器面は、ナデ調整が行われる。復原底径は9cmで、残存高は8.1cmである。

蓋形土製品（第36図9・10） 9は復原径12cm、厚さ1.2cmで、平坦な円盤状をなす。10のように両端部に穿孔されていたかは不明。10は、復原径17cmで、中心に向かって高くなる。壺

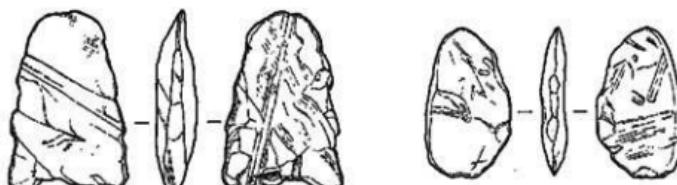


第9圖 3-4號窯藏穴出土土器實測圖(1/4)



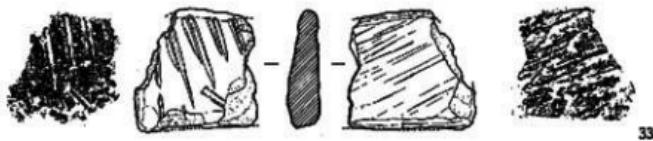
29

30

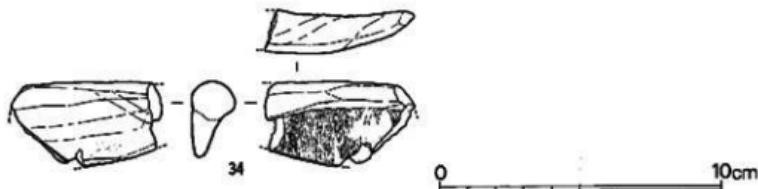


31

32



33



34

0

10cm

第 10 圖 貯藏穴出土土製品実測図1 (1/2)



第 11 図 貯藏穴出土土製品実測図2 (1/2)

部（おそらく両端）に、上から外に向かって斜位に穿孔されている。内・外面とも丁寧にヘラ研磨が施される。

不明土製品（第11図35-37） いずれも定形を持たない焼成された粘土塊であるが、整形痕のある面が、巻き込んだり、他の粘土に覆われるなどしておらず、土器整形時に削り取られた粘土片が固められ、焼けたものである可能性が高い。

4号貯蔵穴（図版3-2, 第12図）

上部は削平され、壁は17cm程残存するが、底面に伏せた状態で完形の鉢が出土している。底面は、87×86cmの不整円形をなす。

出土遺物（図版41, 第9図）

鉢（50） 完成品で、口縁は逆L字形に近いが、口縁内面に粘土が張り出している。口縁端部平坦面には、刷毛目調整痕が残る。胴部は、ふくらみを持ちながらすぼまり平底の底部へつなぐ。器面は、ケズリ状の調整痕が残るが、全体的にナデ調整が行われている。口径19.6cm、器高13cmである。

5号貯蔵穴（図版4-1, 第12図）

平面形は、ほぼ円形をなし、底径は93×91cmである。南に傾斜した斜面のため北側壁の残りが良く48cmである。埋土は、スリ鉢状に堆積している。壺と壺の小片が出土している。

出土遺物（第13図）

壺（51・52） 51は、如意形口縁で、口縁端部下半に刻目が施される。頸部はヨコナデにより刷毛目調整痕は残らない。52は底部小片であるが、上げ底で部厚い底部になる。

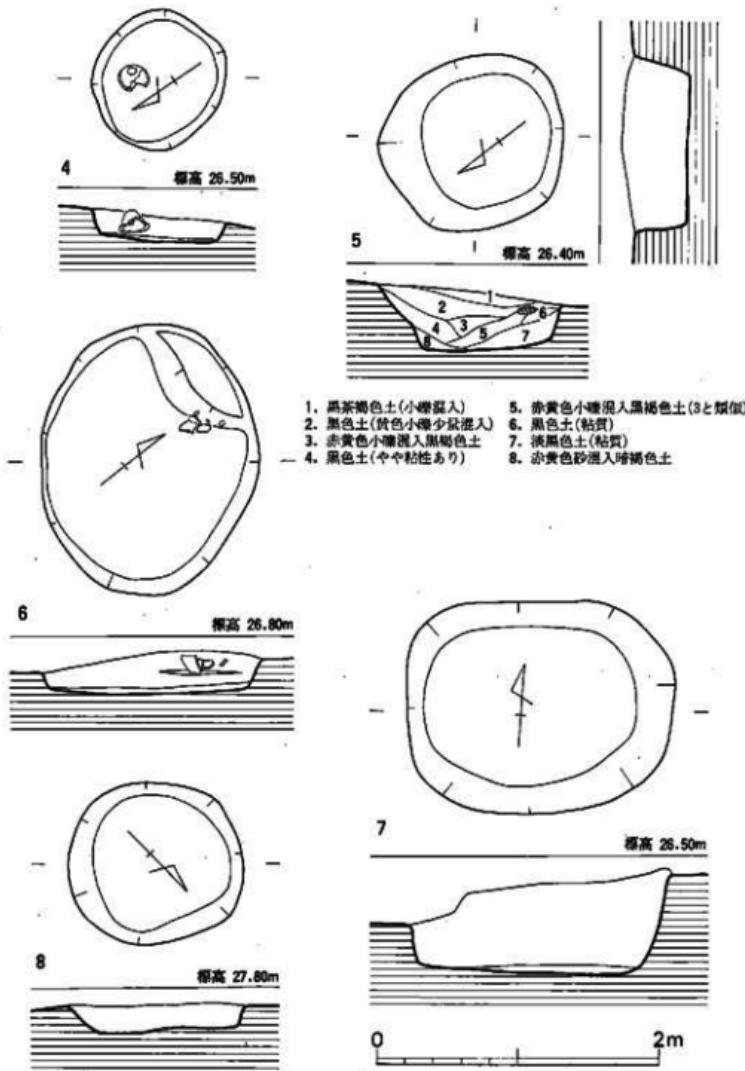
壺（53・54） いずれも、肩部破片で、53は球形に近い胴部を持ち、頸部に近い部分に2本の平行沈線が残り、肩部に3本単位の沈線が弧線を描く。外面は斜位のヘラ研磨、内面は上部までヘラ研磨が及ぶ。54はやや胴が張る壺で、頸部付近に2本の沈線をめぐらし、肩部に2本単位沈線の弧線を描く。内外面ともヘラ研磨がなされている。

6号貯蔵穴（図版4-2, 第12図）

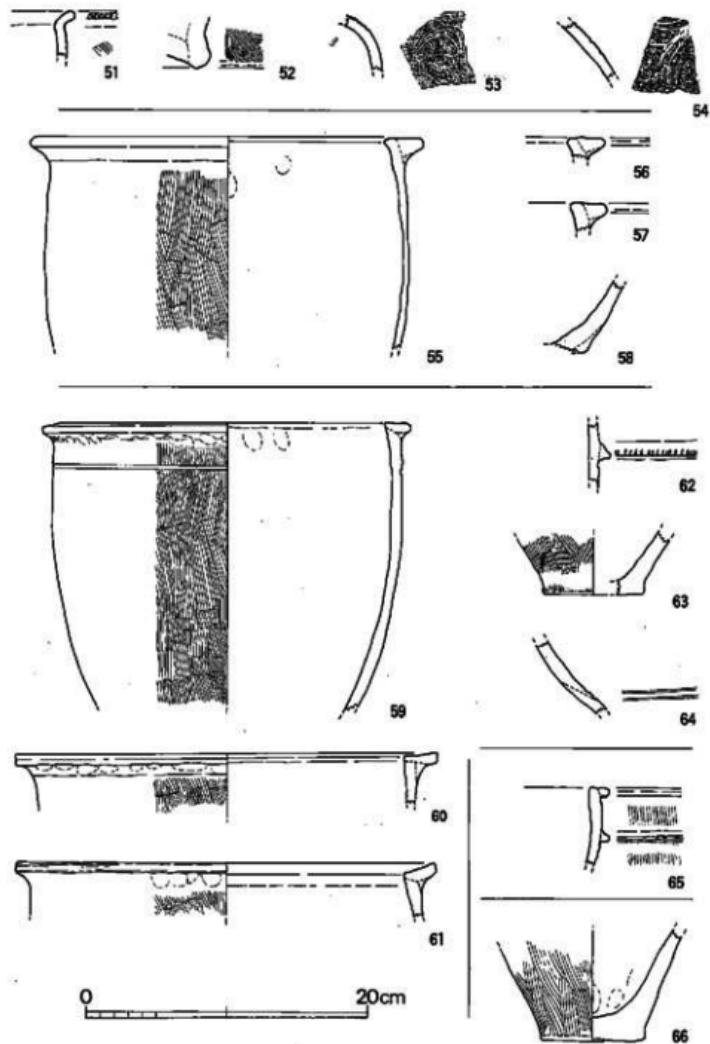
平面稍円形をなし、北側に低い段がつく。底部平面径は175×138cmで、上面削平のため壁は開き気味に立ち上り30cm残すのみである。遺物は底面近くにまとめて出土した土器（壺・壺）破片のみである。

出土遺物（第13図）

壺（55-57） いずれも、逆L字形の口縁をなし、口縁はやや内傾する。口縁外側張り出し部の下は、補強のための粘土が断面三角状に充填され、その部分は内外面とも、ナデまたは指



第12図 4~8号貯蔵穴実測図 (1/40)



第 13 図 5~9号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

押圧が行われる。外面の刷毛目調整痕はその部分以下に残る。

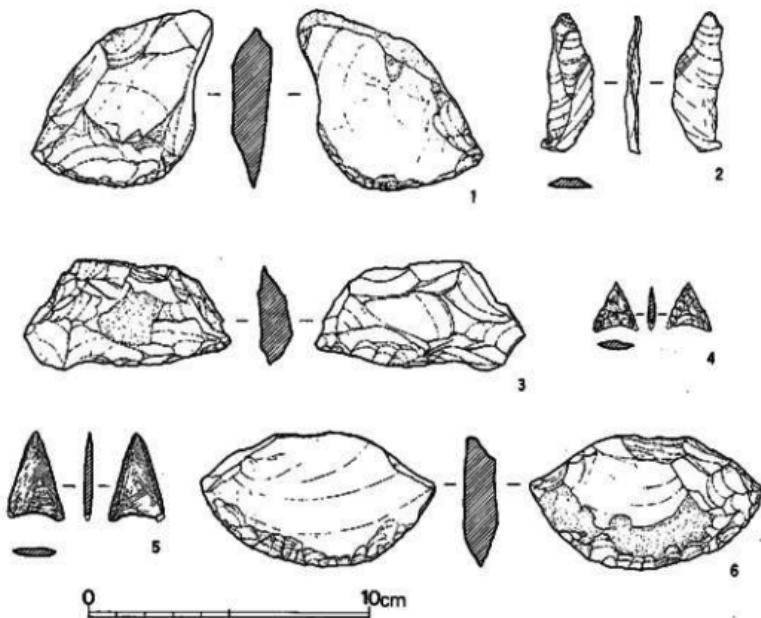
壺 (58) 底部の小破片であるが、丸底風に底部を形成したためと、粘土を輪状に貼り付け平底に整形した痕跡が明瞭に残る。外面は、ヘラ研磨が行われ、内面には指頭痕が残る。(木村)

7号貯蔵穴 (第12図)

調査区の北半部にあり、1号住居跡の下層から検出された胴張り隅丸長方形プランの壺穴で、断面は逆台形状を呈す。長径150cm、短径114cm、深さ東壁で70cmを測る。出土遺物として壺・甕等の破片が少量とスクレイパー1点が出土している。

出土遺物 (図版49、第13図)

甕 (59~63) 口縁部の形状により2タイプあり、口縁端部に三角凸帯を付したもの (59) と逆L字状口縁のもの (60・61) がある。59の口縁下には1条の沈線、62のように三角凸帯を



第14図 貯蔵穴出土石器尖端図1(1/2)

めぐらすものもある。調整は62が内外ともヨコヘラ磨きで仕上げている他は、外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデ調整である。また、口縁部成形時の指頭圧痕をいづれも口縁下に良く残している。復原口径は59が26.2cm、60が29.7cm、61が29.6cmを測る。色調はほゝ燈色である。63は底部の破片資料で、復原底径7.2cmの平底である。調整は外面刷毛、内面ナデで仕上げている。

壺 (64) 肩部に2条の沈線がめぐる頸部付近の破片資料で、内外ともヘラ磨きで仕上げた作りの良い土器である。色調はやゝ淡い燈色である。

スクレイバー (第14図1) サスカイト製のスクレイバーで、刃部長5.7cmを測る。

8号貯蔵穴 (第12図)

発掘区東端の中央付近から検出された不整円形プランの小豎穴で、長径96cm、短径95cm、深さ20cmを測る。出土遺物は甕小片が若干出土しただけである。

出土遺物 (第13図)

壺 (65) 口縁端部と口縁下に凸帯をめぐらした壺の小破片で、口縁下の凸帯には刻目が施されている。外面刷毛、内面ナデ調整で、色調は赤味のある肌色を呈す。

9号貯蔵穴 (第15図)

8号貯蔵穴の南側から検出された不整円形プランの小豎穴で、長径125cm、短径120cm、深さ25cmと浅い。

出土遺物 (第13図)

壺 (66) 底径7.4cmを測る平底の資料で、外面は刷毛、内面はナデ調整、内底部には指頭圧痕を残している。色調は暗茶褐色で、焼成良好である。

10号貯蔵穴 (第15図)

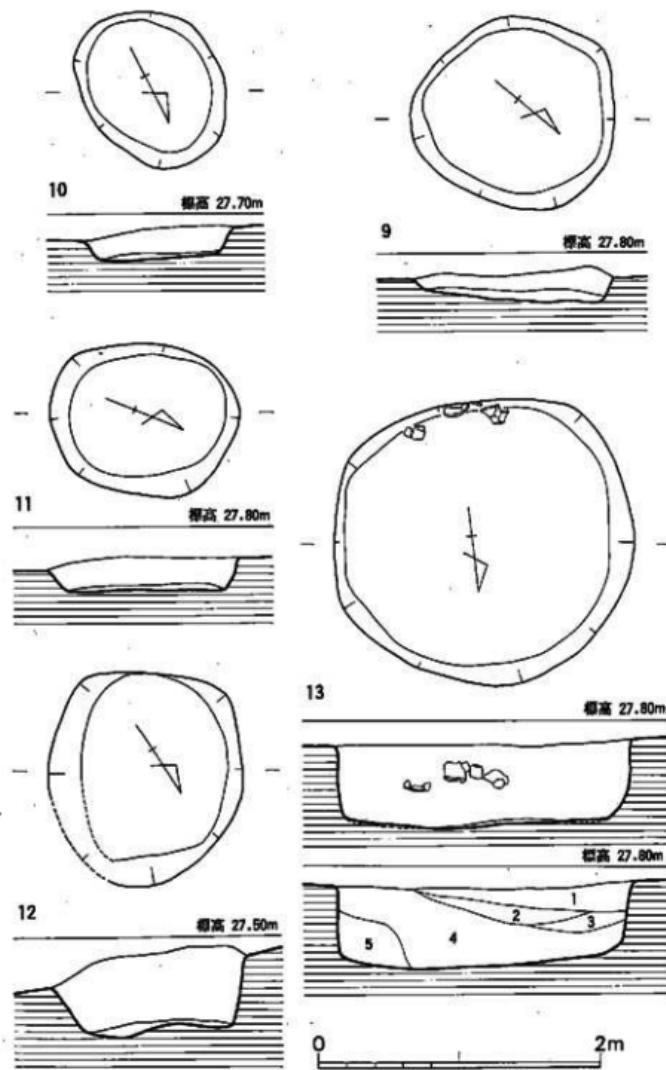
9号貯蔵穴の東側から検出された梢円形プランの小豎穴である。規模は、長径102cm、短径82cm、深さ23cmを測り、上面の削平が著しい豎穴である。

出土遺物 (第16図)

壺 (67) 原初的なT字状口縁の小破片で、口縁部内面のつまみ出しがまだ小さいものである。外面は刷毛、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は肌色を呈す。

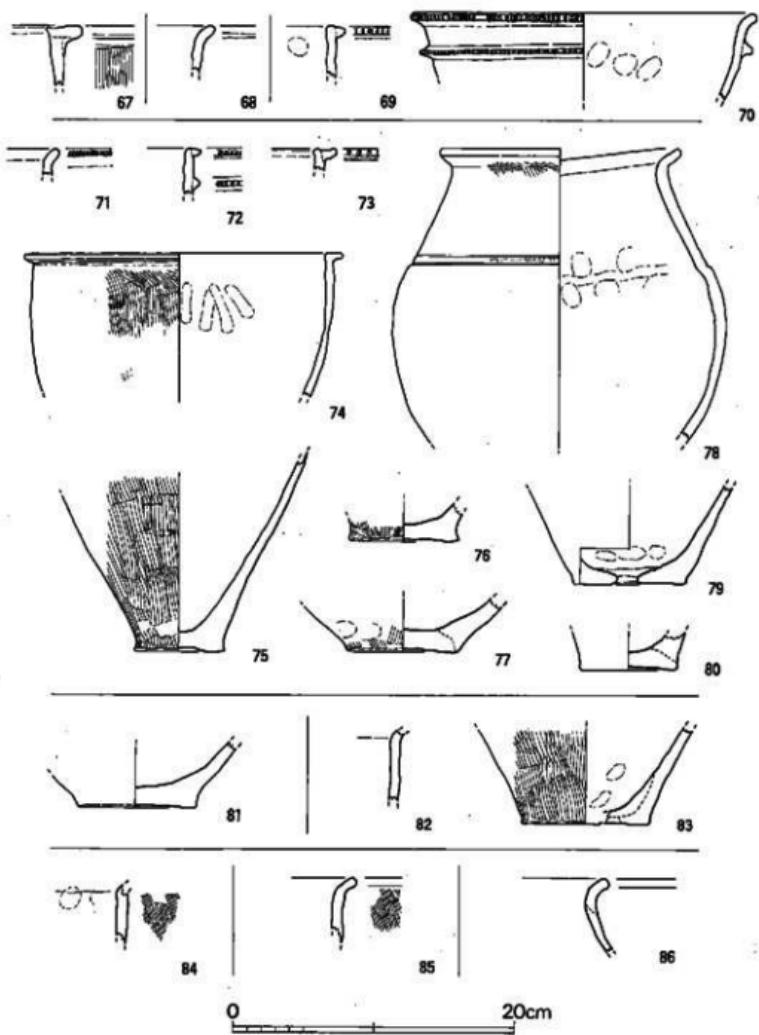
11号貯蔵穴 (第15図)

10号貯蔵穴の南側から検出された小豎穴で、底面のプランは梢円形を呈す。規模は、長径111cm、短径85cm、深さ24cmを測る。断面の形状は逆台形状をなす。出土遺物は土器小片が若



1. 暗茶褐色土
2. 黄褐色砂砾土
3. 黑色土
4. 黄褐色粘质土混り
茶褐色土
5. 暗茶褐色土(黄褐色粘
质土ブロック含む)

第 15 図 9~13号貯藏穴実測図(1/40)



第 16 図 10~15・17~19号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

干出土しただけである。

出土遺物（第16図）

甕（68） 口縁部の外反が弱い如意形口縁の甕の小破片である。内外とも板状工具によるナデ、口縁端部内外はヨコナデ調整である。色調は肌色を呈す。

12号貯蔵穴（第15図）

11号貯蔵穴の東側から検出された長径130cm、短径104cm、深さ56cmを測る底面プランが不整椭円形を呈す小堅穴である。出土遺物として甕小片が若干とサヌカイト片1点が出土しているだけである。

出土遺物（第16図）

甕（69） 口縁端部に三角凸帯を付した甕の小破片である。凸帯外面には刻目が施され、外面全体に煤の付着がみられる。

鉢（70） 復原口径24.5cmを測る如意形口縁の鉢で、口縁下には1条の凸帯がめぐる。口縁端部と凸帯には刻目が施されている。外面は器面が剥離しているため調整は不明だが、内面はヨコヘラ磨きで仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

13号貯蔵穴（図版6-1、第15図）

11号貯蔵穴の南西から検出された円形プランの堅穴である。長径185cm、短径180cm、深さ55cmを測り、壁面は直立気味である。埋土中からは甕・壺等の破片資料がかなり出土した。また、縄文時代早期の押型文土器小片も出土している。

出土遺物（図版53-2、第16図）

甕（74～77・80） 74は口縁端部に細身の三角凸帯を付した甕である。調整は外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。75は胴部下半、76・77・80は底部の資料で、いづれも平底である。底径は75が6.5cm、76が7.9cm、77が7.7cm、80が7cmを測り、75・77の外底部はわずかに凹み底となる。いづれも調整は外面刷毛、内面ナデ調整である。

甕（79） 焼成後に穿孔した甕の底部付近の資料で、底径8cmを測る。調整は外面ヘラ磨き、内面ナデで仕上げ、内底部には指頭圧痕を残している。底部の一部に黒斑がある。

壺（78） 球形の胴部に太い口縁部がつく壺で、肩部には2条のヘラ引き沈線がめぐっている。復原口径17.1cm、胴部最大径23.5cm、現存器高20.7cmを測る。外面は刷毛調整のあと、丁寧なヘラ磨き、内面はナデで仕上げた作りの良い焼成良好な土器である。色調は燈色を呈す。

押型文土器（第17図1） 外面に山形文を施した胴部の破片資料で、一部を磨消している。色調は明褐色を呈す。



第 17 図 貯藏穴出土縄文土器実測図(1/2-1/3)

14号貯蔵穴（図版6-2, 第18図）

発掘区東端中央にあり、13号貯蔵穴の南側から検出された円形プランの小堅穴で、長径125cm、短径124cm、深さ25cmを測る。

出土遺物（第16図）

壺（81）壺の底部付近の資料で、外底部を除き、内外ともヘラ磨きで仕上げている。底部外面には擦過痕がみられるが工具は不明である。色調は黒褐色を呈し、底径は8.3cmを測る。

15号貯蔵穴（図版7-2, 第18図）

14号貯蔵穴の東側にあり、西堅側を16号貯蔵穴に切られた円形プランの堅穴である。規模は長径130cm、推定短径120cm、深さ57cmを測る。

出土遺物（第16図）

壺（82・83）82は如意形口縁の口縁部付近、83は底部付近の破片資料である。82は内外ともナデ、83は外面刷毛、内面ナデで仕上げている。色調は82が暗褐色、83は暗茶褐色を呈す。

16号貯蔵穴（図版7-2, 第18図）

14号貯蔵穴の南側に近接し、15号貯蔵穴の一部を切って造られた典型的な袋状堅穴である。底面のプランは胴張り隅丸長方形で、長径130cm、短径115cm、深さ67cmを測る。出土遺物は何等出土しなかった。

17号貯蔵穴（図版7-1, 第18図）

16号貯蔵穴の南側から検出された底面形が梢円形を呈す堅穴で、断面は袋状をなす。規模は、長径155cm、短径130cm、深さ63cmを測る。

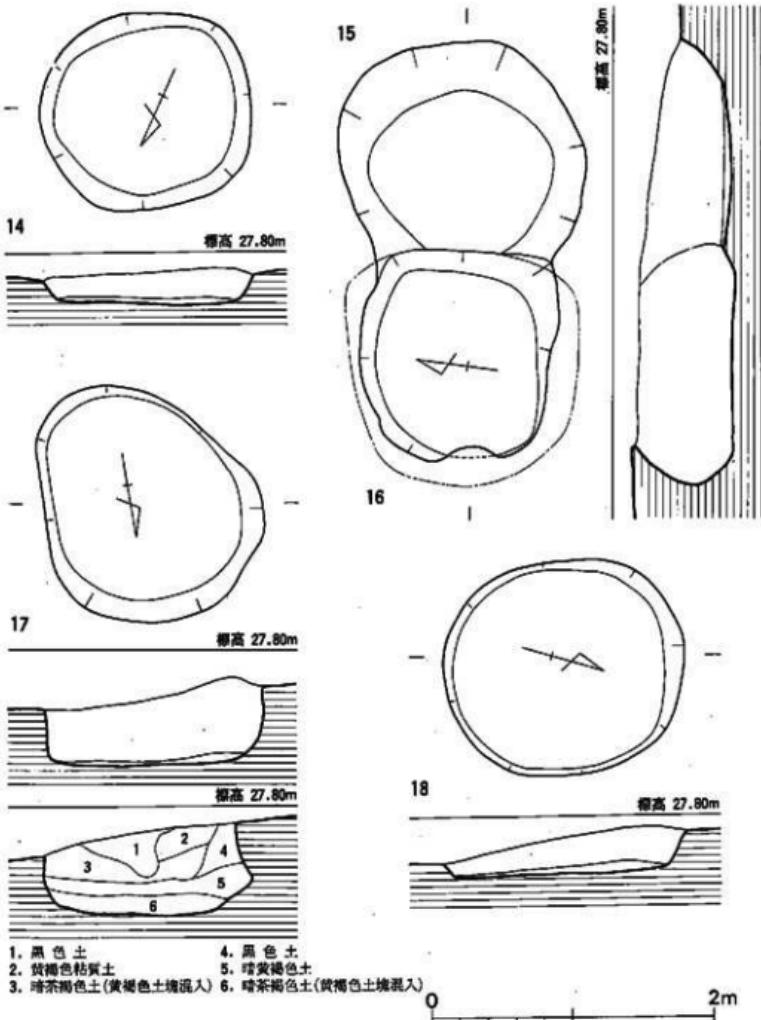
出土遺物（図版53-2, 第16図）

壺（84）口縁部は欠失するが如意形口縁の壺の小破片と思われる。外面は細かい刷毛、内面はナデで仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し、一部に煤の付着がみられる。

押型文土器（第17図2）口縁部付近破片で、裏面に梢円押型文が施される。内面は、約6mmの空白部をあけ2段横位に施文する。原体の長さは1.5cm以上。外面は横位に全面施文するが、部分的にナデ消される。

18号貯蔵穴（図版7-2, 第18図）

17号貯蔵穴の南側に近接し、19号貯蔵穴の一部を切っている。底面形は円形で、長径150cm、短径140cm、深さは残りの良い北壁で33cmを測る。出土遺物は壺などの小片が若干出土したの



第 18 圖 14~18号貯藏穴測量圖 (1/40)

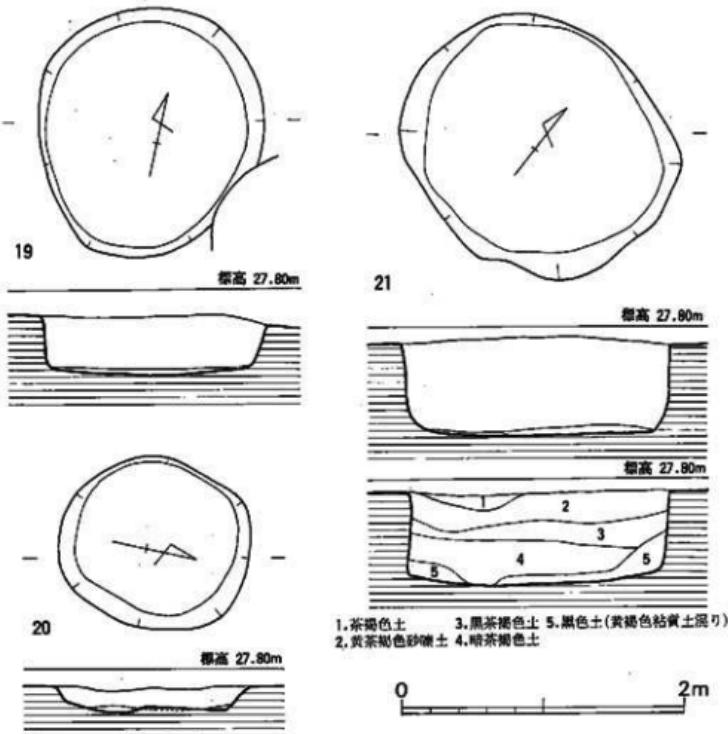
みである。

出土遺物（第16図）

壺（85） 細やかに外反した如意形口縁の壺の小破片である。外面は細い刷毛、口縁部内外はヨコナナ調整で、外面には煤の付着がみられる。色調は外面が黒褐色、内面は淡い橙色を呈し、焼成も良好である。

19号貯蔵穴（図版8-1, 第19図）

17号貯蔵穴の南側にあり、東壁の一部を18号貯蔵穴に切られた状態で検出された。底面形は梢円形プランで、規模は長径160cm、短径143cm、深さ42cmを測る。遺物は若干の土器小片が出士しただけである。



第19図 19~21号貯蔵穴実測図(1/40)

出土遺物（第16図）

壺（86） 口頸部付近の小破片で、内外ともヘラ磨きで仕上げた作りの良い土器である。色調は茶褐色で、焼成も良好である。

20号貯蔵穴（図版8-2, 第19図）

17号貯蔵穴の西側から検出された、長径112cm、短径102cm、深さ15cmと浅い小豊穴である。底面形は楕円形を呈す。遺物は何等出土しなかった。

21号貯蔵穴（図版9-1, 第19図）

発掘区東端中央部にあって、14号貯蔵穴の西側から検出された楕円形プランの袋状豊穴である。規模は、長径172cm、短径153cm、深さ82cmを測る。埋土中からほぼ完形の壺が出土している。

出土遺物（図版41, 第21図）

壺（88・89） 88は逆L字状口縁、89は如意形口縁の壺の小破片である。89の外面には多量の煤が付着している。

壺（87） 口縁部は如意形で、口縁下に2条の沈線がめぐるが、下の沈線は浅く部分的に途切れている。口縁端部には刻目が施され、底部は焼成後に穿孔されている。外面は器面の剥落が著しいが、調整は外面は刷毛、内面はナデで仕上げている。色調は暗茶褐色を呈す。口径20.2cm、器高22.5cm、底径7.2cmを測る。

22号貯蔵穴（図版9-2, 第20図）

21号貯蔵穴の南側から検出された楕円形プランの小豊穴である。規模は長径130cm、短径120cm、深さ14cmを測る。

23号貯蔵穴（図版9-2, 第20図）

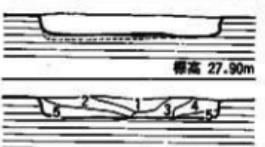
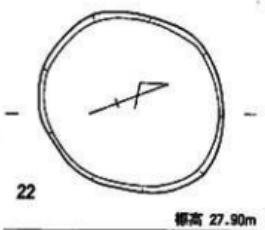
22号貯蔵穴の南側に近接した袋状豊穴で、底面形は脛張り隅丸方形を呈す。規模は長径135cm、短径131cm、深さ52cmを測る。出土遺物は、弥生土器小片と黒曜石・サヌカイト片が若干である。

出土遺物（第21図）

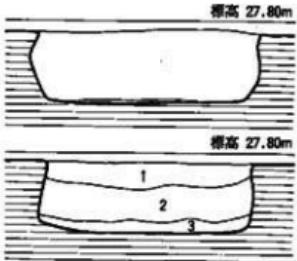
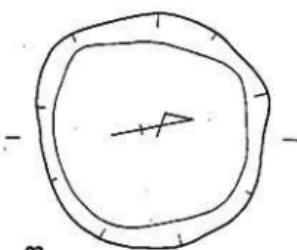
壺（90） 逆L字状口縁壺の口縁部小片である。色調は燈色で、焼成も良好である。

壺（91・92） 底部付近の破片資料で、復原底径は91が9cm、92が11cmを測る。92の内外はヘラ磨きで仕上げていて、壺には珍しいが外面には厚く煤が付着している。

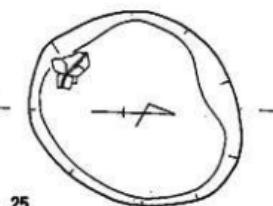
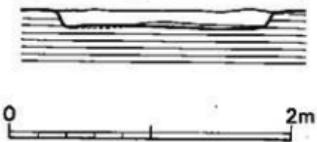
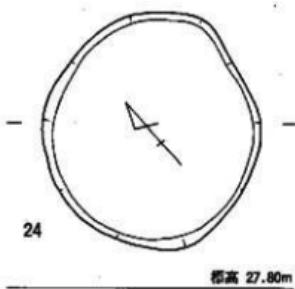
器台（93） 据部の小破片で、色調は肌色で焼成も良い。



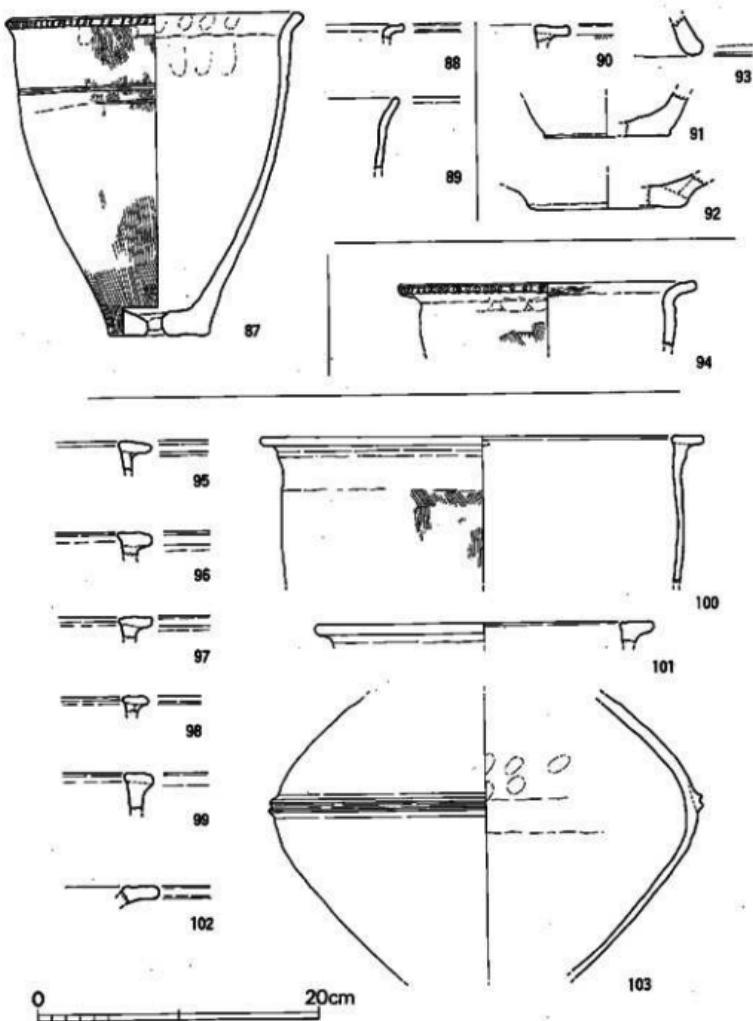
1. 暗茶褐色土
2. 黒色土
3. 黄茶褐色土
4. 黄褐色粘質土
5. 茶褐色土



1. 暗茶褐色土（黄褐色土混り）
2. 黒茶褐色土
3. 暗茶褐色土



第 20 図 22~25号貯藏穴実測図(1/40)



第 21 図 21・23～25号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

24号貯蔵穴（図版9-2, 第20図）

23号貯蔵穴の南側から検出された底面形が円形プランの浅い竪穴である。規模は長径156cm, 短径143cm, 深さ11cmを測る。

出土遺物（第21図）

壺（94） 小形の如意形口縁の壺で、復原口径21cmを測る。胴部外面を刷毛、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデ調整し、口縁端部には刻目を施している。色調は暗茶褐色を呈し、外面には煤の付着がみられる。

25号貯蔵穴（第20図）

発掘区東端中央にあって、24号貯蔵穴の南側から検出された竪穴で、底面形は不整梢円形を呈す。底面より若干浮いた状態で壺・壺等の破片が少量出土した。規模は、長径140cm, 短径115cm, 深さ30cmを測る。

出土遺物（第21図）

壺（95-101） いづれもT字状口縁の壺で、98・99は原初的なT字状口縁である。100は復原口径31.4cm, 101は24cmを測る。

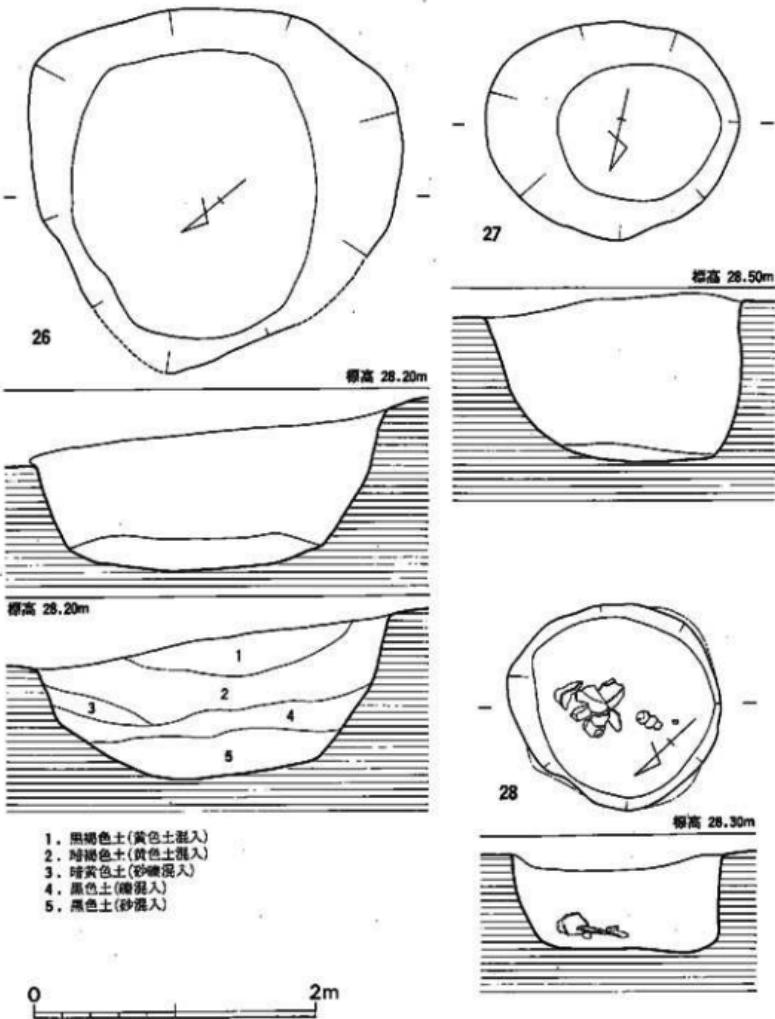
壺（102・103） 102は錐先状口縁の小破片、103は扁球形の胴部資料で、外面にはM字状凸帯が付されている。胴部内面はナデ、内面の上方の一部と外面はヘラ磨きで仕上げている。色調は暗茶褐色を呈し、焼成も良好である。胴部最大径は30cmを測る。 (井上)

26号貯蔵穴（図版10-1, 第22図）

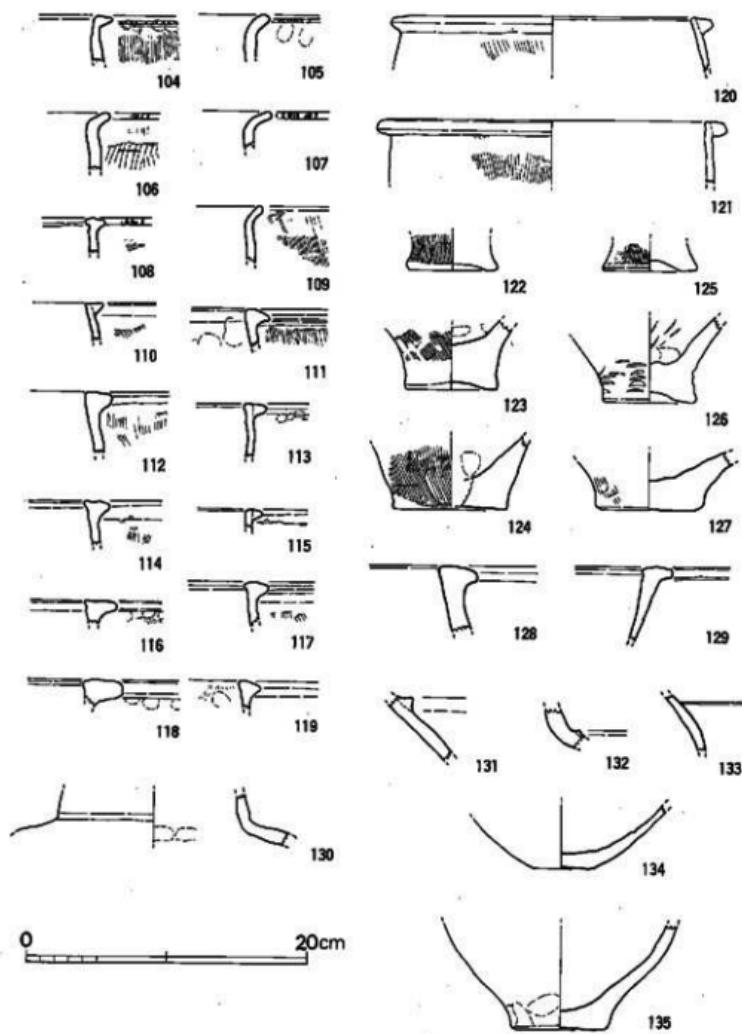
貯蔵穴群の北東側に位置し、26-28号と一緒にする。上面は一部崩落のため不整形をなすが、底部平面形は径205×173cmの胴張り隅丸長方形をなす。壁はやや膨らみながら外に開き約110cm残存する。埋土は、底面近くは水平に近く堆積し、上部になるとスリ鉢状に近い堆積を示す。遺物は土器・円盤状土器片・サスカイト剝片が出土している。

出土遺物（図版51, 第23・24図）

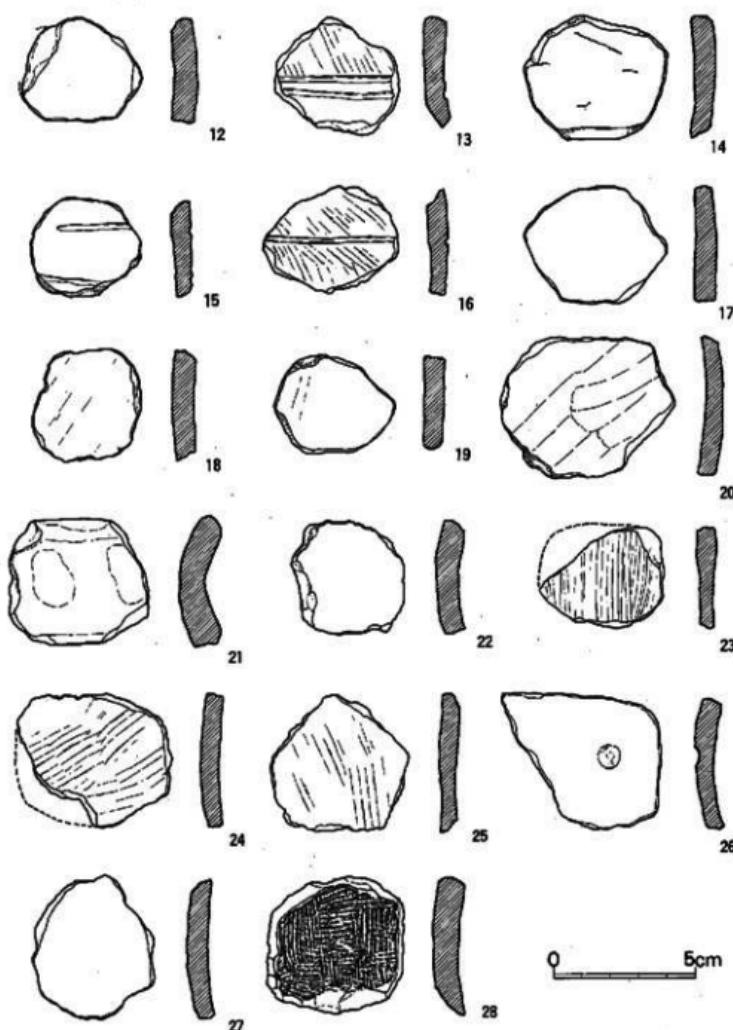
壺（104-127） 如意形口縁をなし、刻目を持つもの（105-107）、口縁端に断面三角形の粘土帯をめぐらし、刻目を施すもの（104・108）、刻目を施さないもの（110-117・119-121）がある。104-108は、小片のため下位にもう1条の凸帯が貼付されるのかは明らかでない。口唇部刻目は、105が下端に、106・107は端部全面に施されている。120・121は口縁部粘土帯は断面台形に近くなっている。復原口径内径は、120が19.6cm, 121が21.6cmである。122-127は底部で、平底をなすもの（124）、上げ底になり厚みをもつもの（122・123）がある。いづれも外面に刷毛目調整痕が残る。



第 22 図 26~28号貯藏穴実測図(1/40)



第 23 図 26号貯藏穴出土土器実測図(1/4)



第 24 図 貯蔵穴出土土製品実測図3 (1/2)

鉢 (129) 口唇部外面に粘土帯を貼り、逆L字状の口縁にし、口唇部内面は、ヘラナデにより、若干突出させる。内外面とも口縁下3.5~3.0cmまで横位ヘラ研磨が施され、以下はナデ調整が行われる。高杯の杯部の可能性もある。

臺 (128・130~135) 128は口縁部片で、口唇部に断面三角形に近い粘土帯を貼付する。内外面とも丁寧にヘラ研磨が施される。130~133は、頸部から肩部にかけての破片である。131・132は頸部に断面三角形の凸帯を持ち、133は肩部に一本沈線が引かれる。134・135は底部片である。130は、おそらく混入品であろう。

円盤状土器片 (第24図12) 変形土器胴部破片を打欠きにより椭円形に成形する。周縁磨滅のため明瞭でないが、短辺部に紐かけ用の挿りのような部分が残る。一部欠損するが、重量は13.95gである。

サヌカイト剝片 2点検出されており、1点は、1.5×2.2cmの小片であり、他は3.1×5.0cmの縱長の剝片である。

27号貯蔵穴 (図版10-2, 第22図)

26号の西側にある。底部平面形は116×97cmの楕円形をなす。壁は、一部袋状をなすが、他は崩落のためか、スリ鉢状に外に向く。残存の深さは116cmである。上面形は180×155cmの楕円形をなす。遺物は、下層と上層に分けて取り上げた土器と、砥石・円盤状土器片がある。

出土遺物 (図版49, 第24~27図)

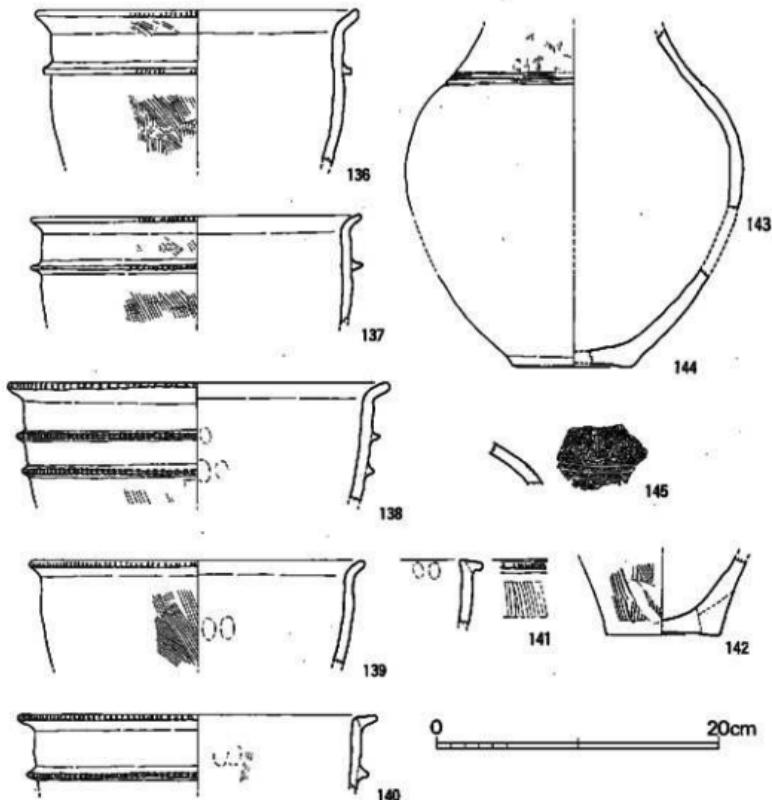
下層出土土器 (第25図)

甌 (136~142) 136~141は、口縁部片であるが、如意形口縁 (136~139)、如意形に近いが粘土を貼付したもの (140)、粘土を貼付し、逆L字状口縁をなすもの (141) がある。いずれも口唇部に刻目を施すが、139のみ口唇部下端に施され、136・137・138・140・141は、端部に施される。136は、口縁下4.5cmに、やや垂れ下がった刻目を施した粘土凸帯をめぐらす。復原口径23cm。137に1条、138には2条、140に1条の断面三角形の刻目を持った凸帯をめぐらす。復原口径は、137が23.5cm、138が27.0cm、139が23.9cm、140が25.4cmである。142は、平底で薄手の底部で、136~141までの甌の底部としておかしくないものである。外面は刷毛目調整の後、一部ヘラナデが施される。

臺 (143~145) 143と144は、接続部分はないが同一個体と思われるものである。頸部に3条の浅い沈線を施し、外面はヘラ研磨を施す。頸部に一部刷毛目調整痕が残る。底部は平底であるが中心部を若干凹ませている。145は、肩部破片で3条の沈線が残る。外面は、刷毛目調整のあと横位のヘラ研磨が施されている。

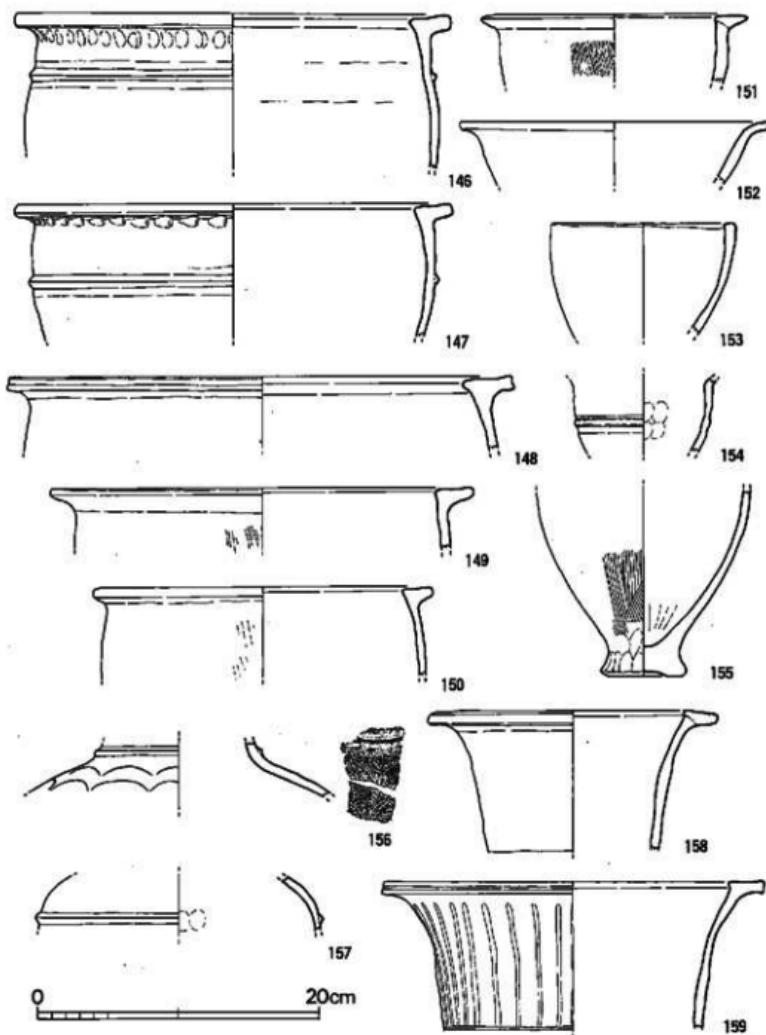
上層出土土器 (第26図)

甌 (146~151・155) いずれも、口縁端外面に粘土帯を貼付し逆L字形の口縁とする。146・



第25図 27号貯蔵穴出土土器実測図1(1/4)

147は、口縁下約4cmと5cmの位置に、断面三角形の粘土帯を1条貼付する。口縁外面粘土帯接合部には工具による押圧の痕が明瞭に残る。復原口縁内径は、146は25cm、147は25.4cmである。148は、口縁外面端に明瞭な面をつくり、粘土接合部には工具痕が残る。内外面とも横位のヘラ研磨が施される。復原口縁内径28.5cm、149・150は口縁外面端部は丸味をおびる。外面は刷毛目調整が施されるが、多くはナデ消されている。復原口縁内径は、149が24.5cm、150が19.7cmである。151は小形の甕で、口縁部上面は丸味を帯び、外端部は幾分尖り気味になる。



第 26 図 27号貯藏穴出土土器実測図2 (1/4)

口縁下2cm以下に刷毛目調整痕が残る。復原口縁内径は14cmである。155は胴部から底部にかけての破片で、底部は括れ、指頭押圧痕が残る。内面底部はヘラでまわしながら削ったような痕が残る。外面は刷毛目の多くはナデ消されている。残存高13cm。

鉢（152-154） 152は、外に開き口縁部でゆるやかに外反する浅鉢で、内面は丁寧に横位のヘラ研磨が施される。外面は口縁部が横位、頸部以下が縦位にナデ調整される。復原口径21.8cm。153は、口縁が直口し、口縁端部は平坦である。外面は、口縁直下9mmは、凹線状にナデが施され、以下3.2cmまでは横位、それ以下を縦位のヘラ研磨をする。復原口径13cm。154は、口縁が外反する小形の鉢で、胴部に断面台形の粘土帯がめぐる。口縁端を欠くが復原口径は11.2cmほどになる。

壺（156-159） 156・157は頸部から肩部の破片で、156は頸部に断面三角形の凸帯がめぐり、肩部に約3cm程の間を置いて連弧沈線文を2列施す。外面は凸帯部分以外はヘラ研磨、内面は頸部までヘラ研磨、以下をナデ調整をする。157は、球形胴部をなす壺の肩部に断面三角の粘土帯をめぐらす。外面は、横位ヘラ研磨が行われている。158・159は、口頸部破片で、鋤先状に近い口縁をなす。いずれも、頸部と胴部の接点に1条の沈線が引かれている。159は、外面に縦位の暗文が施され、内面は横位のヘラ研磨が行われている。復原口縁内径は、158が15.8cm、159が22cmである。

砾石（第27図10） 上層より出土しており、断面長方形をなし、4面を使用している。いずれの面も平坦でなく、ゆるやかに凹む。一面に金属によると思われるキズが数条はしる。一方が欠損し、残存長4cm、厚さ2.7×1.8cm程である。

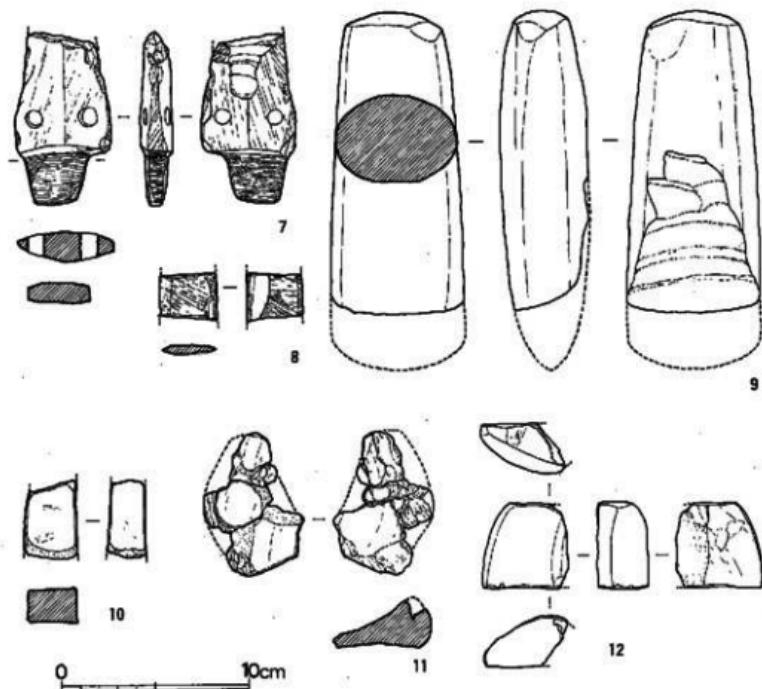
円錐状土器片（第24図13） 壺の頸部沈線部分の破片を利用したもので、打欠きは両面より行われ、周囲角部は磨滅する。特別に紐かけを意図した打欠き、切り込みはない。14.55g。

28号貯蔵穴（図版11-1・2、第22図）

27号の南側にあり、底部平面形は132×123cmの不整円形をなす。壁は一部袋状に膨らむが、崩落のため外に開く。上面形は148×142cmの不整円形をなす。遺物は、底面近くに壺・甕などがありまとめて出土した。

出土遺物（図版41、第28・29図）

甕（160-173） 如意形口縁をなすもの（160-164・166）と、口縁外面に粘土帯を貼り、逆L字状口縁をなすもの（165・167-169）がある。160・162は、口縁端に刻目を施し、口縁下4.5cmと、3.5cmに粘土帯をめぐらし、刻目を施す。復原口径は160が28.3cm、162が24.1cmである。161・166は、口唇部下端に刻目、163・164は刻目を持たず、口縁下の凸帯もない。161は外に開き、内面にヘラ研磨が施されるなど鉢に近い。復原口径22.9cm。残存高11.5cm。163・164は、直口する口縁に粘土帯を貼り如意形に近い口縁をつくり出している。接合部外面には、

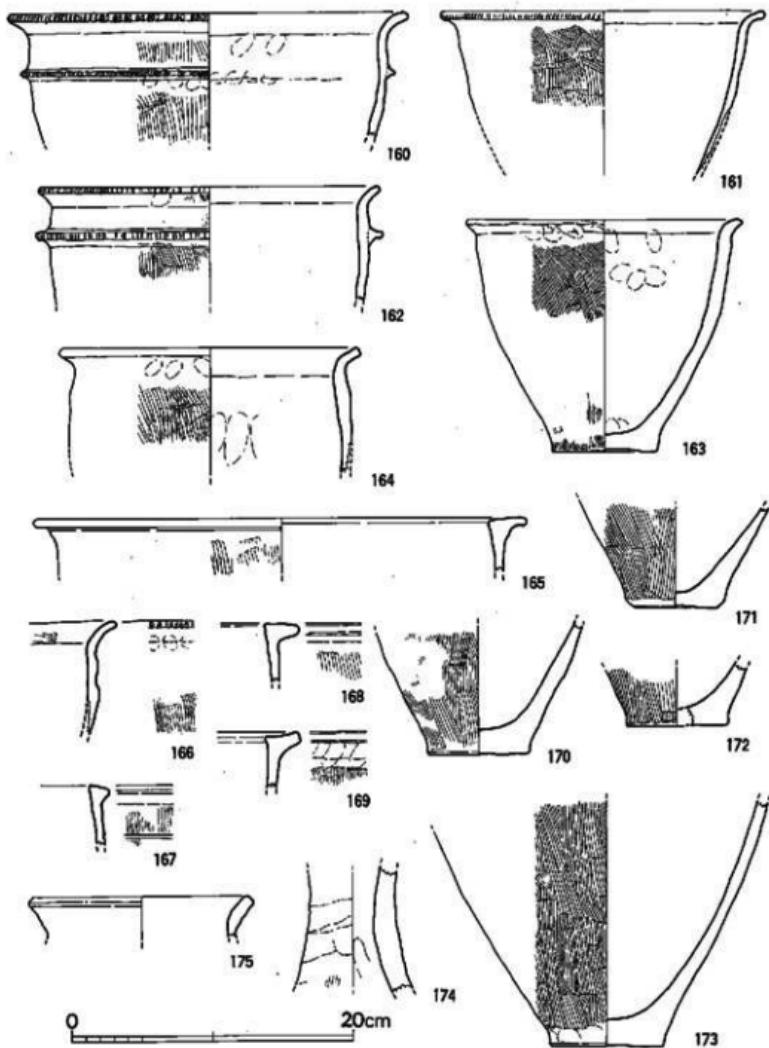


第 27 図 貯藏穴出土石器実測図2 (1/3)

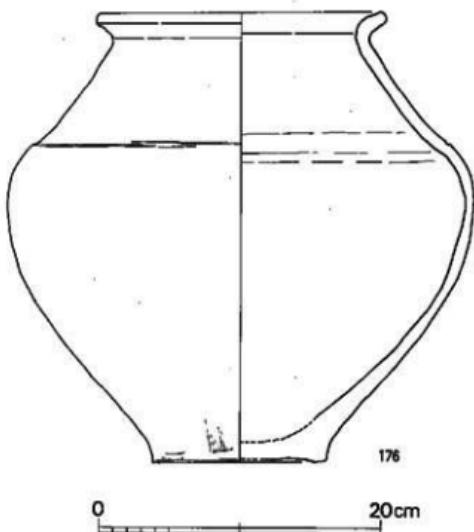
押圧痕が残る。163が復原口径19.5cm、器高16.3cm、164が復原口径21.2cmである。167は、丸味をおびた断面三角形に近い粘土帯をめぐらし、口縁下3.5cmに1条の沈線をめぐらす。165は、復原口縁内径29.4cmで、口縁端はやや垂れ気味である。170-173は、いずれも平底の底部で、160-162の底部として時期的に合うものである。

臺 (175・176) 175は、口縁が外反し、やや肥厚する。復原口径16cm。176は、口縁が短く外反し、頸部が、末広がりに肩部に至り、1条の沈線をめぐらし、胴部につづき平底の底部に至る。外面は頸部以下、横位のヘラ研磨が施され、内面は、口縁・頸部に横位にヘラ研磨、胴部一部にヘラ研磨らしい痕跡が残る。口径20.4cm、胴部最大径32.8cm、底径12.2cm、器高31.9cm。

器台 (174) 脊部破片で、外面は刷毛目痕が残るが殆どがナデ消される。残存高9cm。



第 28 図 28号貯藏穴出土土器実測図1 (1/4)



第29図 28号貯蔵穴出土土器実測図2(1/4)

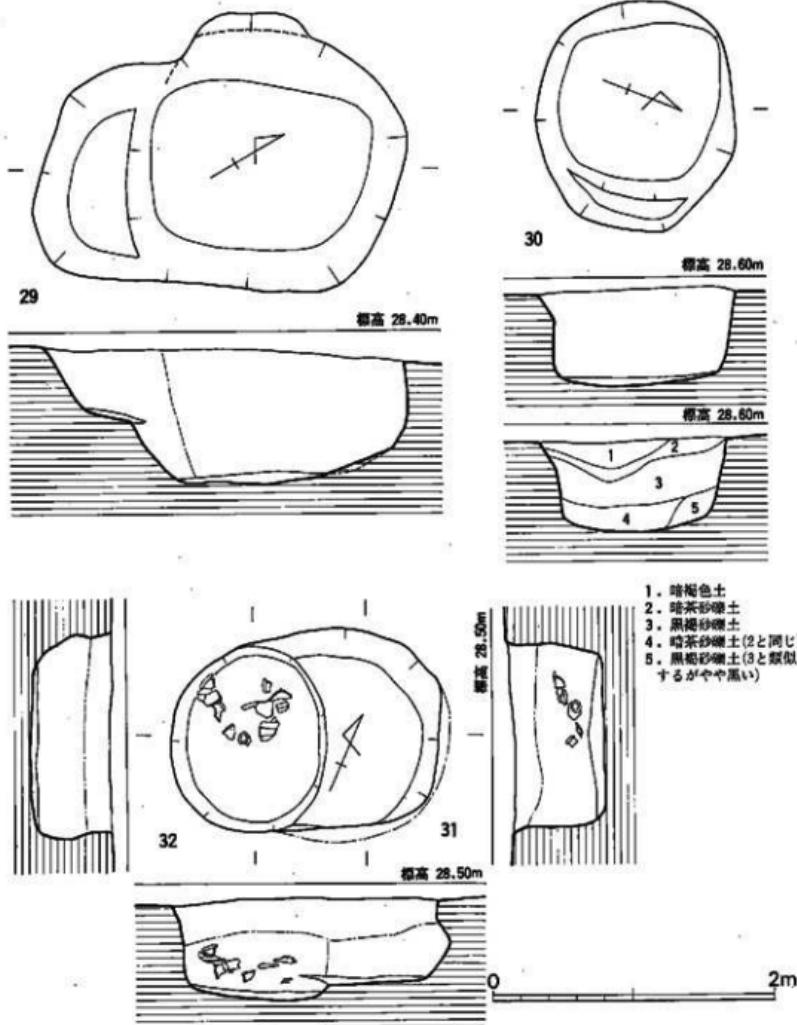
29号貯蔵穴 (図版12-1, 第30図)

本貯蔵穴には、 $153 \times 135\text{cm}$ の平面形隅丸長方形をなす底面より 45cm 上南側に、半月状をなすテラスが認められるが、切り合い関係は発掘時に確認されていない。おそらく、二つの貯蔵穴が切り合っているものと思われ、深い方を29-a、浅い方を29-bとする。aは壁の一部はやや袋状をなすが外に開き、深さ 85cm である。bの底面は半月状で最大長 105cm 、残存幅 42cm で、壁はスリ鉢状に開き、深さ 50cm である。出土遺物は土器のみである。

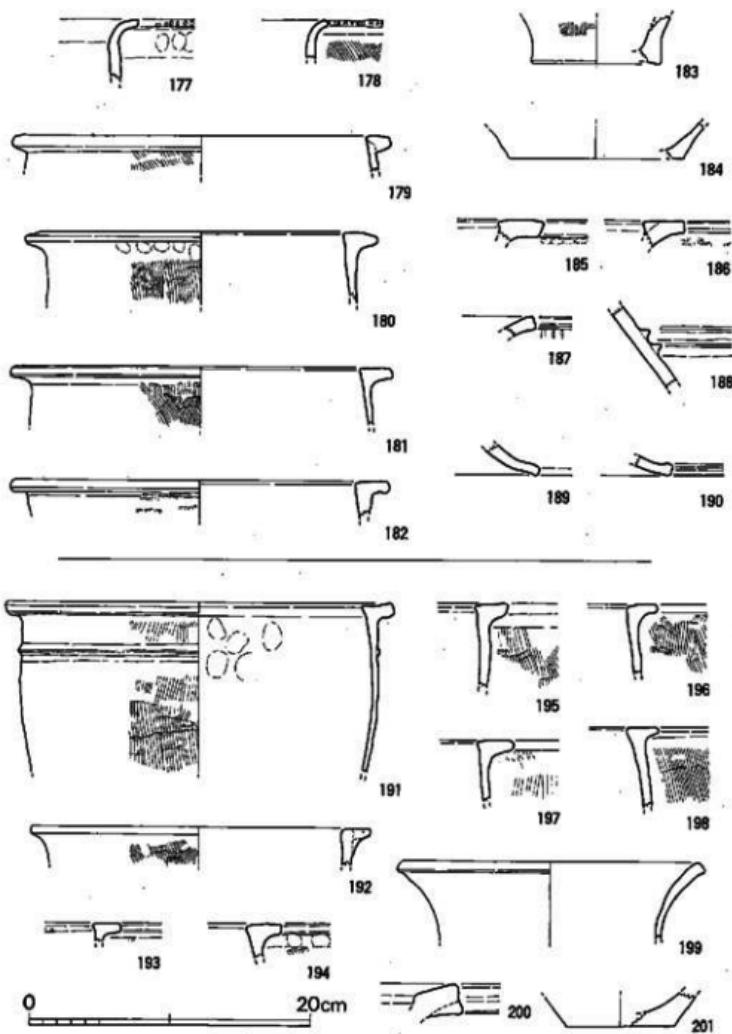
出土遺物 (第31図)

甕 (177~183) 口縁部が、如意形をなし口唇部に刻目を持つもの (177・178) と、逆L字状をなすもの (179~182) がある。178は、内面に横位の荒いヘラ研磨が見られる。179は、口縁部に貼付した粘土帯を断面台形状に成しており、粘土貼付下に刷毛目調整痕が残る。復原口縁内径は、179が 23.3cm 、180が 20cm 、181が 22.6cm 、182が 22.0cm である。183は底部片で平底となる。

壺 (184~188) 185・186は、鋸先状に近い口縁で186は、口縁内部に粘土帯を貼付して成形している。剥離痕が明瞭である。184は、底部片で、丸底状に成形された底部に鉢巻状に貼



第30図 29~32号野藏穴実測図(1/40)



第31圖 29·30號貯藏穴出土土器實測圖(1/4)

付された粘土部分の剥離部である。188は、肩部片で断面三角形の粘土帯が2条M字状に貼付されている。

蓋 (189・190) 端部片で、いずれも小片である。

30号貯蔵穴 (図版12-2, 第30図)

28号貯蔵穴の南側にあるが、32号貯蔵穴などと一群をなす。底部平面形は、112×110cmの隅丸方形をなし底面はやや凹む。壁は、眼らみを持ちながら外に向く。東側に一部テラス状のものがある。深さ69cm。出土遺物は、土器片と軽石が出土している。

出土遺物 (第31図)

甕 (191-198) いずれも口縁部破片で、口縁外に粘土帯を貼付し逆L字状に成形する。191は、口縁下3.5cmに断面三角形の凸帯をめぐらす。外面には、刷毛目調整痕が残る。復原口縁内径は、191が22.9cm, 192が20cm。

壺 (199-201) 199は、頸部から湾曲しながら外反する口縁で、端部は平坦面をなす。復原口径21.8cm。200は、大形壺の口縁端の剥離部分である。口縁上面は、丁寧に研磨される。201は、底部片である。

石製品 素材は軽石で不整形である。一部面が曲線をおび、研磨の痕跡がある。定形はなく、用途は不明であるが、何かを擦るのに使用されたものか。54.95g。

31号貯蔵穴 (図版13-1, 第30図)

32号貯蔵穴に、西側刃が切られている。残された底部平面形よりすると、120×(120?)cmの円形になると思われる。壁は、袋状をなし、口縁付近で直になる。深さは58cm。出土遺物はない。

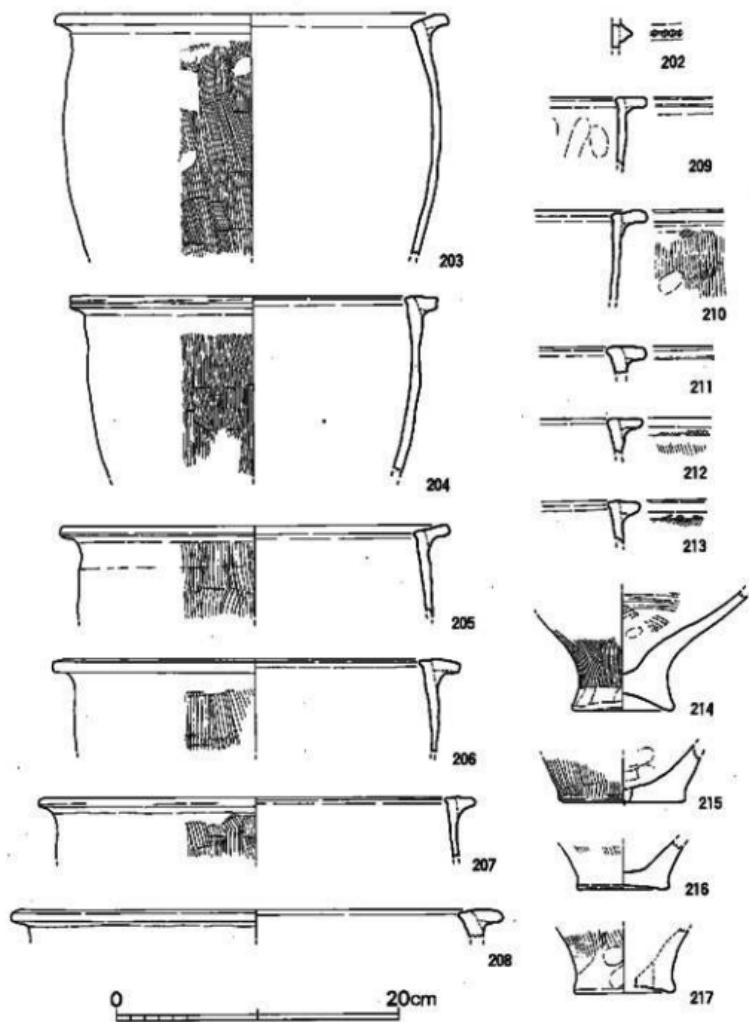
32号貯蔵穴 (図版13-1, 第30図)

31号貯蔵穴を切っている。底部平面形は、120×95cmの梢円形をなし、底部はやや凹む。壁面は袋状になり、口縁付近で外反する。深さ70cm。出土遺物は、土器のみである。

出土遺物 (図版41, 第32-33図)

甕 (202-217) 202は、口縁下断面三角形凸帯部片で、刻目が施される。203-213は、口縁外に粘土帯を貼付し、逆L字状口縁にする。口縁はやや内傾し、胴部は脹らむ。口縁接合部は、指圧痕または、ナデによって補強され、その部分は刷毛目がナデ消される。以下は継位の刷毛目調整痕が残る。214-217は底部片であり、215-217は平底に近い。外面には、刷毛目が残る。

鉢 (218・219) 218は口縁外に粘土帯を貼付し、口縁上面は、平坦をなす。口縁部は内



第32图 32号防盗穴出土土器实测图(1/4)

湾し、湾曲しながら底へ向う。外面は、工具による擦過調整痕が明瞭である。219は、口縁が若干外反するが、逆ハの字状に聞く。復原口径は、218が 26.8cm 、219が 28cm である。

壺 (220~226) 220・221は、頸部から湾曲しながら外反する口縁部片で、外面に縱位の暗文(?)がある。222・224は、口縁外に粘土帯を貼付し、鋤先状に近い口縁にする。224は、上面、内面ともヘラ研磨がなされる。224の復原口縁内径は、 32.2cm 。225は頸部から肩部の破片で、接合部に断面三角の粘土帯がまかれる。頸部は、内面横位ヘラ研磨、外面は横位ナデの後、縱位に 6.3cm の間隔で、3本単位の暗文がある。肩部外面は横位ヘラ研磨。223は球形に近い壺の肩部片で、2本の浅い沈線がめぐる。226は平底底部片である。

蓋 (227) 端部破片で、内面に横位刷毛目調整が認められる。

器台 (228) 底径 9cm 。残存高 5.3cm 。外面刷毛目調整が行われる。

33号貯蔵穴 (図版13-2, 第34図)

32号貯蔵穴の南西にあり、35号貯蔵穴に接するが、切合関係にはない。底部平面形は、 $120\times 112\text{cm}$ の隅丸方形をなし、壁は一部袋状に立ち上る。残存深さ 72cm 。上部平面形は、崩落のため不整形をなす。出土遺物は、土器片と、不明土製品である。

出土遺物 (第10・33図)

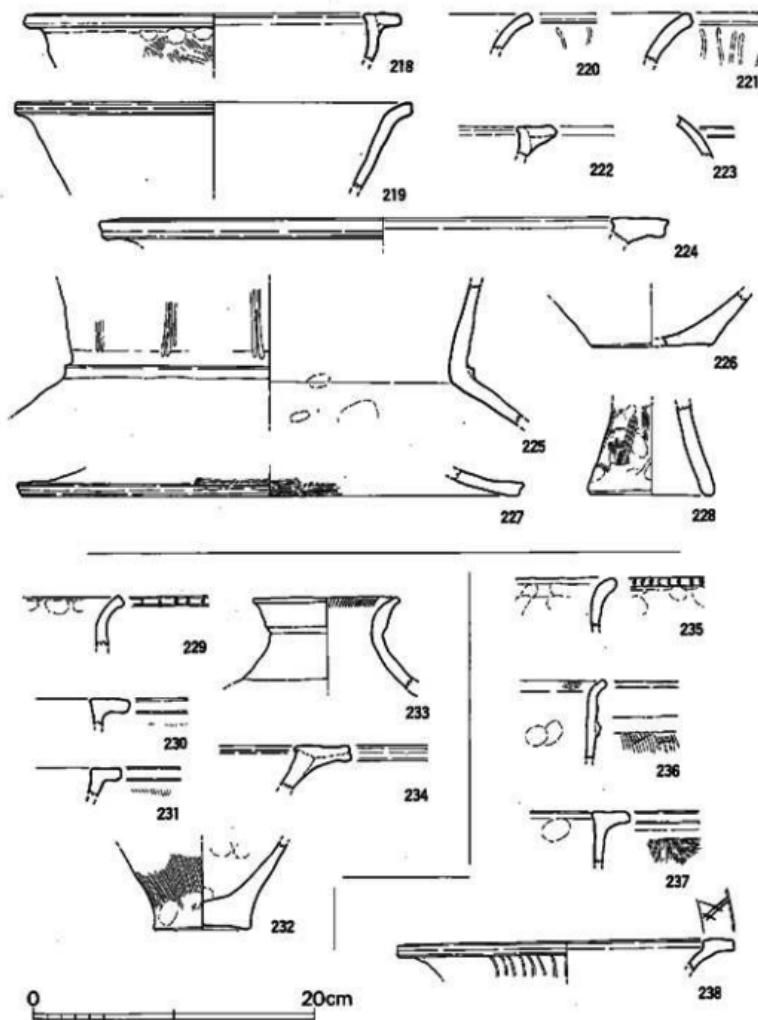
壺 (229~232) 229は、如意形の口縁をなし、口唇端は面をなし、荒い刻目を施す。230・231は、口縁外に粘土帯を貼付し、逆L字状の口縁とする。粘土接合部以下に、刷毛目痕が残る。232は、底部片で、平底をなす。成形時、内面底部に凹盤状の粘土を押え込み、底を厚くしている。底径 6.9cm 。

壺 (233・234) 233は、口径 10.4cm の小形壺口縁部破片で、口縁部は肥厚する。口唇端から 1.2cm までの内面に縱位に赤色顔料による線文が密に引かれている彩文土器である。頸部から肩部へは、少し盛り上がる。234は、大形壺の口縁部片で、鋤先状の断面をなす。

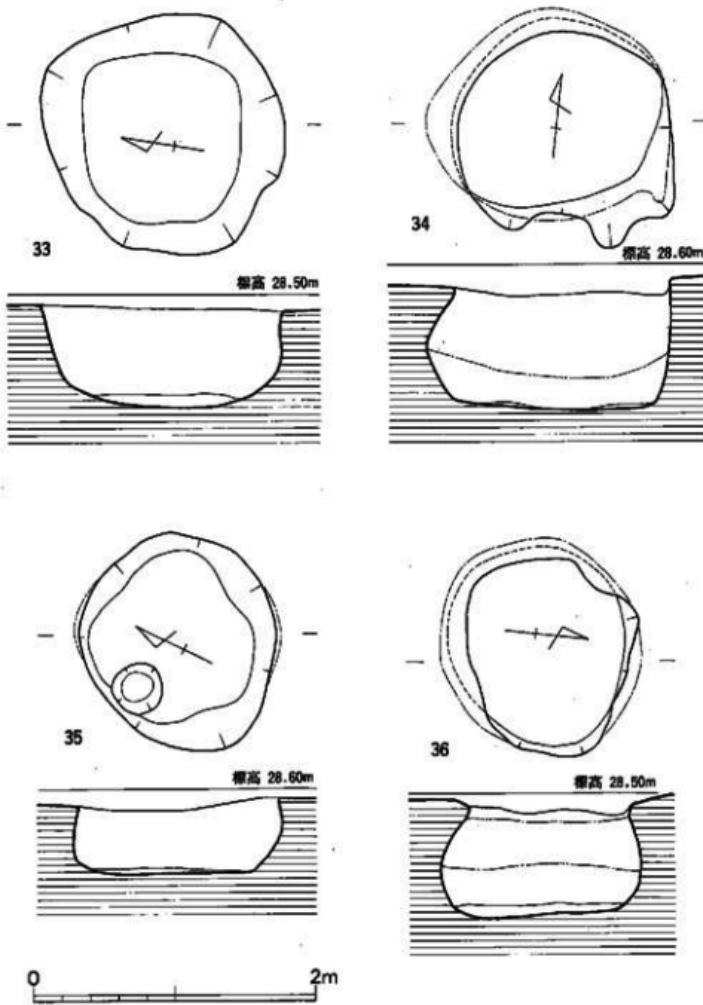
不明土製品 (第10図30) 不整長方形に近い、扁平な粘土塊で、胎土は精良な粘土である。板状、棒状、植物茎風なもの、刷毛目工具のようなものなどの擦過痕があり、その上に重なるように粘土が押しつけられるなどしている。形状に意味があるのか不明であるが、土器成形時の削り溝の粘土をかためたものである可能性がある。

34号貯蔵穴 (第34図)

33号貯蔵穴の東側にあり、底部平面形は、 $147\times 137\text{cm}$ の稍円形をなす。壁は、袋状に立ち上る。上面形は崩落のため一部不整形をなすが、稍円形に近い (径 $150\times 127\text{cm}$)。残存深さ 91cm 。出土遺物は、土器片少量である。



第 33 圖 32~34 千米貯藏穴出土土器実測図(1/4)



第34図 33~36号防空穴尖端圖(1/40)

出土遺物（第33図）

甕（235～237） 235・236は如意形口縁をなし、235は口唇部に荒い刻目を施すが、残存部には刷毛目調整痕は残っていない。236は口唇部に刻目はないが、口唇下3cmに刻目凸帯の剥離痕がある。凸帯以下に刷毛目痕がある。237は、逆L字状に口縁外に粘土帯をめぐらす。接合部ナデ以下に刷毛目痕が残る。

壺（238） 外反する口縁端部内面に粘土帯を貼付し錐先状になる。内面・口縁上面は丁寧に研磨され、口縁上面に、井桁状に浅い沈線が引かれている。外面は、ヨコナデ調整のあと、6～9mmの間隔で、縦位に暗文が施される。復原口径23.8cm。

35号貯蔵穴（図版14-1，第34図）

33号の南西側に接する。底部平面形は、118×108cmで隅丸方形に近いが不整形である。壁は袋状に立ち上るが、上平面は崩落のため不整円形をなす。残存深さ53cm。底面西側に径35cm、深さ10cm程のピットが認められる。出土遺物は、土器・管状土錘・サヌカイト剝片がある。

出土遺物（図版50、第35図）

甕（239～243） 239は、如意形の口縁をなし、口唇部下端に刻目が施される。通常刻目凸帯の付く位置まで（口縁下4cmまで）肥厚させ、段のついた部分を刻目風に、指圧圧を加える。肥厚部は横位に刷毛目調整がなされるが、その殆どは横位ナデ調整で消される。以下も横ナデ調整痕が残る。復原口径25.3cm。240・242は、粘土帯を口縁外に貼付し、逆L字状にしたものであるが、240は、その位置が若干下り、口縁上面が凹む。復原口縁内径18.0cm。241は、くの字に近く口縁が外反し、口唇端は幅広になり面をつくる。

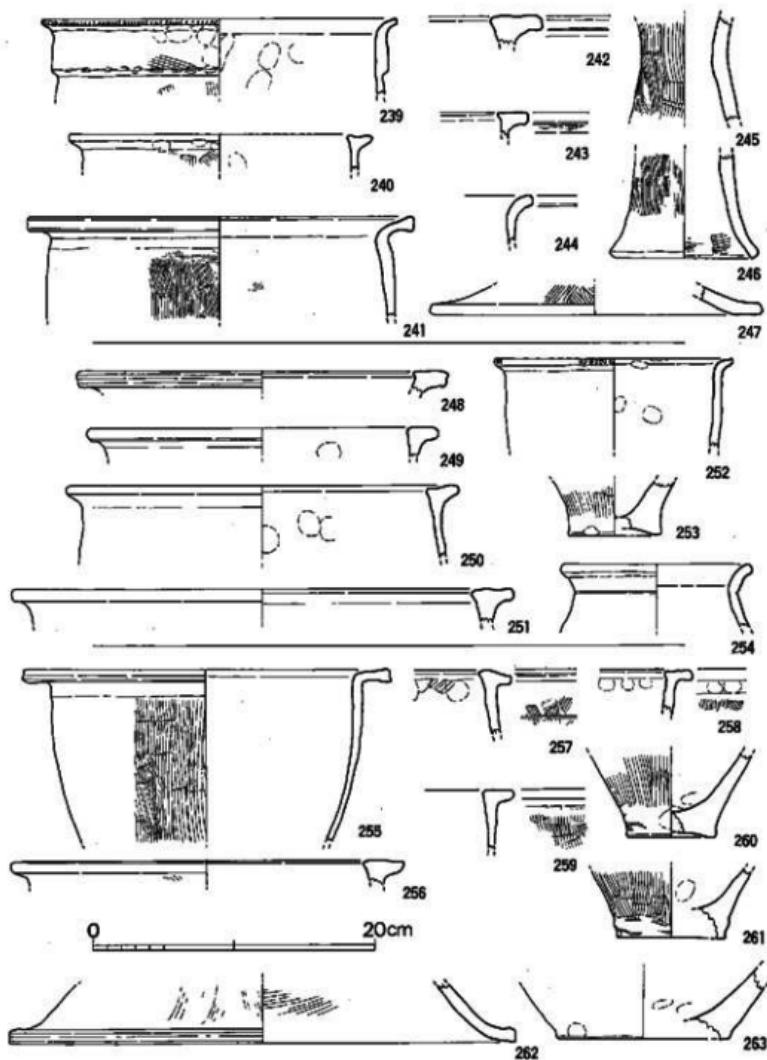
壺（244） 強く丸まって外反する口縁部片であるが、胎土が軟質で磨滅のため調整は不明。

器台（245～246） いずれも外面、荒い刷毛目調整痕が残る。246は、下端内面に、横位の刷毛目調整痕が残る。残存高は、245が7.5cm、246が7.2cmである。

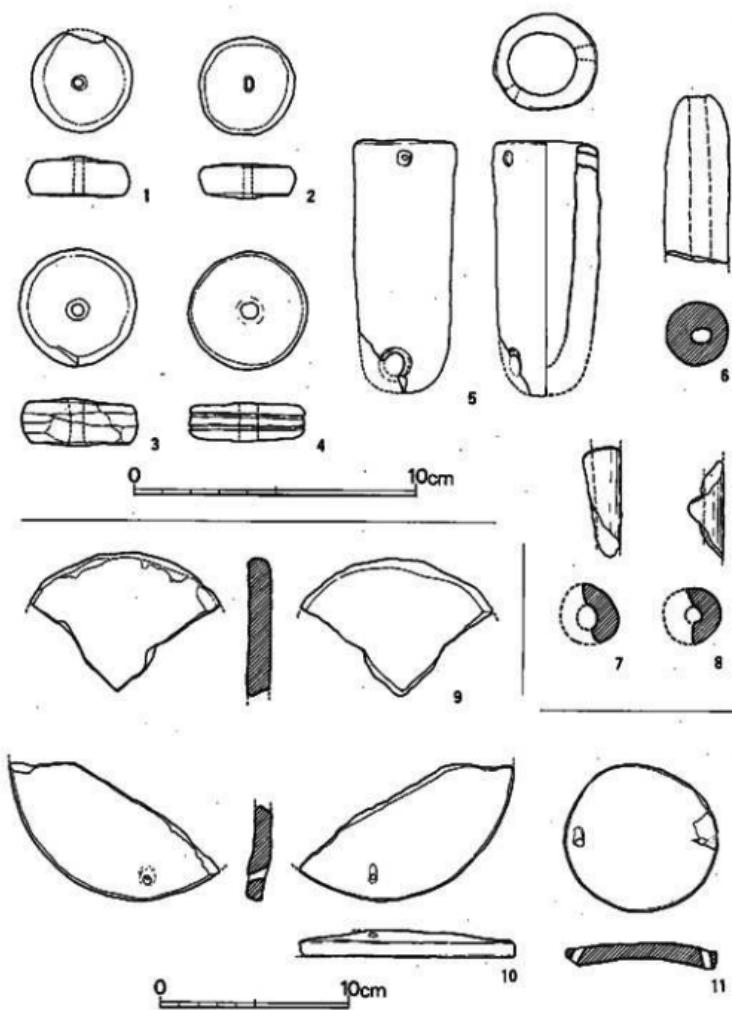
壺（247） 据部破片で、外面は荒い刷毛目痕が縦位に残る。内面は、据部端より1.7cmまでは、ナデ調整が行われる。復原据部径23.5cm。

管状土錘（第36図6） 直径6mmの、棒に粘土を巻きつけて径2.2cmの円管状に成形したもので、指圧の凹みがみられる。残存長6.1cmで一部欠損する。32.65g。

サヌカイト剝片 2点あり、一点は、3.3×2.4cm、厚さ5mmの方に近い横剥ぎの剝片で、一辺に加工痕がある（刃部長さ2cm）。未完成加工品である。もう一点は、一部表皮が残るが、4×1.5cmで、石器の素材をつくる時に剥離された剝片。



第35图 35~37号贮藏穴出土土器实测图(1/4)



第36図 貯藏穴出土土製品実測図4 (1/2-1/3)

36号貯蔵穴（図版14-2, 第34図）

35号貯蔵穴の西側に接し、37号の北西にある。底部平面形は、 $144 \times 129\text{cm}$ の梢円形をなし、壁は袋状に立ち上る。胴部最大径は、 $152 \times 142\text{cm}$ で、上面は崩落のため不整形をなすが、 $140 \times 110\text{cm}$ の隅丸長方形をなす。残存深さ76cm。遺物は、土器・円盤状土器片が出土している。

出土遺物（第35図）

甕（249-253） 252は、如意形に口縁が外反し、端部に刻目がある。内外面ともナテ調整痕が残る。復原口径16.9cm。249-251は、いずれも逆L字状になる口縁部破片である。復原口径内径は、249が20.5cm、250が23.2cm、251が29.6cmである。253は、上底気味の底部である。

壺（248・254） 248は、錐先状に近い口縁部片で、表面にスリップがかけられる。復原口径26.4cm。254は、丸く外反する口縁部を持つ小形壺の破片である。口縁は肥厚しないが、頸部との接点に沈線が1条引かれる。復原口径13.6cm。

37号貯蔵穴（図版15-1, 第37図）

5号住居跡の南西部隅に切られ、土壤29が少しづれて上にのる。底部平面形は、 $132 \times 111\text{cm}$ の胴張り隅丸長方形に近い。壁は外に聞いて立ち上り、残存深さは35cmである。底部南端に、径45×38cm、深さ40cmのピットがある。遺物は、土器と軽石が出土している。

出土遺物（図版48, 第35図）

甕（255-261） 257の口縁上面は下り気味で、口縁下3.5cmに、刷毛目調整のあと1条の沈線を引く。255の口縁は、丸みを帯びながら逆L字状に屈曲し、端部は幅広な面をなす。胴部はやや脹らみ、全面に縦位の刷毛目調整痕が残る。復原口径内径20.8cm。260-261は底部片で、260は上底気味で、261は平底となる。

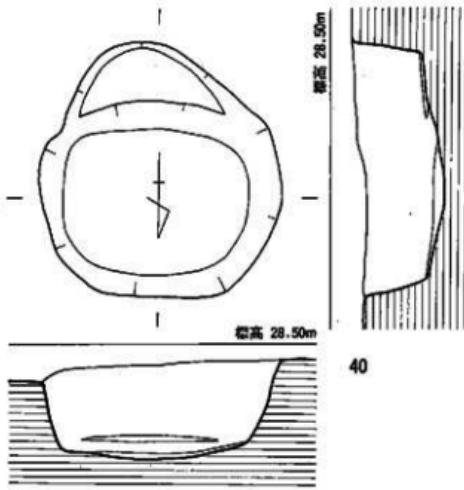
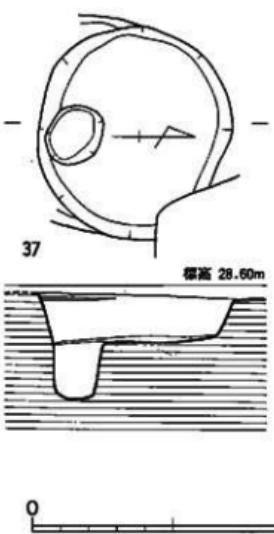
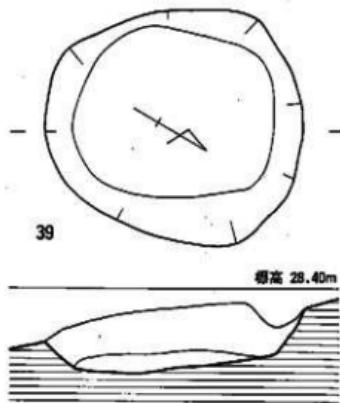
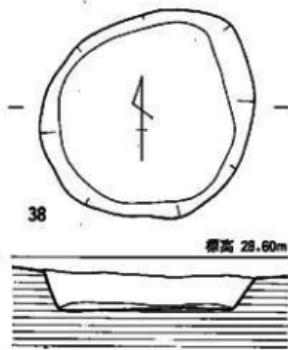
壺（262） 壺部が若干厚くなり端部は面をなす。内面に刷毛目調整痕が残る。外面は、浅く刷毛目状のもので調整する。復原壺部径36.0cm。

壺（263） 大形壺の底部片である。横位の荒いヘラ研磨が残る。

軽石（図版48-2-②） 平面 $8.5 \times 3.8\text{cm}$ の紡錘形をなし、厚さ3.5cmで、特別の加工痕は認められない。側縁部が若干磨滅する。29g。

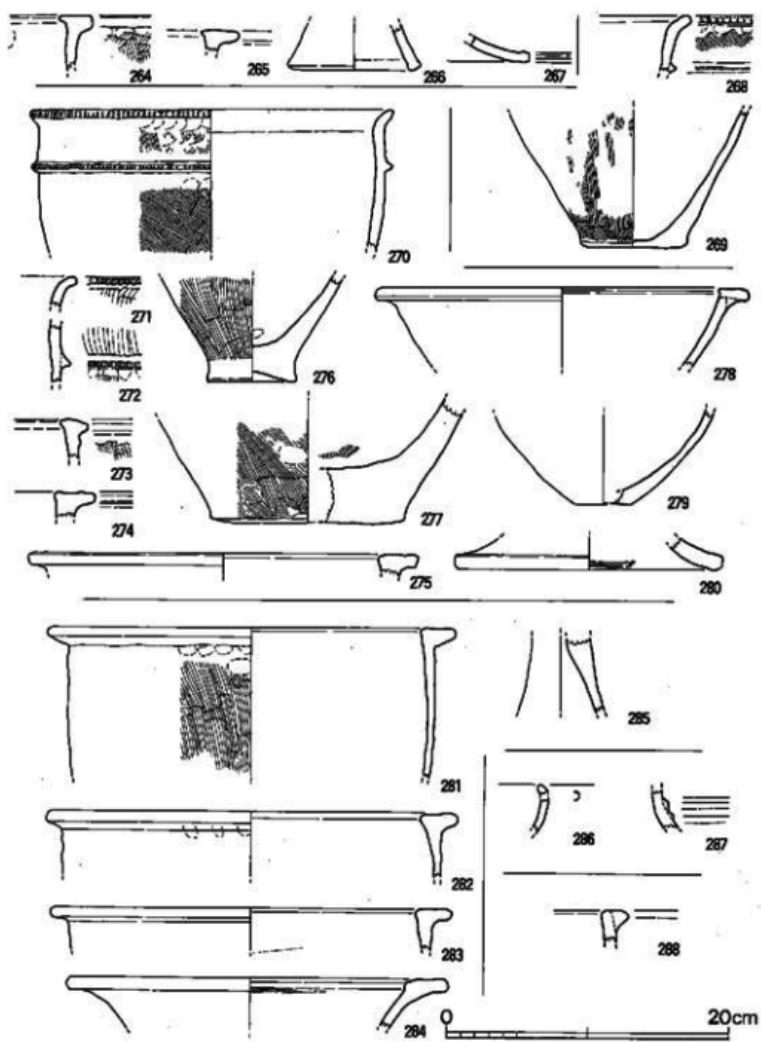
38号貯蔵穴（第37図）

36号貯蔵穴の南側にあり、土壤14が一部重なるようにしてのる。底部平面形は、 $125 \times 122\text{cm}$ の不整円形をなす。残存状態は悪く、壁は30cm残るにすぎない。遺物は、土器と軽石が出土している。



0 2m

第37図 37~40号貯藏穴実測図(1/40)



第38圖 38~43号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

出土遺物（図版48、第38図）

甕（264・265） いずれも、口縁外側に粘土帯を貼り、逆L字状にする。264は、内側にも貼付し、断面三角形に突出させている。外面に刷毛目調整痕が残る。

器台（266） 復原底部径9cm、残存高3cmで、端部がやや肥厚する。内面はヨコナデ調整される。

蓋（267） 据部破片で、外面端部より1.5cmはヨコナデ、それ以上は縦位、斜位のナデ調整が行われる。

軽石（図版48-2-③・④） 2個出土し、一面だけ11×6.5cmの不整橢円形に近い平坦面を持つが、特別の磨減痕等はない。高さ6cm程で長軸にそって両側から、つまみ状に抉れる。70.35g。もう一点は、7.5×7.5cmの隅丸方形に近い平坦面を持つが、特別な加工痕はない。高さ4.5cmの角錐状をなし、頂部より5本の凹みが走り、一本は、幅2.5cmほどの断面ゆるやかな半円をなし、何かの掠過によって出来た溝のようにもみえる。40.75g。

39号貯蔵穴（第37図）

40号貯蔵穴の東側に接する。底部平面形は、143×120cmの不整隅丸長方形をなす。壁は、外に開き、深さ43cmが残存する。遺物は、土器が出土しているのみである。

出土遺物（第38図）

甕（268・269） 268は、如意形口縁をなし、口唇端に刻目を持つ。口縁下3.5cmに断面三角形の刻目ある凸帯がめぐる。269は、平底をなす底部で、おそらく268と同一個体と思われる。

40号貯蔵穴（図版15-2、第37図）

39号貯蔵穴西側に接する。底面南側に半円状のテラスがあり、おそらく2個の貯蔵穴が切合っているものと思われる。底部平面形隅丸長方形のものを40-A、半円形のものを40-Bとする。40-Aは底面径132×105cmで、壁は服みを持って外に開き、深さ70cmを測る。40-Bは、残存底面径103×37cmで、40-Aより15cmほど床面が高い。壁は、外に開き50cm残存する。遺物は、土器・紡錘車・円盤状土器片が出土している。

出土遺物（図版50-1、第11・36・38図）

甕（270-277） 270・271は、如意形口縁をなし、270は、口唇部下端に刻目を施し、口縁下4cmに断面三角形の刻目ある凸帯をめぐらす。271は、口唇端部に刻目があり、同一個体と思われる272は、口縁下の断面三角形の刻目ある凸帯である。273・274は、口縁外側に粘土帯を貼付し、逆L字状に近い口縁とする。276は上底気味、277は平底で、やや大形壺の底部片である。

高杯（278・280） 杯部破片で外に開く口縁端に粘土帯を貼付し、鋤先状に近い口縁とする。

内外面とも横位ヘラ研磨が施される。復原口縁内径22.2cm。280は、脚端部片で、外面は縱位ヘラ磨き、内面は端部から2.5cmまで横位刷毛目が残る。復原底径19.2cm。

壺(279) 底部片で、底面やや凹む。外面は、胴部最大径付近は横位、以下は縱位の丁寧なヘラ磨き、内面は横位のヘラ磨きが認められる。底部復原径3.6cm。他に、内面に赤色顔料、外面に赤色顔料と、縱位暗文(1cm間隔)を施した口縁部小片が出土している。

紡錘壺(第36図1・2) 1は、径3.64cm、厚さ1.3cmの土製円板に一方向より、径 4×4 mmの小孔を穿つ。20.85g。2は、径3.4cm、厚さ1.1cmの土製円板に一方向より 4×2.5 mmの小孔を穿つ。16.8g。

不明土製品(第11図38・39) 38は、 $3.4 \times 1.5 \times 0.8$ cmの粘土塊を絞ったような形をなす。39は、 $2.4 \times 2.3 \times 1.6$ cmの粘土塊で、粘土小片を合せ、多面体をなす。精良な粘土である。

(木村)

41号貯蔵穴(第39図)

40号貯蔵穴の南側から検出された竪穴で、底面形は不整円形をなす。規模は、長径165cm、短径160cm、深さ87cmを測り、断面はU字状で、他の竪穴と若干異なっている。出土遺物は壺・壺・高杯等の破片がある。

出土遺物(第38図)

壺(281~283) いづれもT字状口縁の壺で、復原口径は281が29.2cm、282が29.4cm、283が28.6cmを測る。いづれも器面の風化が著しいため、調整手法は不明な点が多いが、281の胴部外面は刷毛調整で、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデと思われる。281と282の口縁下には口縁部成形時の指頭圧痕がみられる。

壺(284) 鑿先状口縁の破片資料で、復原口径は28.2cmである。口縁部内面はナデ調整のあとヘラ磨きし、外面はナデで仕上げている。色調は淡褐色を呈し、焼成良好である。

高杯(285) 柱状部の破片資料で、外面タテヘラ磨き、内面ナデで仕上げている。(井上)

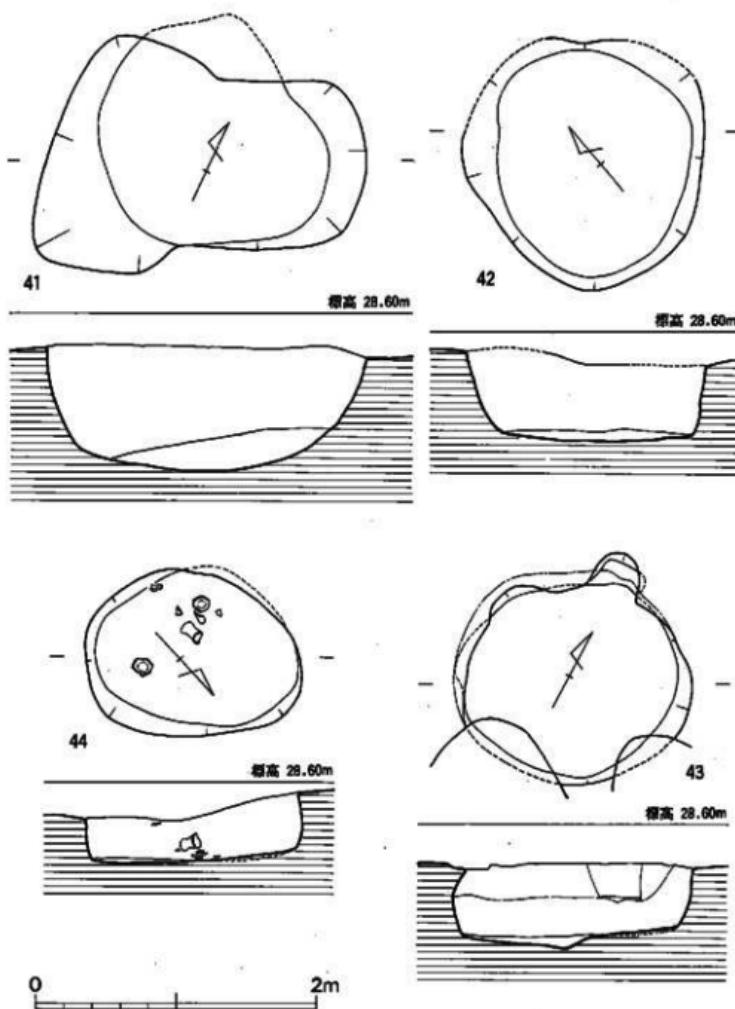
42号貯蔵穴(図版16-2、第39図)

40号貯蔵穴の西側、43号貯蔵穴の東側に接する。底部平面形は、 160×138 cmの不整楕円形をなす。壁はやや外開きに立ち上り、65cm残る。遺物は、土器が少量出土している。

出土遺物(第38図)

鉢(286) 口縁は丸味を帯びて内湾し、端部は丸まる。口縁下7mmに焼成前の径4mmの小孔が穿たれている。外面は丁寧な横位ヘラ磨き、内面は横位ナデ調整が残る。

壺(287) 頸部から肩部への接点で断面M字状の凸帯がめぐる。内外面とも、横位ヘラ磨きがなされる。



第39図 41~44号貯藏穴実測図(1/40)

43号貯蔵穴（図版16-2, 第39図）

42号貯蔵穴の西側に接し、44号貯蔵穴に切られる。底部平面形は、 $145 \times 144\text{cm}$ の円形をなし、壁は、袋状に立ち上り、深さ52cm残存する。上面形は崩落により不整形をなす。遺物は、土器少量と、円盤状土器片が出土している。

出土遺物（図版51, 第24・38図）

壺（288） 口縁外面に粘土帯を貼り、断面は丸まった三角形をなす。

円盤状土器片（第24図15） 壺肩部破片を $3.9 \times 3.5\text{cm}$ の円盤状に加工する。10.05g。

44号貯蔵穴（図版16-2, 第39図）

35・45号貯蔵穴を切る。底部平面形は $144 \times 112\text{cm}$ の梢円形をなす。壁は、やや脹みを持つも直に立上がる。深さ47cm。遺物は、土器・石戈・サヌカイト剝片が出土している。

出土遺物（図版49, 第27・40図）

壺（289-299） 289-292は、逆L字状の口縁、293-295は、くの字に外反する口縁を持つ。295は端部がやや厚くなり面をなす。296・297は平底、298・299は、やや上底の底部片である。

壺（300-303） 301-303は、壺先状の口縁部片、300は復原底径 10.3cm の底部片である。

石戈（第27図7） 残存長9cm。茎部幅 3.6cm 、厚さ 1.2cm 、断面脹みを持った長方形に整形。身基部両端に直径8mmの孔が、ほぼ円筒状に穿たれる。基部付近の両刃部は、刃はつくられず幅5mmほどの面をなす。身残存長は6.2cmで中央に鏽が走る。

サヌカイト剝片 $6.5 \times 3.5\text{cm}$ の横剥ぎの剝片。特別の加工痕はない。

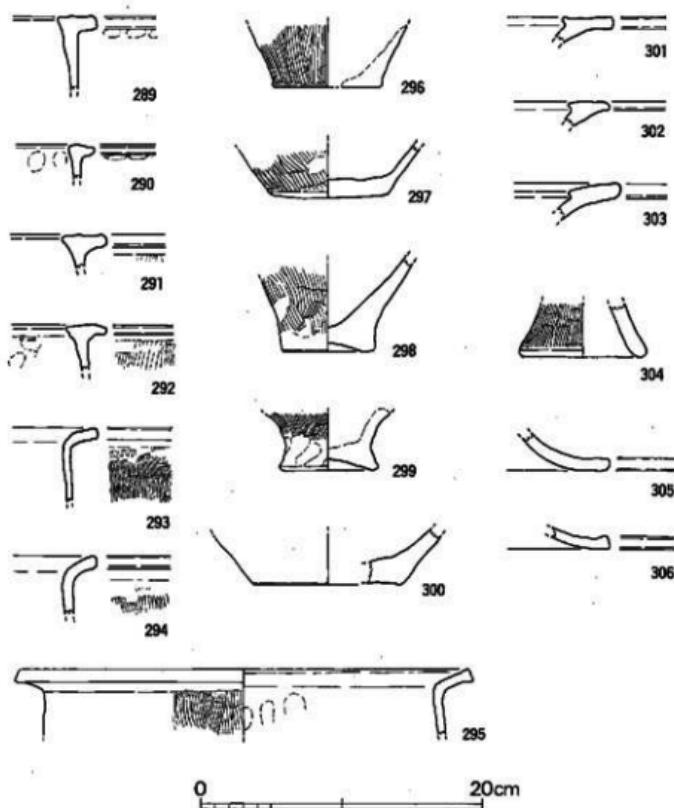
45号貯蔵穴（第41図）

44号貯蔵穴に切られる。底部平面形は $(165 + \alpha) \times 161\text{cm}$ の不整円形で、壁は袋状をなし、最大径 $204 \times ?$ となる。上面付近では直に立ち上り、上面径は、 $160 \times (160 ?) \text{cm}$ となる。残存の深さは85cmである。遺物は土器・円盤状土器片・不明土製品2個・黒曜石縫長剝片・軽石4個が出土している。

出土遺物（図版51, 第10・11・14・24・42図）

壺（307-318） 口縁が如意形をなし、口唇端部に刻目、口縁に1条の凸帶を持つもの（307・308）、口縁部は不明であるが、口縁下に2条の沈線を持つもの（310）がある。307は、復原口径 25.3cm 。311-314は、口縁や内傾し、逆L字に近い口縁をなす。復原口縁内径は、311が 22.4cm 、312が 21.2cm 、313が 19.2cm 、314が 22.4cm 。315-318は底部片で、315・316は外面に刷毛目調整痕が残り、やや上底気味である。

壺（319-324） 319は、肩部に3本単位の連弧文を、下に接して2本の平行沈線を描く。

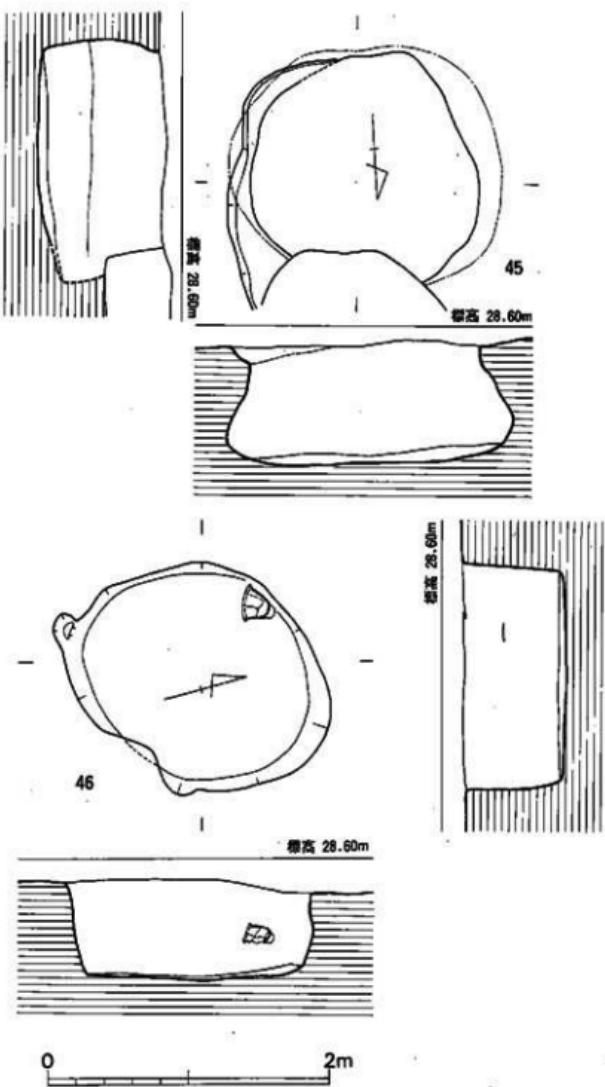


第40図 44号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

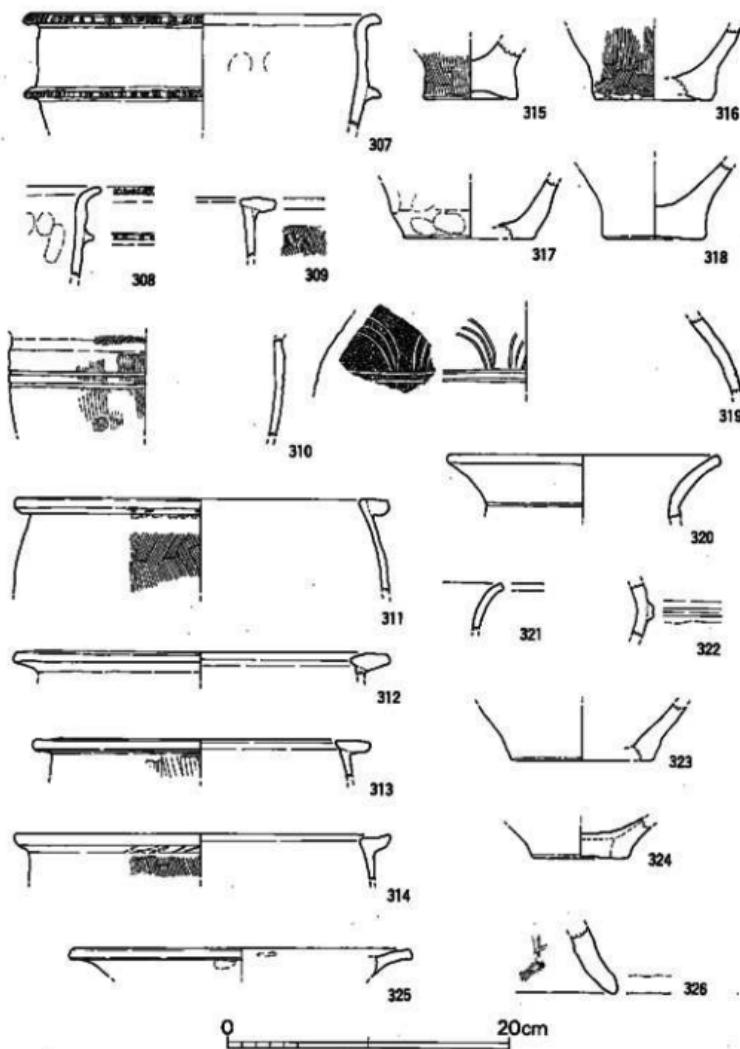
内外面とも、丁寧にヘラ研磨が行われる。320は、口縁部片で、口縁は肥厚しないが、それに相当する部分下位に1本沈線がめぐる。復原口径19.4cm。321は、外反する口縁片で、外面に縦位の暗文がある。322は、胸部にM字状の粘土帯をめぐらす。323・324は、底部片である。

鉢(325) おそらく鉗先状口縁をなすと思われ、口縁内面は、研磨される。高杯杯部の可能性もある。復原口径24.4cm。

器台(326) 器部片で、粘土は精良であるが、焼きは軟かい。内面に絞り痕がある。



第 41 圖 45-46 号貯藏穴実測図(1/40)



第 42 図 45号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

本遺構出土の土器の中に、遺構が埋没後に、重なって造られた遺構（竪穴状をなす）の遺物が混入していたと思われ、311・314・322・325・326が、その可能性がある。

円盤状土器片（第24図16） 壺底部の沈線部分を長軸に 4.7×3.6 cmの楕円形をなす。周縁は、やや磨滅する。13.6g。

不明土製品（第10図31、第11図40） 31は、 6×4.2 cm、厚さ1.5cmの、先端の丸まった矢尻状をなす。表面には、ナデの痕、径3mmの棒を押し付けた痕、ヘラ状のもので擦った痕、指ナデの痕などが残っているが、いずれも、目的を持ったものとは思われない。粘土のつなぎ目も多くみられ、全体の形が両手掌で押し潰したようにみられる事から、土器整形時の残余粘土をかためたものかとも思われる。34.35g。40は、長さ3cm、径1.3cmの筋鉢状に近く一端を欠く。少なくとも、粘土紐2本を撚り合わせた状態であるが、用途は不明。31と同じく、残余の粘土を撚り合わせた可能性がある。

黒曜石製縦長剥片（第14図2） 長さ4.9cm、幅1.6cmの黒曜石の縦剥ぎの剥片で、両端に自然面が残る。両側縁に、細かな剥離が認められ使用によるものと思われる。凸縁部は、ほぼ全縁、凹縁部は、凹部のみに認められる。

輕石 5個の細片に割れている。原形は不明。一部に擦れた面が残るものがある。合計8.7g。

46号貯蔵穴（図版18-1、第41図）

41号貯蔵穴の南側に接する。底部平面形は、 167×143 cmの楕円形をなし、壁は一部袋状に立ち上る。残存深さ72cm。壁際に、壺形土器が出土している。遺物は、土器以外に不明土製品が出土している。

出土遺物（図版42・52、第11・43図）

壺（327～329） 327・328は、口縁外部に粘土を貼付して逆L字形の口縁とし、端部に刻目を施す。327は、口径21.4cm、器高19cmで、底部に焼成後の穿孔がある。328の復原口径は、23cmである。

壺（330） 外反する口縁部小片で、内面は横位、外面は斜位に、ヘラ磨きが行われる。

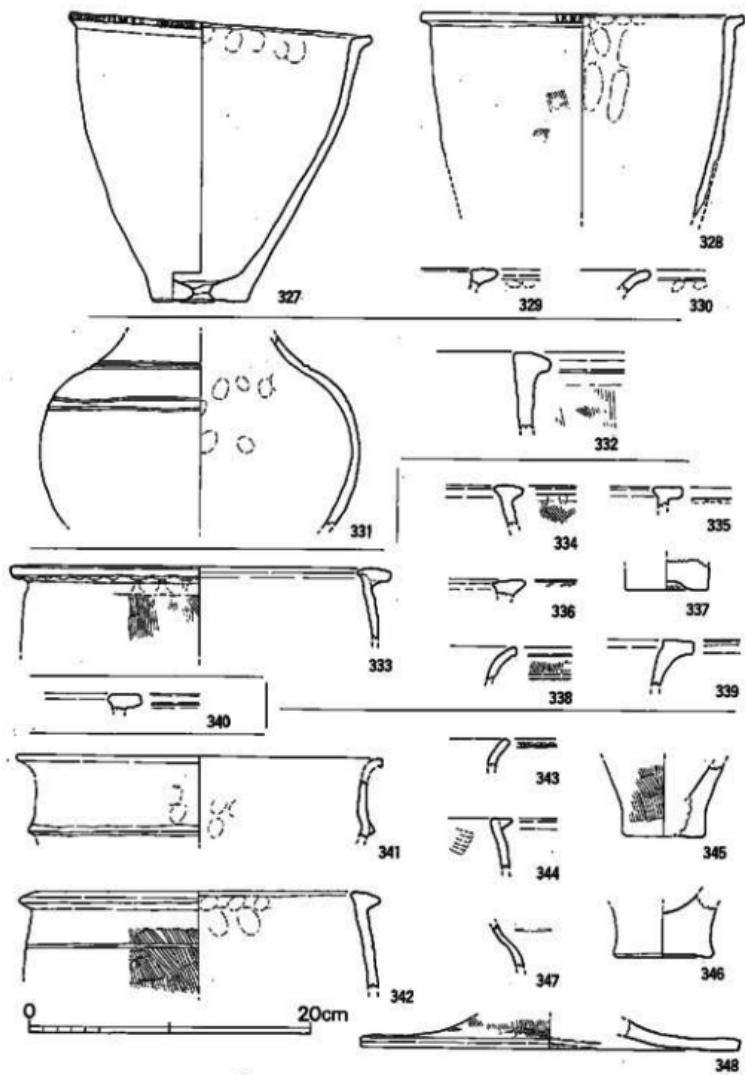
不明土製品（第11図41） $3 \times 2.1 \times 1.5$ cmの粘土塊で、良質粘土である。定形はなさず、おそらく、土器製作時の残余の粘土を固めたものと思われる。

47号貯蔵穴（図版18-2、第44図）

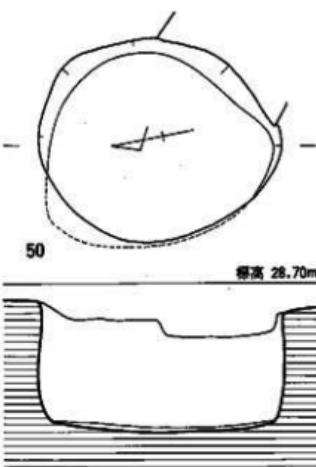
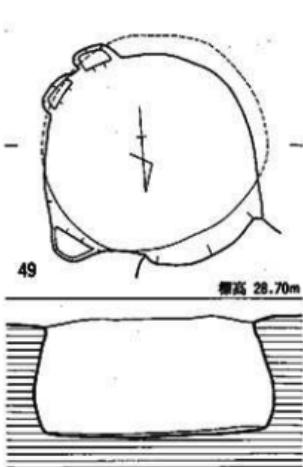
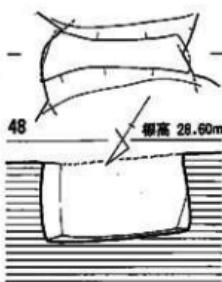
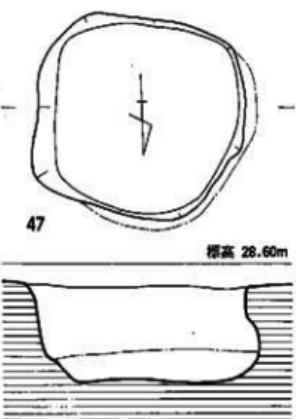
45・50・49号貯蔵穴に取り囲まれるように存在する。底部平面形は、 135×130 cmの、胴張り隅丸方形をなし、壁は袋状に立ち上る。深さ68cm。遺物は土器と砥石が出土している。

出土遺物（図版49、第27・43図）

壺（332） 口縁外に粘土帯を貼付する。口縁上面から外面にかけて横位研磨がなされるが、



第43図 46-47-49-51-52号蔚藏穴出土土器実測図(1/4)



0 2m

第44図 47~50号貯藏穴実測図(1/40)

一部刷毛目調整痕が残る。内面は、ナデ調整が行われる。

壺 (331) 頸部に2本、肩部に2本の沈線がめぐり、球形に近い胴部をなす。外面胴部は、横位ヘラ磨きがされる。

砾石 (第27図11) 破片のため原形は不明であるが、 7.5×5.5 cmの不整方形をなし、両面に使用面があり凹む。アブライト製。
(木村)

48号貯蔵穴 (第44図)

49・50号貯蔵穴に切られ、その大半を欠失した袋状堅穴で、残存する東西径105cm、深さ57cmを測る小堅穴である。遺物は何等出土しなかった。

49号貯蔵穴 (図版19-1, 第44図)

47号貯蔵穴に西接し、48号貯蔵穴を切っている。底面形は円形の典型的な袋状堅穴である。規模は、長径160cm、短径150cm、深さ85cmを測る。

出土遺物 (第11・43図)

壺 (333-338) いわゆるT字状口縁のもの (333-336) と如意形口縁のもの (338) がある。T字状口縁のもののうち、334・336は原初的なタイプである。337は底部資料で、外底部中央が凹底である。

壺 (339) 鍋先状口縁の小破片で、口縁部内面はヨコヘラ磨き、外面はヨコナデで仕上げている。色調は褐色を呈し、焼成良好である。

不明土製品 (第11図42) 3.5×2.2 cm、厚さ1.1cmの楕円形の粘土塊である。一側面は欠けるが、他は指ナデで仕上げている。

50号貯蔵穴 (図版19-1, 第44図)

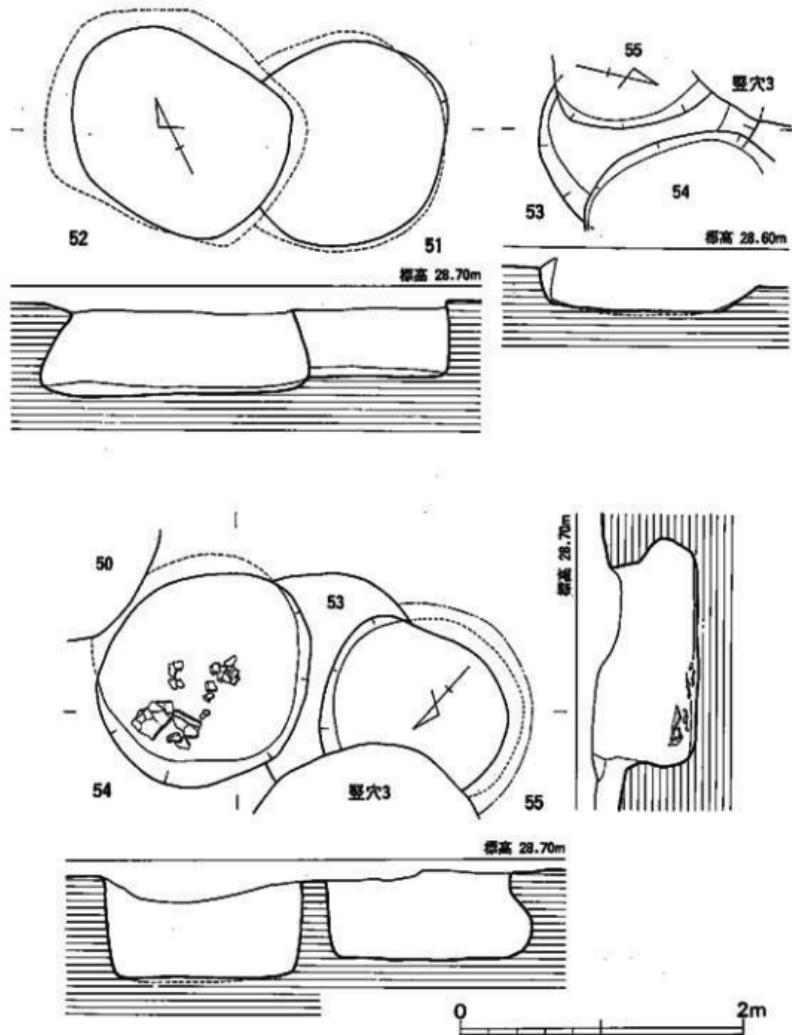
47号貯蔵穴の西側にある堅穴で、底面形は不整梢円形を呈す。断面は典型ではないが弱い袋状をなしている。規模は、長径160cm、短径150cm、深さ90cmを測り、他の貯蔵穴に較べ残りが良い堅穴である。

51号貯蔵穴 (図版20-1, 第45図)

45号貯蔵穴の西側にあり、西壁側を52号貯蔵穴で切られた堅穴である。規模は、南北径157cm、深さ49cmを測る。断面の形状は、弱いものの袋状を呈す。

出土遺物 (第43図)

壺 (340) 幅の狭いT字状口縁の小破片で、色調は肌色で焼成も良好である。



第45図 51~55号貯藏穴実測図(1/40)

52号貯蔵穴（図版20-1, 第45図）

51号貯蔵穴を切った典型的な袋状竪穴で、長径184cm, 短径150cm, 深さ60cmを測る。底部平面形は刺張り隅丸長方形を呈す。遺物は壺・壺・蓋等の破片が少量出土した。

出土遺物（第43図）

壺（341～346） 341～344は口縁部付近、345・346は底部付近の破片資料である。口縁部の形状には、如意形のもの（343）と端部に三角凸帯を付したもの（342・344）があり、口縁下に1条の三角凸帯をもつもの（341）、1条の沈線がめぐるもの（342）がある。調整は肩部外側刷毛目、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げたものが多い。342の口縁部上面は刷毛目調整している。342の復原口径は25cmを測る。色調は暗茶灰色ないしは暗茶褐色を呈す。345・346とも底部の器内が厚い平底である。

壺（347） 肩部に1条の沈線がめぐる小形壺の小破片で、内外ともヘラ磨きで仕上げた暗茶褐色を呈す焼成良好な土器である。

蓋（348） 條部付近の破片資料で、復原口径27cmを測る。外面を刷毛のあと、部分的にナデ調整し、内面はナデ、條部内外はヨコナデで仕上げている。色調は燈色を呈し、焼成も良い。

（井上）

53号貯蔵穴（第45図）

54号・55号貯蔵穴に、東西の両側を切られ、さらに北側は竪穴3に切られており、54・55号貯蔵穴の間に、わずかに残存するだけである。残存する部分よりすると、底面径128cmの円形に近い形態をなすと思われる。壁は、丸みをおびて外に開き40cm残存する。出土遺物はない。

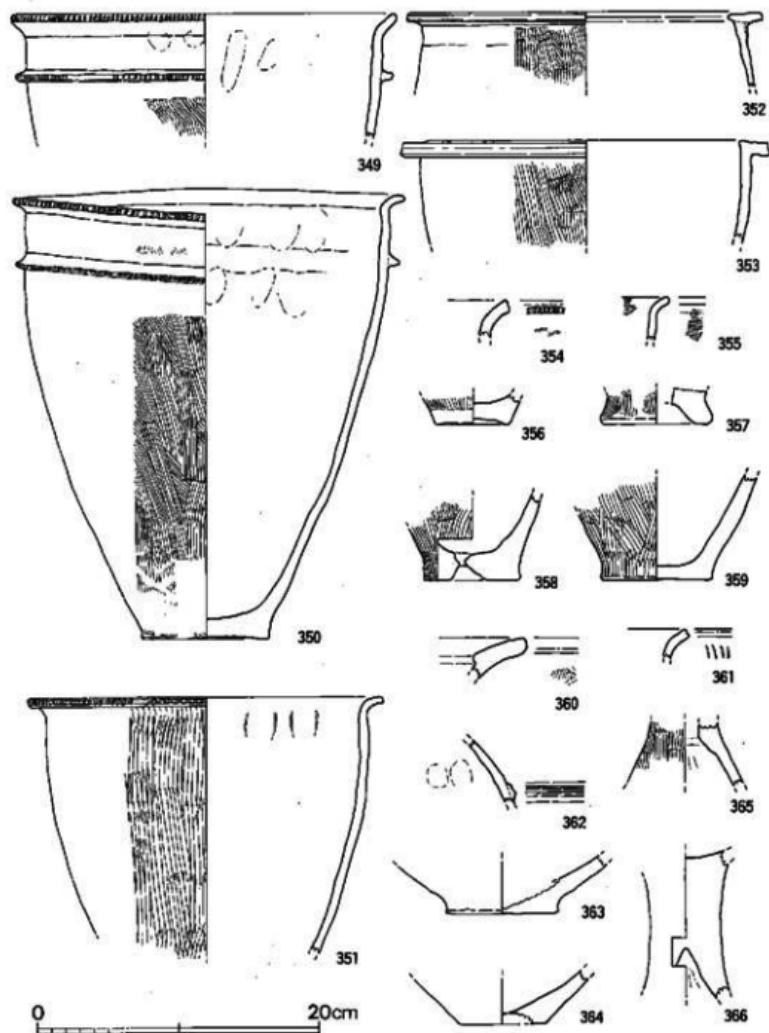
54号貯蔵穴（図版20-2, 21-1, 第45図）

50号貯蔵穴の西側に接し、53号貯蔵穴を切る。底部平面形は、145×145cmの円形をなし、壁は袋状に立ち上り、深さ73cmである。土器は、ほぼ床面に接してまとめて出土している（350・351など）。

出土遺物（図版42, 第46図）

壺（349～359） 349～351・354・355は、如意形口縁を持つ。いずれも口唇部に刻目を持ち、349・350は1条の刻目凸帯を持つ。350は、口径27.5cm、器高31.9cmで平底である。349の復原口径27cm、351は24.65cmである。352・353は、逆L字状に近い口縁をなす。復原口径は、352が20.4cm、353が21.8cmである。356～359は底部片で、358・359は平底で、349～351などの底部として良いものである。356・357は上底となる。

壺（360～364） 360・361は、外反する口縁で、360は、内面が肥厚する。361は、外面に縦



第 46 図 54号贮藏穴出土土器実測図(1/4)

位暗文がある。362は、胸部片で、断面M字状の凸帯がめぐる。363・364は、底部片で、外面へラ磨きされる。

蓋（365） 握り部付近の破片である。外面は刷毛目調整がなされる。

高杯（366） 脚部片で、杯部下は、実のある円筒状をなし、外面はヘラ磨きされる。残存高10cm。

55号貯蔵穴（図版20-1, 第45図）

53号貯蔵穴を切り、豊穴3に切られる。底部平面形は、135×135cmの円形をなし、壁は袋状に立ち上る。深さ63cmである。遺物は、土器と円盤状土器片が出土している。

出土遺物（図版42・51, 第24・47図）

蓋（367-372） 367-371は、いずれも逆L字状に近い口縁をなす。367は、復原口縁内径22cmで、口縁は内傾する。口縁外側粘土接合部には、指押圧痕が良く残る。372は底部片で、やや上げ底気味である。

蓋（373） ゆるやかに外反する口縁部片で、内面から口縁端上面は、ヘラ磨き、外面はナデのあと、1cm間隔の暗文が継ぎに施される。頭部には1本の沈線が引かれる。復原口径23.5cm。

蓋（374） 据端部破片で、端部やや肥厚する。復原径19.6cm。

器台（375） 底部片で、端部やや肥厚する。外面は刷毛目調整痕が残る。底径10.7cm、残存高5.5cm。

円盤状土器片（第24図17・18） 17は、4.1×4.1cmの不整方形で周囲一面より打欠く。16g。18は、3.7×3.6cmの方形で、紐かけ用の抉りが2ヶ所認められる。13.2g。いずれも壺脇部破片を利用する。

56号貯蔵穴（図版22-1, 第48図）

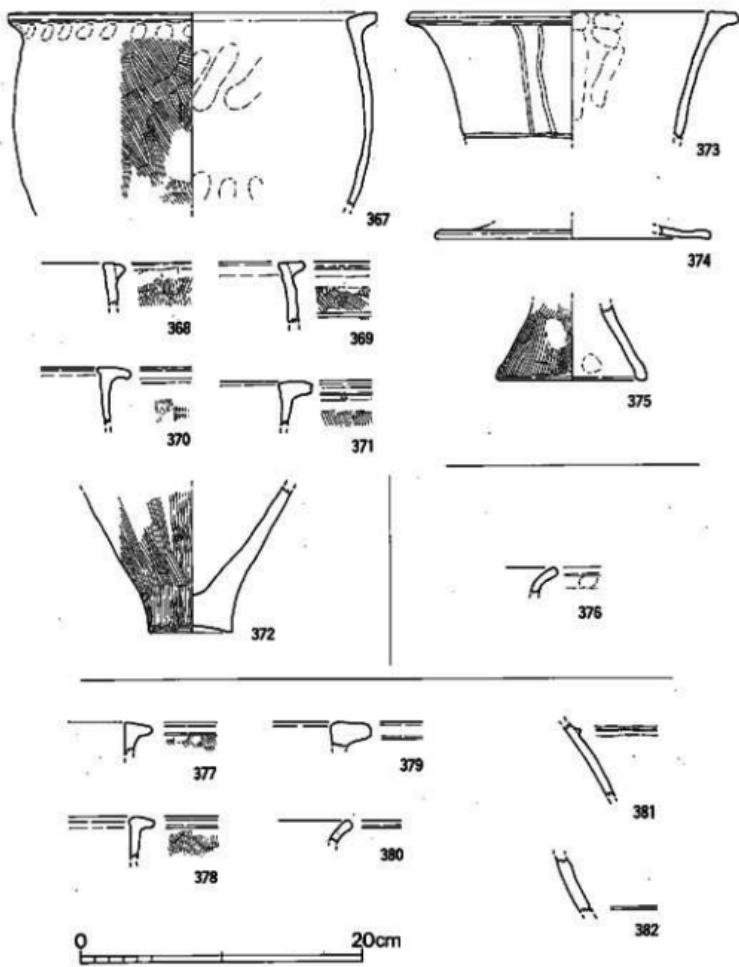
57号貯蔵穴に切られる。底部平面形は、150×132cmの不整梢円形をなす。壁は、外に開き壁高66cmとなる。遺物は、少量の土器片が出土している。

出土遺物（第47図）

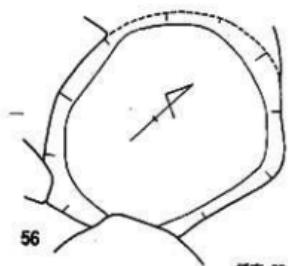
蓋（376） 外反する口縁部小片。端部は丸まり内外ともナデ調整が行われる。（木村）

57号貯蔵穴（図版22-1, 第48図）

56号貯蔵穴の南壁の一部を切って作られた豊穴で、断面は南壁が強い袋状をなすのに対し、北壁は直立気味に外反している。底面形は胴張り隅丸方形で、規模は長径158cm、短径153cm、深さ72cmを測る。遺物は弥生土器小片が若干出土しただけである。

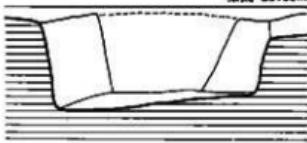


第 47 圖 55~57 号貯藏穴出土土器實測圖(1/4)



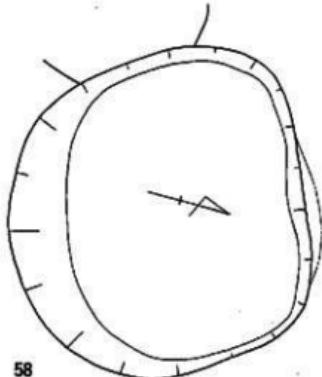
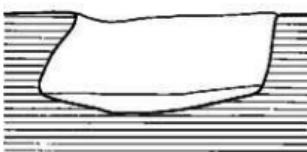
56

標高 28.60m



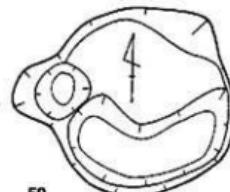
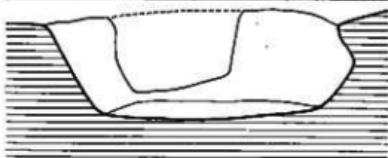
57

標高 28.60m



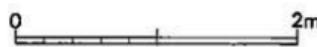
58

標高 28.50m



59

標高 28.60m



第 48 図 56~59号貯藏穴実測図(1/40)

出土遺物（第47図）

甕（377～380） 377～379は逆L字状口縁、380は如意形口縁の甕である。胴部外面は刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデしている。377の口縁下には成形時の指頭圧痕が残っている。

壺（381・382） 肩部付近の小破片で、381は1条の三角凸帯、382は1条の沈線がめぐらっている。外面の調整は、381がナデ、382がヘラ磨き、内面は381がナデのあと部分的にヘラ磨き、382はナデ仕上げである。色調はいずれも暗茶灰褐色を呈し、焼成も良好である。

58号貯蔵穴（第48図）

西壁の一部を57号貯蔵穴に切られた堅穴で、底面形は胴張り隅丸長方形を呈す。規模は、長径210cm、短径160cm、深さ74cmを測る。出土遺物は壺・甕・鉢・蓋・器台等の弥生土器が多数出土した。

出土遺物（第11・49図）

甕（383～392） 如意形口縁のもの（383・387・388）と逆L字状口縁のもの（384～386）があり、384・385は逆L字状口縁でも口縁部の幅が狭いタイプである。383の口縁下には1条の三角凸帯が付されている。383・384・387の口縁端部と凸帯には刻目が施されている。調整は、胴部外面は刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。383の胴部内面と385の口縁下には指頭圧痕がみられる。復原口径は383が25cm、384が24.6cm、385が29cm、386が34.4cmを測る。389～392は底部付近の資料で、391・392が底部の器肉が厚いタイプで、391の外底部は凹み底である。調整は外面刷毛、内面ナデで、391・392の内底部には指頭圧痕を残している。底径は389が7.3cm、390が8.6cm、391が8.4cm、392が6.5cmを測る。

鉢（395） 復原口径29.2cmを測る逆L字状口縁の鉢である。胴部外面は指ナデのあとヘラ磨き、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は肌色で、焼成は良好である。

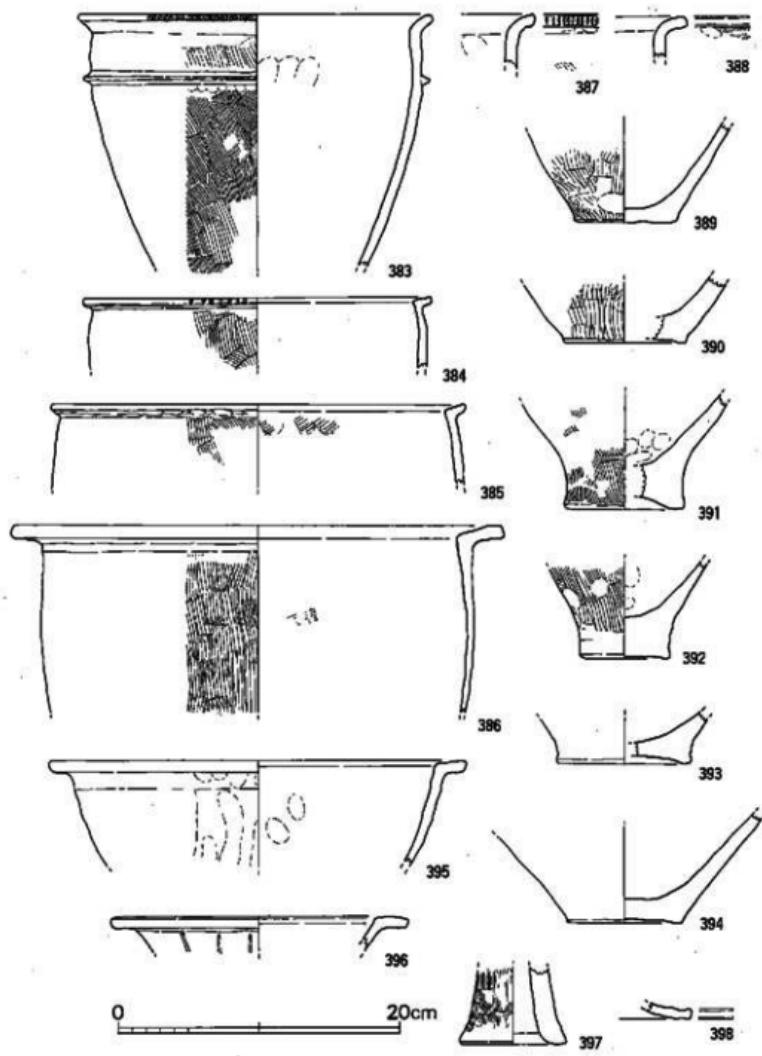
壺（393・394・396） 393・394は底部付近、396は口縁部の資料である。396は錐先状口縁の小形の壺で、復原口径21cmを測る。口縁部内面は丁寧なヨコヘラ磨き、頸部外面はナデのあと暗文を施している。色調は暗橙色で、焼成も良好である。

蓋（398） 据部の小破片で、外面ナデ、据部から内面はヨコナデしている。色調は橙色を呈し、焼成も良好である。

器台（397） 下半部の資料で、復原据部径は7.6cmを測る。外面の調整は刷毛、内面はナデで仕上げた器肉の厚い土器である。

不明土製品（第11図43） 棒状の粘土紐で、下端は欠損している。指ナデ痕が全体に残る。

以上が58号貯蔵穴から出土した土器とされているものの、この貯蔵穴を切って作られた57号貯蔵穴出土の土器群に比べ、明らかに型式的に新しい土器群（386・391・392・395～398）が混在している。このことは、上層にあった新しい時期の遺構である3号堅穴住居跡に基本的に



第 49 図 58号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

帰属する土器群の可能性が高いとすべきであろう。

59号貯蔵穴（第48図）

57号貯蔵穴の南側にある小堅穴で、61号貯蔵穴の一部を切っている。底面形は不整円形を呈し、底にはピット2個が穿たれている。規模は長径120cm、短径115cm、深さ28cmを測る。

出土遺物（図版53-2、第7・50図）

壺（399）底部の破片資料で、復原底径7cmを測る。器面は風化が著しく調整は不明である。

縄文土器（第7図6）粗製深鉢形土器の胴部片で、内面に板状工具による削り痕が残る。

胎土には角閃石を混入する。

60号貯蔵穴（第51図）

59号貯蔵穴の北東に隣接し、61号貯蔵穴の北壁の一部を切っている袋状堅穴である。底面形は不整円形を呈す。規模は長径140cm、短径118cm、深さ83cmを測る。

出土遺物（図版51、第24・50図）

壺（400・401）如意形口縁の壺で、400の口縁端部には刻目を施している。401は復原口径28.8cmを測り、色調は明褐色を呈す。

壺（402）肩部に2条の沈線がめぐる壺の胴部小片である。調整は外面ヘラ磨き、内面上半はヘラ磨き、下半には指頭圧痕がみられる。

円盤状土器片（第24図19）側面を粗く打ち欠いた不整椭円形を呈す。4.2×3.5cm、厚さ7mm、重さ11.35gを測る。

61号貯蔵穴（第51図）

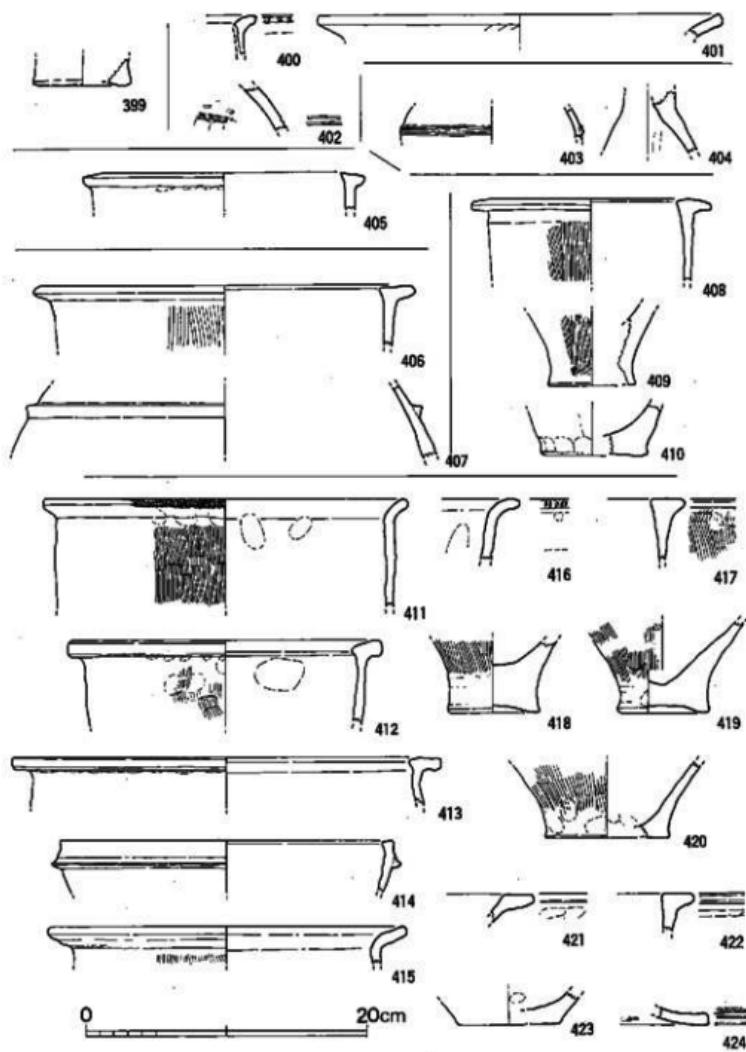
西壁を59号、北壁を60号、東壁を62号貯蔵穴に切られた堅穴で、底面形は円形を呈す。規模は長径140cm、短径130cm、深さ45cmを測り、断面は逆台形をなしている。

出土遺物（図版51、第24・50図）

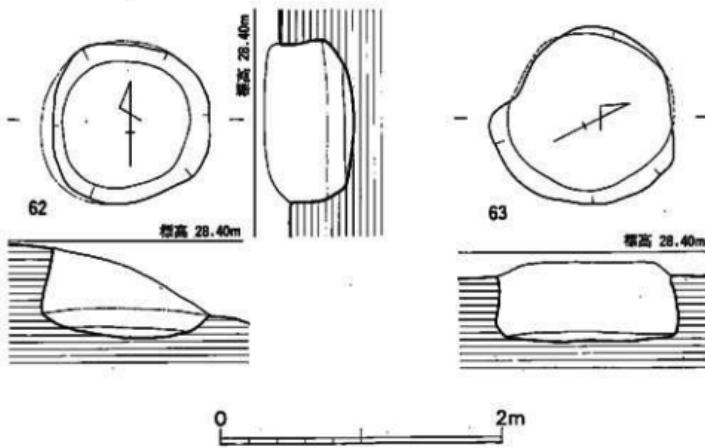
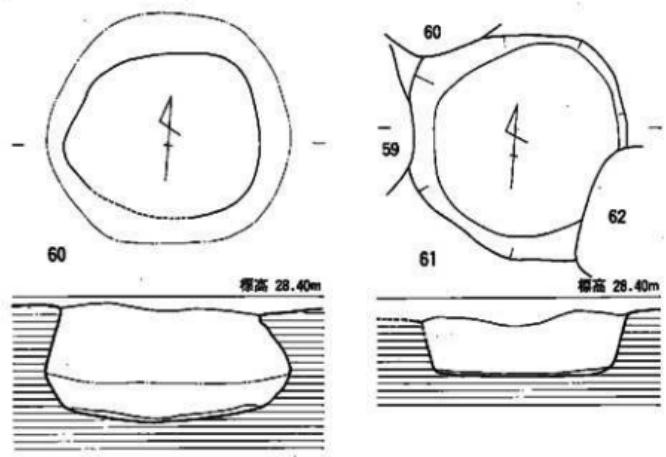
壺（403）胴部の破片資料で、胴部外面には1条のM字状凸帯が付された小形壺である。外面は、ヘラ磨き、内面はナデて仕上げた黒褐色を呈す焼成良好な土器である。復原胴部最大径は12.8cmを測る。

高杯（404）脚部の破片資料で、調整は外面をタテヘラ磨き、内面はヘラ状工具によりナデている。

円盤状土器片（第24図20）土器片を加工したもので、6.1×4.8cm、厚さ6mm、重さ23.6gを測る。



第50図 59~65号蔚藏穴出土土器実測図(1/4)



第 51 図 60~63号貯藏穴実測図(1/40)

62号貯蔵穴 (図版22-2, 第51図)

61号貯蔵穴の東壁を切った小形の袋状竪穴で、底面形は円形である。規模は長径90cm, 短径88cm, 深さ64cmを測る。遺物としては弥生土器小片若干と鉄鎌片1点が出土している。鉄鎌はその型式からみて、新しい時期の混入品と思われる。

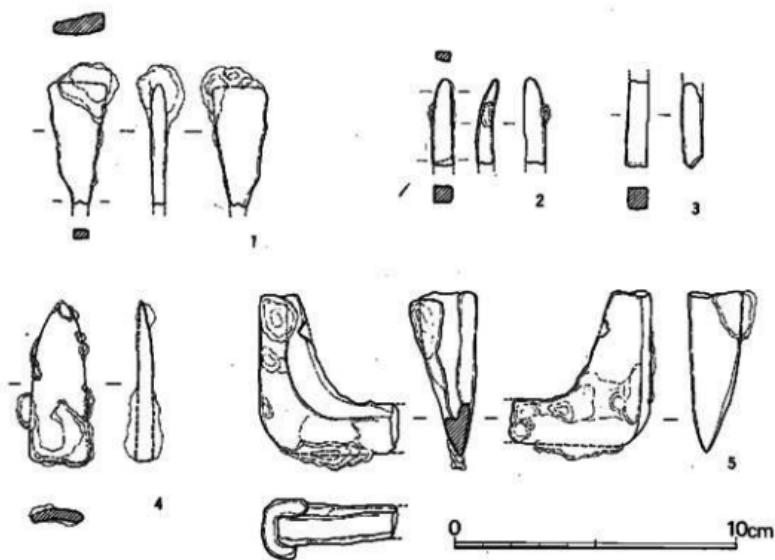
出土遺物 (図版53-1, 第50・52図)

鑿 (405) 口縁端部に三角凸帯を付した甕で、復原口径は20cmを測る。色調は明褐色を呈す。

鉄鎌 (第52図 1) 方頭細根斧柄式の鎌で、基部を欠失している。頭部幅2.1cm, 長さ3.5cm, 中央部の厚さ0.6cmを測る。

63号貯蔵穴 (図版23-1, 第51図)

62号貯蔵穴の北側に近接して検出された小竪穴で、底面形は円形プランを呈す。断面は弱いものの袋状をなしている。規模は長径114cm, 短径110cm, 深さ58cmを測る。



第52図 貯蔵穴出土鉄器実測図(1/2)

出土遺物（第10・50図）

壺（406） T字状口縁の壺で、胴部外面を粗い刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。

壺（407） 肩部に1条の三角凸帯を付した壺の胴部破片で、色調は赤褐色で、胎土・焼成とも良好な土器である。

不明土製品（第10図34） 口縁端部に粘土紐を貼付したような粘土塊で、壺製作途中の失敗作のように思われる。

64号貯蔵穴（第53図）

55号貯蔵穴の西側から検出された袋状竪穴で、規模は長径158cm、短径127cm、深さ65cmを測る。底面形は胴張り隅丸長方形を呈す。

出土遺物（第50図）

壺（408～410） 408は逆L字状口縁の小形の壺で、復原口径17cmを測る。胴部外面は粗い刷毛、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデ調整である。409・410は底部付近の資料で、外面の調整は409が刷毛、410がナデ、内面はいずれもナデで仕上げている。色調は408が赤褐色、409が明褐色、410が茶褐色である。

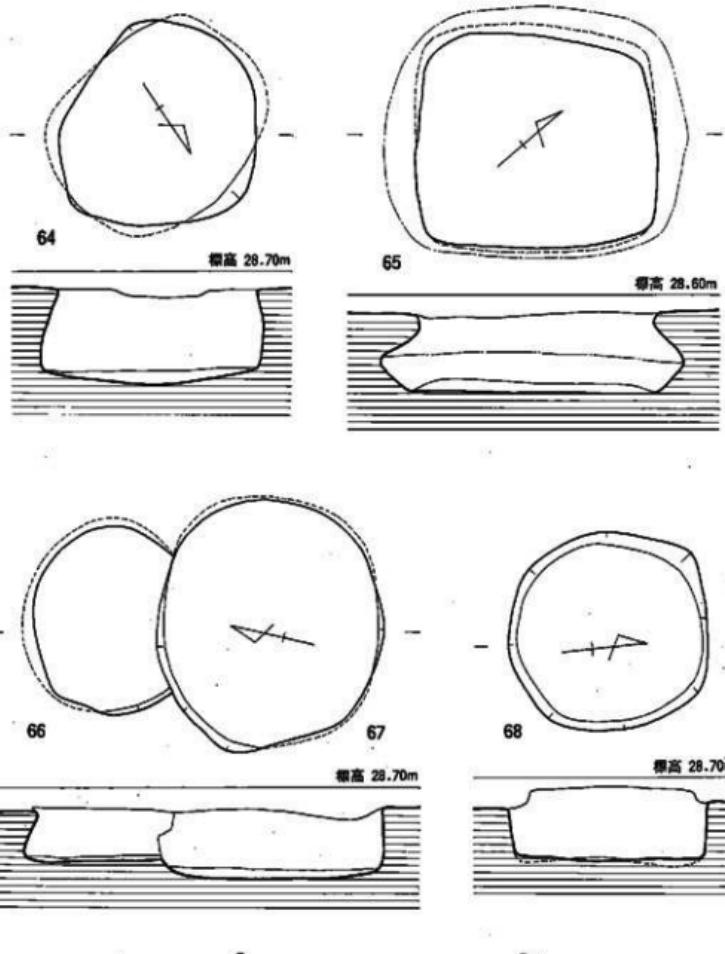
65号貯蔵穴（図版23-2、第53図）

64号貯蔵穴の南西から検出された袋状竪穴で、底面形は隅丸長方形を呈す。壁面のオーバーハングは東壁が弱い他は、強い袋状をなしている。規模は長径172cm、短径160cm、深さ55cmを測る。遺物は壺・甕・蓋等の破片多数が出土した。

出土遺物（第50図）

甕（411～420） 口縁部の形状により3タイプに分かれる。如意形口縁のもの（411・415・416）、T字状口縁のもの（412・413・417）、口縁端部より少し下がった位置に三角凸帯が付く内外面とも丹塗りの珍しい甕（414）。などがある。417はT字状口縁の原初的タイプといえる。411・416の口縁端部には刻目が施されていて、416の口縁下には凸帯の剥離痕がみられる。調整は、胴部外面を411が刷毛、412が刷毛のあと部分的にナデ、内面は両方ともナデで、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。411・412とも口縁下に成形時の指頭圧痕を残している。復原口径は411が25.2cm、412が21.6cm、413が30.6cm、414が23.4cm、415が24.8cmを測る。418～420は底部付近の資料で、418は底面の器内が厚いタイプである。調整は外面刷毛、内面ナデで仕上げていて、底部下半はさらにヨコナデしている。底径は418が6.5cm、419が6.4cm、420が8.7cmを測る。

壺（421～423） 421・422は鋸先状口縁の壺の口縁部小片で、422の口額部は直立気味のタ



第 53 図 64～68号貯藏穴実測図(1/40)

イブである。色調はどちらも暗茶灰色で、焼成も良好である。423の底部の破片資料で、外面ヘラ磨き、内面刷毛のあとナデで仕上げている。色調は黒褐色を呈す。復原底径は6.8cmを測る。

壺 (424) 据部の小破片で、体部内外は刷毛、据部内外はヨコナデで仕上げている。

66号貯蔵穴 (図版24-1, 第53図)

65号貯蔵穴の南側に近接し、南壁側を67号貯蔵穴に切られた小形の袋状堅穴である。底面形は円形で、規模は長径135cm、復原短径130cm、深さ36cmを測る。

出土遺物 (第54図)

壺 (425) 如意形口縁の小破片で、口縁下に1条の沈線がめぐる。胴部外面は刷毛、内面は刷毛のあとナデしている。色調は暗茶灰色を呈し、焼成も良好である。

67号貯蔵穴 (図版24-1, 第53図)

66号貯蔵穴の南壁を切って作られた底面形が円形プランの袋状堅穴である。規模は長径178cm、短径152cm、深さ50cmを測る大形の堅穴である。

出土遺物 (第54図)

壺 (426) 底部破片で、底径8.6cmを測る。外面刷毛、内面と外底部はナデ仕上げである。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。

壺 (427~429) 427は広口の單口縁の壺、428はく字状に緩やかに外反する單口縁の壺の小片で、428の内外ともヘラ磨き、427は外面がヘラ磨き、内面はヨコナデで仕上げている。429は小形壺の頸部付近の破片資料で、肩部には2条の沈線がめぐっている。調整は内外ともナデ仕上げで、色調は暗茶灰褐色を呈す。
(井上)

68号貯蔵穴 (図版24-2, 第53図)

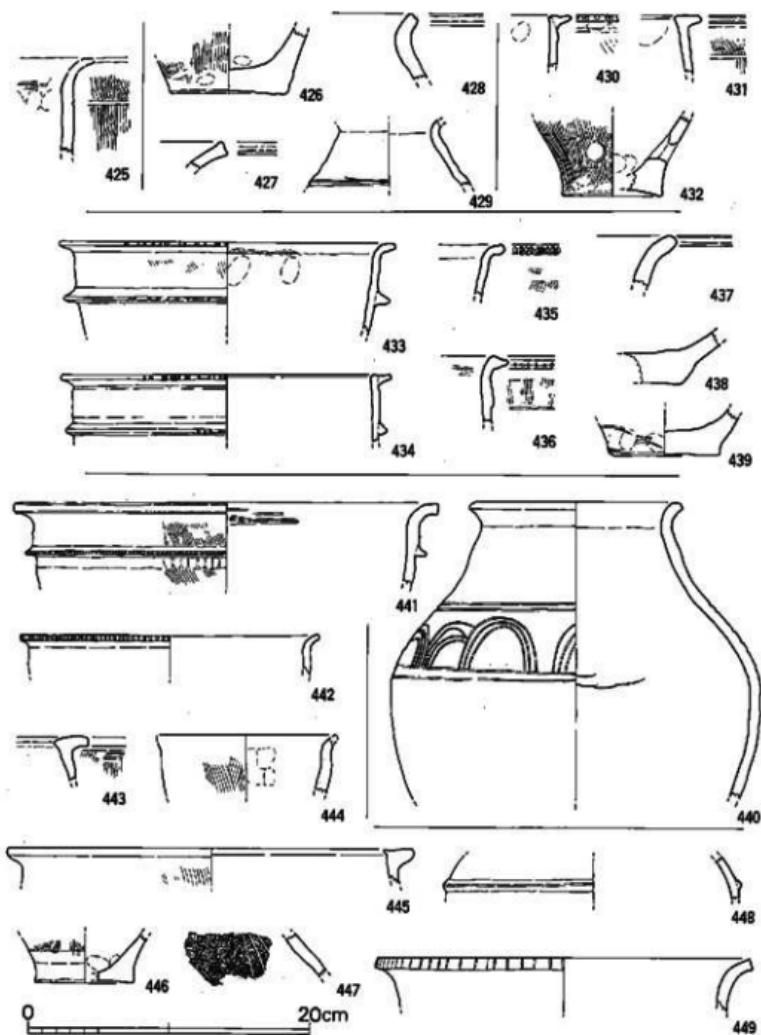
69号貯蔵穴の西側にあり、堅穴6が上面を削平する。底部平面形は、132×125cmの円形で、壁はほぼ直に立ち上る。残存深さ55cm。遺物は、土器が少量出土している。

出土遺物 (第54図)

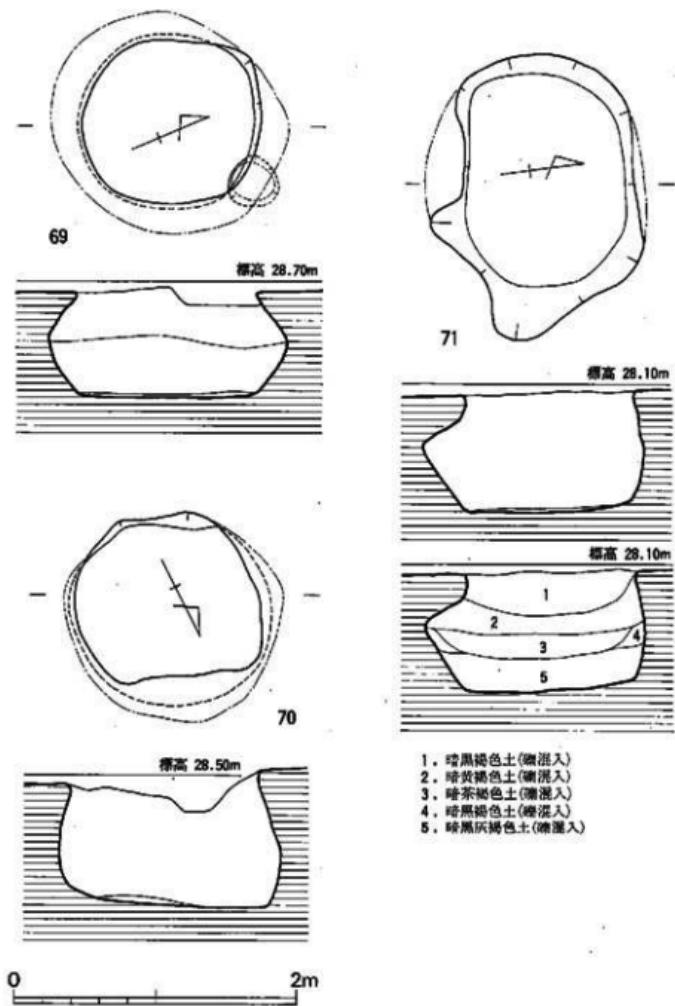
壺 (430~432) 430は、口縁端部に刻目、431は、口縁下3cmに1条の沈線がある。432は、底部片で平底をなす。

69号貯蔵穴 (図版24-2, 第55図)

68号貯蔵穴の東側にあり、堅穴6に切られる。底部平面形は、125×125cmの円形をなす。壁は、袋状に立ち上り、胴部最大径167cm、上面径は、118×126cmで円形をなす。深さ78cm。底面北東部に径35cmの穴がある。遺物は、土器と円盤状土器片が出土している。



第 54 図 66~71号貯藏穴出土土器実測図(1/4)



第 55 圖 69~71号貯藏穴実測図(1/40)

出土遺物（図版51、第24・54図）

甕（433～436） 433・435は、如意形口縁をなし、口唇部端に刻目を施し、433は口縁下4cmに刻目凸帯をめぐらす。復原口径23.8cm。434・436は、口縁外に粘土帯を貼付し、その先端に刻目を施す。434は、口縁下4cmに刻目凸帯をめぐらす。436は、口縁下外面に、通常刻目凸帯の貼付される付近まで粘土を貼り肥厚させる。434は復原口径23.4cm。

壺（437～439） 437は、外反する口縁部片。438・439は底部片である。

円盤状土器片（第24図21） 外反し、外に肥厚する口縁部を利用し両面より打欠き、 4.8×4.4 cmの長方形に加工する。磨滅痕はない。32.8g。

70号貯蔵穴（図版25-1、第55図）

36号貯蔵穴の西側にあり、堅穴15に切られる。底部平面形は、 145×128 cmの円形をなし、壁は袋状に立ち上り、最大径は、 156×140 cmとなる。上部平面形は、崩落によりゆがんでいる。深さ98cm。遺物は、土器だけである。

出土遺物（図版42、第54図）

甕（440） 口縁から胴下半部までの破片で、口縁は外反し、頸部から肩部は殆ど屈曲せずに続く。肩部には、頸部・胴部との境に2本単位の沈線をめぐらし、その間を、3本単位の連張状沈線を施す。復原口径13.8cm、残存高21cmである。

71号貯蔵穴（図版25-2、第55図）

70号貯蔵穴の西側にある。底部平面形は、 150×110 cmの、胴張り隅丸長方形をなし、壁は袋状に立ち上る。上部平面形は、崩落のため不整形をなす。深さ83cm。遺物は、土器と鉄製品が出土している。

出土遺物（図版53-1、第17・52・54図）

甕（441・443・445・446・449） 441は、口縁下3.5cmにやや垂れ下がった刻目凸帯をめぐらすが、そこより外反する口縁端まで肥厚させ、口縁端部は面をなし、その上・下端部に細い刻目を施す。復原口径30cm。449も、外反する口縁を持つが、端部は平坦な面をなし、沈線風の刻目を入れる。復原口径26.8cm。接合しないが、同一個体と思われる破片が、33号貯蔵穴より出土している（229）。442は、如意形に外反する口縁で端部に刻目がある。復原口径21.1cm。443・445は、逆L字状の口縁、446は底部片である。446の復原口縁内径24.5cm。

鉢（444） 口縁端部を欠くが、外反する口縁を持つ。復原口径12.7cm。

壺（447・448） 447は、肩部片で3本単位の沈線を引く。448は、断面M字状の凸帯を胴部最大径部に持つ。

鉄製品（第52図2・3） 2個は接合しないが同一個体と思われる。鉄鎌の茎部片とも考え

られるが、用途不明である。

縄文土器（第17図5） 深鉢刷部片で、ヘラ状工具の整形痕がつく。金基母が混入している。混入品である。

72号貯蔵穴（図版26-1・2、第56図）

71号貯蔵穴の西側にあり、南側は豈穴14に切られている。底部平面形は、195×180cmの円形をなし、壁は袋状をなし、最大径は220×191cmとなる。上部平面形は、177×146cmの楕円形になる。深さ103cm。甕が堆積土上位で潰れた状態で出土しており、この時期までにかなり埋没していたと思われる。

出土遺物（図版42、第57図）

甕（450～455） 450は、口縁外に粘土帯を貼付し、外方へ断面三角形にのばす。口縁下4.8cmに、断面三角形の凸帯をめぐらす。いずれの凸帯にも、刻目はない。口縁上面は、刷毛目調整により平坦面をなす。復原口径24.6cm。451・452は、逆L字状口縁をなすが、452は口縁下3.5cmに1条の沈線が引かれる。復原口径内径は、451が16.8cm、452が20cm。453～455は底部片。

鉢（456） 口縁が外反し、胴が若干膨らむ小形の鉢である。

壺（457・458） 457は、頸部から若干外反しながらのび、端部でさらに外反する。復原口径13.2cm。

器台（459） 下端部片で、外面に刷毛目調整痕が残る。

蓋（460） 壺部片で、外面に刷毛目が残り、端部は、やや凹んだ面をなす。

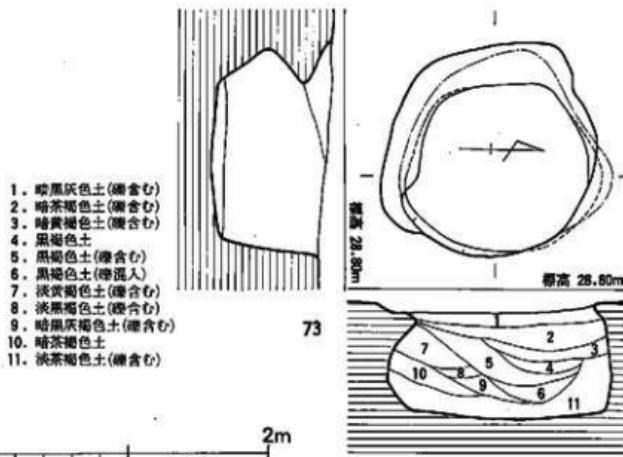
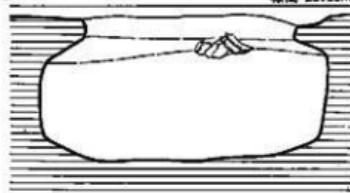
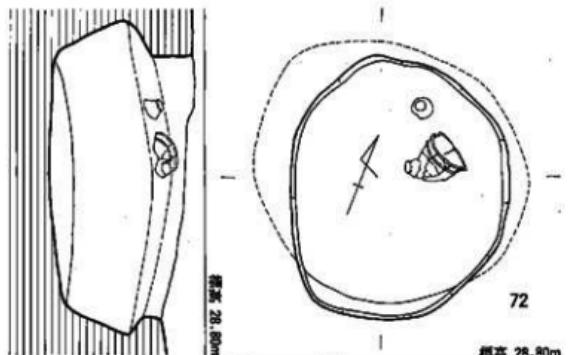
73号貯蔵穴（図版27-1、第56図）

72号貯蔵穴の南にある。底部平面形は、135×120cmの不整円形なし、壁は袋状に立ち上る。深さは83cmである。埋土は、ほほスリ鉢状に堆積する。遺物は、土器とサヌカイト剥片が出土している。

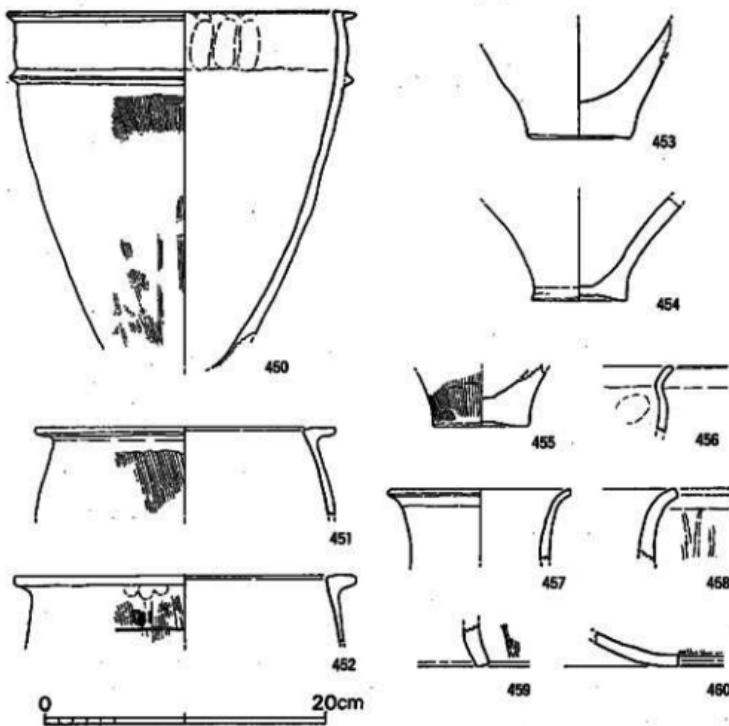
出土遺物（図版43、第58図）

甕（461～467） 如意形口縁をなすもの（461～463）、口縁外縁に断面台形に近い粘土帯を貼付したもの（464）がある。461は、如意形を意図するも、「く」字に外反する。口唇端に刻目、口縁下に、刻目凸帯をめぐらす。胴はやや膨らむ。復原口径21.8cm。462は、口縁は強く丸まって外反する。口唇部に刻目を施す。底部は、焼成後穿孔されている。口径25.9cm、器高25.2cm。463は、口唇端部は、平坦面をなし、押圧風の刻目がある。464も同じような刻目である。復原口径は、463が30cm、464が22cmである。465～467は、底部片。

鉢（468・469） 468は、外反する口縁。469は、やや内済気味の口縁であるが、口縁外面には、粘土帯の剥離痕が残る。復原口径は、468が、18cm、469が15.9+2cmである。



第 56 図 72・73号貯藏穴実測図 (1/40)



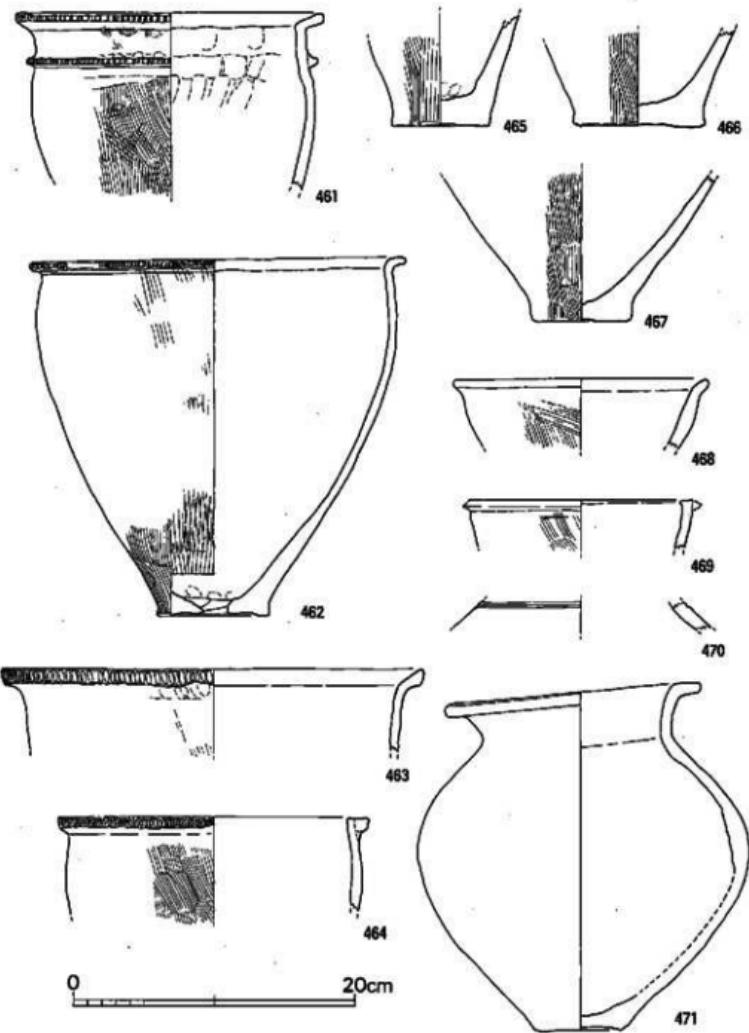
第57図 72号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

壺(470・471) 470は、頸部に2条の沈線をめぐらす。471の口縁は、逆L字状に屈曲し、上面は平坦になる。頸部はややすぼまり、胴部はやや丸みをおびて脹み、底部へ続く。口径18cm、器高24cm。

サヌカイト剝片 2点出土しており、1点は 4×2.5 cmの横剝離片、もう1点は 3.5×2 cmの長方形で、周囲が剥離されている。いずれも、定形化していない。
(木村)

74号貯蔵穴(図版27-2, 第59図)

38号貯蔵穴の南西から検出された袋状竪穴で、75号貯蔵穴を切っている。底面形は胴張り開九方形。規模は長径143cm、短径142cm、深さ64cmを測る。遺物は壺・壺など多数の弥生土器が出土した。



第 58 図 73号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

出土遺物（図版43・49、第27・60図）

壺（472-481） 口縁部の形状により3つのタイプに分かれる。如意形のもの（472・473・476）、口縁端部に三角凸帯が付くもの（474）、逆L字状口縁のもの（475・477・478）などである。473-475の口縁下には1条の三角凸帯がめぐっている。調整は、胴部外面が刷毛、内面はナデ仕上げで、内面に指頭圧痕を顯著に残すもの（472-474）もある。いずれも口縁部内外はヨコナデ仕上げである。472はほぼ完形品で、口径20.2cm、器高20.8cm、底径8.9cmを測る。479-481は底部付近の資料で、胴部外面の調整は刷毛のもの（479・481）とナデのもの（480）があり、内面はいずれもナデ調整である。

壺（482） 緩やかに外反する単口縁の壺で、内外ともヘラ磨きした茶褐色を呈す焼成良好な土器である。復原口径は25.6cmを測る。

石劍（第27図8） 劍身の小片で、最大幅2.1cm、厚さ3.5mmを測る。粘板岩製。

75号貯蔵穴（図版27-2、第59図）

東壁側を74号貯蔵穴に切られた竪穴で、底面形は円形である。断面は逆台形状を呈し、規模は南北径153cm、復原東西径140cm、深さ54cmを測る。遺物は壺・壺・高杯・器台等の土器破片が少量出土した。

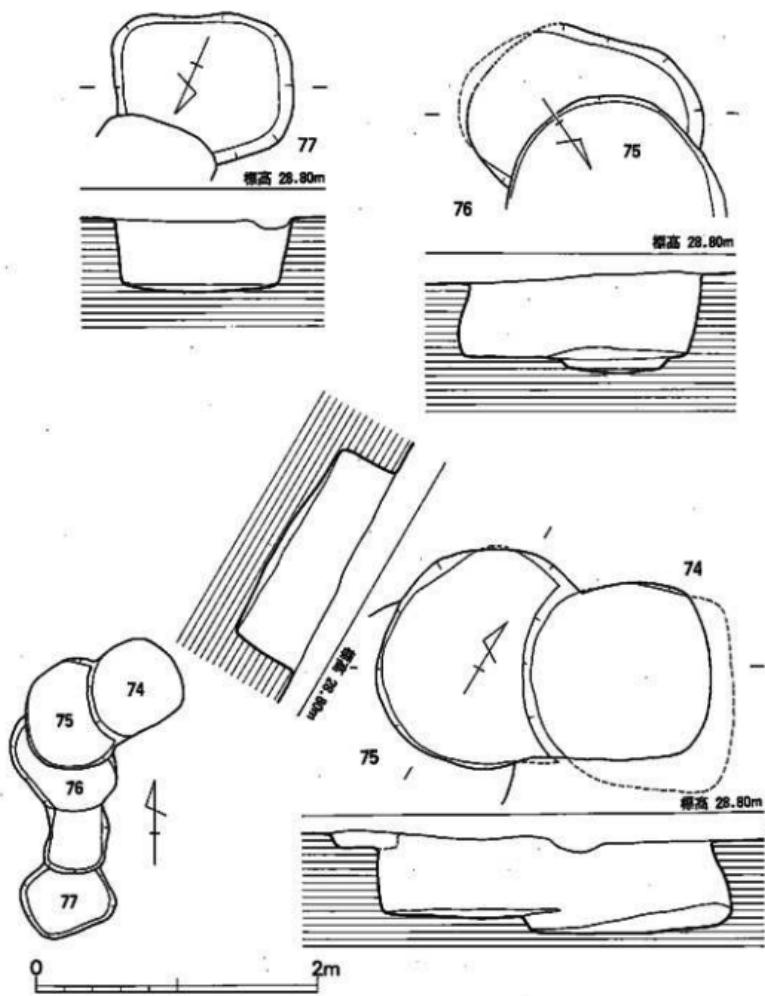
出土遺物（第61図）

壺（483-486） 如意形口縁のもの（483・484）とT字状口縁のもの（485・486）があり、前者の壺の口縁端部には刻目が施されていて、483の口縁下には刻目をもつ1条の凸帯がめぐっている。いずれも破片資料で、復原口径は483が28.8cm、484が19.8cm、485が31cmを測る。調整は器面風化のため不明なものが多いが、486は胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。483・484の胴部内面はナデ仕上げで、指頭圧痕も残している。484の外面には煤の付着がみられる。色調は483が暗茶褐色、484が暗灰褐色、485が肌色、486が淡茶色である。

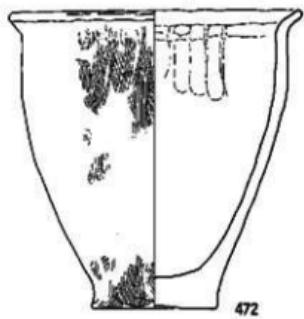
壺（489・490） 489は底部、490は頸部から胴部上半の破片資料である。489は復原底径11.2cmを測り、調整は器面の風化が著しく不明である。490は球形の胴部に内傾気味に立ち上がる頸部がつき、口縁部がく字状に外反する壺で、肩部には1条の沈線がめぐる。

高杯（488） 鋼先状口縁の杯部の破片で、復原口径は25.2cmを測る。調整は体部内外ともナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は暗灰茶色を呈す。

器台（487） 下半部の破片で、据部径は8.2cmを測る。調整は体部外面刷毛、内面はナデ、据部内外はヨコナデしている。色調は肌色を呈し、焼成も良好である。



第 59 図 74~77号貯藏穴実測図(1/40)



472



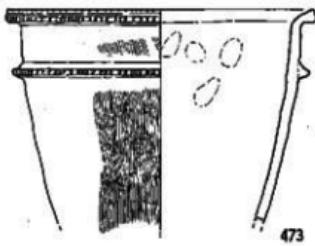
475



476



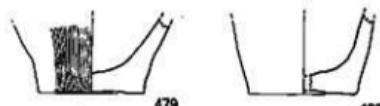
477



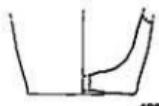
473



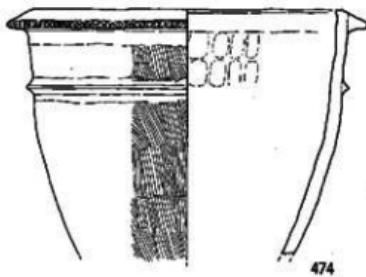
478



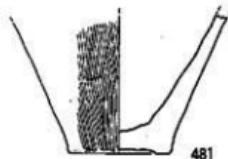
479



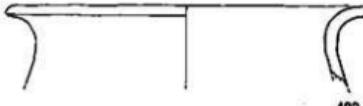
480



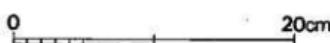
474



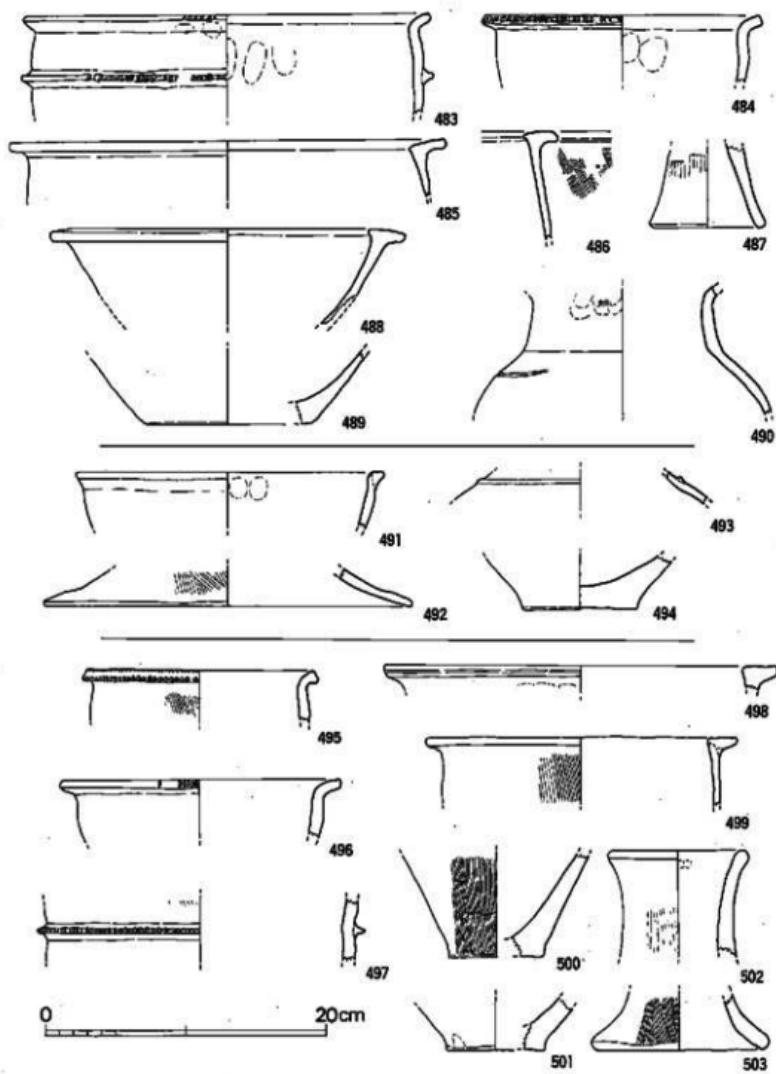
481



482



第 60 図 74号貯藏穴出土土器実測図(1/4)



第 61 図 75~77号蔚穴出土土器実測図(1/4)

76号貯蔵穴（図版27-2, 第59図）

75号にその大半を切られた袋状堅穴で、底面形は梢円形を呈す。規模は復原長径170cm, 短径107cm, 深さ56cmを測る。遺物は壺・甕・蓋等の破片少量とスクレイバー1点が出土している。

出土遺物（図版49-1, 第14・61図）

鉢（491） 口縁端部に三角凸帯が付く、復原口径22cmを測る鉢である。胴部外面は風化のため調整は不明、内面はナデで仕上げている。色調は暗褐色を呈す。

壺（493・494） 肩部に1条の低い三角凸帯がめぐる小形壺の小破片である。内外ともヘラ磨きで仕上げた淡灰褐色を呈す焼成良好な土器である。494は底部資料で、外面ヘラ磨き、内面ナデで仕上げている。底径は8.1cmを割る。

蓋（492） 帽部付近の破片で、復原帽部径は26.2cmを測る。調整は体部外面刷毛、内面ナデ仕上げで、色調は赤褐色である。

スクレイバー（第14図3） 背面に一部自然面を残すが、両面より削難され、全体が台形状をなす。上辺と底辺に相当する部分に加工がされ、刃部がつくられるが、底辺の方が主要な刃部となる。刃部長6.7cm, 高さ3.6cm, 厚さ5mmの不定形のスクレイバーである。サヌカイト製。

77号貯蔵穴（図版27-2, 第59図）

76号貯蔵穴の南にあって、北東隅を土壤に切られた小堅穴である。底面形は胴張り隅丸長方形で、規模は長径111cm, 短径92cm, 深さ56cmを測る。断面は逆台形状を呈す。遺物は甕・鉢・器台等の破片が少量出土した。

出土遺物（図版51, 第24・61図）

甕（495-501） 如意形口縁のもの（495・496）と逆L字状口縁のもの（498・499）がある。497は口縁下に1条の三角凸帯が付く甕で、端部には刻目が施されている。いずれも破片資料で、復原口径は495が16.9cm, 496が20.1cm, 498が28cm, 499が22.2cmを測る。調整は胴部外面を495が刷毛のあとナデ、497・499は刷毛、胴部内面はいずれもナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。495・496ともに口縁端部に刻目を施すものの、495は上下に施している。496の外面には煤の付着がみられる。500・501は底部付近の破片資料で、復原底径は500が6.8cm, 501が7cmを測る。胴部外面の調整は500が刷毛、501はナデ、内面は两者ともナデ仕上げである。

器台（502・503） 簡形の器台で、502は器受部付近、503は帽部付近の破片資料である。体部外面の調整は502が刷毛のあとナデ、503は細かい刷毛、内面はいずれもナデ仕上げで、502の器受部内外はヨコナデしている。色調は502が明褐色、503は赤褐色を呈す。

円盤状土器片（第24図22） 4×4cm, 厚さ0.8cm, 重さ16.4g のほぼ円形に土器片を加工する。

（井上）

78号貯蔵穴（図版28-1，第62図）

78~80号貯蔵穴は一群をなし、78・80号貯蔵穴は、79号貯蔵穴を切る。底部平面形は、155×143cmの不整円形をなし、壁は袋状をなして立ち上る。図面上の最大径は200×175cmになるが、上下堆積層に挟まれた疊層が崩落した結果の可能性がある。上部平面形は、152×143cmの不整方形をなす。深さ64cm。壁際に甕形土器がまとまって出土している。

出土遺物（図版43，第63図）

甕（504~513） 504・505は、口縁外に粘土帯を貼付し、端部に刻目をつける。外面は、刷毛目調整。復原口径は、504が20.4cm、505が23.9cm。508・507は、口縁外粘土帯を貼付し、口縁上面を平坦にするが、508の粘土帯断面はカマボコ形に近い。復原口縁内径は、507が15.8cm、508が28cmである。509~513は、底部片で、511は上底、以外は平底であるが、端部が若干張り出す。

壺（514） 頸部と肩部の接点に断面M字形の凸帯をめぐらす。頸部には、2cm間隔で縱位の暗文がある。頸部径30cm。

器合（515） 下半部片で、外面は刷毛目調整痕がナデ消されている。

79号貯蔵穴（図版28-1，第62図）

東側を78号、南側を80号貯蔵穴に切られる。底部平面形は、176×145cmの楕円形をなし、壁は袋状に立ち上る。壁高123cm。遺物は、土器が少量出土している。

出土遺物（図版64）

甕（516~519） 519は口縁外の粘土帯が剥離し、口縁下に断面三角形の凸帯をめぐらす。516は、口縁外に断面カマボコ形の粘土帯を貼付する。復原口縁内径18.4cm。517・518は、平底の底部片である。

壺（521） 肩部片で、3条の沈線が引かれる。

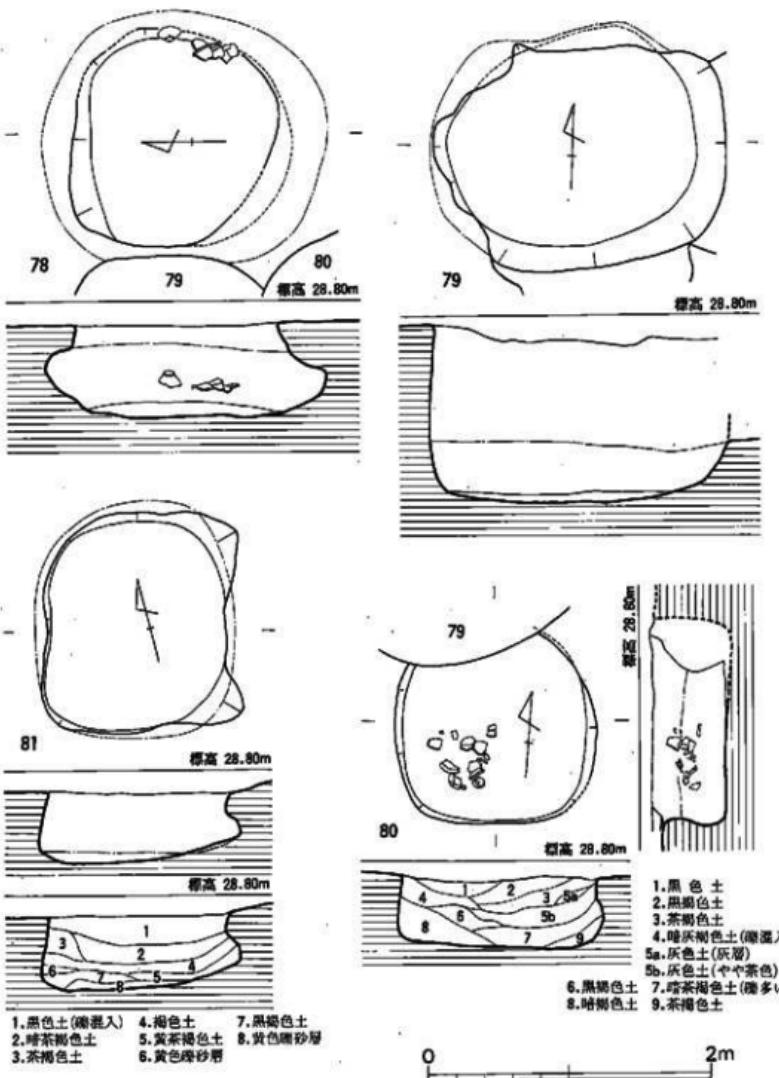
蓋（520） 据部片で、端部は丸まる。内外面に刷毛目痕が残る。

80号貯蔵穴（図版28-1，第62図）

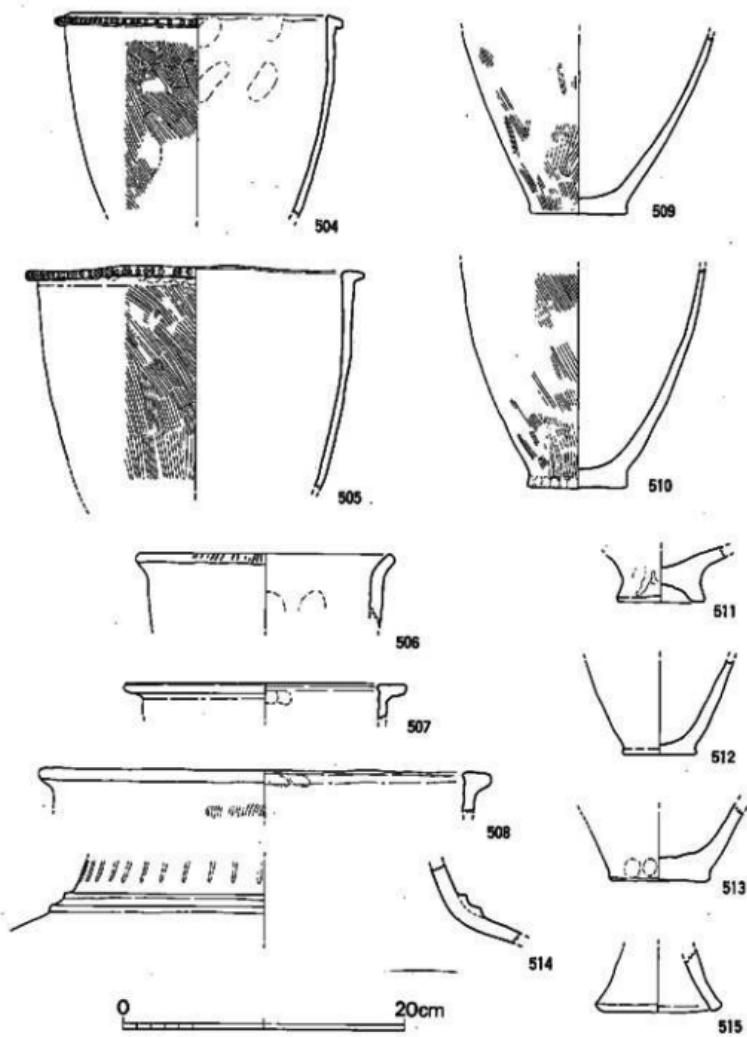
79号貯蔵穴を切り、堅穴4に切られる。底部平面形は、140×130cmの隅丸方形をなし、壁は袋状に立ち上る。深さ50cm。埋土は、スリ鉢状に堆積し、土器は中程より上位にまとめて出土している。遺物は、土器以外に砾石が出土している。

出土遺物（図版43・49，第27・64図）

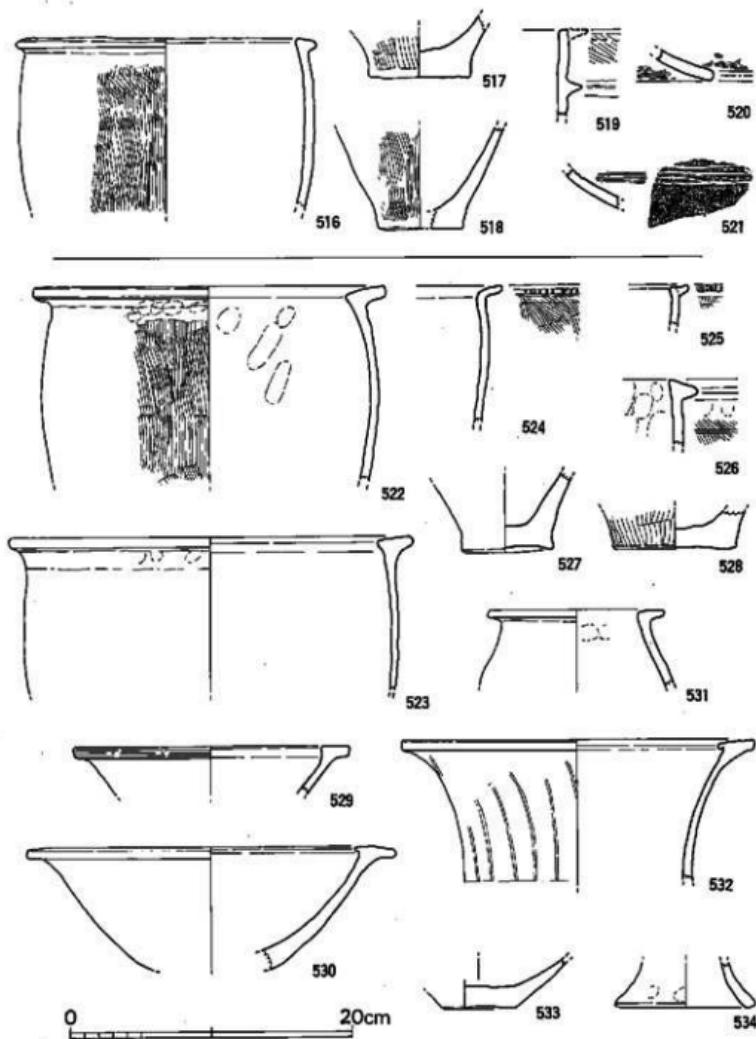
甕（522~528） 524は、如意形に口縁を外反させ、口唇下端部に刻目が施される。525は、口縁外に粘土帯を貼付し端部に刻目をつける。526は、口縁外に断面三角形の粘土帯をつけ口



第 62 図 78~81号貯藏穴実測図(1/40)



第63図 78号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)



第 64 図 79-80号贮藏穴出土土器実測図(1/4)

縁上面を外下りの平面にする。口縁下に1条の沈線を引く。522・523は、口縁やや内傾し逆L字の口縁をなす。復原口縁内径は、522が19.4cm、523が23.6cm。527・528は底部片で、528は平底をなす。

高杯（529・530） 高杯杯部片と思われ、鋤先状に近い口縁をなし、外面とも丁寧なヘラ磨きがなされる。復原口縁内径は、529が15.6cm、530が20.5cmとなる。529は、鉢の可能性がある。

壺（531～533） 531の口縁は、強く屈曲し外反する。頸部外面には横位のヘラ磨きがみられる。532は、口縁が鋤先状をなし端部上面をつくる。頸部はゆるやかに外反し、肩部との接点に1条の沈線がひかれる。頸部外面には、2cm間隔で縦位の暗文がある。復原口径は、531が12.5cm、532が25cmをなす。

器合（534） 下半部片で、復原底径10cm。

砥石（図版49、第27図12） 半欠品であるが、3.5cmの幅に切られた、高さ2.7cmのカマボコ形をなす。底面、両側面は使用によって凹む。各面とも平滑である。

81号貯蔵穴（図版28-2、第62図）

79号貯蔵穴の西側にあり、竪穴10に一部上面を削られる。底部平面形145×125cmの梢円形をなし、壁は袋状に立ち上る。埋土は、やや水平に近く堆積する。深さ51cm。遺物は、土器が少量出土している。

出土遺物（第66図）

甕（535～538） 538は、口縁が如意形に外反し、端部に刻目を施し、口縁下に刻目凸帯をめぐらす。外面、部分的に刷毛目調整痕が残る。復原口径17.5cm。535～537は、口縁外に粘土帯を貼付したもので、535は断面台形に近く端部に刻みがある。536・537は、端部は丸味をおびる。

82号貯蔵穴（第65図）

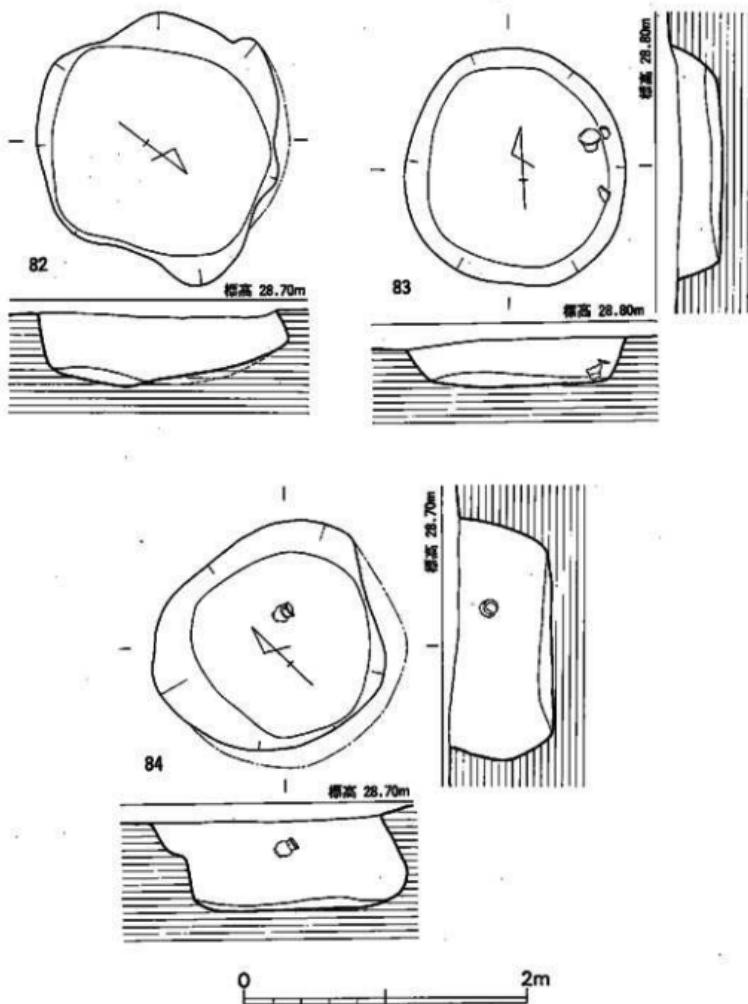
81号貯蔵穴の南にあり、上面は竪穴10により削平される。底部平面形は、155×140cmの胴張り隅丸長方形をなし、壁はやや袋状に立ち上る。残存深さ50cm。出土遺物はない。

83号貯蔵穴（第65図）

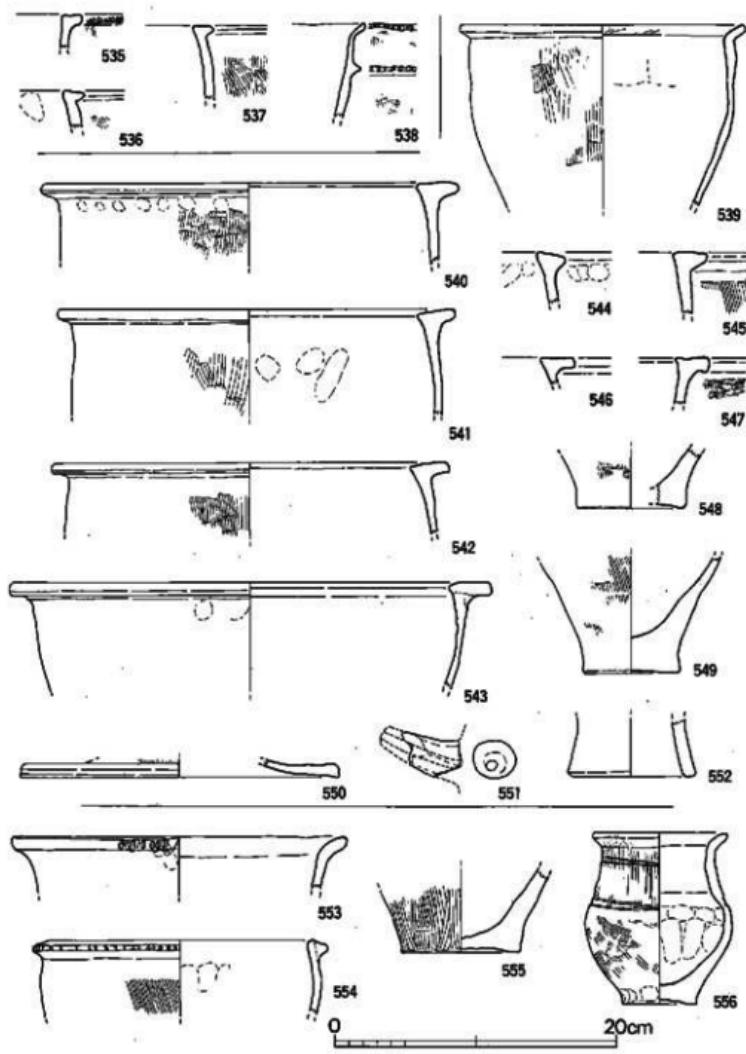
82号貯蔵穴の北側にある。底部平面形は、140×130cmの円形をなし、壁は外に開いて立ち上る。残存する深さは35cmである。遺物は、土器が出土しているのみである。

出土遺物（図版50、第66図）

甕（539～549） 539は、口縁部は強く屈曲して外反し、端部は面をなす。口縁内面に、刷



第 65 図 82~84号竪穴式墓(1/40)



第 66 図 81-83-84号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)

毛目調整痕が残る。外面には、荒い刷毛目調整がされる。復原口径20cm。540-547は、口縁外に粘土帯を貼り、逆L字に近い口縁にしたもので、口縁は内傾する。544は、カマボコ形に近い断面をなす。復原口縁内径は、540が^φ23.6cm, 541が^φ23.6cm, 542が^φ22.6cm, 543が^φ28cm。548・549は、平底の底部片である。

壺 (550) 捩端部片で、端部は肥厚する。復原壺部径22.5cm。

器台 (552) 下端部片で、底径9cm。

注口土器 (551) 本体より剥離した注口部片である。径3×2.5cmの梢円形の断面をなし、径6×8mmの孔が通る。

84号貯蔵穴 (図版29-1・2, 第65図)

7号住居跡と、竪穴12の間にある。底部平面形は、128×125cmの不整円形をなし、壁は一部袋状に立ち上る。残存する深さは、65cmである。小形壺 (556) が、中央上面に近い所で出土している。

出土遺物 (図版44, 第66図)

壺 (553-555) 553は、ゆるやかに外反する口縁で、端部はやや平坦となり、荒い刻目が施される。この土器は、93号貯蔵穴の597と同一個体である。復原口径23.7cm。554は、口縁外に、断面三角形に近い粘土帯を貼り、刻目を施す。復原口径20.9cm。555は、平底の底部である。

壺 (556) 口縁は強く外反し、頸部はやや内傾し、胴部はあまり腰れない。底部はやや上底気味である。口縁下と、頸部と胴部の境に、2本単位の沈線をめぐらす。器面調整は、壺としては荒い。口径9.55cm, 器高12cm。完形品。

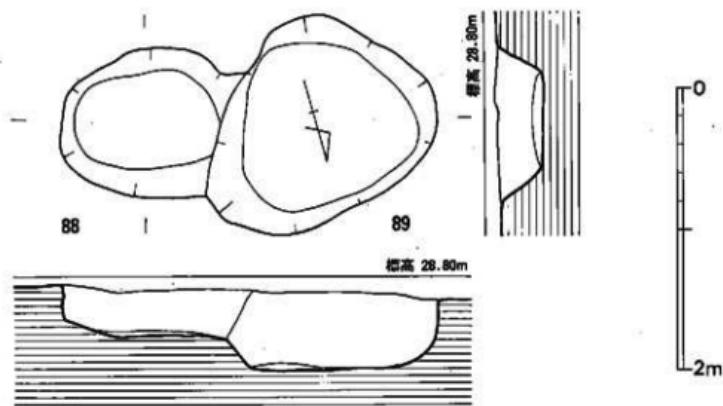
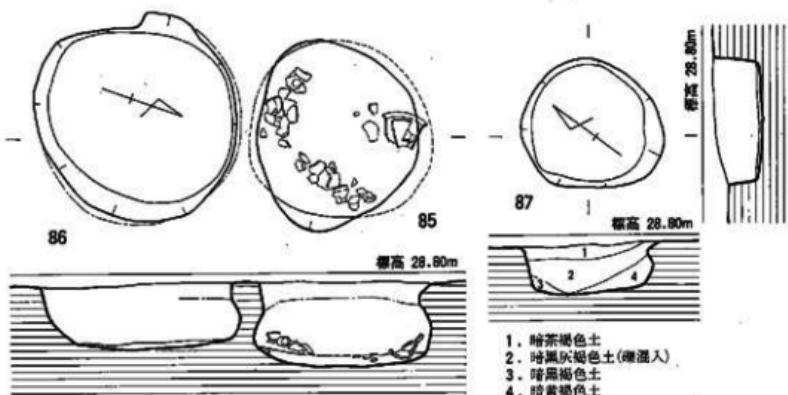
85号貯蔵穴 (図版30-1, 第67図)

6号住居跡の南側、86号貯蔵穴の北側にある。底部平面形は、130×127cmの円形をなし、壁は、袋状に立ち上る。深さは60cmである。土器が床面近くにまとまって出土しており、貯蔵穴廃絶後、それ程時間をおかず土器が廃棄されたものと思われる。

出土遺物 (図版44, 第68図)

壺 (557-564) 557-559は如意形口縁をなし、端部に刻目がつけられる。557は、器面外部に、板状工具による調整痕が残る。復原口径22.8cm, 器高23.7cm。558・559は、外面に刷毛目調整痕が残る。復原口径は、558が^φ22cm, 559が^φ13.7cmである。560-563は、口縁外に粘土帯を貼付したもので、560は口唇部と口縁下凸帶に刻目がなされる。復原口径27cm。561には、口縁下に1条の沈線がめぐる。564は、平底の底部である。

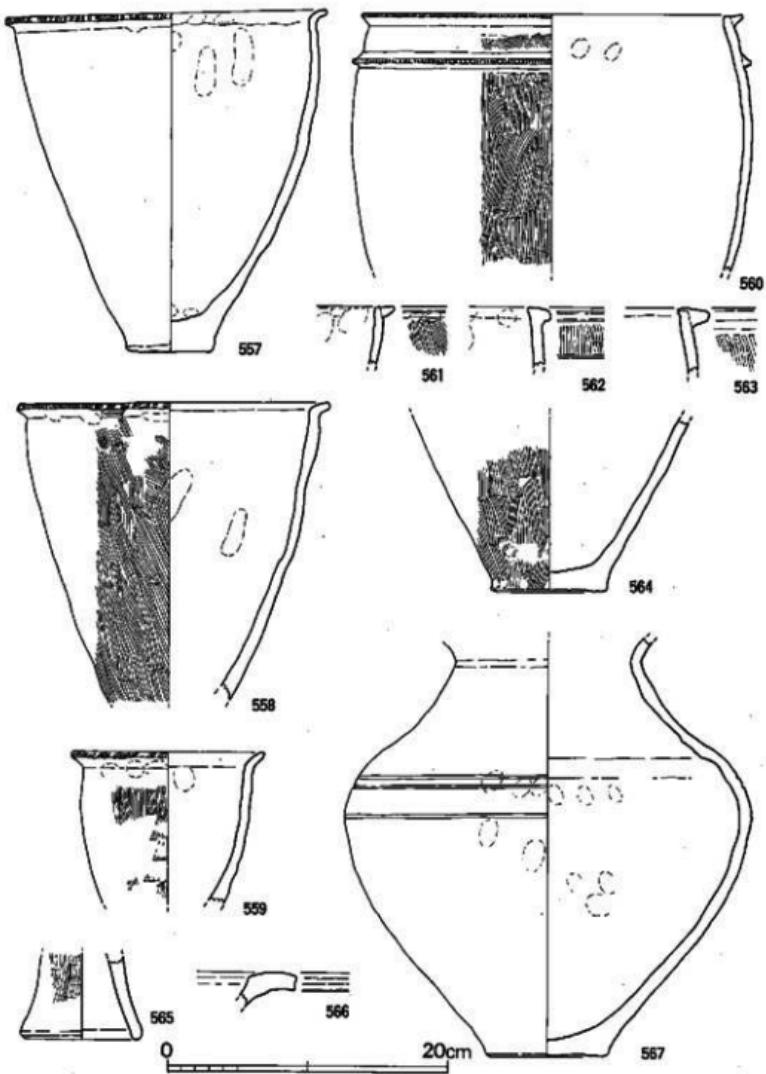
壺 (566・567) 567は口縁端を欠くが、口縁は短く外反し、頸部は広がり、肩部に2条、胴部最大径に1条の沈線が引かれ、平底の底部につづく。復原頸部径13cm, 胴部最大径28.6cm



第 67 図 85~89号貯蔵穴実測図(1/40)

底径8.6cm、残存器高30cm。

器台(565) 下半部片で、端部は丸まる。外面には刷毛目調整痕が残る。復原底径8.6cm。



第 68 图 85号贮藏穴出土土器实测图(1/4)

86号貯蔵穴（第67図）

85号貯蔵穴の南側に接する。底部平面形は、 $134 \times 117\text{cm}$ の楕円形をなし、壁は袋状に立ち上る。深さ47cm。土器の出土はなく、黒曜石剝片が1点出土しているのみである。

87号貯蔵穴（第67図）

86号貯蔵穴の南側に位置する。底部平面形は、 $83 \times 83\text{cm}$ の円形で、壁は一部袋状となる。残存する深さは、33cmである。埋土は、南側から北側に傾斜して堆積している。出土遺物はない。

88号貯蔵穴（図版30-2, 第67図）

12号竪穴の南側にあり、89号貯蔵穴に切られ、15号土壙によって一部上面が削られている。底部平面形は、 $105 \times 70\text{cm}$ の楕円形をなし、壁はほぼ直に立ち上る。残存する深さ33cm。遺物は土器のみである。

出土遺物（図版44, 第69図）

壺（568-578） 568は、如意形に口縁が外反し、端部に刻目を施し、口縁下に断面三角形の刻目凸帯をめぐらし、平底の底部となる。口径20.9cm、底径7.1cm、器高18.7cm。571は、口縁は強く屈曲して外反する。端部は面をなす。575は、口縁下の刻目ない断面三角形の凸帯である。569・572-574・576は、口縁外に粘土帯を貼付し、逆し字口縁にしたものである。578は、口縁内面に厚い粘土帯を貼付し、口縁を肥厚させた大形の壺の口縁部。570は、くの字に外反する口縁で端部はやや厚くなる。復原口径25.1cm。577は、平底の底部片である。

壺（579-581） 579は、肩部に断面M字状の凸帯がめぐらし破片、580・581は、錐先状になる口縁部片。復原口縁内径は、580が20cm、581が23.8cmである。

壺（582） 壺部破片。端部は面をなし、やや凹む。

器台（583） 下端部片。端部は丸まる。

89号貯蔵穴（図版30-2, 第67図）

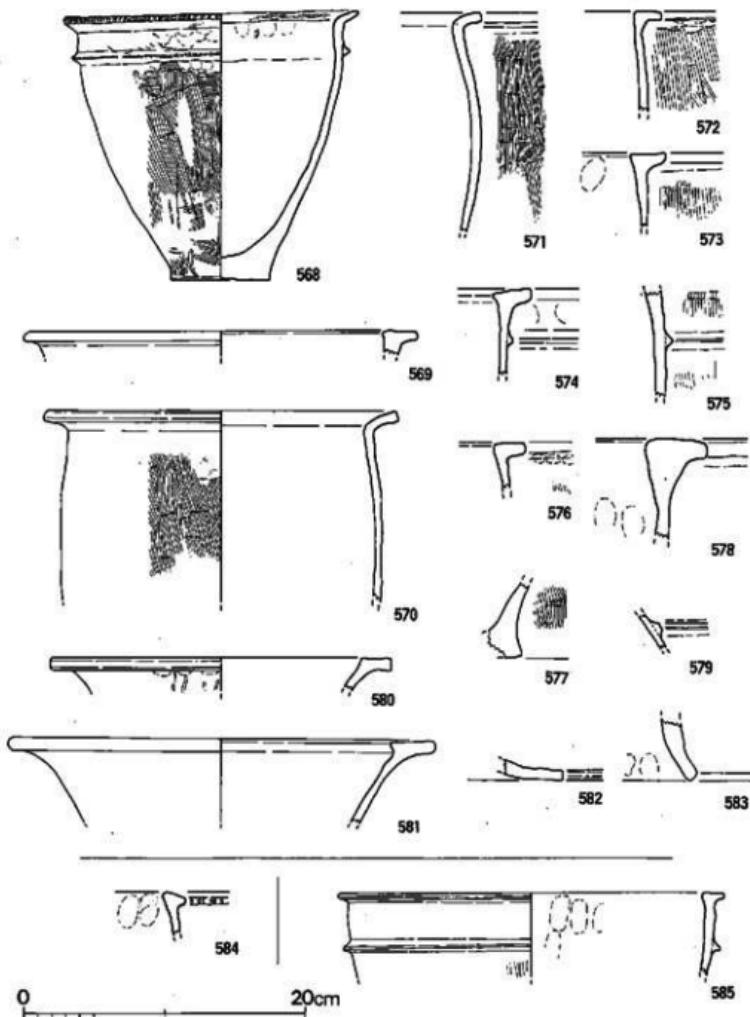
88号貯蔵穴を切る。底部平面形は、 $123 \times 120\text{cm}$ の不整円形をなし、壁は丸みを持って立ち上る。残存する深さ55cm。遺物は、土器が少量出土している。

出土遺物（第69図）

壺（584） 口縁外に粘土帯を貼付し、口縁上面が外下りになり、端部に刻目がある。

90号貯蔵穴（図版31-1, 第70図）

88・89号貯蔵穴の南側にある。底部平面形は、 $130 \times 115\text{cm}$ の楕円形で、壁は袋状に立ち上る。



第 69 図 88~90号蔚藏穴出土土器実測図(1/4)

深さは、62cm。遺物は、土器が少量出土している。

出土遺物（第69図）

甕（585） 口縁外面と、口縁下4cmに断面三角形の粘土帯を貼付する。復原口径27.4cm。

91号貯蔵穴（図版31-2, 第70図）

12号住居跡の北側にある。底部平面形は、100×80cmの胴張り隅丸長方形をなし、壁は袋状に立ち上る。深さ51cm。埋土はスリ鉢状に堆積する。遺物は、土器と円盤状の蓋が出土している。

出土遺物（図版50-2, 第36・71図）

甕（586-589） 586-588は口縁外に粘土帯を貼付し、逆L字状の口縁としたもの。復原口径内径は586が19.4cm, 587が22cm, 588が25.8cm。589は上底の部厚い底部である。

器台（590） 器高14.95cmの器台で、外面に刷毛目痕が残る。上部に黒斑がみられる。

円盤状蓋（第36図11） 8.1×7.8cmの楕円形をなし、中心部がやや盛り上り下面が凹む。長軸両端に、上面から下外方向に向かって径4mmの小孔が穿たれており、下面開孔部外側に紐ずれの痕跡がある。全体を丁寧にヘラ研磨を施す。（木村）

92号貯蔵穴（第70図）

91号貯蔵穴の西側にあって、18・19号竪穴の下層から検出された袋状竪穴である。底面形は楕円形を呈し、規模は長径140cm、短径127cm、深さ58cmを測る。

出土遺物（第71図）

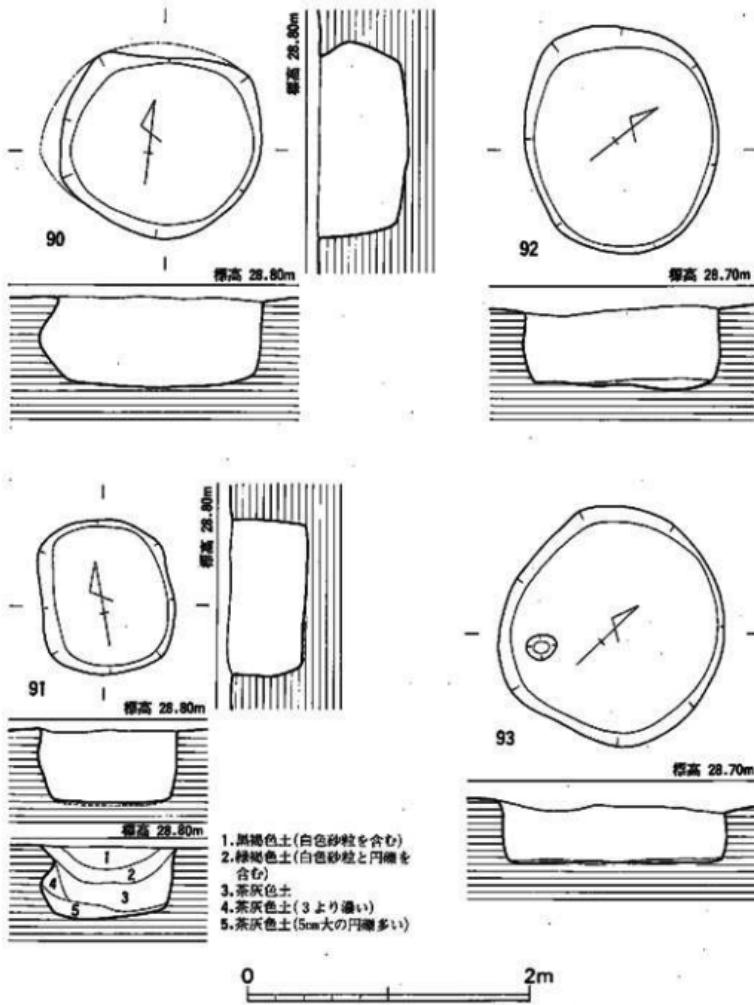
甕（591-594） 如意形口縁のもの（591・593）と逆L字状口縁のもの（594）がある。592は口縁部を欠失しているが591と同様、口縁下に1条の三角凸帯がつく如意形口縁の甕と思われる。胴部外面の調整は592・593が刷毛、内面は591-594ともナデ仕上げで、口縁部はいずれもヨコナデしている。また、593の口縁部内面はさらにヨコヘラ磨きしている。色調は591・594が暗茶褐色、592・593が暗茶灰色で、591・593の外面には煤の付着がみられる。（井上）

93号貯蔵穴（図版32-1, 第70図）

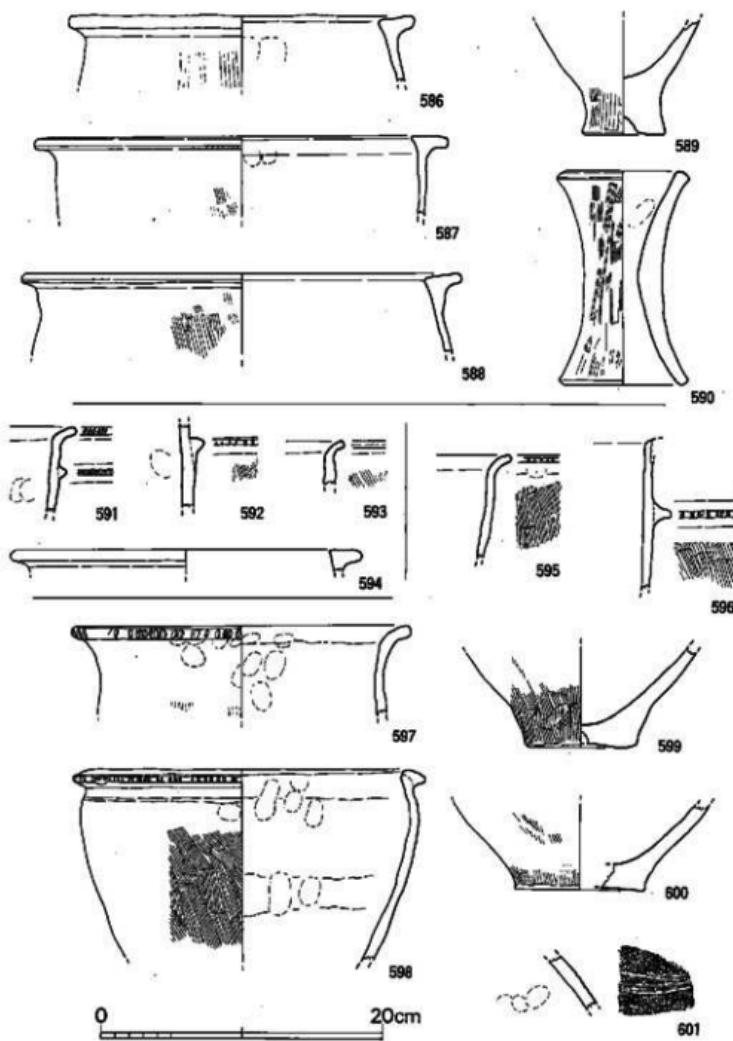
12号住居跡の床面下から検出されたものである。底部平面形は、145×140cmの円形をなし、壁は直に立ち上る。残存する深さ40cm。底面南側に22×18cm、深さ約10cmのピットがある。遺物は、土器と円盤状土器片が出土している。

出土遺物（図版51, 第24・71図）

甕（595-600） 595は、如意形に外反する口縁端に刻目を施す。596は、口縁外面に貼付されたおそらく刻目のある粘土帯が剥離しており、口縁下に刻目凸帯をめぐらす。597は、84号貯蔵穴の553の土器と同一個体である。口縁は、ゆるやかに外反し、端部は面をなし、荒い刻



第 70 図 90~93号貯蔵穴実測図(1/40)



第 71 図 91~93号蔚藏穴出土土器実測図(1/4)

目を施す。復原口径24cm。598は、口縁外面に粘土帯を貼付し、刻目を施す。口縁は内傾し肩部はやや脹らむ。復原口径25cm。599・600は、平底の底部である。

壺 (601) 3本の沈線をめぐらす肩部の破片である。

円盤状土器片 (第24図23~25) いずれも、麥胴部片を加工したものである。23は一部欠損するが、 4.4×3.7 cmの楕円形で周縁は磨滅する。重さ7.9g。24は、一部欠損するが、 5.5×4.5 cmの楕円形をなす。重さ16.9g。25は、 4.5×4.5 cmの不整方形をなし、重さ18.5g。

94号貯蔵穴 (図版32-2, 第72図)

12号住居跡の床面下から検出されたもので、95号貯蔵穴に切られている。底部平面形は 140×115 cmの、不整楕円形をなし、壁は外に開いて立ち上る。残存している深さは、36cmである。

出土遺物 (第73図)

壺 (602~606) 602は、口縁は強く屈曲して短く外反する。603・604は、口縁外面に粘土帯を貼付し、逆L字状の口縁とする。605は、断面三角形になる粘土帯を口縁外に貼付する。復原口径は、602が21.4cm, 603が28cmとなる。606は、平底の底部。

壺 (607~609) 607は、鋸先の口縁部片、609は、断面M字状凸帯をめぐらす肩部片、608は底部片である。607の復原口縁内径は、24.6cm。

95号貯蔵穴 (図版32-2, 第72図)

12号住居跡の床面下から検出されたもので、94号貯蔵穴を切っているが、床面の高さは、94号貯蔵穴とほぼ同じである。底部平面形は、 134×100 cmの不整楕円形をなす。壁は、外に開いて立ち上る。残存する深さ38cm。土器が、南側上面近くでまとまって出土している。

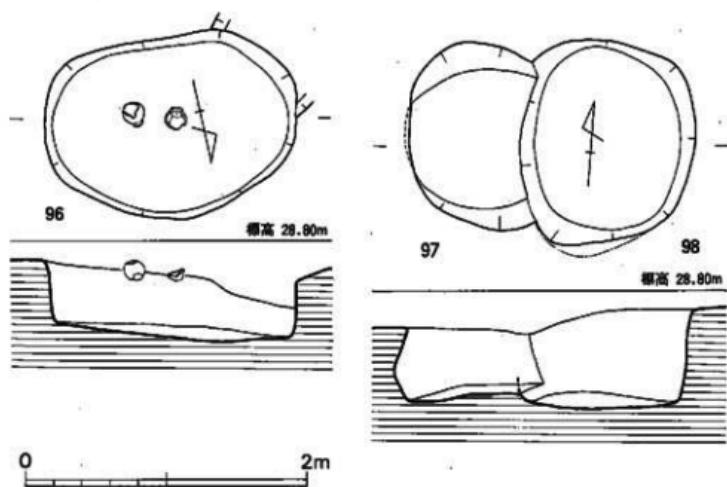
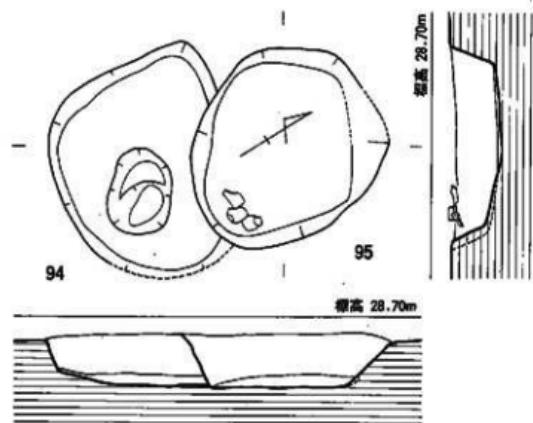
出土遺物 (第11・73図)

壺 (610~616) 610は、口縁外に断面三角形になる粘土帯を貼付し、口縁上面はやや外下りとする。611~614は、逆L字状口縁をなし、612は口縁下に断面三角形の凸帯をめぐらす。復原口縁内径は、610が33cm, 611が28.6cm, 612が36.6cm。615・616は底部片である。

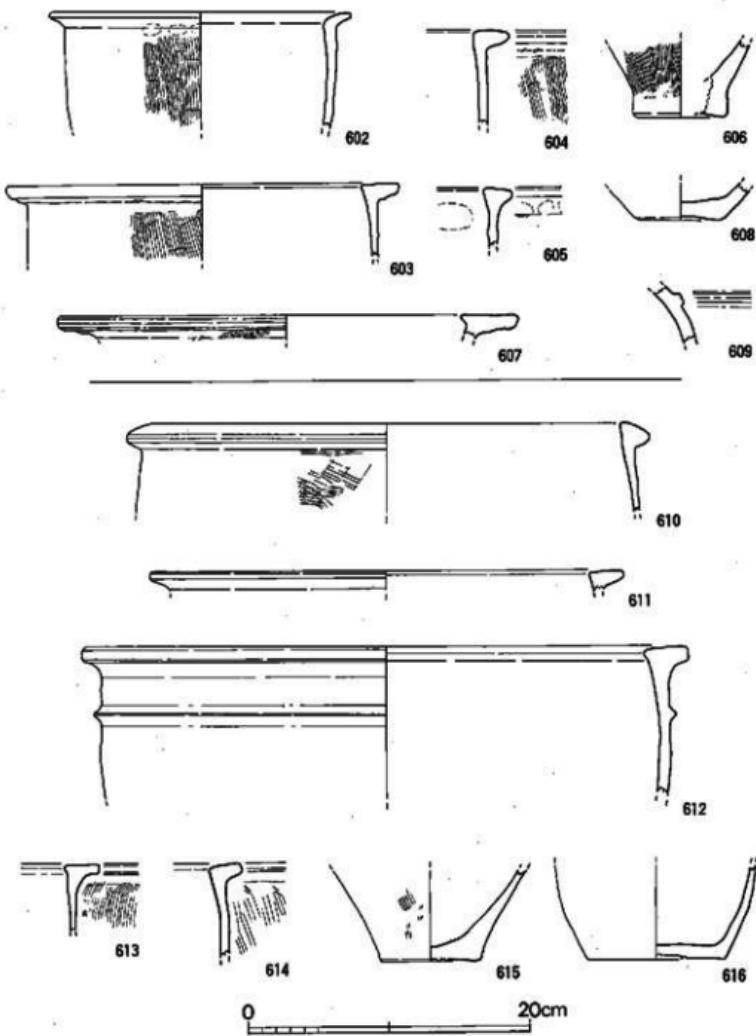
不明土製品 (第11図44~47) いずれも、定形をなさない。46を除いて精良な粘土である。45は、何個かの粘土を集めて平坦面に押し付けた粘土塊である。44は、団子状に丸めたもの、47は、小さく押し潰したものである。

96号貯蔵穴 (図版33-1, 第72図)

12号住居跡の南側に接する。底部平面形は 168×117 cmの楕円形をなし、壁はやや内傾して立ち上る。残存する深さは、44cm。土器 (622・623) が上面付近で出土している。



第 72 図 94~98号貯藏穴実測図(1/40)



第 73 図 94-95号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

出土遺物（図版44・45、第74図）

甕（617～620） 617・620は、逆L字状口縁をなし、端部に面がある。復原口縁内径は24cm。618・619は、厚手の底部片である。

鉢（621・622） 622は、口縁上面が平坦で外に少し張り出す。底部は平底である。口径19.9cm、器高19.4cm。

無頸甕（623） 球形の胴部を持ち、底部は小さく高い。口縁外面には、相対する位置に半月状の粘土を貼り、真中に径3.5×5mm、その両側に、径5×7mmの孔を上から下へ貫通させ、把手とする。外面に塗られた赤色顔料の痕跡が残る。

97号貯蔵穴（図版33-2、第72図）

98号貯蔵穴に切られ、上面を12号住居跡によって削られている。底面形は $(110+\alpha) \times 99$ cmの円形をなし、壁は袋状に立ち上る。残存する深さは51cmである。土器が少量出土している。

出土遺物（第74図）

甕（624・625） 624は、口縁が、ゆるやかに外反し、端部に刻みを持ち、口縁下3cmに刻目がない断面三角形の凸帯をめぐらす。625は、口縁が強く屈曲して短く外反し、端部に刻目を施す。

98号貯蔵穴（図版33-2、第72図）

97号貯蔵穴を切り、西側一部を12号住居跡によって削られる。底部平面形は、128×104cmの梢円形で、壁はやや外に開いて立ち上る。残存する深さは71cmで、97号貯蔵穴の床面より10cm低い。遺物は、土器が少量出土している。

出土遺物（第74図）

甕（626～628） 626は、口縁外に断面三角形の粘土帯をめぐらし、口縁下5cmにも断面三角形の凸帯をめぐらす。101号貯蔵穴の土器640と接合する。628は、平底の底部片である。

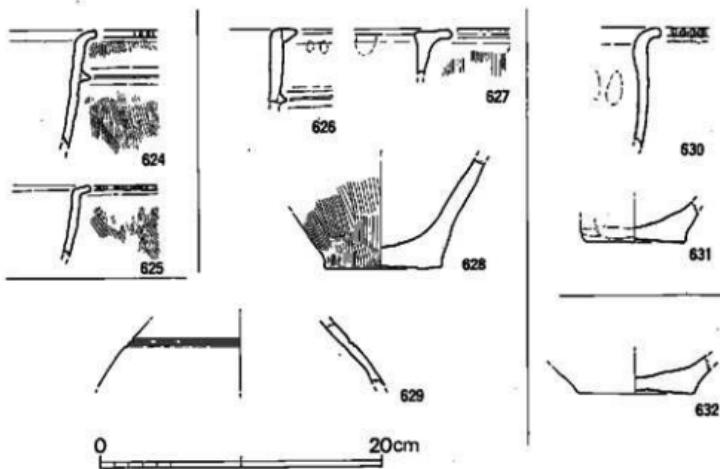
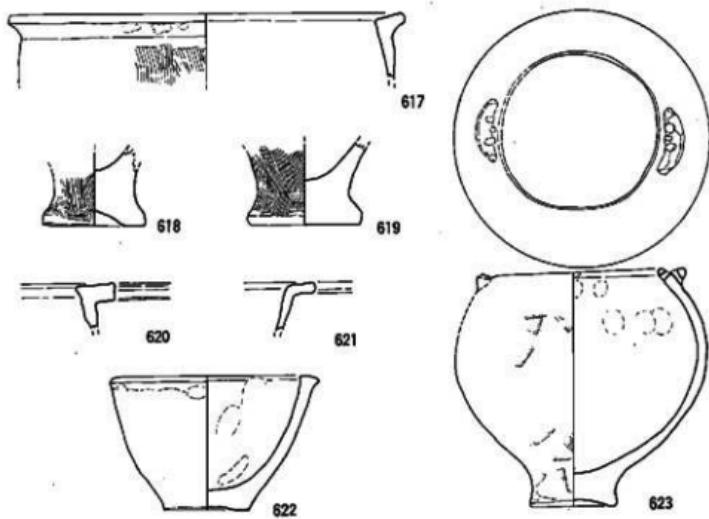
甕（629） 頸部と肩部の境に2本の沈線をめぐらす。外面横位のヘラ磨きがされる。復原頸部径17cm。

99号貯蔵穴（図版34-1、第75図）

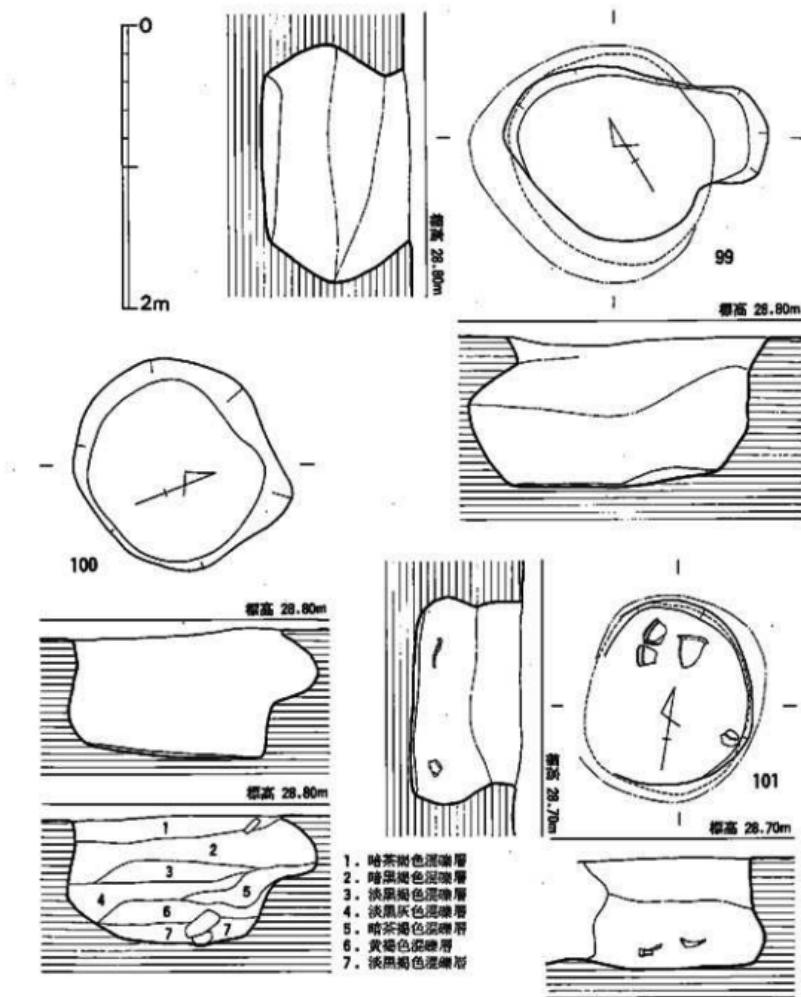
98号貯蔵穴南側にある。底部平面形は、153×135cmの梢円形をなし、壁は袋状に立ち上り、胴部最大径は、197×166cmとなる。上部平面形は崩落のため不整形をなすが、120×127cmの梢円形に近い。深さ105cm。遺物は土器が少量出土している。

出土遺物（第74図）

甕（630・631） 630は、短く強く丸まって外反する口縁で端部に刻目がある。631は、平底



第74図 96~100号貯藏穴出土土器実測図(1/4)



第 75 図 99~101号貯藏穴実測図(1/40)

の底部片である。

100号貯蔵穴（図版34-2, 第75図）

98号貯蔵穴の東側、101号貯蔵穴の北側にある。底部平面形は、 $123 \times 108\text{cm}$ の胴張り隅丸方形をなし、壁は袋状となる。埋土は、水平に近い堆積を示す。遺物は、少量の土器と管状土錐が出土している。

出土遺物（図版50, 第36・74図）

壺（632） 底部片で、外面ヘラ磨きがされる。底面2ヶ所に轍圧痕がある。

管状土錐（図版50-8, 第36図8） 中央付近の破片で、復原径2cm、復原孔径5mmの管状をなすが、長さは不明である。

101号貯蔵穴（図版35-1・2, 第75図）

100号貯蔵穴の南側にあり、103号貯蔵穴によって切られている。底部平面形は、 $132 \times 115\text{cm}$ の楕円形をなし、壁は袋状になる。深さ79cm。土器が、床面近くでまとまって出土している。

出土遺物（図版45, 第76・77図）

壺（633-641） 633-635は、如意形口縁をなし、端部に刻目が施され、口縁下に断面三角形の刻目凸帯があげられる。復原口径は633が 23.3cm 、634が 29.0cm 、635が 18.1cm である。636は、口縁が短く強く外反し、端部に刻目を持つ。640は、やはり強く外反するが、端部は面をなし、上・下端に細い刻目がある。口縁下5cmに刻目凸帯がある。復原口径は、636が 27cm 、640が 30.9cm である。641・638は、口縁外に粘土帯を貼付し、641は小さく、638は長く突出させている。いずれも口縁下に凸帯をめぐらす。639は、平底の底部である。

壺（642） 口縁内面に粘土帯を貼り肥厚させた強く外反した口縁で、頸部はゆるやかに湾曲しながら肩部へ続き、接点に2条の沈線を引く。口縁下端部に刻目をつける。口径 33.4cm 。

（木村）

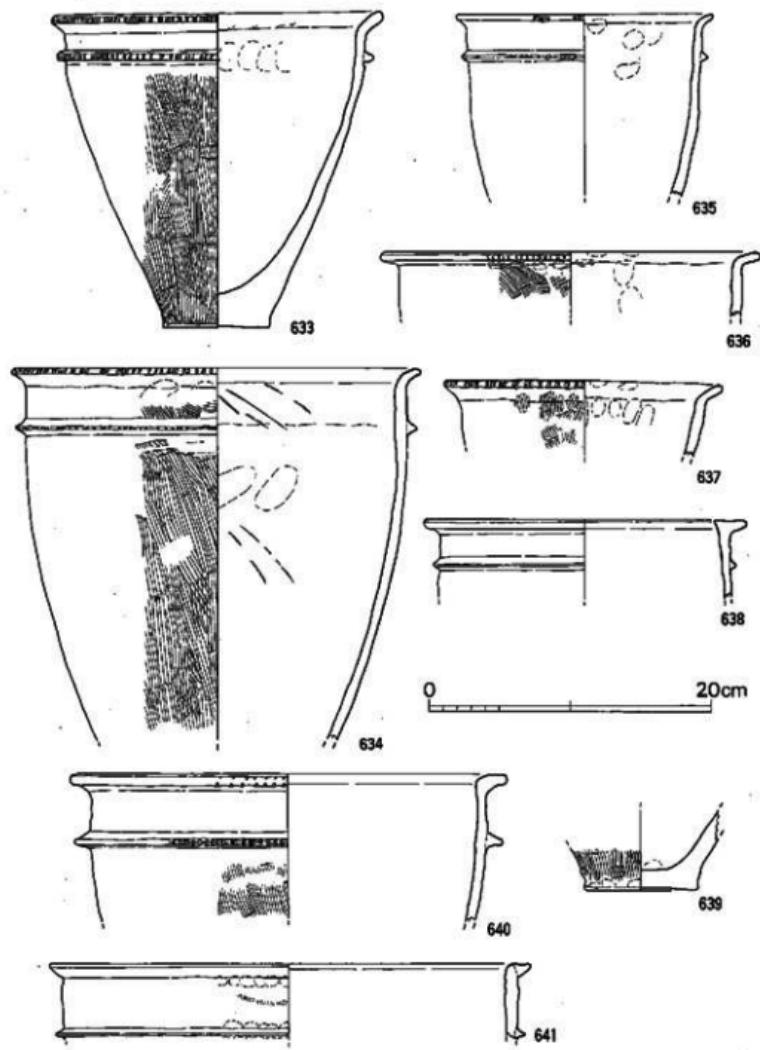
102号貯蔵穴（図版35-1, 第78図）

101号貯蔵穴の南側にあって、北壁の一部は103号貯蔵穴に切られた袋状堅穴である。底面形は胴張りの隅丸長方形を呈す。規模は長径 145cm 、短径 128cm 、深さ 72cm を測る。

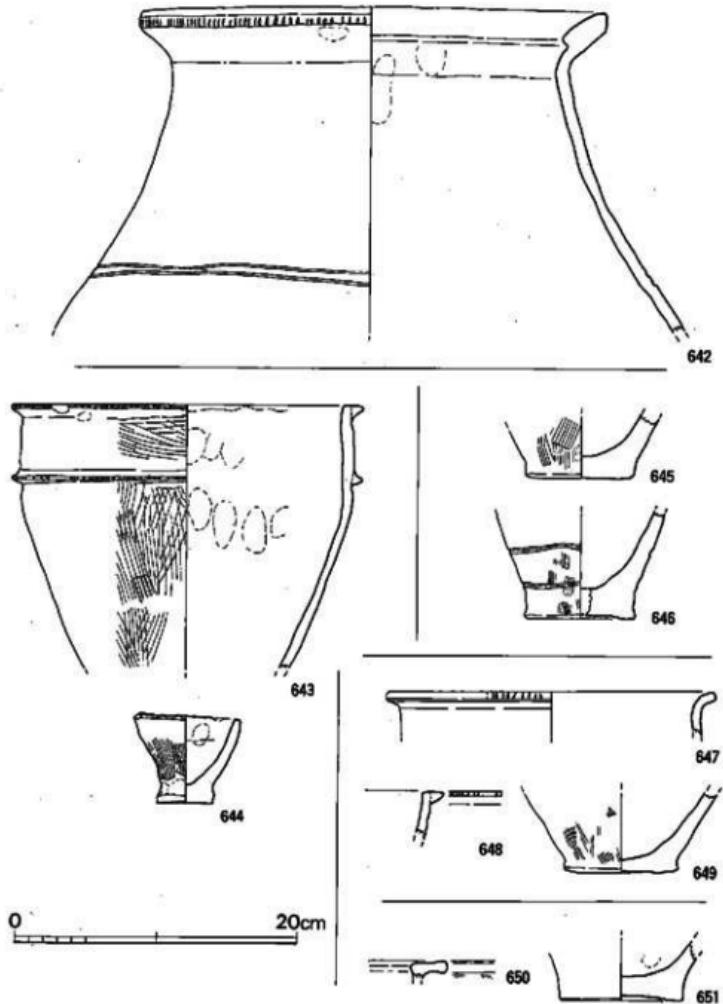
出土遺物（図版45, 第77図）

壺（643） 口縁端部に三角凸帯がつく壺で、口縁下にも1条の三角凸帯が貼付され、凸帯端部には刻目が施されている。胴部外面は粗い刷毛調整、内面はナデで仕上げている。色調は暗茶色を呈し、焼成も良い。復原口径は 27cm を測る。

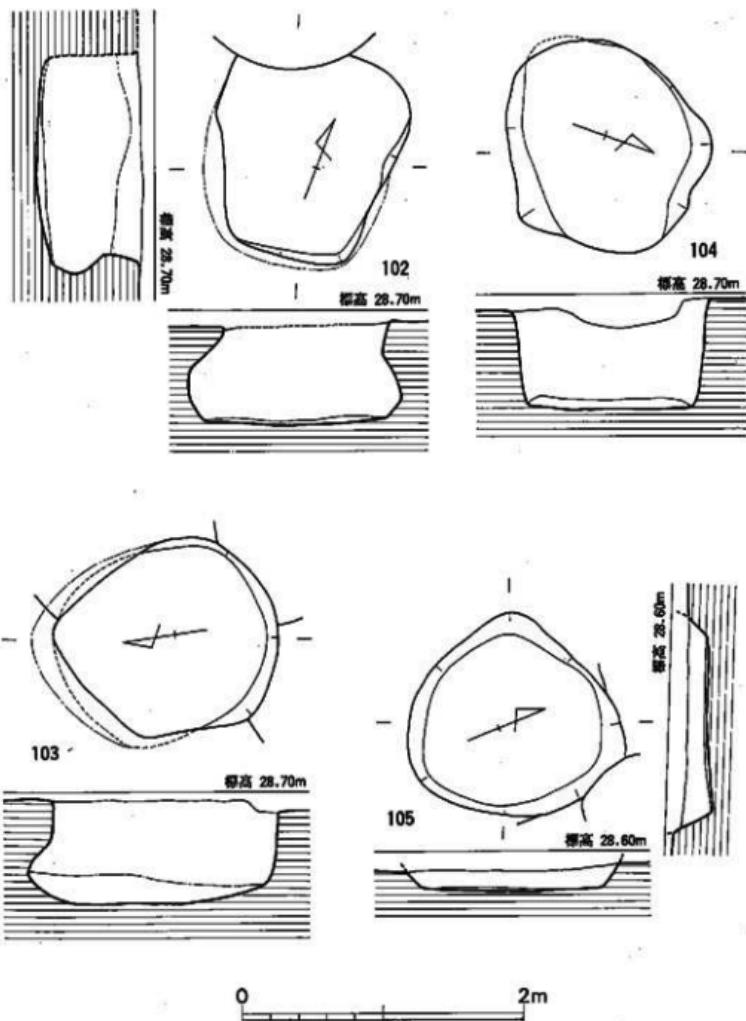
壺（644） 口径 6.8cm 、器高 6.1cm を測る小形の壺である。体部外面刷毛の他はナデで仕上



第 76 図 101号貯藏室出土土器実測図(1/4)



第 77 図 101~105号貯藏穴出土土器実測図(1/4)



第 78 図 102~105号貯藏穴実測図(1/40)

げていて、口縁端部には刻目が施されている。

103号貯蔵穴（図版35-1，第78図）

101・102・104号貯蔵穴を切って作られた竪穴で、壁面は北壁と東壁は袋状をなすものの、南壁は直立気味である。底面形は割張りの隅丸長方形で、規模は長径148cm、短径133cm、深さ73cmを測る。

出土遺物（第11・77図）

甕（645・646）底部付近の破片資料で、復原底径は645が7.85cm、646が7.75cmを測る。外面の調整は646が刷毛、645は刷毛のあとナデ、内面はナデ仕上げである。646の外面には3条の沈線がめぐる。色調は645が暗褐色、646が淡褐色を呈し、焼成も良好。

不明土器品（第11図48～50）いづれも不定形の棒状の粘土塊である。

104号貯蔵穴（第78図）

東壁側を102・103号貯蔵穴で切られた竪穴で、規模は長径163cm、短径113cm、深さ80cmを測る。底面形は不整梢円形で、断面は逆台形状を呈す。

出土遺物（第77図）

甕（647～649）647が如意形口縁、648は口縁端部に三角凸帯を貼付した甕で、いずれも端部に刻目が施されている。647は復原口径23.3cmを測る。色調は647が茶褐色、648が暗茶褐色を呈す。649は底部付近の破片資料で、復原底径8.2cmを測る。外面は刷毛調整のあとナデ、内面はナデで仕上げている。色調は暗茶褐色で、焼成も良好である。

105号貯蔵穴（第78図）

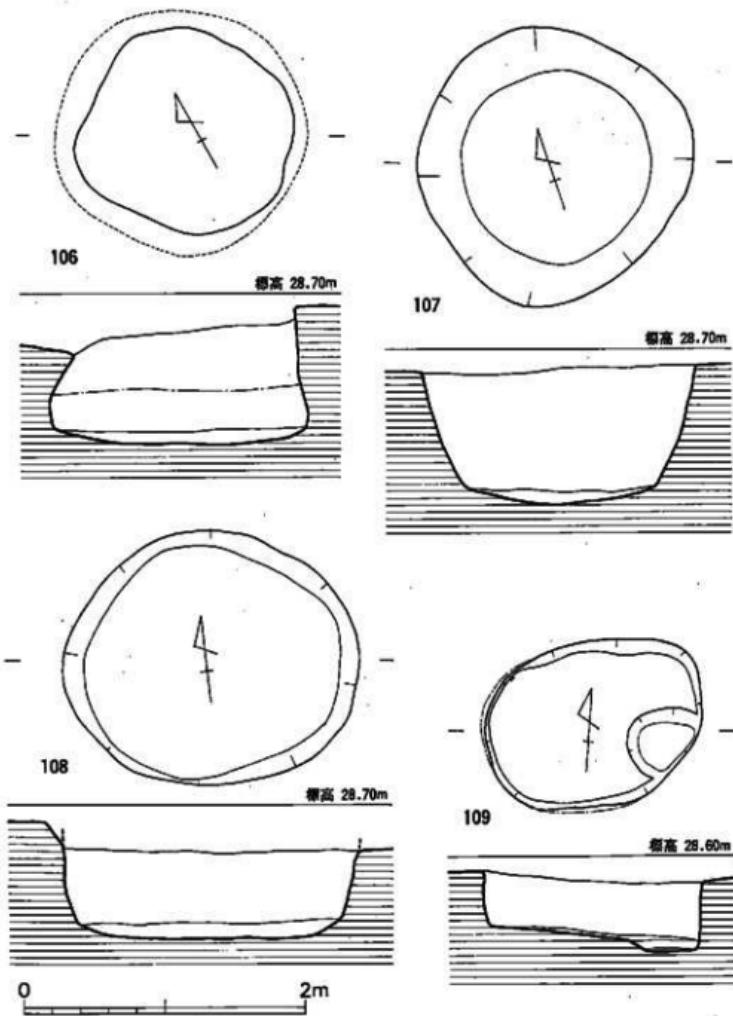
67号貯蔵穴の西側の23号土塼の床面から検出された底面形が不整円形を呈す浅い小形の竪穴である。規模は長径125cm、短径123cm、深さ29cmを測る。

出土遺物（第77図）

甕（650・651）650はT字状口縁の小破片、651は凹み底気味の底部資料である。651の外面はヘラ磨き、内面はナデで仕上げていて、底径は8.6cmを測る。色調は650が茶褐色、651が暗褐色を呈し、焼成はいづれも良好である。
(井上)

106号貯蔵穴（図版36-1，第79図）

105号貯蔵穴の南側にあり、109号貯蔵穴の北側にある。底部平面形は、175×170cmの円形をなし、壁は袋状になる。上面形は140×135cmの隅丸長方形になる。深さ98cm。遺物は、土器が出土している。

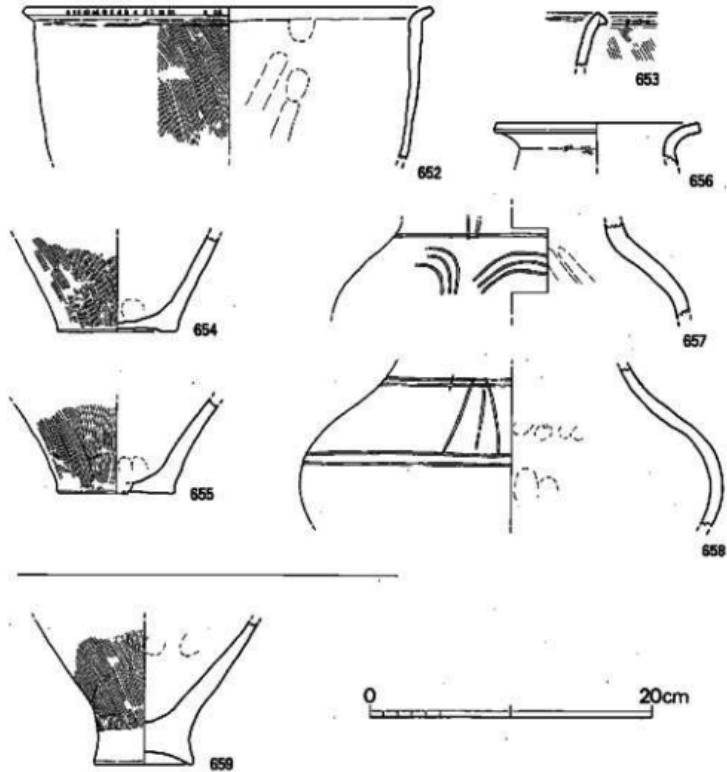


第 79 圖 106~109号 諸古穴査測図 (1/40)

出土遺物（第80図）

甕（652～655） 652は短く外反した口縁で、端部に刻目がある。復原口径29cm。653は外反する口縁で、口唇下端に刻目がある。654・655は底部である。

壺（656～658） 656は、口縁が強く短く外反し、端部は平坦である。内面にヘラ磨きがみられる。復原口径14.6cm。657・658は肩部から頸部の破片で、657は頸部に2本単位の縱位沈線をひき、頸部と肩部の境に1条の沈線をめぐらし、肩部には3本単位の連弧文沈線を引く。



第80図 106-107号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

658は頸部・肩部の境と、胴最大部に2本単位の沈線をめぐらし、肩部に継ぎの沈線を引く。復原頸部径は、657が 16cm 、658が 18cm である。

107号貯蔵穴（図版36-2、第79図）

108号貯蔵穴の西側にある。底部平面形は $135\times133\text{cm}$ の円形をなし、壁はやや股みながら外に聞く。深さ 94cm 。遺物は土器が少量出土している。

出土遺物（第80図）

壺（659）上底で、厚い底部片である。底径 7.1cm 。

（木村）

108号貯蔵穴（図版37-1、第79図）

107号貯蔵穴の南東、13号住居跡床面下から検出された竪穴で、底面形は梢円形をなす。規模は長径 183cm 、短径 162cm 、深さ 60cm を測る。埋土上層からは壺・甕・高杯等の破片が多数出土した。

出土遺物（第81図）

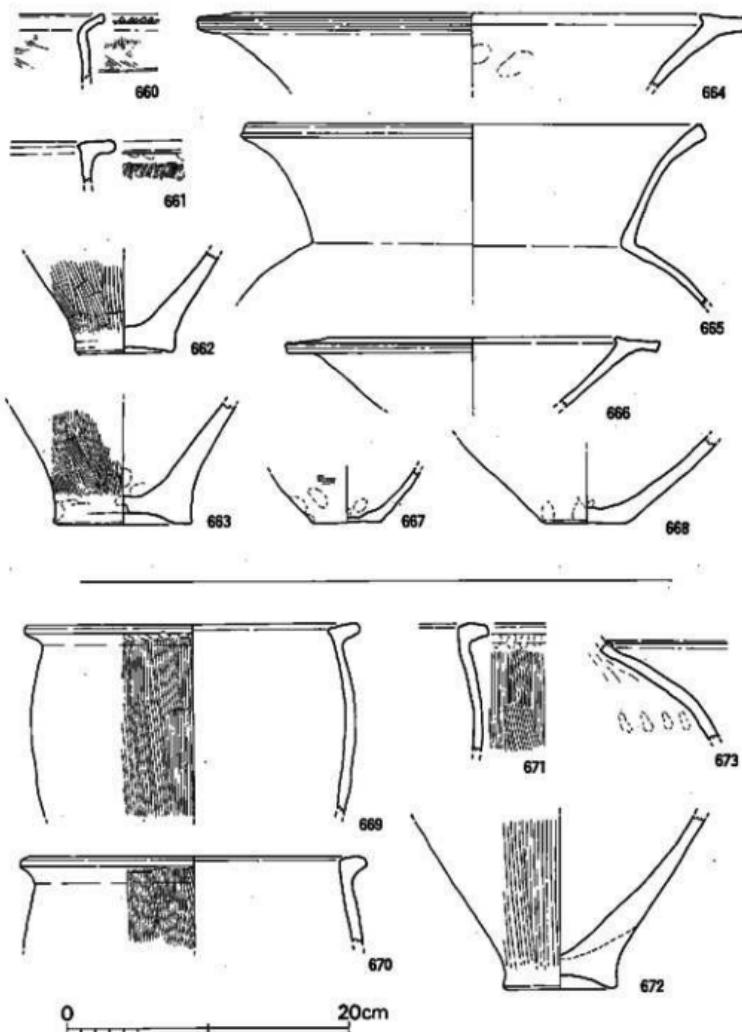
壺（660～663）660は如意形口縁、661はT字状口縁の甕の小破片、662・663は底部資料である。660の口縁下には1条の沈線がめぐり、口縁端部には刻目が施されている。胴部外面の調整は、660・661とも刷毛、内面はいづれもナデ、口縁部内外はヨコナデしている。662・663の外面調整は刷毛で、底部付近はさらにヨコナデしている。内面はナデ仕上げで、663の内底部には指頭圧痕がみられる。底径は662が 7cm 、663が 9.8cm を測る。

甕（664・665・667・668）664は鋤先状口縁、665は広口の單口縁の甕で、いづれも破片資料である。復原口径は664が 39cm 、665が 32.2cm を測る。調整は664が頸部内外をナデ、口縁部内外をヨコナデ、664は外面が風化しているため明確ではないが、ナデのあとヘラ磨き、内面はナデ仕上げ、口縁部内外はヨコナデし、内面をさらに粗いヘラ磨きをしている。色調はいづれも肌色で、焼成も良好である。667・668は底部資料で、667は底径 5cm の小形甕、668は底径 6cm を測る中形甕の底部である。外面の調整は667が刷毛のあとナデ、668はナデ、内面はいづれもナデ仕上げで、667の内底部には指頭圧痕がみられる。

高杯（666）鋤先状口縁の杯部の破片資料で、復原口径は 26.6cm を測る。調整は器面の風化が著しいため不明瞭だが、一部残存するところからみれば杯部内外ともヘラ磨きで仕上げたものと思われる。

109号貯蔵穴（第79図）

106号貯蔵穴の南側から検出された竪穴で、東壁際床面には浅いピットがある。底面形は梢円形で、規模は長径 147cm 、短径 105cm 、深さ 37cm を測る。壁面は直立し、断面は箱形を呈す。



第 81 図 108-110号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

110号貯蔵穴（第82図）

109号貯蔵穴の南側から検出された竪穴で、東壁側は一部未掘である。底面形は円形と思われる。規模は復原長径180cm、短径172cm、深さ47cmを測る。

出土遺物（図版45、第81図）

甕（669～672） 669～671は口縁幅の狭い逆L字状口縁の甕である。調整は胴部外面が刷毛、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。669と671の口縁下には成形時の指彫痕が残っている。色調は669が淡黄茶褐色、670が茶褐色、671は黄褐色を呈す。672は胴部下半の破片資料で、底部は凹み底である。調整は胴部外面を粗い刷毛、内面はナデ、底部付近と外底部はナデで仕上げている。色調は淡茶褐色で焼成良好である。

壺（673） 頸部下に1条の三角凸帯が付く壺の肩部付近の小破片である。調整は外面がヨコヘラ磨き、内面はナデ仕上げである。色調は淡褐色を呈す。

111号貯蔵穴（第82図）

110号貯蔵穴の南西側から検出された小竪穴である。底面形は橢円形で、南壁側にピットがあるが新しい時期のものである。規模は長径134cm、短径103cm、深さ37cmを測り、断面は逆台形状をなしている。埋土中からは甕破片が若干出土した。

112号貯蔵穴（第82図）

108号貯蔵穴の南側で、2号住居跡の床面下から検出された竪穴である。南半部が未掘のため、底面形は不明である。規模は東西径155cm、南北径は現存部で70cm、深さ57cmを測る。断面は逆台形状を呈す。遺物は壺・甕・器台等の破片と鉄鏃が出土している。

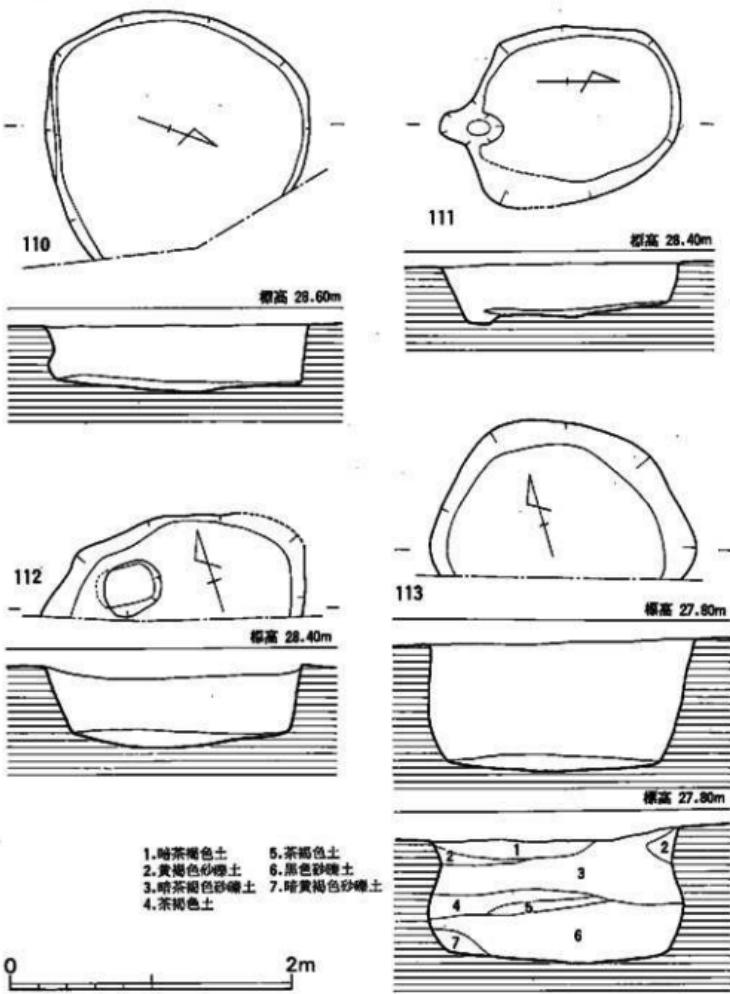
出土遺物（図版53、第52、83図）

甕（674・675） 674は逆L字状口縁の小破片で、口縁下に1条の三角凸帯がついている。調整は胴部外面を細かい刷毛、内面はナデ、口縁部内外をヨコナデしている。675は器肉の厚い凹み底で、底径7cmを測る。外面刷毛、内面ナデ調整し、外底部と底部外面はさらにヨコナデして仕上げている。色調は黄褐色を呈す。

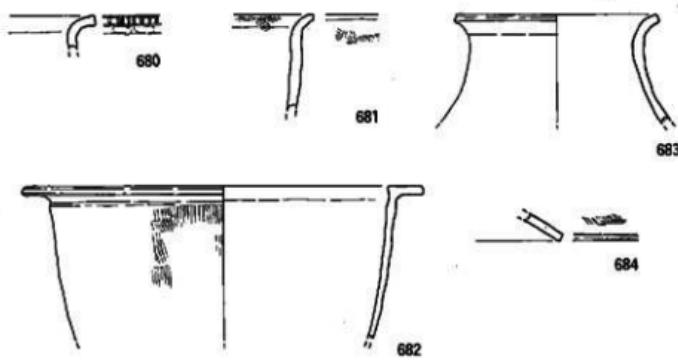
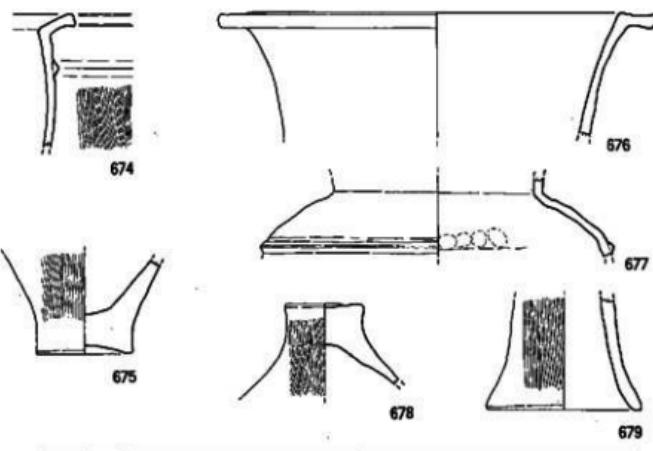
壺（676・677） 676は鋸先状口縁壺の口頸部の破片で、復原口径は31.1cmを測る。頸部内外をナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。677は肩部に1条の三角凸帯がめぐる肩部付近の破片資料で、外面ヘラ磨き、内面ナデで仕上げている。

蓋（678） 鍋部付近の破片で、体部外面は刷毛、内面ナデ、天井部外面とその付近はさらにヨコナデして仕上げている。色調は黄茶褐色を呈し、焼成も良好である。

器台（679） 簡形器台の下半部の破片で、鋸部径は11cmを測る。体部外面は刷毛、内面ナデ、



第 82 図 110~113号貯藏穴実測図(1/40)



0 20cm

第 83 圖 112·113 号貯藏穴出土土器實測圖 (1/4)

据部内外はヨコナデしている。色調は淡黄褐色を呈す。

鉄錐（第52図4） 全長5.7cm, 中央部幅1.9cm, 厚さ0.4cm, 基部の幅2.1cmを測る。断面は三日月状を呈す。

113号貯蔵穴（図版37-2, 第82図）

112号貯蔵穴の南東から検出された袋状堅穴で、南半部は未掘である。規模は東西径153cm, 南北は現存部で94cm, 深さ95cmを測る。遺物としては壺・甕などの弥生土器が少量と石錐, 鉄製鍬先などが出土している。鉄製鍬先は形態的に新しい時期の混入品かもしれない。

出土遺物（図版53-1, 第52・83図）

甕（680～682） 680・681は如意形口縁, 682はT字状口縁の甕破片である。680の口縁端部には刻目が施されている。682は復原口径28.5cmを測り, 調整手法は器面の剥落が著しいため不明だが, 脇部外面は刷毛, 口縁部内外はヨコナデ仕上げと思われる。

壺（683） 口頭部付近の破片資料で, 復原口径は14.5cmを測る。調整は内外ともヘラ磨きで仕上げていて, 色調は暗茶褐色を呈し, 焼成も良好である。

蓋（684） 据部の小片で, 体部外面刷毛, 内面ナデ, 据部内外はヨコナデ調整である。

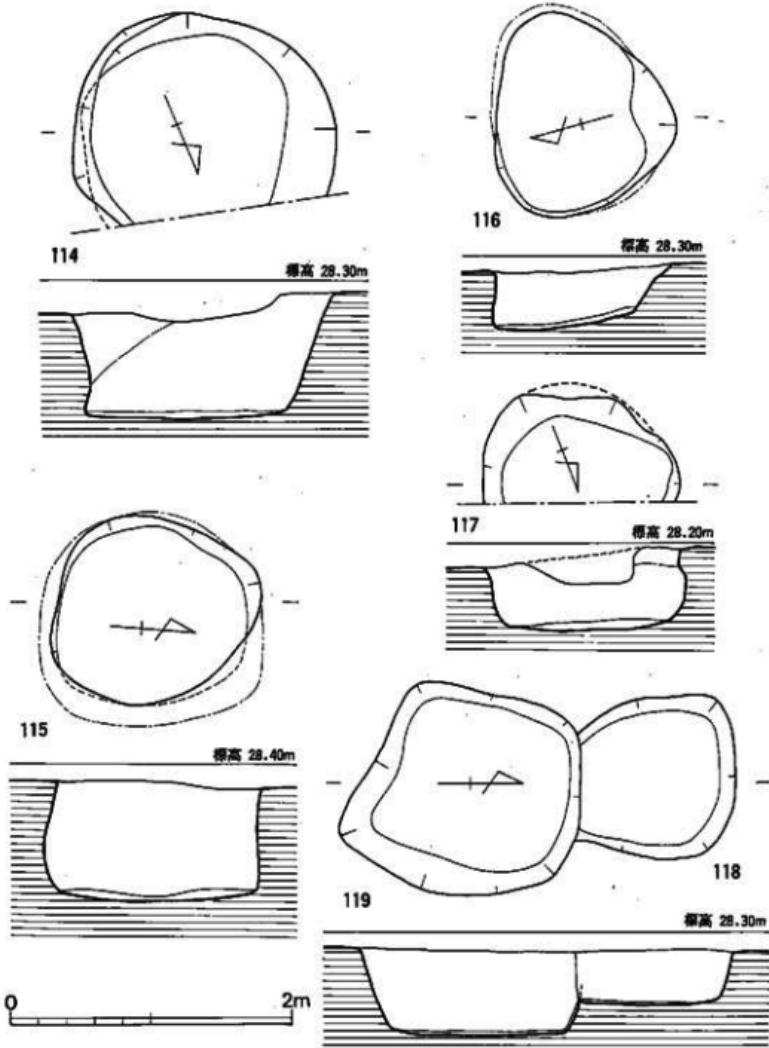
鉄錐先（第52図5） 一方の袋部を欠失した錐先である。現存刃部長4.8cm, 身の高さ5.8cm, 袋部上面内法幅1cmを測る。

114号貯蔵穴（図版34図）

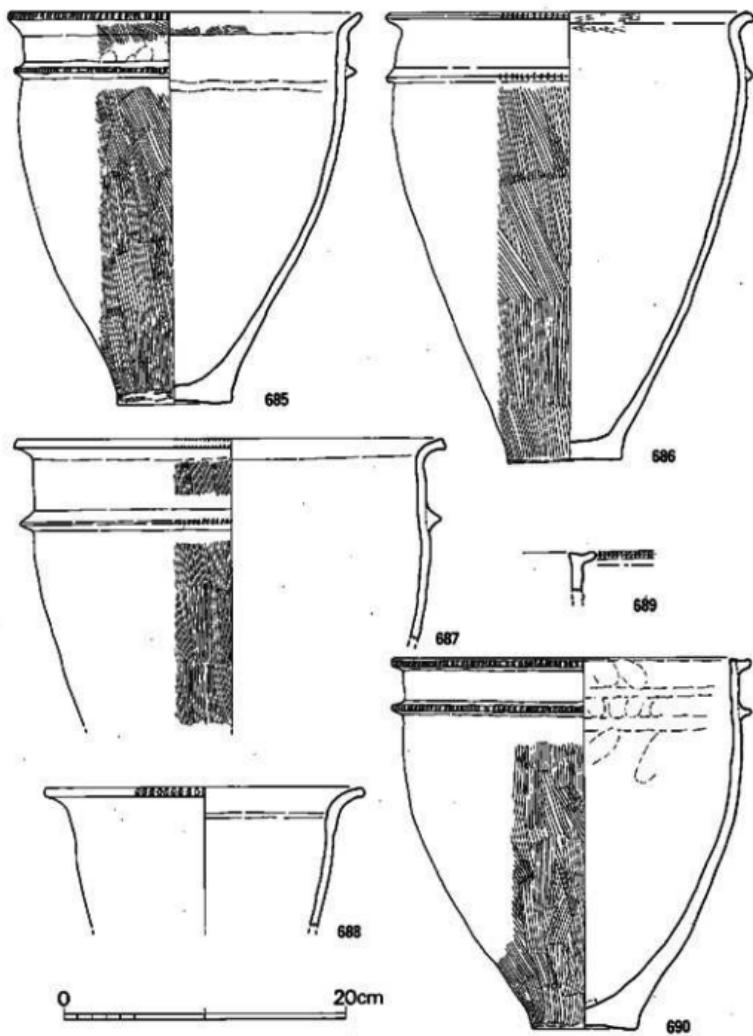
112号貯蔵穴の南側から検出された堅穴で, 北壁側は未掘部分を残している。断面は東西側が袋状をなすが, 他は立ち気味に外反している。底面形は不整円形で, 規模は東西径145cm, 南北復原径145cm, 深さ75cmを測る。埋土中からは壺・甕・蓋等の弥生土器が多数出土した。

出土遺物（図版45・46, 第85・86図）

甕（685～692） 口縁部の形状により3つのタイプに分れる。いわゆる如意形口縁のもの（685～688）, 口縁端部に三角凸帯をめぐらすもの（689・690）, T字状口縁のもの（691）である。685～687は口縁下に1条の三角凸帯が貼付され, 口縁端部とともに刻目が施されている。器面の調整は, 脇部外面は688がナデの他は刷毛調整, 内面はいづれもナデ, 口縁部内外はヨコナデで仕上げている。685と686の口縁部内面には一部刷毛調整を残し, 690の口縁部付近内面には指頭圧痕を頗著に残している。ほぼ全形が知られる資料である685・686・690の計測値は, 口径は685が²25.05cm, 686が²26cm, 690が²25.2cm, 器高は685が27.7cm, 686が31.7cm, 690が²26.25cmを測る。復原口径は687が²30.6cm, 688が²22.8cm, 691が²29cmを測る。色調は685・690が暗茶褐色, 686が明茶褐色, 687・688が茶褐色, 691が赤褐色を呈し, 焼成も良好である。685～690の脇部外面上半には煤の付着が著しく, 下半は二次加熱により赤変したものが多い。692は脚台状を



第 84 図 114—119号古墓測図(1/40)

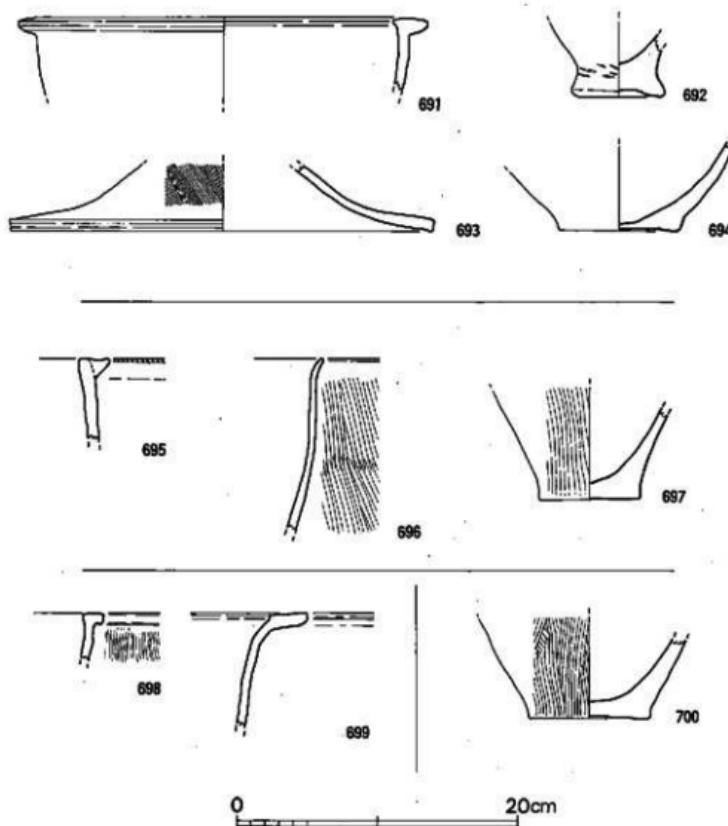


第 85 図 114号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

呈す底部資料で、底径6.7cmを測る。内外ともナデ仕上げである。色調は黄褐色を呈す。

壺(694) 底部付近の資料で、内面ナデ、外面は風化のため調整手法は不明である。底径は8.5cmを測る。

壺(693) 堀部の破片資料で、体部外面は細かい刷毛、内面はナデ、堀部内外はヨコナデで仕上げている。復原堀部径は30.2cmを測る。色調は淡黄褐色で、焼成も良い。



第86図 114~117号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

115号貯蔵穴（第84図）

114号貯蔵穴の南東側から検出された小形の袋状堅穴で、底面形は不整円形プランを呈す。規模は長径135cm、短径127cm、深さ86cmを測る。

出土遺物（第86図）

壺（695～697）695は口縁端部に三角凸帯がめぐる壺、696は外反が弱い如意形口縁の壺小破片である。696の胴部外面は粗い刷毛調整、内面はナデ、口縁部内外はヨコナダで仕上げている。697は底部付近の資料で、外面は粗い刷毛、内面と外底部はナデ調整である。696・697の外面には煤の付着がみられる。色調はいづれも茶褐色を呈し、焼成は良好である。

116号貯蔵穴（第84図）

115号貯蔵穴の東側から検出された底面形が不整梢円形を呈す小堅穴である。規模は長径137cm、短径97cm、深さ41cmを測る。出土遺物は弥生土器小片が数点出土しただけである。

出土遺物（第86図）

壺（698）口縁幅の狭い逆L字状口縁をもつ壺の小片で、胴部外面を刷毛、内面はナデ、口縁部内外はヨコナダで仕上げている。

壺（699）鋸先状口縁壺の口縁部の小破片で、調整は内外ともヘラ磨きで仕上げた暗茶褐色を呈す焼成が良好な土器である。

117号貯蔵穴（第84図）

116号貯蔵穴の東側に接続した小形の袋状堅穴で、北半は未掘である。東西径120cm、現存南北径64cm、深さ50cmを測る。

出土遺物（第86図）

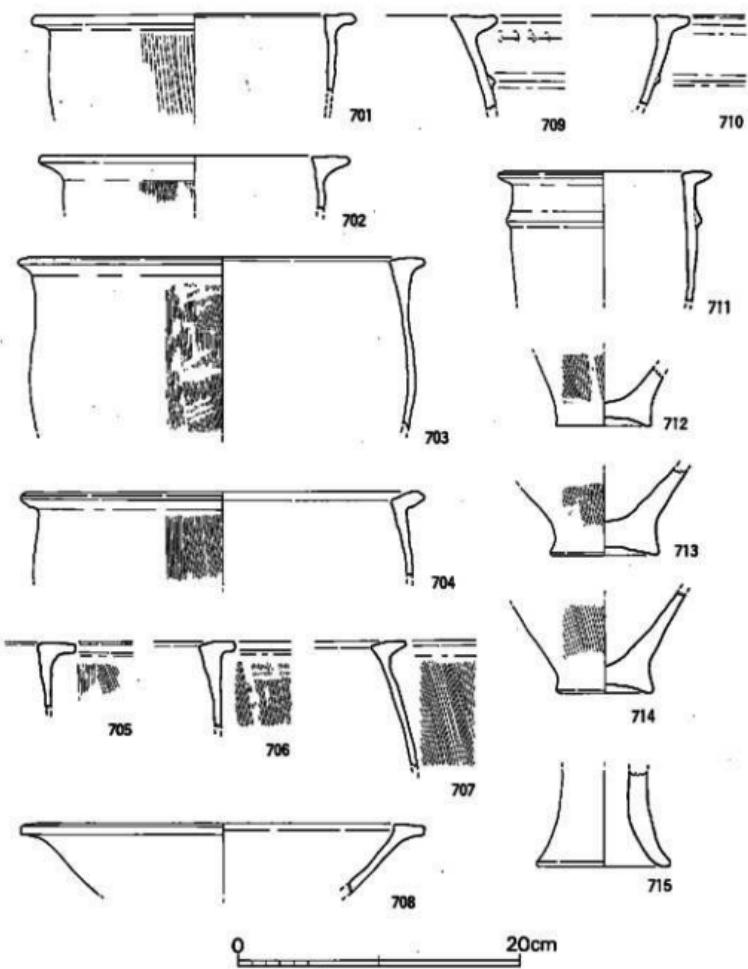
壺（700）底部付近の資料で、調整は胴部外面が刷毛、内面はナデ、外底部は削り状の擦過痕がみられる。底径は8.7cmを測る。

118号貯蔵穴（第84図）

115号貯蔵穴の南にあって、南壁側を119号貯蔵穴に切られた小堅穴である。底面形は不整梢円形を呈し、規模は復原長径110cm、短径96cm、深さ38cmを測る。遺物は壺・鉢・高杯・器台等の弥生土器片が多数出土した。

出土遺物（図版46、第11・87図）

壺（701～707・709～714）口縁部の形状により2つのタイプに分かれる。逆L字状口縁のもの（701～706・709・711）、T字状口縁のもの（707・710）である。調整は胴部外面が刷毛、



第 87 圖 118 号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

内面ナデ、口縁部内外はヨコナデ仕上げである。709～711の口縁下には1条の三角凸帯が貼付されている。711は復原口径が15.2cmを測る小形壺である。口径の知りえるものでは、701が23cm、702が22.1cm、703が28.9cm、704が28.8cmを測り、いづれも復原値である。712～714は底部付近の資料で、外底部は凹み底である。調整は外面が刷毛、内面はナデ、外底部と底部外面はヨコナデで仕上げている。

高杯（708） 鋤先状口縁の杯部の破片資料で、復原口径は28.8cmを測る。調整は器面が風化しているため不明である。

器台（715） 筒状器台の下半部の資料で、裾部径は9.4cmを測り、内外ともナデで仕上げている。色調は茶褐色で、焼成も良い。

不明土製品（第11図51） 不整形で扁平な粘土塊で、長径4.3cm、短径3.4cm、厚さ2cmを測る。

119号貯蔵穴（第84図）

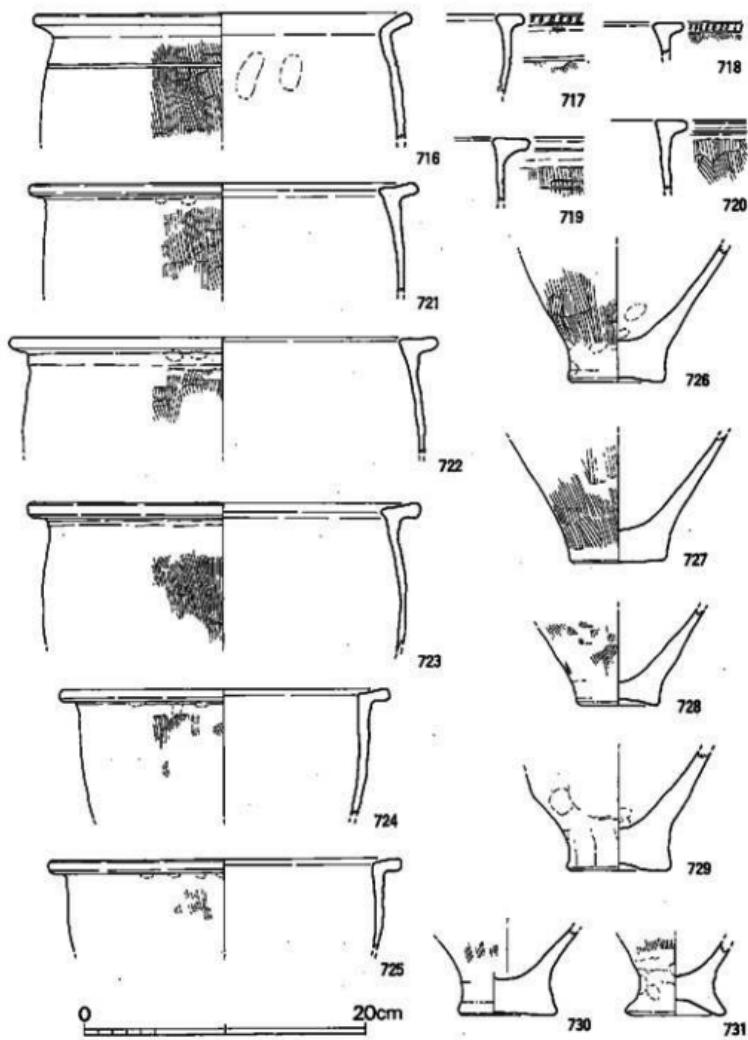
118号貯蔵穴の南壁を切った状態で検出された堅穴である。底面形は隅丸方形で、断面は逆台形状を呈している。規模は長径121cm、短径116cm、深さ60cmを測る。出土遺物としては、壺・壺・蓋・高杯等の弥生土器片が多数出土した。また、用途・性格は不明であるが、鐵鋤壺を思わせる土製品が出土している。

出土遺物（図版50-1、第36・88・89図）

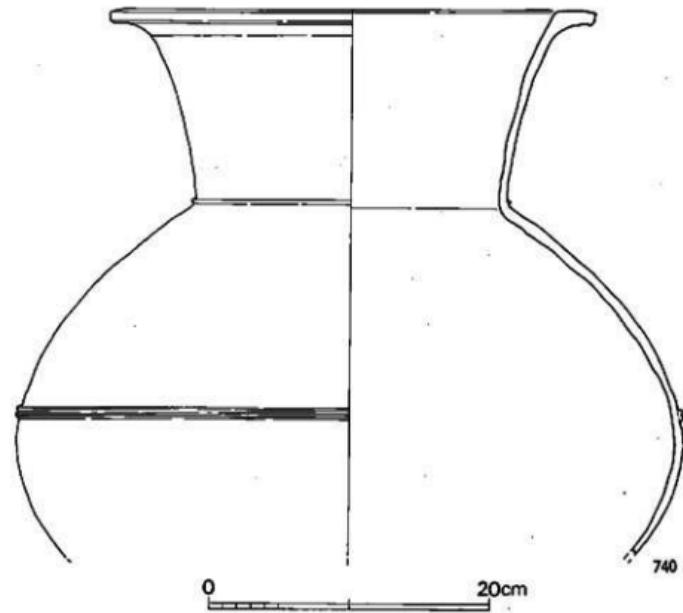
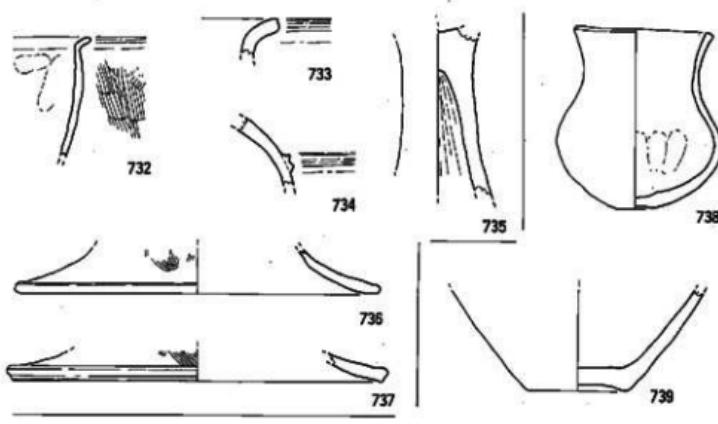
壺（716～732） 口縁部の形状により、如意形口縁（716・732）、逆L字状口縁（717～720・722・724・725）、T字状口縁（721・723）の3つのタイプに分けられる。716・717の口縁下には1条、719には2条の沈線がめぐり、718と719の口縁端部には刻目が施されている。調整は、胴部外面が刷毛、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。718の口縁部上面はさらにヘラ磨きしている。721・722・724・725の口縁下には口縁部成形時の指頭圧痕が残っている。いづれも破片資料であるが、復原口径のわかるものは716が27cm、721が27.6cm、722が30.5cm、723が28cm、724が23.4cm、725が25.2cmを測る。726～731は底部付近の資料で、726・727・729・730は底の器肉が厚い底部で、731は脚台状をなす底部である。調整は、729が外面ナデ、728が刷毛のあとナデの他は、全て刷毛調整で、内面はいづれもナデ仕上げである。また、さらに底部外面はヨコナデして仕上げている。底径は726・727が6.9cm、728が5.9cm、729が7.4cm、730・731が7.1cmを測る。色調は726・729・731が橙色で、他は肌色を呈している。

壺（733・734） 733は強く外反した單口縁の壺の口縁部小片、734は胴部にM字状凸帯がめぐる壺の肩部付近の小破片である。734の外面は丁寧なヨコヘラ磨き、内面はナデで仕上げた焼成良好な作りの良い土器である。

蓋（736・737） 補部付近の破片資料で、体部外面刷毛のあとナデ、内面はナデ、補部内外



第 88 図 119号貯藏穴出土土器実測図(1/4)



第 89 圖 119-120 号貯藏穴出土土器實測圖(1/4)

はヨコナデしている。736の体部内面の一部に煤の付着がみられる。復原口径は736が26cm、737が27.2cmを測り、色調は736が褐色、737が淡橙色を呈す。

高杯 (735) 柱状部の資料で、外面を丁寧なタテヘラ磨き、内面はナデて仕上げた淡橙色の焼成良好な高杯である。

土製品 (第36図5) 丸底で筒状をなす土製品である。口縁端部に2個の小孔が焼成前に、底部付近には焼成後に小孔が1個穿たれている。口径は外径で3.7cm、内径で2.4cm、器高9cmを測る。内外ともナデ調整で仕上げた焼成良好な土製品である。内径が2.4cmと小さいので若干疑問は残るが、形状などからして飯蛸壺の可能性はあるだろう。

120号貯蔵穴 (第90図)

発掘区南東端部から検出された小形の袋状竪穴で、規模は長径117cm、短径114cm、深さ43cmを測る。底面形は円形を呈し、西壁側の床面にはピットが穿たれている。

出土遺物 (図版46・49、第14・24・89図)

壺 (738~740) 738は扁球形の胴部に立ち気味に外反する短口縁がつく小形壺で、底部は凹み底である。調整は胴部内面をナデ仕上げの他は、ナデ調整のあと全面を丁寧にヨコヘラ磨きで仕上げた黄褐色を呈す焼成良好な作りの良い土器である。復原口径9.9cm、器高12.4~12.7cm、胴部最大径11.8cmを測る。739は底部付近の破片資料で、底部は上げ底である。調整は胴部内外をヘラ磨き、内外底部はナデで仕上げている。復原底径は7.3cmで、色調は暗茶色を呈す。740は鋸先状口縁の大形壺で、復原口径34.3cm、胴部最大径46.8cm、残存器高39cmを測る。頸部下には1条の小さな三角凸帯、胴部にはM字状凸帯がめぐっている。調整は外面を丁寧なヨコヘラ磨き、頸部内面はナデのあとヨコヘラ磨きの仕上げである。胴部内面はナデ調整で、各所に指頭圧痕を残している。色調は乳白色を呈し、胎土・焼成とも良好で、器肉も薄く作りの良い土器である。

土製品 (第24図26) 土器片を方形に形成途中の土製品で、一部未調整部分を残している。また、中央部の穿孔も途中である。長径5.5cm、短径4.6cm、厚さ0.8cmを測る。

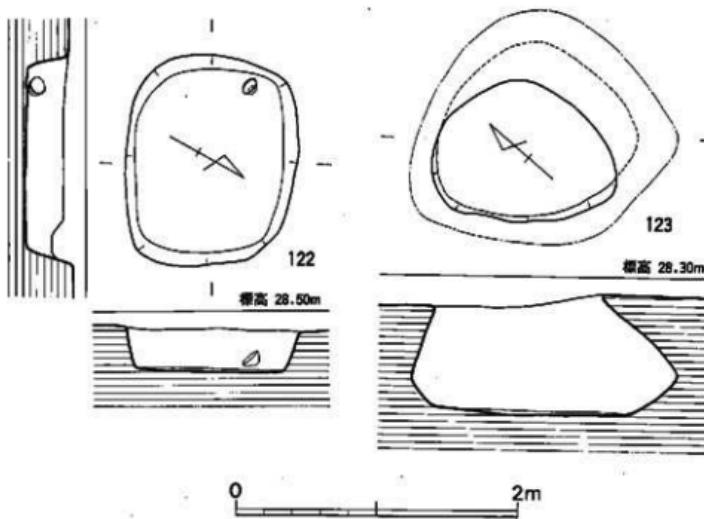
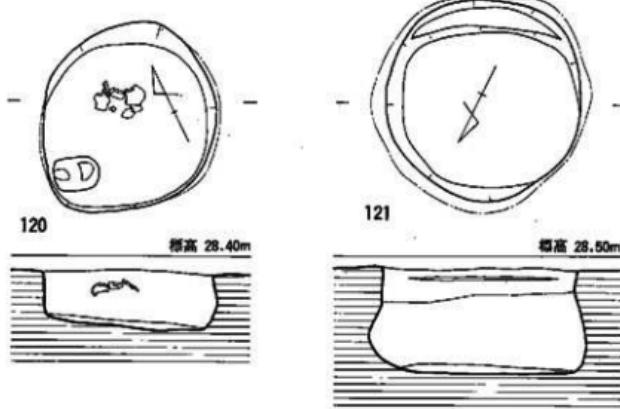
磨製石鎌 (第14図5) 基部の抉りが小さい二等辺三角形の磨製石鎌で、刃部に刃こぼれがみられる。長さ3.2cm、基部幅2cm、厚さ3mmを測る。石質は粘板岩である。

121号貯蔵穴 (第90図)

120号貯蔵穴の北側から検出された小形の袋状竪穴である。底面形は梢円形を呈し、南壁側にはテラスがある。埋土中から壺・壺等の弥生土器多数と無文土器片が若干出土した。

出土遺物 (図版47・50、第91図)

壺 (741~749) 口縁部の形状により2つのタイプに分かれる。如意形口縁の壺 (741~743・



第 90 図 120~123号貯藏穴実測図(1/40)

745), 逆L字状口縁の壺(744・746)である。741の口縁下には1条の三角凸帯が貼付され、口縁端部とともに刻目が施されている。742・745の口縁端部にも刻目がある。調整は、胴部外面が刷毛、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。741は完形品で、口径は24.3cm、器高25cm、底径7.2cmを測る。他は破片資料で、復原口径は742が17.6cm、743が30.1cm、744が28.1cmを測る。色調は741が赤褐色、742・745・746が暗茶褐色、743が茶褐色、744が黄褐色を呈す。741~743の胴部外面上半には著しい煤の付着がみられ、742は内面にも付着している。747・748は胴部下半、749は底部付近の破片資料である。復原底径は747が7.5cm、748が7cm、749が7.6cmで、748は凹み底である。調整は胴部外面が刷毛、内面はナデ、底部外面を748が指頭によるナデ、749はヨコナデ、外底部は748がナデ仕上げで、747は削り状の擦過のあとナデ調整、749は擦過のままである。747・748の胴部外面には煤が付着している。色調は747・749が暗茶褐色、748が茶褐色を呈し、焼成も良好である。

壺(750) 外面を肥厚させた有段状口縁壺の口縁部破片で、復原口径19.2cmを測る。調整は器面の風化が著しく不明である。色調は淡黄褐色を呈す。

無文土器(751~753) いづれも棒状をなす朝鮮系無文土器の剝離した口縁部破片である。752・753の外面には口縁部成形時の指頭圧痕が残っている。色調は751が暗灰色、752が明褐色、753が暗褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

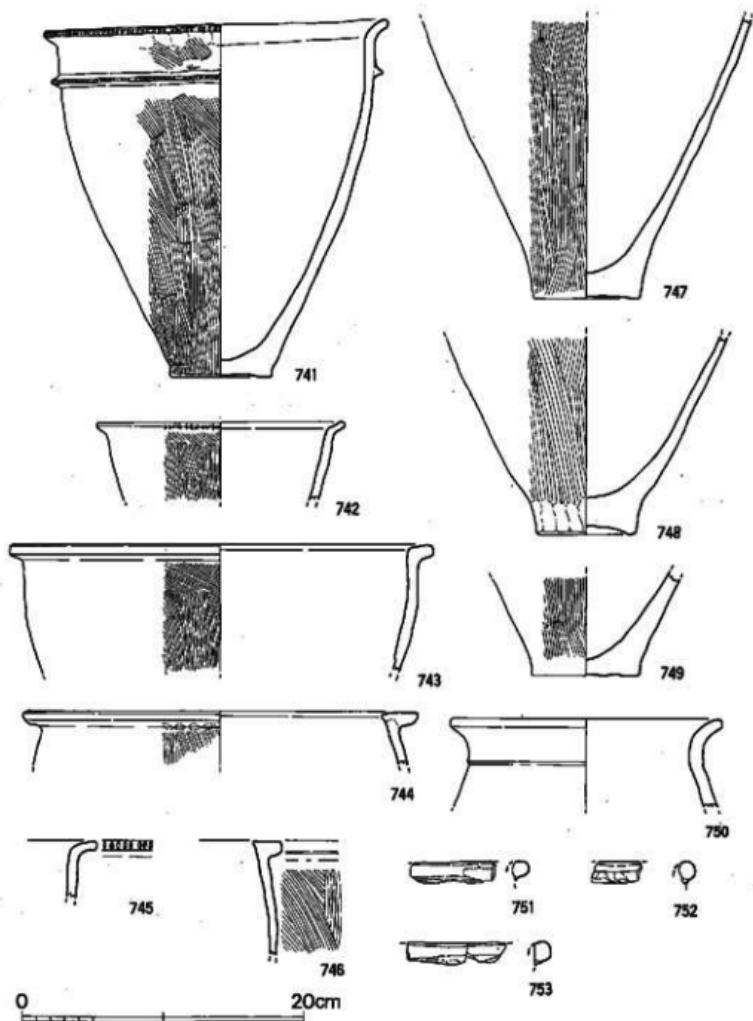
122号貯蔵穴(第90図)

121号貯蔵穴の北西から検出された底面形が隅丸長方形を呈す小堅穴である。規模は長径130cm、短径106cm、深さ30cmを測り、断面は逆台形状を呈す。床面からは小形壺をはじめ、壺・壺等の土器片が数点出土した。

出土遺物(図版50、第36・92図)

壺(754~758) 754・755は口縁部付近、756~758は底部付近の破片資料である。754は如意形口縁の壺で、口縁下には1条の三角凸帯がめぐっている。口縁と凸帯端部には刻目が施されている。755は逆L字状口縁の壺で、口縁下には凸帯がめぐるものと思われる。756は脚台状をなす底部で、外底は凹み底である。757・758は平底で、復原底径は757が8.8cmを測り、758は10.8cmと大きい底部である。調整は外面が刷毛、内面はナデ、外底部はナデ仕上げのもの(756)と削り状擦過のあとナデで仕上げたもの(757・758)がある。

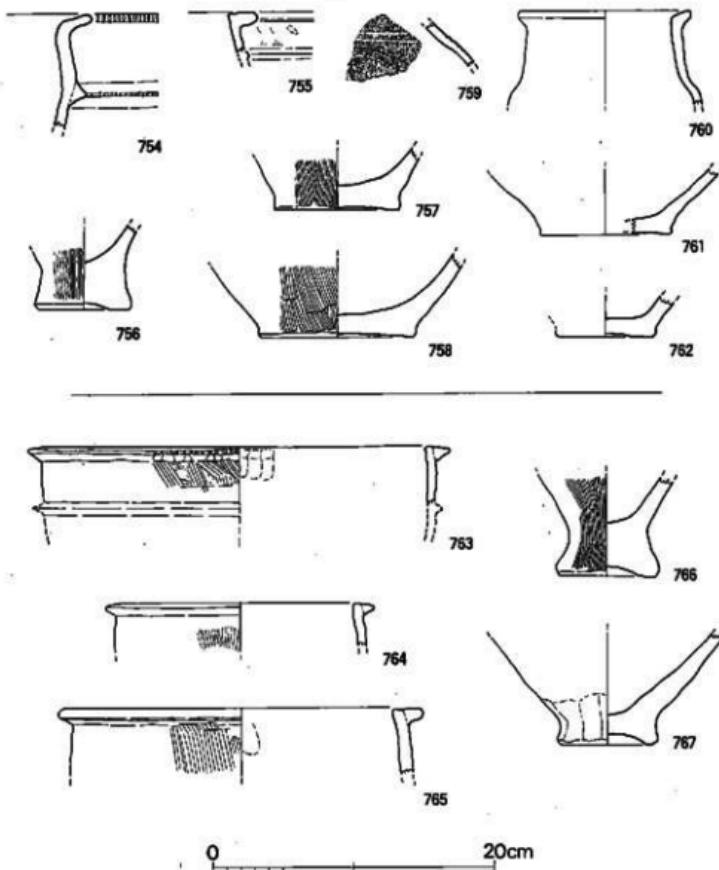
壺(759~762) 759は肩部付近の小破片で、2条の平行沈線とその下に三重のヘラ描き張文がみられる。760は小形壺の口縁部破片で、復原口径12.4cmを測る。調整は頭部外面をヨコヘラ磨き、内面をナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げている。色調は淡茶褐色を呈す。761・762は底部付近の破片で、底径は761が9.3cm、762が7.1cmを測る。調整は761が体部内外をヘラ磨き、762はナデ、外底部は削り状擦過のあとナデた762とヘラ磨きした761がある。色調はい



第 91 図 121号貯藏穴出土土器片測図(1/4)

づれも暗茶褐色で焼成も良好である。

紡錘車（第36図3） 土製の紡錘車で、径41.3~41.5mm、厚さ14.5mm、重さ32.1gを測る。



第92図 122-123号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

123号貯蔵穴（図版39-1, 第90図）

190号住居跡の床面下から検出された袋状竪穴である。断面の袋状は、特に東壁側の削りが強い。底面形は不整円形を呈し、規模は長径132cm、短径124cm、深さ88cmを測る。遺物は少量の弥生土器破片が出土しただけである。

出土遺物（図版50-1, 第36・92図）

壺（763-767） 763-765は口縁端部に三角凸帯がめぐる壺で、763の口縁下には凸帯が付くタイプと思われる。胴部外面は刷毛、内面はナデ、口縁部内外はヨコナデ調整である。復原口径は763が29.9cm、764が18.1cm、765が25.9cmを測る。色調は763・765が赤褐色、764が暗褐色を呈す。766・767は底部付近の破片である。766は脚台状、767は凹み底の底部である。調整は766が外面刷毛、内外底部ナデ仕上げで、767は内外とも全てナデで仕上げている。

紡錘車（第36図4） 径41.8mm、厚さ13mm、重さ29gを測る土製紡錘車で、側面には2条の平行沈線がめぐっている。

124号貯蔵穴（図版39-1, 第93図）

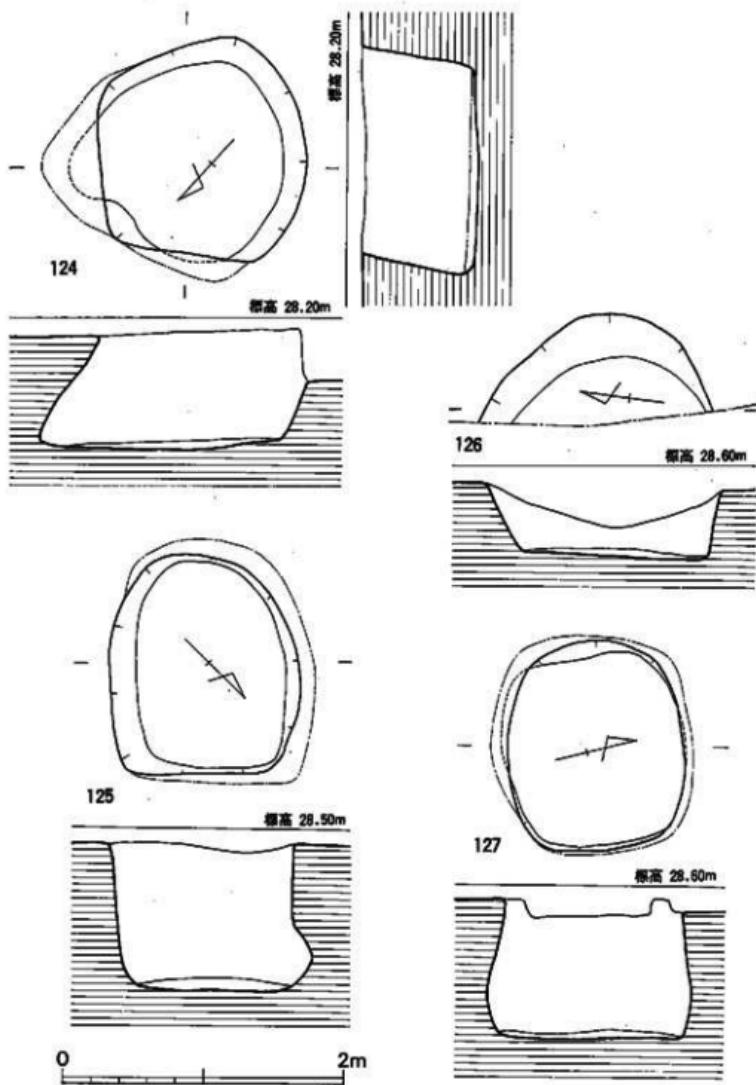
123号と同様、190号住居跡の床面下から検出された袋状竪穴である。北壁と東壁側の削りは強いが、西壁と南壁は上面の崩壊もあって直立気味に外反している。底面形は不整円形で、規模は長径152cm、短径145cm、深さ80cmを測る。遺物は壺・壺・瓶など多数の弥生土器が出土した。

出土遺物（図版47, 第94図）

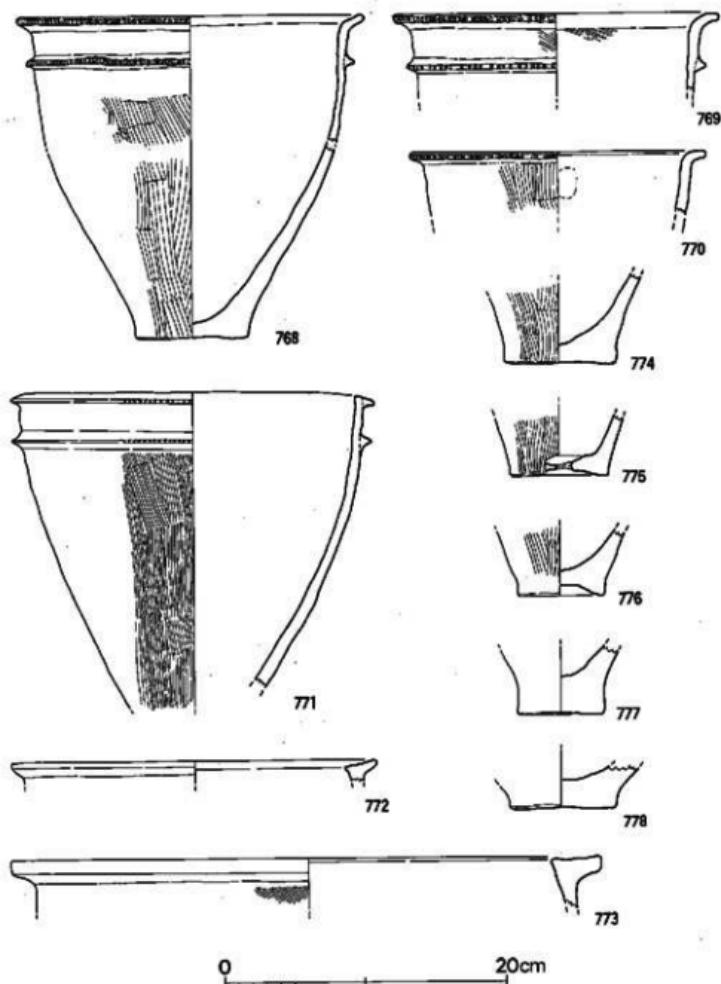
壺（768-774・776・777） 口縁部の形状により4タイプに分かれる。768-770のような如意形口縁のもの、771のように口縁端部に三角凸帯をめぐらすもの、772のようにT字状口縁のもの、773のように逆L字状口縁のものなどである。768・769・771は口縁下に1条の三角凸帯が貼付されていて、口縁端部とともに刻目が施されている。調整は胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデである。768は復原口径24.5cm、器高22.8cm、底径8cmを測る。773は大形壺で、復原口径は42cmを測る。768・770・771の胴部外面には煤の付着がみられる。色調は768・771が茶褐色、769・773が赤褐色、770が黒褐色、772が淡灰褐色を呈す。774・776・777は底部付近の資料で、776は凹み底である。底径は774が7.9cm、776・777が6.1cmを測る。

瓶（775） 底部付近の資料で、底部は焼成後に穿孔されている。調整は体部外面刷毛、内面ナデ仕上げである。色調は明褐色で、胎土・焼成とも良好である。

壺（778） 底部資料で、内外ともナデで仕上げている。底径は7.6cmを測る。



第 93 図 124~127号貯藏穴実測図(1/40)



第 94 図 124号贮藏穴出土土器実測図(1/4)

125号貯蔵穴（図版39-1, 第93図）

124号貯蔵穴の北西に隣接して検出された袋状堅穴である。底面形は胴張りの隅丸長方形を呈し、規模は長径147cm, 短径107cm, 深さ103cmを測る。遺物は壺・甕等の弥生土器が多数出土した。

出土遺物（図版47-51, 第24・95図）

甕（779～790） 大きく3タイプがある。如意形口縁の甕（780・781）、口縁端部に三角凸帯をめぐらした甕（779・782～785）、逆L字状口縁の甕（786）である。780の口縁下には2条の平行沈線、779・783～785の口縁下には1条の三角凸帯がめぐらしている。口縁部と凸帯端部にはいづれも刻目が施されている。調整は胴部外面刷毛、内面ナデ、口縁部をヨコナデで仕上げている。779は完成品で、口径26.5cm、器高27.1～29.1cm、底径8cmを測る。口縁部内面には口縁成形時の指頭圧痕が残っている。780～786は破片資料で、復原口径のわかるものとしては782が21cm、783が25.5cm、784が23.5cm、785が30.2cm、786が30cmを測る。779の胴部外面上半には煤の付着がみられる。787～790は底部付近の資料で、底径は787が8.8cm、788が9.6cmと大きく、789が6.6cm、790が7.3cmと小さく底面の器内が厚い底部である。790は脚台状底部を思わせる。787・788の調整は体部外面が刷毛、内面はナデのあと粗いヘラ磨き、外底部はナデ仕上げである。789と790の調整は外面刷毛、内面と外底部はナデで、底部外面はさらにヨコナデで仕上げている。

壺（791） 立ち気味の頸部に強く外反する口縁がつく小形の壺で、復原口径は16.5cmを測る。頸部内面は指ナデのあと部分的にヨコヘラ磨き、口縁部内面から頸部外面はヨコナデ、頸部下端はさらにヨコヘラ磨きをしている。色調は淡橙色を呈し、焼成良好である。

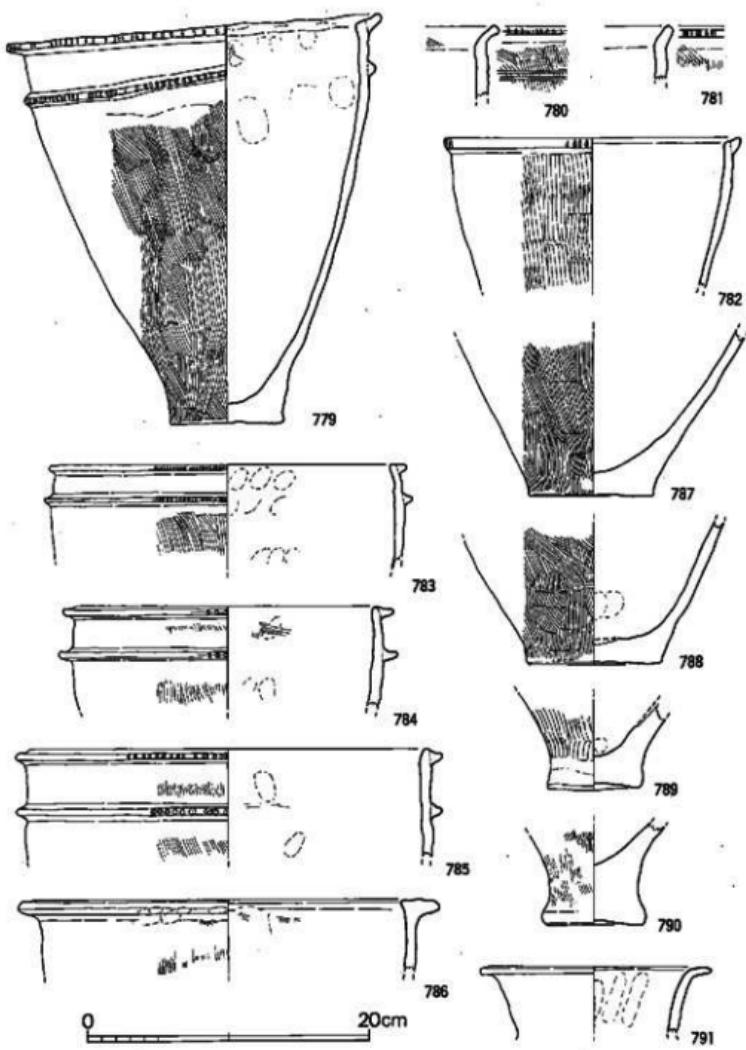
円盤状土器片（第24図27・28） 27は左右と上面に小さな抉り部分があり磨滅している。28はほぼ方形に形成された土製品で、左側面と上端部に小さな抉りがある。

126号貯蔵穴（第93図）

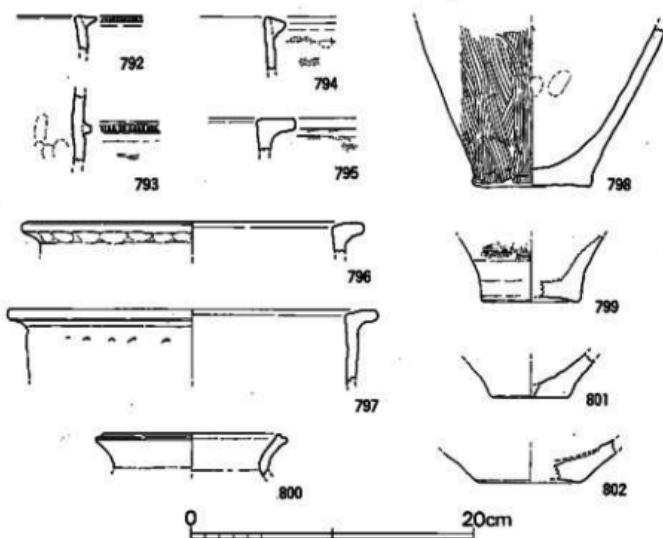
96号貯蔵穴の南西にあって、東壁側の一部を発掘しただけで、その大半は区域外のため未掘の堅穴である。断面は逆台形状で、規模は確認した東西径138cm、深さ54cmを測る。

出土遺物（図版47, 第96図）

甕（792～799） 792と794は口縁端部に三角凸帯をめぐらす甕で、795～797は逆L字状口縁の甕である。793は口縁下に1条の三角凸帯がめぐる甕の小片で、口縁部は792と同様と思われる。口径のわかるものとしては796が24.3cm、797が26.3cmで、いづれも復原値である。798は胴部下半の資料で、胴部外面は刷毛、内面はナデのあと部分的にヘラ磨きで仕上げている。胴部外面の一部に煤の付着がみられる。色調は肌色を呈し、焼成良好である。底径は8.3cmを測る。



第 95 圖 125 号貯藏穴出土土器実測図(1/4)



第 96 図 126号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

799は底部付近の破片で、復原底径7cmを測る。

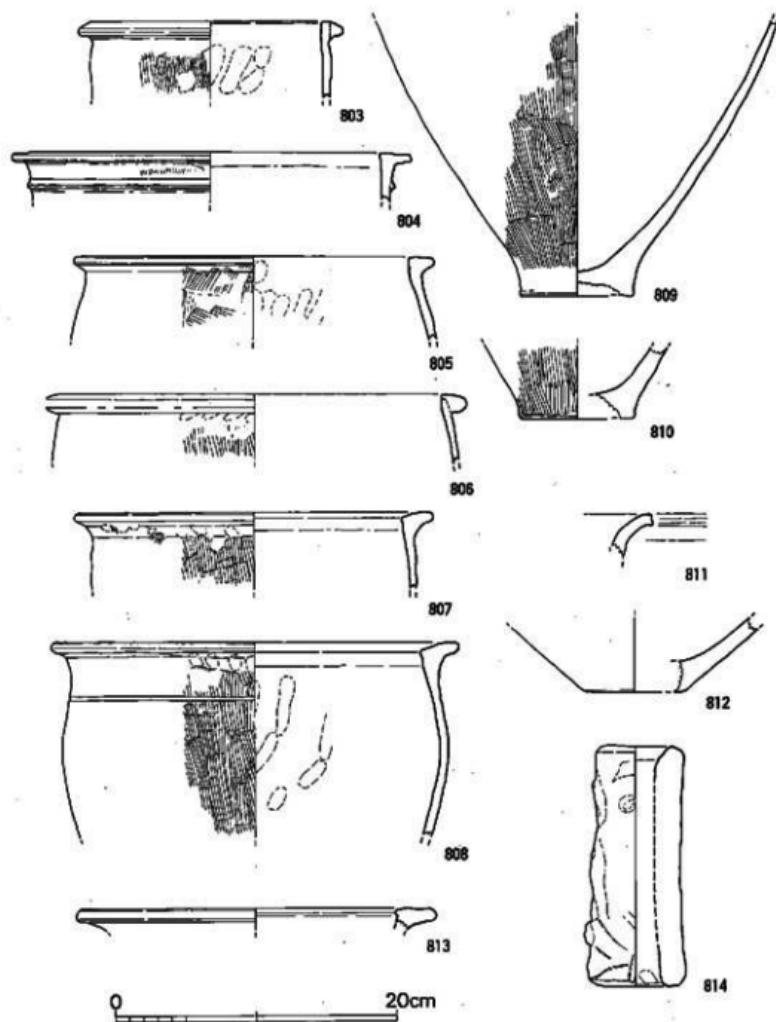
壺(800～802) 800はく字状口縁の小形壺で、復原口径は13.7cmを測る。口縁部内外はヨコナデ仕上げで、端部外面は凹線状をなしている。色調は肌色を呈す。801・802は底部破片で、調整は801は内外ともナデのあとヘラ磨き、802は外面ヘラ磨きで仕上げている。外底部は801が削り状の擦過、802はナデ調整である。色調は801が暗茶灰色、802が暗茶灰褐色である。

127号貯蔵穴 (第93図)

126号貯蔵穴の南側から検出された小形の竪穴で、断面の倒りは弱いが袋状を呈す。底面形は胴張りの隅丸方形で、規模は長径135cm、短径130cm、深さ99cmを測る。遺物は壺・壺・支脚等の土器片が多数出土した。

出土遺物 (第97図)

壺(803～810) 803・806は口縁端部に三角凸帯をめぐらした壺、804・805・807・808は逆L字状口縁の壺である。804は口縁下に1条の三角凸帯、808は1条の沈線がめぐっている。肩部外面の調整は刷毛、内面ナデ、口縁部内外はヨコナデで、803・805・808の内面には指頭ナデ圧痕が顕著に残っている。また、口縁下にも成形時の指頭圧痕がみられる。いづれも破片資



第 97 図 127号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

料であるが、復原口径は803が18.8cm、804が28.3cm、805が25.6cm、806が29.9cm、807が25.5cm、808が29cmを測る。色調は803・804・806・807が肌色、805が暗茶灰色、808が暗茶灰褐色を呈し、焼成も良好である。809は胴部下半の破片資料で、胴部外面は刷毛調整、内面と外底部はナデで、底部外面はさらにヨコナデして仕上げている。内底部には炭化物の付着がある。810は底部付近の破片で、復原底径は8.1cmを測る。色調は809・810とも暗茶灰色である。

壺 (811～813) 811・813は口縁部破片で、813は鋸先状口縁の壺である。復原口径は25.5cmを測り、色調は淡い橙色である。812は底部付近の破片で、外面はヘラ磨き、内面はナデで仕上げている。色調は暗灰色で、焼成も良好である。復原底径は7cmである。

支脚 (814) 器内の厚い筒状の支脚で、器高17.2cm、上端幅6.2cm、下端幅6.8cmを測る。内外とも指頭ナデにより仕上げた粗雑な土器である。色調は肌色で、焼成良好である。(井上)

128号貯蔵穴 (図版39-2, 第98図)

127号貯蔵穴の東側に位置する。底部平面形114×110cmの不整円形をなし、壁は外に開く。残存する深さ38cm。遺物は少量の土器が出土している。

出土遺物 (第99図)

壺 (815) 口縁外に粘土帯をめぐらし、逆L字状に近い口縁としたもので、口縁下での剥離が明瞭である。復原口縁内径30cm。

壺 (816) 外反する頸部から口縁にかけての破片で、端部は面をなし凹線がめぐる。復原口径27.1cm。

129号貯蔵穴 (図版39-2, 第98図)

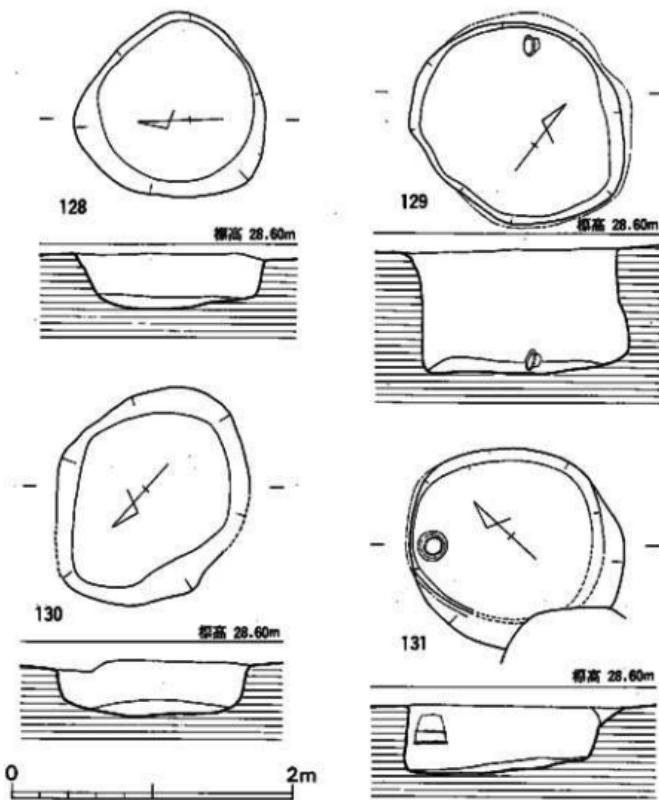
128号貯蔵穴の南側にあり、130号貯蔵穴により切られている。底面形は147×130cmの不整円形をなし、壁は内傾気味に立ち上る。深さ87cm。床面北側に、土器(825)が出土している。

出土遺物 (図版47, 第99図)

壺 (817～823) 817・818は、如意形に口縁が外反し、端部に刻目がある。817は、口縁下3.3cmに刻目凸帯をめぐらす。口径24.1cm。820は、口縁外と、口縁下5cmに断面三角形の凸帯を巡らせる。復原口径33.6cm。98号貯蔵穴626、101号貯蔵穴641と極めて類似する。821は、口縁外に断面カマボコ形に粘土帯を巡らせる。復原口径26.9cm。819は、口縁外と口縁下3.5cmに刻目凸帯を巡らす。822・823は底部片で、823は、くびれで高い。

鉢 (825) 小形の鉢で、口縁はわずかに外反し、歪みがある。口縁下に部分的に1条の沈線を巡らせている。口径13.0cm、器高8.4cm。

壺 (824) 鋸先状に近い断面の口縁部片で、内外面とも、丁寧に研磨される。



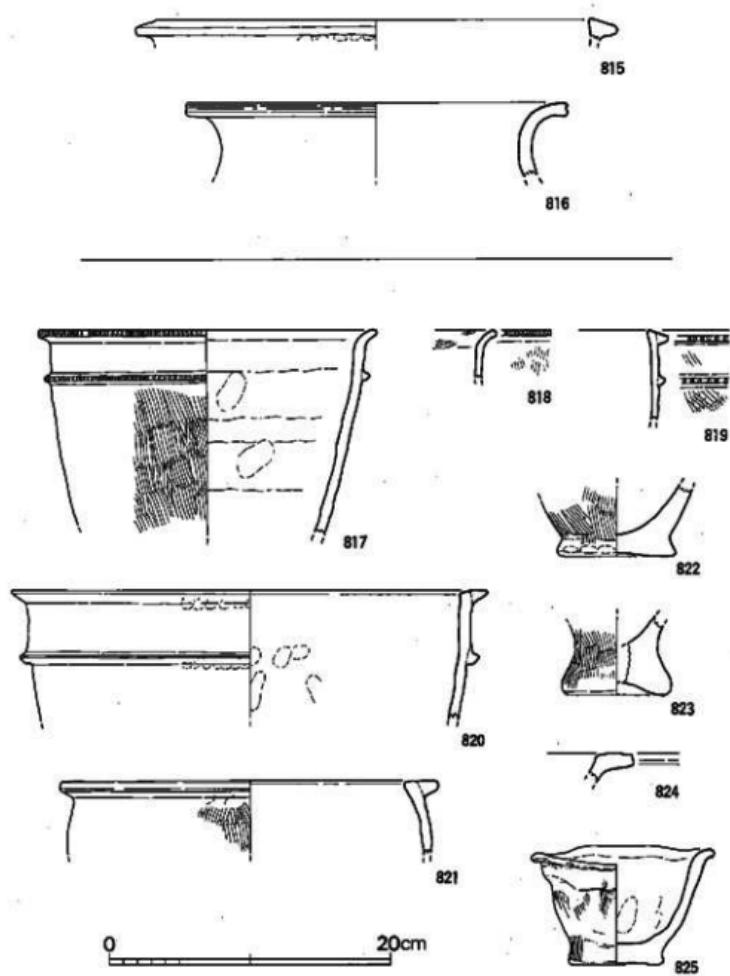
第98図 128~131号貯蔵穴実測図(1/40)

130号貯蔵穴 (図版39-2, 第98図)

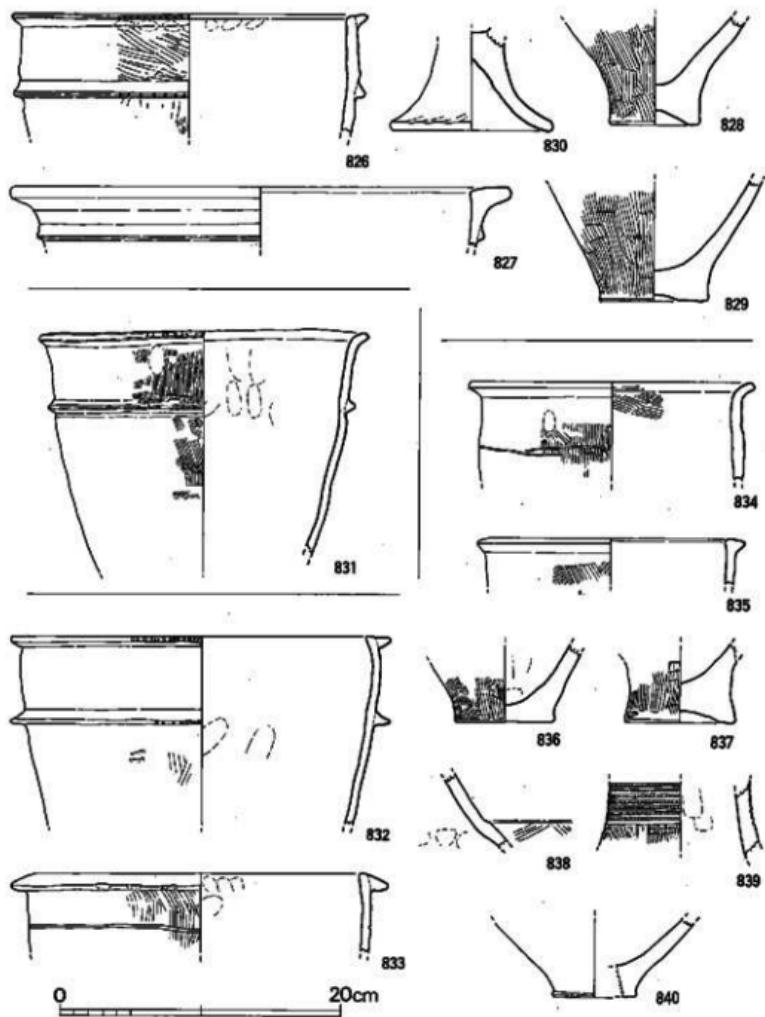
129号貯蔵穴の東側一部を切るが、浅いため、129号の床面までは達していない。底面形は、 $143 \times 112\text{cm}$ の不整梢円形をなし、壁は外に開き40cmと浅い。遺物は、土器が出土している。

出土遺物 (第100図)

■ (826-829) 826は、口縁外と口縁下5.5cmに断面三角形の凸帯をめぐらし、間隔のあいだ小さな刻目をつける。外に粗い刷毛目が残る。復原口径25.2cm。827は、逆し字状口縁とし口縁直下に、断面三角形の凸帯をめぐらす。復原口縁内径29.8cm。828・829は、やや上底の底



第99図 128・129号貯藏穴出土土器実測図(1/4)



第 100 図 130~132号貯藏穴出土土器実測図(1/4)

部である。

高杯 (830) 脚部片で、裾はハの字状に開く。脚高5.2cm。

131号貯蔵穴 (図版39-2, 第98図)

130号貯蔵穴の南側にあり、132号貯蔵穴に切られる。底部平面形は、 $127 \times 120\text{cm}$ の円形をなし、壁は内傾して立ち上がる。深さ49cm。底部を欠く甕形土器が1点、床面から20cm程浮いて倒立の状態で出土している。

出土遺物 (図版47, 第100図)

甕 (831) 如意形口縁をなし、端部に刻目があり、口縁下5cmに断面三角形の刻目のある凸帯を巡らす。口径23.4cm。残存高16cm。

132号貯蔵穴 (図版39-2, 第101図)

131号貯蔵穴を切る。底部平面形は、 $97 \times 90\text{cm}$ の円形をなし、壁は袋状で最大径は $145 \times 126\text{cm}$ である。深さ73cm。遺物は、土器・サヌカイト製スクレーパー・サヌカイト剝片が出土している。

出土遺物 (図版47-49, 第14-100図)

甕 (832-837) 832は、口縁外と、口縁下6cmに断面三角形の凸帯をめぐらし、端部に刻目をつける。833は、口縁外に下り気味に断面三角形の粘土帯を巡らし、口縁下3.8cmに1条の沈線を巡らす。834は、口縁が短く外反し、口縁下4.5cmに1条の沈線を巡らす。復原口径は、832が27.0cm、833は26.8cm、834は20.2cm、835は18.8cmである。836は平底、837はやや上底の底部片である。

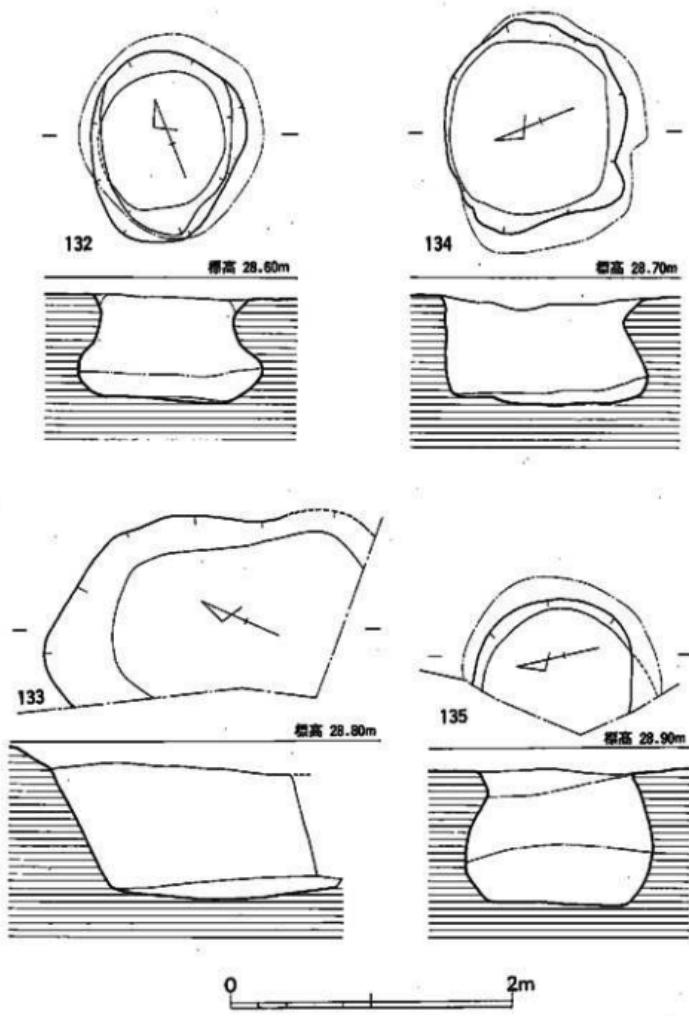
甕 (838-840) 838は、頸部と肩部の境で段がつけられ、肩部に4本単位の鋸歯文を施す。839は頸部片で、地文に縱位の刷毛目を残し8本以上の沈線を密にめぐらせており、在地の土器ではなく、瀬戸内・壱前地方からの影響が考えられる土器である。840は底部片。

スクレーパー (図版49-6, 第14図6) 横剥ぎのサヌカイト製で、木彫形をなす。打面と反対側を刃部とし、両側より刃部加工をする。

他に、サヌカイトの横剥ぎ剝片 ($6.5 \times 3.5\text{cm}$)、縦剥ぎ剝片 ($5 \times 3.5\text{cm}$)と、刃部加工痕の認められる小片が出土している。

133号貯蔵穴 (第101図)

12号住居跡・134号貯蔵穴の南にある。発掘区外に拡がるため全形は不明であるが、発掘部分よりすると、底部平面形は $(140) \times (115 + \alpha)\text{cm}$ の脇張り隅丸長方形になると思われる。壁は、外に開き、深さは100cmである。遺物は土器が出土している。



第 101 図 132~135号貯藏穴実測図 (1/40)

出土遺物（第102図）

甕 (841～852) 逆L字状の口縁を持つ。841・842は、口縁下に2条の沈線を巡らす。843～845は、口縁やや内傾し、L字状口縁の端部は丸まる。846・847は、口縁端は面をなし、口縁下に凸帯の剥離した痕跡がある。復原口縁内径は、841が18.4cm、842が24cm、843が24.8cm、844が24.4cm、845が22.1cm、846が27.6cm、847が27.9cmである。848～852はやや上底気味の底部片。848は、底部中央に焼成後の穿孔がある。

鉢 (853) 外反する口縁内面に粘土帯を貼付し、動先状口縁とする。

壺 (854・855) 854は、胴部にめぐる凸帯部分、855は底部片である。

器台 (856) 下半部片で、外面に刷毛目痕が残る。底径10.4cm。

134号貯蔵穴（第101図）

16号住居跡の南側に接する。底部平面形は123×113cmの胴張り隅丸方形をなし、壁は袋状となる。深さ73cm。遺物は出土していない。

135号貯蔵穴（第101図）

16号住居跡の北側にある。発掘区境のため一部未発掘である。底部平面形は、 $100 \times (90 + \alpha)$ cmで、円形になると思われる。壁は、袋状をなし、深さは95cmである。遺物は、土器と不明土製品・繩文土器片が出土している。

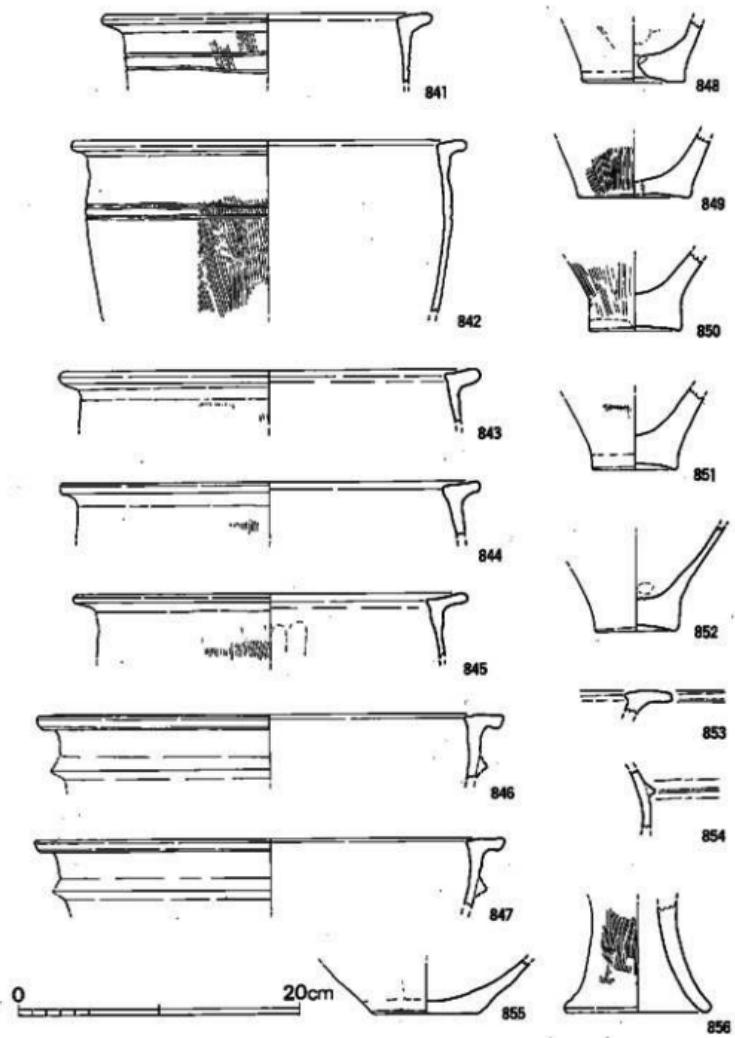
出土遺物（図版48・52、第10・103図）

甕 (857～865) 857は、わずかに外反する口縁を持ち、外面には継位の刷毛目痕が残る。858は、口縁外に断面カマボコ状の粘土帯をめぐらす。口縁外に粘土帯を、859は下り気味に、860は上り気味に、861は逆L字状にめぐらす。復原口縁内径は、858が18cm、859が19cm、860が23cm、861が25.1cmである。862～865は、底部片。

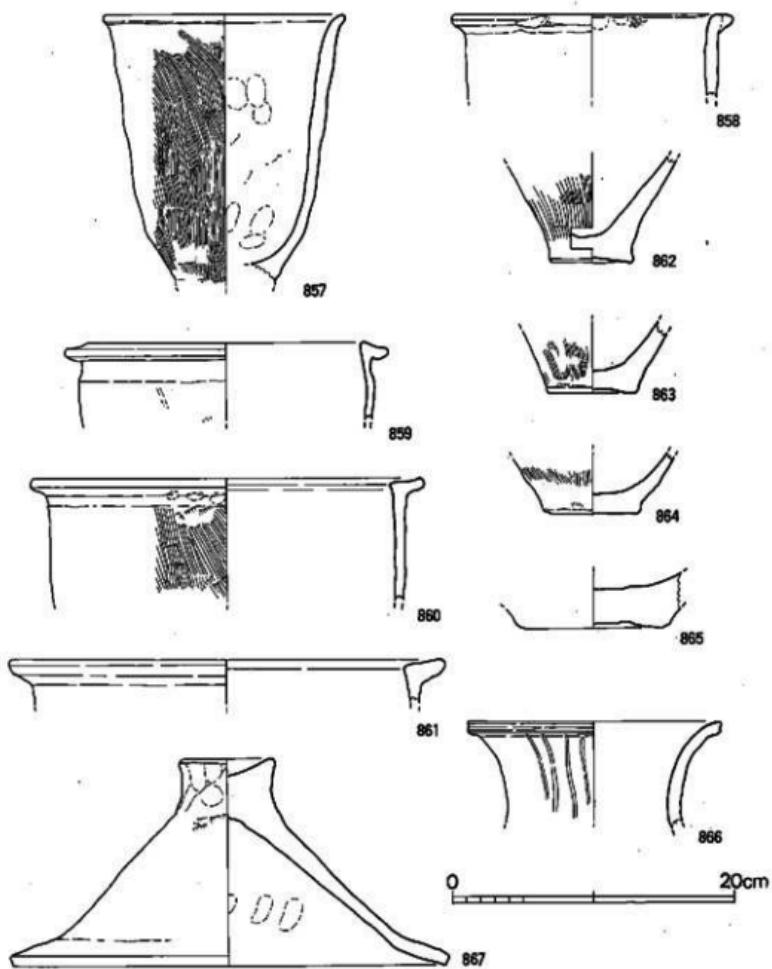
壺 (866) 外反する口頭部片で、端部は面をなし、凹線が引かれる。1cm間隔の暗文が継位に施される。

蓋 (867) つまみ部上面は凹み、やや括れてから拡がり、裾部でわずかに屈曲する。端部は面をなす。裾部径31.2cm、器高19.7cm。

不明土製品（第10図33） 幅4cm、厚さ1.2cmのやや湾曲した板状をなし長さ4.3cmを残し両端を欠損する。凸側には、幅5mmの先の割れた棒状工具で斜位に併行して沈線を引く。凹面には、板状工具での条痕が残る。胎土は、弥生時代前期の土器のものと同じである。橈状把手の一部のようにも見えるが用途不明である。



第 102 図 133号蔚窯穴出土土器実測図(1/4)



第 103 圖 135號貯藏穴出土土器實測圖(1/4)

136号貯蔵穴（第104図）

135号貯蔵穴の西側にある。底部平面形は、 $110 \times 92\text{cm}$ の胴張り隅丸長方形で、壁は袋状をなす。深さ44cm。遺物は出土していない。

137号貯蔵穴（第104図）

126号住居跡に東側を切られている。底部平面形は、 $140 \times 112\text{cm}$ の隅丸長方形をなし、壁は外に開く。深さ56cm。遺物は土器が出土している。

出土遺物（第105図）

甕（868～872） 868～870は、口縁外に粘土帯をめぐらしたものであるが、868は断面台形に近く、869・870は逆L字状となる。868の口縁下に1条の沈線がめぐる。871・872は底部および底部付近破片である。868の復原口縁内径は26cm。

壺（873） 873は、錐先状をなす。復原口縁内径28.8cm。

138号貯蔵穴（図版40-1, 第104図）

137号貯蔵穴の北側にあり、126号住居跡に接する。底部平面形は、 $135 \times 126\text{cm}$ の円形をなし、壁は袋状となる。深さは、104cmで上部平面形も円形である。遺物は、床に接して変形土器と磨製石斧が出土している。

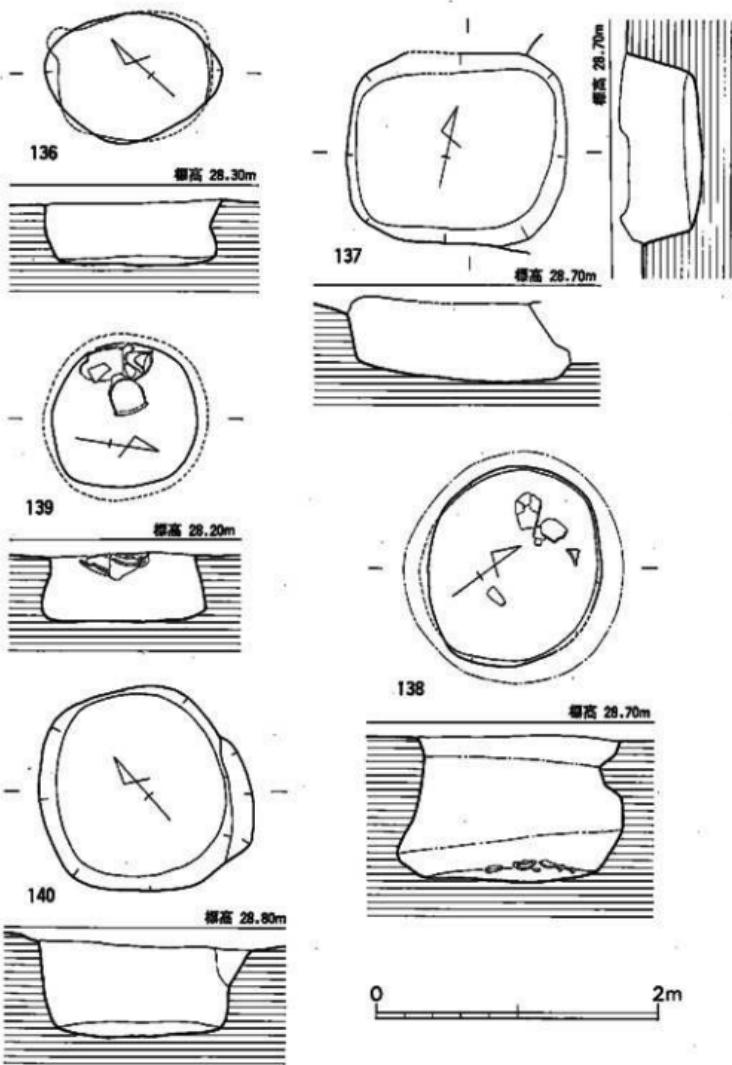
出土遺物（図版49, 第27・105図）

甕（874～876・878・879） 口縁が、874は如意状に、875は短く強く外反し、端部は丸まり刻目がある。874は口縁下に刻目凸帯、875は1条（？）の沈線が巡る。876は、口唇外に粘土帯を巡らせ、部分的に刻目があり、口縁下3cmに断面三角形の凸帯を巡らす。残存部には刻目は認められない。復原口径は、874が27.0cm、875が29cm、876が26cmである。878・879は平底の底部である。

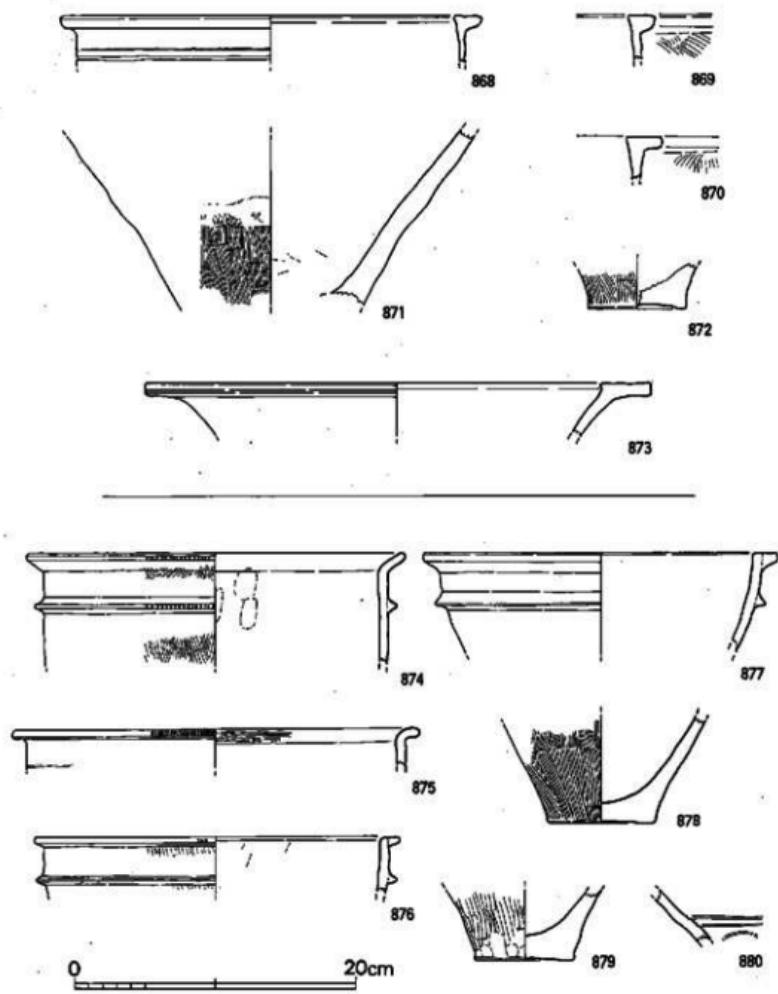
鉢（877） 口唇外に断面台形の粘土帯を巡らし、口縁下3.5cmに断面三角形の凸帯を巡らす。外面凸帯より下は粗いヘラ磨き、内面は丁寧なナデ調整が行われている。復原口縁内径11.6cm。

壺（880） 頸部から肩部の破片で、壺目に2条の沈線、肩部に1本（+α）の弧文が描かれる。

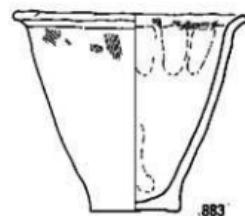
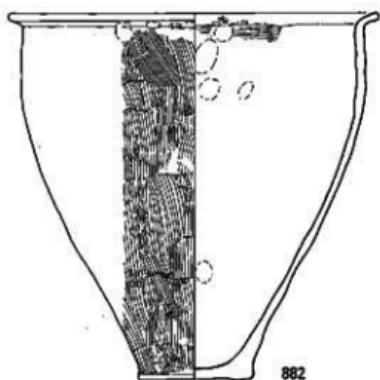
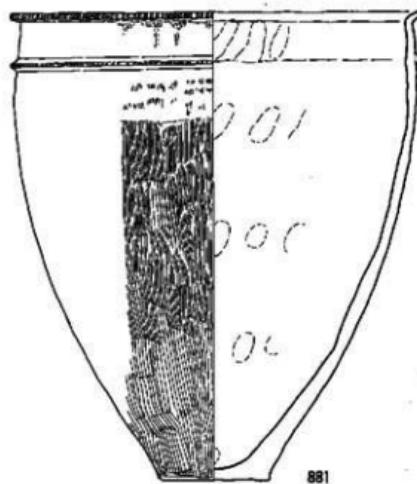
磨製石斧（第27図9） 玄武岩製の太形始刃石斧で、刃部を欠損する。全体は丁寧に研磨されている。頭部も稜をつくって研磨され、使用の痕跡はない。残存長15.8cm、太さ6.4×4.6cm。所謂今山製とされるものである。



第 104 図 136~140号貯藏穴実測図 (1/40)



第 105 圖 137·138 号 貯藏穴出土土器実測図 (1/4)



0 20cm

第 106 圖 139 号貯藏穴出土土器実測図 (1/4)

139号貯蔵穴（図版40—2，第104図）

138号貯蔵穴の北側にある。底部平面形は、 $117 \times 117\text{cm}$ の円形で、壁は内傾する。貯蔵穴最大径は底面にある。深さ49cm。上部平面形は、 $103 \times 102\text{cm}$ の円形である。上面付近に、甕形土器4個がまとまって出土している。

出土遺物（図版48，第106図）

甕（881～884） いずれも、短く丸味を持って外反する口縁で、平底の底部を持つ。881は、口唇端部に刻目を施し、口縁下3.5cmに刻目凸帯を造らす。口径29cm、器高33.2cm。882・884は、口縁や形態が類似する。883は、口径26.1cm、器高26.2cm。884は復原口径23.4cm。883は、口径16.7cm、器高14cm。

140号貯蔵穴（第104図）

他の貯蔵穴群とは離れて、61号住居跡床面より検出されている。上部平面形は $130 \times 120\text{cm}$ の円形で、壁は丸味をおびて開く。深さ66cm。出土遺物はない。
(木村)



第107図 工事に迫られる発掘調査

IV おわりに

上の原遺跡は、弥生時代と奈良時代を主体とした濃密な一大集落跡である。今回の報告は、弥生時代前期から中期にわたる貯蔵穴群のみの報告で、本来は貯蔵穴を利用（貯蔵庫としての機能、廐棄場としての機能）した弥生人達の居住地と合わせて検討すべきであるが、このことについては次回以降に報告したい。

従って、貯蔵穴群のみの報告では一面的な見方しかできないが、貯蔵穴の形態や分布、貯蔵穴の埋没等の特徴、ならびに出土土器の縦年の位置付けと円盤状土器片の機能、イイダコ窯形土製品などについて簡単に触れ一応のまとめとしたい。

1. 貯蔵穴について

形態

今回紹介した遺構全てが、貯蔵穴と断定できるわけではなく、いくつか疑問符つきの遺構があることをはじめにことわっておきたい。

形態をみると、断面形、底部平面形、上部平面形の三つの要素が考えられるが、削平や崩落によって上面形の判明しないものが殆どである。したがって貯蔵穴一覧表に示した平面形及び平面規模はいずれも底部平面形である（表1～4）。

まず平面形をみると、円形と梢円形があり、それぞれに胴張り隅丸方形及び、胴張り隅丸長方形が認められるが、明確な方形及び長方形はない。円形が一番多く、71（Ⅰ期27、Ⅱ期24、Ⅲ期12、不明8）、胴張り隅丸方形17（Ⅰ期5、Ⅱ期3、Ⅲ期3、不明6）と円形に近いものが、98と全体の70%を占める。梢円形は、27（Ⅰ期8、Ⅱ期8、Ⅲ期7、不明4）、胴張り隅丸長方形25（Ⅰ期3、Ⅱ期15、Ⅲ期4、不明3）と、梢円形に近いものが52となっている。時期的に違いが認められるかという点については、Ⅰ期が梢円及び円に近いものが74%を占め多いが、Ⅱ期以降は、Ⅱ期54%、Ⅲ期58%とその率が下がっている。

断面形は、A型壁が外に開く、B型壁が直になる、C型壁が袋状になるものがある。A型63（Ⅰ期18、Ⅱ期21、Ⅲ期16、不明8）、B型6（Ⅰ期3、Ⅱ期1、Ⅲ期1、不明1）、C型71（Ⅰ期24、Ⅱ期27、Ⅲ期10、不明10）となる。この断面形は、多分に遺構の保存状態による影響が大きく、比較的浅い例の多い（深さについては後述）Ⅲ期にあっては、A型が比較的多くなっており、残存している深さが20cm程までのものは、袋状になる可能性は十分あると思われる。深さと、断面形との関係をみると、A型は深さ20～39cmの間にピークがあり（23個）、C型は、40～59cm（24個）、60～79cm（24個）にピークがあり、39cm以下は1個しかない。この点から

表 1 貯藏穴一覧表①

()内は復原数

No	底面 (cm)			面積 (cm)	面積	出土遺物			時間	備考	旧 No
	平面形	長径 × 短径	柱穴 六 形 孔 溝 き			土器	鉄器	石器・土製品			
1	椭円形	155×140	無	A	23	1~4			II		1
2	+	(200)×175	+	+	20	5~15		第10番29	III		6
3	+	175×160	+	+	96	16~49		第36番 9~10 第11番35~37	II~III		3
4	円形	87×86	+	+	17	50			III		4
5	+	93×91	+	+	48	51~54			I		5
6	不整椭円形	175×138	+	+	30	55~58			III	テラスあり	7
7	洞張開丸長方形	150×114	+	+	70	59~64		第14番1	II		29
8	不整椭円形	96×95	+	+	20	65			I?		25
9	+	125×120	+	+	25	66			I?		24
10	椭円形	102×82	+	+	23	67			III		23
11	+	111×85	+	+	24	68			I?		21
12	不整椭円形	130×104	+	+	56	69~70			I		22
13	円形	185×180	+	B	55	71~80			I		8
14	+	125×124	+	A	25	81			I?		20
15	+	130×120	+	+	57	82~83			I	16号に切られている	18
16	洞張開丸長方形	130×115	+	C	67					15号を切っている	17
17	不整椭円形	155×130	+	+	63	84			I?		14
18	円形	150×140	+	A	33	85			I?		16
19	椭円形	160×143	+	+	42	86			I?	18号に切られている	15
20	+	112×102	+	+	15						13
21	+	172×153	+	B	82	87~89			I		9
22	円形	130×120	+	A?	14						11
23	洞張開丸方形	125×131	+	C	52	90~93			III		10
24	円形	156×143	+	A	11	94			I		12
25	不整椭円形	140×115	+	+	30	95~103			III		13
26	洞張開丸長方形	205×173	+	+	110	104~135		第24番12	II		77
27	椭円形	116×97	+	+	116	136~159		第27番10 第24番13	I~III		75
28	不整円形	132×123	+	+	70	160~176			I~III		76
29	洞張開丸長方形	153×136	+	+	85	177~190			II~III		79
30	洞張開丸方形	112×110	+	+	69	191~201			III	テラスあり	80
31	円形	120×(120)	+	C	58					32号に切られている	99
32	椭円形	120×95	+	+	70	202~228			III	31号を切っている	98
33	洞張開丸方形	120×112	+	A	72	229~234		第10番30	I~III		97
34	椭円形	147×137	+	C	91	235~238			I~III		101
35	不整円形	118×108	有	+	53	239~247		第36番5	II~III		96

表 2 貯藏穴一覧表(2)

No.	底面(cm)		断面(cm)	開口	出土遺物			時期	備考	旧 No.
	平面形	長径×短径			柱 形 無	柱 高さ	柱穴	土器	鉄器	石器・土製品
36	椿円形	144×127	無	C 76		248~254		第24回14	I 一回	100
37	*	132×111	有	A 35		255~263			II 一回	47
38	不整円形	125×122	無	*	30	264~267			III	95
39	銅張隔丸長方形	143×120	*	*	43	268~269			I	44
40	*	131×105	*	*	70	270~280		第36回1~2 第11回38~39	II 一回	45
41	不整円形	165×160	*	*	87	281~285			III	43
42	椿円形	160×138	*	*	65	286~287				42
43	円形	145×144	*	C 52		288		第24回15	II 44号に切られている	41
44	椿円形	144×112	*	*	47	289~306		第27回7	III 43号・45号を切っている	10
45	不整円形	(165)×161	*	*	85	307~326		銅462, 鉄36回 隔丸161, 隔丸160	I 一回 44号に切られている	39
46	椿円形	167×143	*	A 72		327~330		第11回41	I 一回	46
47	銅張隔丸長方形	135×130	*	C 68		331~332		第27回11	I 一回	58A
48		105×?	*	*	57				49~50号に切られている	87
49	円形	160×150	*	*	85	333~339		第11回42	II 一回 48号を切っている	31
50	不整梢円形	160×137	*	*	90				48号を切っている	32
51	円形	(160)×157	*	*	49	340			52号に切られている	38
52	銅張隔丸長方形	184×150	*	*	60	341~348			II 51号を切っている	37
53		128×?	*	A ?	40				54~55号に切られている	88
54	円形	145×145	*	C 73		349~366			I 一回 50号に切られ、53号を切 ている	33
55	*	135×135	*	*	63	367~375		第24回17~18	II 一回 隔穴3に切られ、53号を 切っている	34
56	椿円形	150×132	*	A 66		376			57号に切られている	94
57	銅張隔丸長方形	158×153	*	C 72		377~382			II ? 56~58号を切っている	30
58	銅張隔丸長方形	210×160	*	*	74	383~398		第11回43	I ? 57号に切られている	99
59	不整円形	120×115	有	A 28		399			III 61号を切っている	33
60	*	140×118	無	C 83		400~402		第24回19	61号を切っている	103
61	円形	140×130	*	A 45		403~404		第24回20	59~60~62号に切られて いる	106
62	*	90×88	*	C 64		405		第52回 I	61号を切っている	83
63	*	114×110	*	*	58	406~407		第10回34	III	82
64	銅張隔丸長方形	158×127	*	*	65	408~410			III	54
65	隔丸長方形	172×160	*	*	55	411~424			II 一回	89
66	円形	135×(130)	*	*	36	425			I 67号に切られている	36
67	椿円形	178×152	*	*	50	426~429			I 一回	35
68	円形	132×125	*	A 55		430~432			II	90
69	*	125×125	有	C 78		433~439		第24回21	I	91
70	*	145×128	無	*	98	440			I	101

表 3 貯蔵穴一覧表③

No.	底面 (cm)	断面 (cm)	通数	出土 置物	地質	備考	組 No.
平四形	長径×短径	柱穴	土器 鉄器 石器・土製品				
71 刷毛丸長方形	150×110	無 C 83	441~449	第27号 2-3	II	第17号 5	64
72 円 形	195×180	△ △ 103	450~460		III		65
73 不整円形	135×120	△ △ 83	461~471		II		73
74 刷毛丸方形	143×142	△ △ 64	472~482	第27号 8	II		48
75 円 形	153×(140)	△ B 54	483~490		III	74号を切っている(?)	49
76 指 円 形	(170)×107	△ C 56	491~494	第14号 3	II	75号に切られている	50
77 刷毛丸長方形	111×92	△ A 56	495~503	第24号 22	II		51
78 不整円形	155×143	△ C 64	504~515		II	70号に切られている	52
79 指 円 形	176×145	△ △ 123	516~521		II	78・80号に切られている	58
80 円 形	(140)×130	△ △ 50	522~534	第27号 12	II	79号を切っている。	53
81 指 円 形	145×125	△ △ 51	535~538		II		60
82 刷毛丸長方形	155×140	△ △ 50					112
83 円 形	140×130	△ A 35	539~562		III		72
84 不整円形	128×125	△ C 65	553~556		I		84
85 円 形	130×127	△ △ 60	557~567		I		67
86 指 円 形	134×117	△ △ 47					66
87 円 形	83×83	△ A 33					74
88 指 円 形	105×70	△ △ 33	568~583		II	89号に切られている	68
89 不整円形	123×120	△ △ 55	584		II	88号を切っている	69
90 指 円 形	130×115	△ C 62	585		II		70
91 刷毛丸長方形	100×80	△ △ 51	586~590	第36号 11	III		71
92 指 円 形	140×127	△ △ 58	591~594		II		113
93 円 形	145×140	有 △ 40	595~601	第24号 23-24-25	II		68
94 不整指円形	140×115	△ A 36	602~609		II	95号に切られている	110
95 *	134×100	無 △ 38	610~616	第10号 32 第11号 44-47	II	94号を切っている	109
96 指 円 形	168×117	△ B 44	617~623		II		111
97 円 形	(110)×89	△ C 51	624~625		I?	98号に切られている	107
98 指 円 形	128×104	△ A 71	626~629		II	97号を切っている	105
99 *	153×135	△ C 105	630~631		I		61
100 刷毛丸方形	123×108	△ △ 90	632	第36号 8			58
101 指 円 形	132×115	△ △ 79	633~642		II	103号に切られている	57
102 刷毛丸長方形	145×128	△ △ 72	643~644		II	103号に切られ、104号を切っている	55
103 *	148×133	△ △ 73	645~646	第11号 48-50	II?	101・102・104号を切っている	56
104 不整指円形	163×113	△ A 80	647~649		I	102・103号に切られている	92
105 不整円形	125×123	△ △ 29	650~651		II		62

表 4 貯蔵穴一覧表④

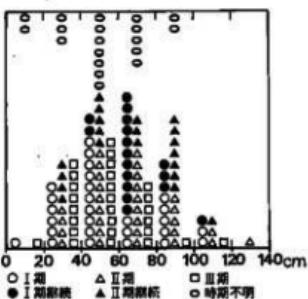
No	底面 (cm)	断面 (cm)	四壁	出土遺物	時期	備考	No
106	円形	175×170	柱穴 形便 柱穴	無 C 98	652~658	I	81
107	+	135×133	+ A	94	658	II	63
108	箱円形	183×162	+ +	80	660~668	III	85
109	+	147×105	有 B	37			129
110	円形	(180)×172	無 +	47	669~673	II	130
111	箱円形	134×103	有 A	37			145
112	不整円形?	155×(140)	+ +	57	674~679	第14回 5	半分未掘
113	円形	153×(150)	無 C	95	680~684	第14回 5	I~II
114	不整円形	145×(145)	+ A	75	685~694	II	129
115	+	135×127	+ C	86	695~697	I	131
116	不整箱円形	137×97	+ A	41	698~699	II~III	125
117	+	120×(90)	+ C	50	700		半分未掘
118	+	(110)×96	+ A	38	701~715	第11回 51	119号に切られている
119	隅丸方形	121×116	+ +	60	716~727	第36回 5	118号を切っている
120	円形	117×114	有 C	43	738~740	第14回 5 第24回 25	III
121	箱円形	125×110	無 +	73	741~753		I~II
122	隅丸長方形	130×106	+ A	30	754~762	第36回 3	II
123	不整円形	132×124	+ C	88	763~767	第36回 4	II
124	+	152×145	+ +	80	768~778	II~III	140
125	隅丸長方形	147×107	+ +	103	779~791	第24回 27~28	II
126	(54+ε)×(50+ε)	A ?	54	792~802		II	大半未掘
127	剥張隅丸方形	135×130	+ C	99	803~814	II~III	123
128	不整円形	114×110	+ A	38	815~816	II	124
129	不整箱円形	147×130	+ C	87	817~825	II	130号に切られている
130	+	143×112	+ A	40	826~830	II~III	129号を切っている
131	円形	127×120	+ C	49	831	I	132号に切られている
132	+	97×90	+ +	73	832~840	第14回 6	131号を切っている
133	剥張隅丸長方形	(140)×115+ε	+ A	100	841~856	III	119
134	剥張隅丸方形	123×113	+ C	73			120
135	円形?	100×91+ε	+ +	95	857~867	第10回 33	半分未掘
136	剥張隅丸長方形	110×92	+ +	44			84
137	隅丸長方形	140×112	+ A	56	868~873	III	118
138	円形	135×126	+ C	104	874~880	第27回 9	I
139	円形	117×117	+ +	49	881~884	I	126
140	+	130×120	+ A	66			115

しても、A型は浅いもの（残存状態が悪いもの）に多いことがいえ、A型のなかには、本来C型に属していた可能性のあるものが多いと考えられる。以上の点を考慮した上で、現状での比率をみると、I期・II期・時期不明とも、袋状のもの（C型）が50%をこえており、III期のみ、A型が59%となっているが、前述のように、このうちの多くがC型の可能性があると考えられる。したがって、本遺跡の貯蔵穴の多くは、袋状（C型）を呈していたと思われる。

次に貯蔵穴の深さであるが、これもいままで述べてきたように、削平等の影響を強く受けていると思われる。一応それを無視してみてみると、深さ20cm毎の階級毎にその数を示すと、第108図のようになる。40~59cmが36、60~79cmが30とピークになり、一番深いものが123cmとなる。時期によって差が認められるかについては、I期が、60~79cmに14個とピークがあり、II期は、40~59cmに14個とピークがある。III期は若干少なくなるものの40~59cmに10個とピークが認められる。全体的な傾向としては、徐々に浅くなることがいえるが、これも、時間の経過とともに表土層が堆積して行く点と、削平との関係を考慮する必要があり、一概に浅くなるとばかりはいえない。したがって時期的に古いI期に多い60~79+αcmが標準的な深さといえる。又、平面的に時期を無視して深さをみると、貯蔵穴群の中心部分に、80cm以上の深いものが集中し、その周辺に、60cm以下のものが多い傾向にある。理由は判明しないが、おそらく、貯蔵穴の多い所（集中部分）をさけて、後の住居が作られている結果とも考えられ、貯蔵穴の一部は比較的長い間、凹地として残っていたことも考えられる。I~III期までの遺物が認められる貯蔵穴が、中心部に多く、また比較的深いものに（60~79cm-6個、80~99cm-2個、100~119cm-1個、40~59cm-1個）多いことも、それを裏づけているのかもしれない。

分 布

貯蔵穴群は、前述のように、全体としては遺跡東部に群をなしている。時期的にみると、I期が、東側に、II期が中央から西側、III期が中央に多いようにみえるが、全体としては混在しているといえる。全体をみると、さらにいくつかの小群に分かれると、各群とも各時期を含んでおり、各まとまりの中で、断続的に貯蔵穴が作られ、廃絶され、各遺物が廃棄されたことをうかがわせる。それぞれの群が、それぞれ一定の集団に属することを想像されるが、判断はできない。



第108図 時期別貯蔵穴深度度数表

貯蔵穴の埋没

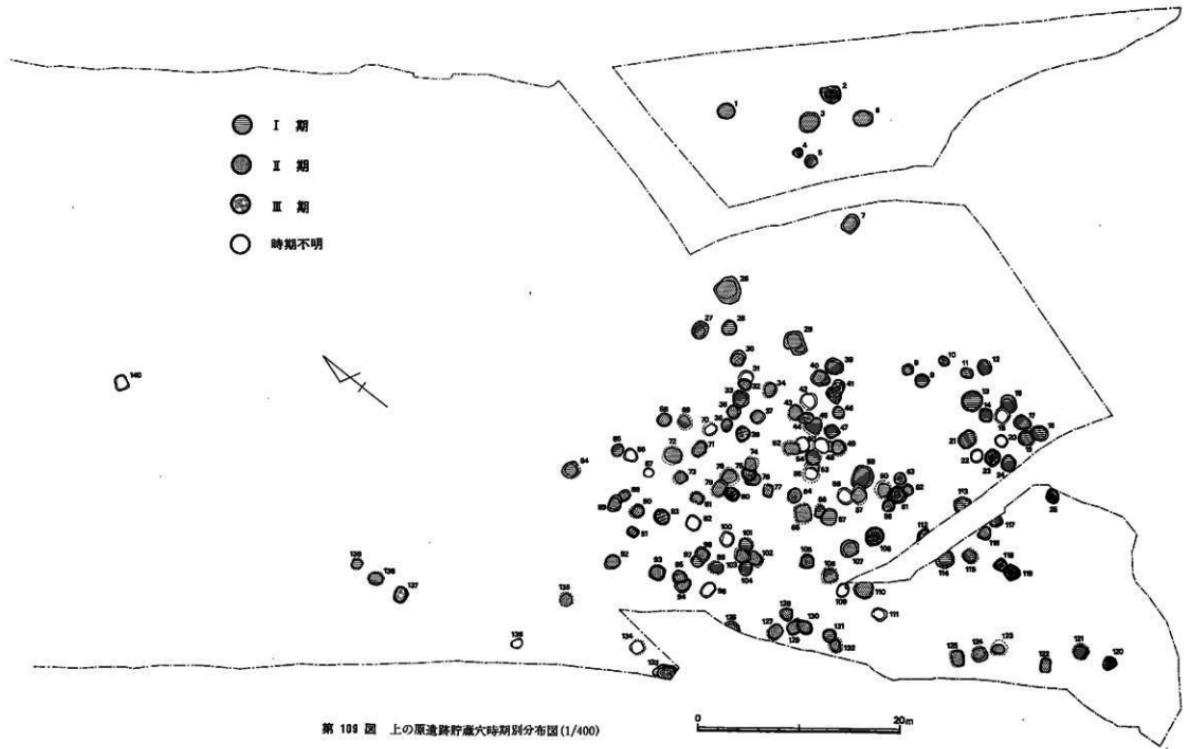
本遺跡の貯蔵穴で、埋土の堆積状態の記録されているものは少なく、16ヶ所であるが、水平に近い堆積を示すもの（Ⅰ）8ヶ所、スリ鉢状堆積を示すもの（Ⅱ）8ヶ所である。Ⅰ期の断面形態はA型が2個、B型が1個、C型が5個と、袋状をなすものが多く、Ⅱ期は、A型が4個、B型が1個、C型が3個と、壁の外に開くものが多い。A型でⅡの堆積を示すのは自然の堆積といえるが、C型で、Ⅰの堆積を示すものは、ある程度人為的に埋められた可能性があると考えられよう。本来、2m近い深さがあり、口が狭い袋状をなす貯蔵穴は、自然堆積にしても、人為的に埋めたにしても、底面近くは、中央が盛り上がった堆積状況を示すものが、他の遺跡では認められるが、本遺跡では認められず、深さが150cmを超えるものがなかったことを示しているのであろうか。

遺物の出土状況の記録されている貯蔵穴は、25ヶ所と少ないが、それよりすると、完形に近いかあるいは、ある程度の大きさを持っている土器片が、(イ)床面上または、上10cm以下のもの、(ロ)中位にあるもの、(ハ)上面付近にあるものが認められ、それぞれ(a)中央にあるもの、(b)壁際にあるものがある。(イ)1例のうち(a)2、(b)9、(ロ)9例のうち(a)2、(b)5、(ハ)4例のうち(a)2、(b)2となっている。(イ)・(ロ)で、(b)壁際に出土する例が多いのは、先の堆積土からの推定に反して、堆積土中央が盛り上がっており、壁際に転落した事を示していると思われる。(ロ)で(a)と(b)が等しいのは、転落の余地がなく、当然である。

各期にわたって遺物が包含されていた貯蔵穴についてみると、その貯蔵穴で古い時期の土器が(イ)の堆積を示す貯蔵穴は、廃絶後あまり時を経ずして廃棄が行われ、28・54・85号貯蔵穴のようにⅠ～Ⅱの各期の土器が混入するものがある。初期のものが(ロ)や(ハ)の堆積を示す、84号や72号の場合、それまでの埋没が比較的早かったことをうかがわせ、(ハ)の72号の場合、Ⅲ期の遺物は、切合った後の時代の遺構による混入が十分考えられる。

遺物の出土状況の記録されている貯蔵穴で、明確に、使用されていた状況で廃絶したと思われるものではなく、おそらくは廃絶後そう間をおかず、人為的に、又は自然に埋没したものと思われる。

遺物の中に、異なった貯蔵穴より出土した土器が接合する例があり、同時期に凹地として存在し、廃棄場として利用されたことを示している。84号貯蔵穴（Ⅰ～Ⅱ期）土器553と、約12m離れた93号貯蔵穴（Ⅱ期）土器597、98号貯蔵穴（Ⅱ期）土器626と、約3m離れた101号貯蔵穴（Ⅰ～Ⅱ期）土器641の2例が接合資料で、また33号貯蔵穴（Ⅰ～Ⅲ期）土器229は、5m離れた71号貯蔵穴（Ⅱ期）土器449はきわめて類似している。以上の事は、84号と、93号の場合、84号がⅠ期より埋没が初まりⅡ期の段階で、84・93号とも同時に廃棄場として利用された事を示し、98・101号の場合も同様にⅡ期に、又おそらく33・71号の場合もⅡ期に同時に廃棄場として利用されていた事を示している。しかし、意図的に別々に廃棄されたものなのか、偶然で



第 108 図 上の原遺跡古墓群時期別分布図(1/400)

あるのかは、判断できない。ただ先に述べた、小群内で別々に廃棄されているのは、98・101号の組合せだけで、他は隣接した小群にわたっていることは、意図的なものを少々感じさせるとどまる。

(木村)

2. 貯蔵穴出土の土器群について

甘木・朝倉地方における弥生時代遺跡の調査例は多いが、弥生前期から中期にわたる調査例は意外と少ないのが現状である。従って、この時期の土器群年は整備できていない。しかし、近年の九州横断道関係の発掘調査で、その間の遺跡が調査され、良好な一括資料を得ることができた。

今回の上の原遺跡の貯蔵穴から出土した土器群は、この甘木・朝倉地方における弥生前期から中期の土器群の変遷過程を知る上で貴重な資料である。ここでは、この地域の当該期の土器群の変遷を、いまだ欠落した器種も多く不充分ではあるが、周辺遺跡の資料も一部加えて、一応の整理をしておきたい。

なお、上の原遺跡の貯蔵穴出土の土器群には、良好な一括資料もあるものの、その大半は復次的な投棄による時期差のある土器群が混在した資料であったため、資料の抽出に苦慮した。従って、良好な一括資料を基本に、さらに、個別貯蔵穴出土の完形品ないしは完形品に近い資料をもとに共存資料の抽出を行った。

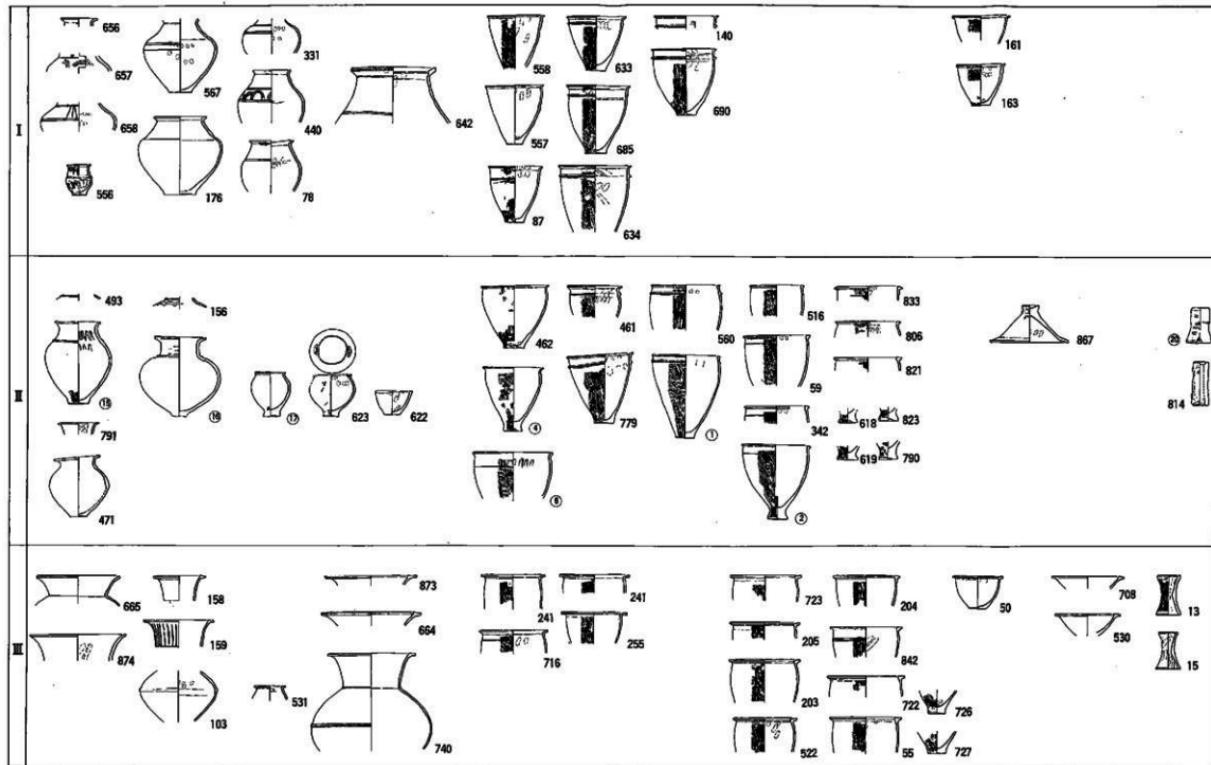
次に、各期毎の土器群の特徴と変遷を明らかにしよう。主に、壺と壺の形態的特徴とその変遷を中心に説明をする。

上の原Ⅰ期 この時期の良好な一括資料は、28号・85号・101号・106号・114号貯蔵穴出土の土器群である。壺には小形・中形・大形がある。いずれも球形ないしは扁球形の胴部に内傾の強い頸部がつき、外面に有段状の縫を残す口縁部がつく壺である。肩部にも、前期の壺の特徴である肩部の屈折稜の名残りである沈線が1条から数条めぐっている。また、肩部には平行沈線文や半円弧文等の文様が施されたものも多い。調整は、外面が丁寧なヨコヘラ磨きで仕上げ、内面はヘラ磨きしたものとナデのものがあり、いずれも胎土は精良で焼成も良好な作りの良い土器である。大形壺である642は内傾する頸部に強く外反する口縁部がつく壺で、口縁部は肥厚させている。口縁端部外面に刻目を施し、肩部には2条の沈線がめぐる。前期末の大形壺の基本的特徴である。壺は口縁部の形状により三つのタイプがある。如意形口縁のもの(557・558)、如意形口縁下に1条の三角凸帯をめぐらすもの(633・634・685)、口縁端部と口縁下に1条の三角凸帯を貼付したもので、いわゆる亀ノ甲タイプといわれる壺(140・690)である。いずれも口縁端部と凸帯端部に刻目を施している。また、87のように如意形口縁下に沈線をめぐらすものもある。この時期の如意形口縁は、Ⅱ期の壺に比べ口縁部の外反が弱く短かいのが特徴といえる。亀ノ甲タイプの壺も口縁部は、Ⅱ期の壺が内傾気味であるのに対して直立ないし

は外傾気味という小差が指摘できるようである。調整は、胴部外面を刷毛、内面をナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げたものが多い。557のように胴部内外ともナデで仕上げた珍しい壺もある。底部はいずれも平底で、Ⅱ期の壺に比べ大きいといえる。

上の原Ⅱ期 この時期の一括資料としては、73号・96号・110号・123号・125号・127号・132号・135号貯蔵穴出土の土器群である。また、甘木市西原遺跡では、この時期の良好な一括資料が貯蔵穴から多数出土している。この時期の基準資料として、2号と5号貯蔵穴出土の土器群を採用する。器種としては、壺・壺・蓋・支脚等がある。壺には小形と中形があり、493や⑮のようにⅠ期の頸部が内傾する壺の系譜をひく壺で、頸部下に1条の三角凸帯がめぐる土器である。156・⑯は扁球形の胴部に直立気味の頸部がつき、口縁部は強く外反する壺で、しばしば頸部下に1条の三角凸帯をめぐらすのを特徴とし、この時期の特徴的な土器である。471・791は広口の小形壺で、Ⅲ期の広口小形壺につづく土器と思われる。623・⑰は、いわゆる無頸壺といわれる小形の土器である。623の口縁端部には2個対の小さな把手がつき、それぞれ2個の穴が穿孔されている。小形の蓋（第36図10）等の紐通し穴とセットをなす土器である。壺にはⅠ期からの系譜を引く三つのタイプと、この時期から出現する口縁端部に太目の三角凸帯を貼付し、しばしば口縁下に1条の沈線をめぐらす壺である（59・342・516・618・619・790・806・821・823・833・②）。口縁部は若干、内湾気味で胴部が緩やかに張り、底部は脚台状ないしは器肉の厚い高台状の底部を特徴とする（618・619・790・823）。この時期の典型的な壺である。この種の壺の中でも、806・821・833のように口縁端部の三角凸帯がより太目となり、Ⅲ期に出現する逆L字状やT字状口縁とした壺（55・203・205・522・722・723・842）の粗型ともなる壺がすでに出現はじめめるのもこの時期の特徴である。如意形口縁の壺は、Ⅰ期のものに比べ、口縁部の外反が強く長目のものが多くなる（462・④・⑥・461・779）。また、亀ノ甲タイプの壺はⅠ期のものに比べ、口縁部が内湾する傾向がみられる（560・①）。調整手法は、胴部外面を刷毛、内面をナデ、口縁部内外はヨコナデで仕上げるのが一般的である。

上の原Ⅲ期 この時期の一括資料としては、3号・27号（上層出土資料）・32号・80号・108号・118号・119号・133号貯蔵穴出土の土器群がある。器種としては壺・壺・鉢・高杯・器台などと豊富である。壺には小形・中形・大形があり、口縁部の形状で大きく二つのタイプに分かれる。単口縁の広口壺（665・874）、鋤先状口縁の広口壺（158・159・664・740・873）、無頸の広口小形壺（531）などがある。胴部はいずれも扁球形（103・740）で、鋤先状口縁壺の胴部には1条から2条のM字状凸帯がめぐるが一般である。調整手法は、外面を丁寧なヨコヘラ磨きで仕上げ、内面は頸部付近まで丁寧にヘラ磨きしたものやナデで仕上げたものなどがあるが、いずれも作りの良い土器である。また、159の頸部外面にみられるようなヘラによる暗文を施したものもある。壺には、如意形口縁の系譜をひいたく字状口縁の壺（570・716・241・255）と、逆L字状ないしはT字状口縁をなす壺（55・203・205・522・722・723・842）



第 110 図 貯蔵穴出土の弥生土器変遷図(1/12)

番号は挿図の土器番号と同じ、①の番号は西原遺跡の土器番号である。

があり、如意形口縁の壺が消長する時期である。逆L字状ないしはT字状口縁の壺は、祖型となるⅡ期の壺（806・821・833）の口縁部がさらに拡大されたものである。口縁部の作りも、三角凸帯を横付けしたⅡ期の壺とは異なり、上端にのせて口縁部を作る手法を基本的にとっている。従って口縁部内面端部のヨコナデによるつまみ出しが目立つようになる壺を特徴とする。底部の形状もⅠ・Ⅱ期のものに比べ、底部付近のしまりが強く底径の小さいものに変化している。また、Ⅱ期の外方にはり出した脚台状を思わせる底部（618・619・790・823）は、この時期は殆ど姿を消してしまう。しかし、底部の器肉は全体として厚いものが多い。鉢（50）・高杯（530・708）とも鋸先状口縁を有す土器で、この時期の特徴を示している。器台（13・15）は筒状のもので、調整は外面を刷毛で仕上げたもの（13）と、内外ともナデで仕上げたもの（15）がある。この時期の器台は上下の開きが大差ないのが特徴である。

以上、上の原跡の貯蔵穴から出土した土器群も大きく三時期に区分した。これらを從来の弥生土器編年に対比するとすれば、Ⅰ期は前期末、Ⅱ期は中期初頭、Ⅲ期は中期前葉にはほぼ対応できるであろう。

（井上）

3. 円盤状土器片について

円盤状土器片として取上げた遺物は、通常“メンコ”といわれている遺物に近い。しかし、メンコのように周囲を研磨した個体ではなく、多くは周囲を打欠いて成形したままであり、若干周囲が磨消している個体があるだけである。本例のような遺物は、本来各遺跡で出土していると思われるが、報告された例は少ない。報告された一例である島根県西川津遺跡（註1）では、53個を集成している。大きさは、径3~7cm前後の範囲にあり、5cm前後の遺物が多い。重量は5~60g程までの範囲にあり、20~25gの間が一番多いが、平均重量は27.6gである。報告者は、これらを土器片利用の紡錘車未製品として報告をしている。また同様の例を“メンコ”として報告している例（註2）も形態をさしているだけで、用途を示すと、推定しているわけではない。

	大きさ	重量(g)	出土位置	備考	回数
1	(4.3+ε)×3.6	13.95	野 26	一部欠	カメ 12
2	4.5×4.1	14.55	野 27		ツボ 13
3	5.0×4.4	21.4	野 36		カメ 14
4	3.9×3.4	10.05	野 43		ツボ 15
5	4.8×3.8	13.6	野 45		カメ 16
6	5.1×4.0	16.0	野 54		カメ 17
7	3.8×3.7	13.2	野 55	抉り有り	カメ 18
8	4.2×3.4	11.35	野 60	一部欠	カメ 19
9	5.2×4.9	23.6	野 61	一部欠	カメ 20
10	5.0×4.5	32.8	野 69		カメ 21
11	4.0×4.0	16.4	野 77		カメ 22
12	4.4×3.5	7.9	野 93	一部欠	カメ 23
13	(5.2+ε)×4.7	16.9	野 93	一部欠	カメ 24
14	4.9×4.8	18.5	野 93		カメ 25
15	(5.5+ε)×4.5	24.6	野 120	粗面斜削(?)	ツボ 26
16	5.0×4.3	19.55	野 125		カメ 27
17	4.8×4.7	29.4	野 125	抉り有り	カメ 28
18	(4.8+ε)×4.1	13.5	野 32	一部欠	ツボ (井上223)
19	(4.3+ε)×4.7	24.8	野 51・52	一部欠	ツボ *
20	4.1×3.8	13.1	野 122	一部欠	カメ *
21	6.6×5.5	32.4	野 124	一部欠	カメ *
22	(5.0+ε)×5.3	26.0	野 158	一部欠	ツボ (井上860)
23	5.6×4.1	15.6	土 壤		カメ *

表 5 円盤状土器片計測表

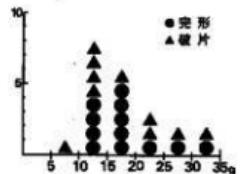
さて、本遺跡例は、表5、第111図に示したように、大きさは4~5cm台が殆どで、重量は10~30g台にあり15g前後(10~20gの間)が一番多い。成形は各貯蔵穴で解説したように、一方向から細く打欠き調整したものが多く、また両面より加工した個体もある。周縁を意図的に研磨したものはなく、磨滅が認められるものも多い。使用している土器片は、壺形土器の胴部破片が多いが、外反する口縁部を利用したものの、壺形土器の肩部や頸部を利用したものもあり、かならずしも平坦に近い部位を利用しているわけではない。このことは、西川津遺跡で考えられたのと同じ紡錘車未製品とするには、躊躇をおぼえさせる。とはいっても、第24図26は、コウ打により穿孔をはじめており、紡錘車の未製品といえないこともない。また、あきらかに紡錘車として、つくられた製品(第36図1~4)は、それぞれ20.85g、16.8g、32.1g、29.0gと近い重量を示すことも重要である。ただ、紡錘車未製品とするには、残存する長辺が整っている点が気になる。それでは紡錘車未製品以外に考えられる用途は何かということになる。形・重量で最も類似しているものは、縄文時代の土器片鍤である。そういう目でみると、第24図13、18、21、27、28など紐かけ用の抉りとしても良い打欠きが認められ、特に18の抉りは、打欠きでなく擦り切りである。また13・16などは沈線を長軸と取り入れており、表5の18、22も、壺肩部の沈線を取り入れている。

ちなみに縄文時代の土器片鍤の重量は、九州にはその出土例がきわめて少ないので渡辺誠氏の著書(注3)よりみると、10~20g台が一番多いということである。また同じく漁網鍤である切目石鍤は、20g台が最も多いている。上の原例は、前述のように10~20gが一番多く、重量的には、問題は少なく、形態的には明確な切目はつけられてはいないものの、類似は指摘できる。

九州では、縄文時代の土器片鍤も、切目石鍤も殆ど類例がないが、切目石鍤とほぼ同じ重量を示す、打欠き石鍤(注4)が主に河川沿いの内陸部遺跡で出土している。短軸・長軸は、4~5cmが多く、重量も30g以下が多い。上の原遺跡の土器片は、大きさ・重量とも類似しているといえる。

上の原遺跡より、管状土鍤も出土しており(第36図6~8)、いずれも欠損品で本来の重量は不明であるが、おそらく30g台の中形品であると思われる。管状土鍤には、100gを超す大形品、30g台の中形品、10g前後台の小形品がある。上の原遺跡の土器片は、中形品と小形品の中間の重量を示しているといえる。

遺跡の東側には、荷原川が流れ、筑後川に合流している。遺跡からは、筑後川まで直線距離にして3km程である。もし、以上の遺物を土器片鍤と仮定しても、河川で投網に使用するすれば、おそらくすぐ割れて使用できなくなり、用をなさず、他の網の形態を考えなければなら



第111図 円盤状土器片重量分布度数表

ない。

円盤状土器片が、以上の点からだけではただちに土器片鍼であると断定することには無理があるが、ここでは、その可能性があるという点を指摘するに留める。 (木村)

- 註1 内田律雄, 1989「土製品」朝駒川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V(海崎地区3), p.90~93。島根。
- 2 富永直樹, 1988「塚原遺跡の調査」安武地区遺跡群I(久留米市文化財調査報告書56)久留米。
- 3 渡辺 誠, 1973「縄文時代の漁業」(雄山閣)
- 4 小池史哲, 1977「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第4集, 福岡。

4. イイダコ壺形土製品

119号貯蔵穴より出土した、イイダコ壺形土製品については、遺物の項で触れているが、再度簡単に記述しておく。大きさは外形が、長さ9.1cm、口縁径3.8cmの円筒形をなし、一方が丸く塞がる。壁は、7.5~9.5mmと厚く、内径は、口径2.4×2.2cm、深さ8.1cmと小さい。口縁下3mmに、147°の角度をなして、外面より内側に2個の穿孔が行われている。さらに、一方の孔の下方6.5cmに、おそらく焼成後と思われる径7mmの孔があけられている。底部の一部を欠くが、重量は、94.35gである。以上がタコ壺形土製品の概要である。

本土製品の用途は、なんであるか決手になるものはない。単なる容器として考えても、底部付近の穿孔は、それに疑問を感じさせるし、小形でありながら、ミニチュア土器、模造土器というわけでもない。形態的に一番似ているのが、表題にもつかった、隨葬漁具としてのイイダコ壺である。

考古学的遺物としてのイイダコ壺は、通常弥生時代中期中葉に、コップ形で口縁下に孔を有するものが大阪湾から播磨灘沿岸にかけて出現し、弥生時代終末になって九州北部に拡がるとされている(註1)。大きさは、口径5~6cm、器高9~10cm程度であるとされる。

以上のような特徴は、本土製品と比較すると形態は類似するものの、遺物の時期、大きさに違いのあることを示している。即ち、本土製品は、同じ貯蔵穴内より出土している土器よりすれば、中期初頭あるいは中期前半であり、西口陽一氏が(註2)、イイダコ壺としている、山口県下関市綾羅木郷遺跡出土の前期の側面に4孔をあけた陶壺を別にすれば、最も古い例となってしまう。また大きさにしても、小形のもので内径4cm、深さ8cmとすると、内径2.4×2.2cmでは、通常の半分にもみたないことになる。現在イイダコ壺に使用されるアカガイにしても通常殻幅7cm、殻高6cm、殻長11.5cm程であり、サルボウなどはややそれを下まわり、タマキガイは、殻幅2cm、殻高4.5cm、殻長5cmとやや小さい。またアカニシにしても、殻口径は5cm以

上ある。土製のものとして「日本水産捕採誌（下）」（註3）の飯館壺に記載されている、播磨地方例は、高さ3寸5分（10.6cm）、口径1寸3分（3.9cm）、胴最大部径2寸4分（7.3cm）とされている。口径は本例に一番近い例といえるが、やはり本例を上まわっている。

イイダコは、通常全長20cm、胴長4cm程度で、胴幅2~3cm程度である。もし、本土製品をイイダコ壺と考えた場合、小形のイイダコであれば一四分がもぐり込む空間はあるといえる。したがって、積極的に本土製品を評価すれば、イイダコ壺と考えることも可能である。しかし、道具類、特に漁具は、その対象物によって、形態、大きさはかなり限定されており、特異な形、大きさは出現しにくいものであることも事実であり、また本遺跡が、遺跡南側を流れる筑後川が流入する有明海から40km以上の距離にあり、イイダコ壺による雜漁撈を日常的活動として行っていたとも考えにくい位置にあることもまた事実である。

本製品を、漁具として評価した場合、他に考えられるのは、河川の小形魚類を対象とした陥穿具としての、ウケ・ドウの類、または、以前イイダコ壺に関して考えられた事のある「ズミ」（土錐）の一種とも考えられるが、いずれも積極的に評価するだけの根拠はない。

本土製品は底部付近に穿孔があり、単なる容器とは考えられないものの、イイダコ壺としても、形態の類似と小形のイイダコ程度であれば、捕獲可能であるとはいえるものの断定するだけの根拠はない。しかも、時期、海からの距離、平均的な大きさなど否定材料も多い。したがって、結論としては、用途不明土製品とする以外ないが、積極的に評価すれば、イイダコ壺などの漁具としての可能性が高いといえる。

（木村）

註1 和田晴吾、1988「漁撈」弥生文化の研究5、153~161頁。東京。

2 西口陽一、1989「大阪・イイダコ壺」考古学研究36-1、25~48頁。岡山。

3 農商務省水産局、1910「日本水産捕採誌」。東京。

図 版



1 上の原道路周辺航空写真

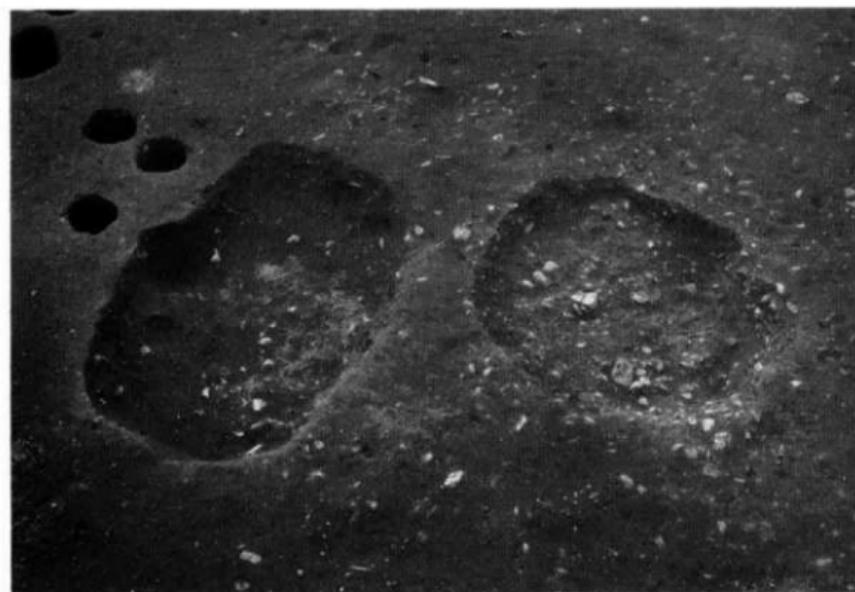


2 上の原遺跡貯蔵穴群全景気球写真

図版 2



1 1～6号貯藏穴群全景（北西から）



2 1号貯藏穴（右）、土壤（北から）

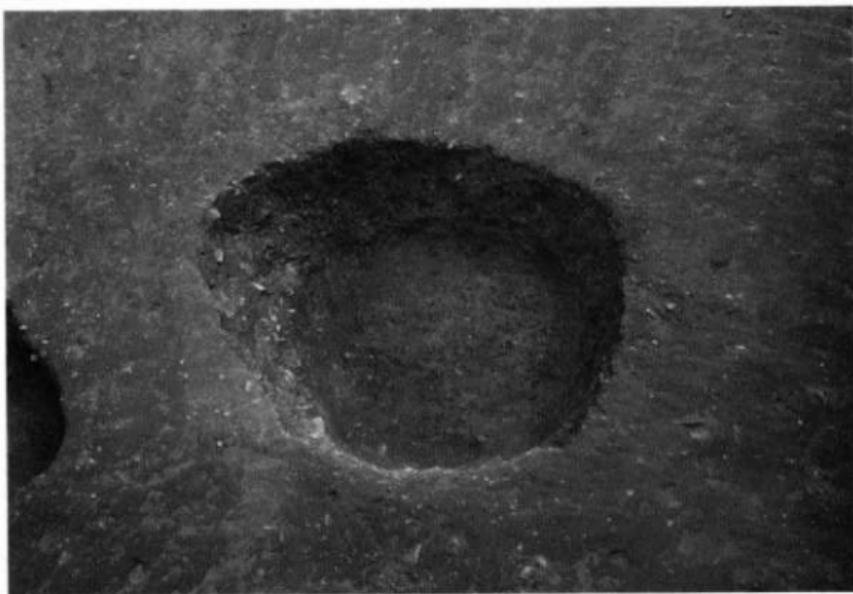


1 3号貯蔵穴（南西から）

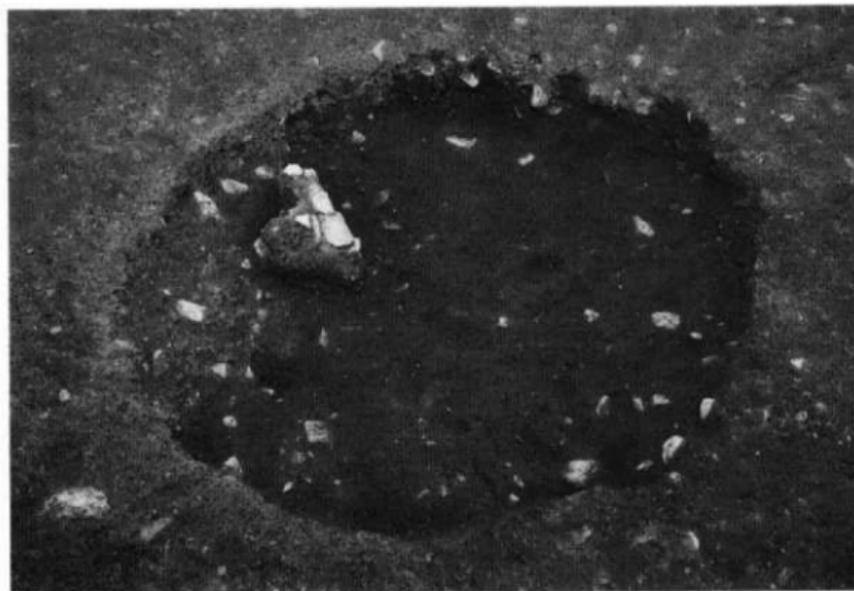


2 4号貯蔵穴（南西から）

図版 4



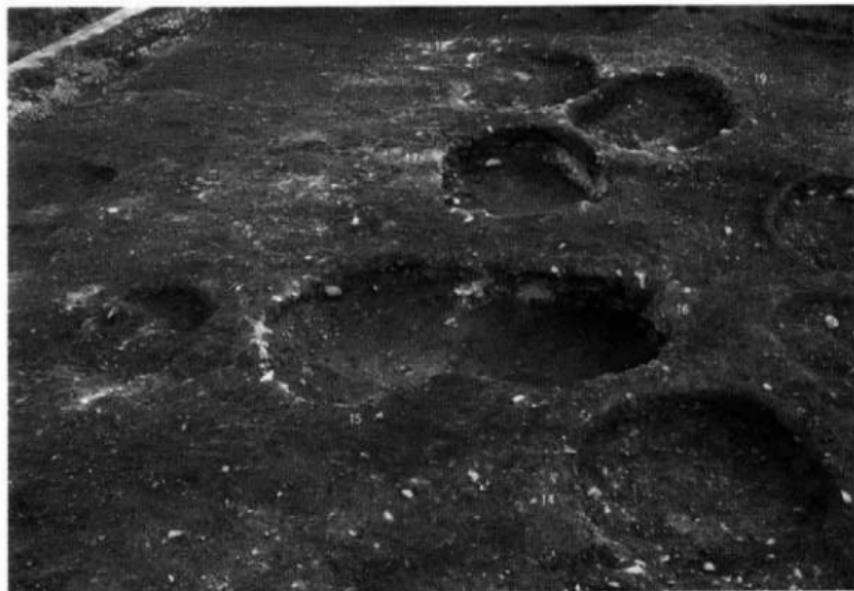
1 5号貯藏穴（南西から）



2 6号貯藏穴（南西から）

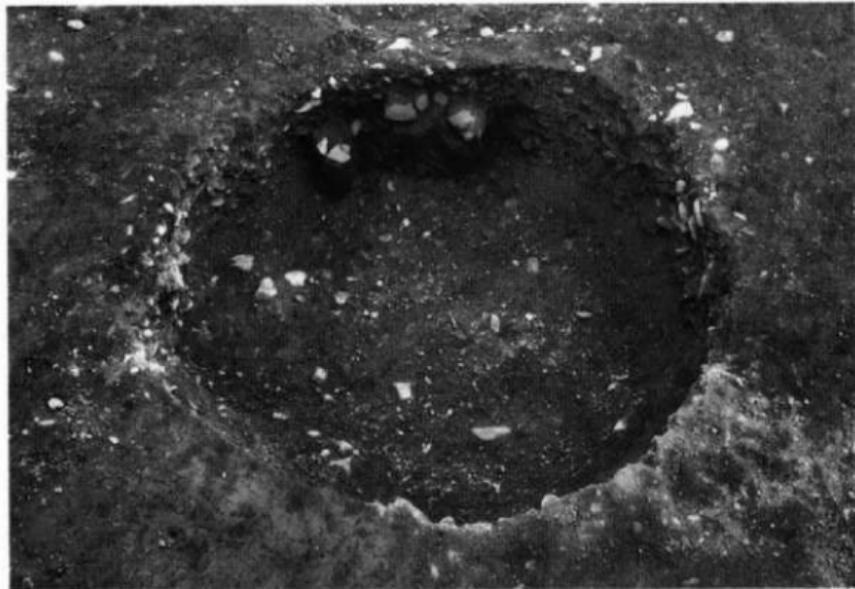


1 8~24号貯蔵穴群全貌（北から）

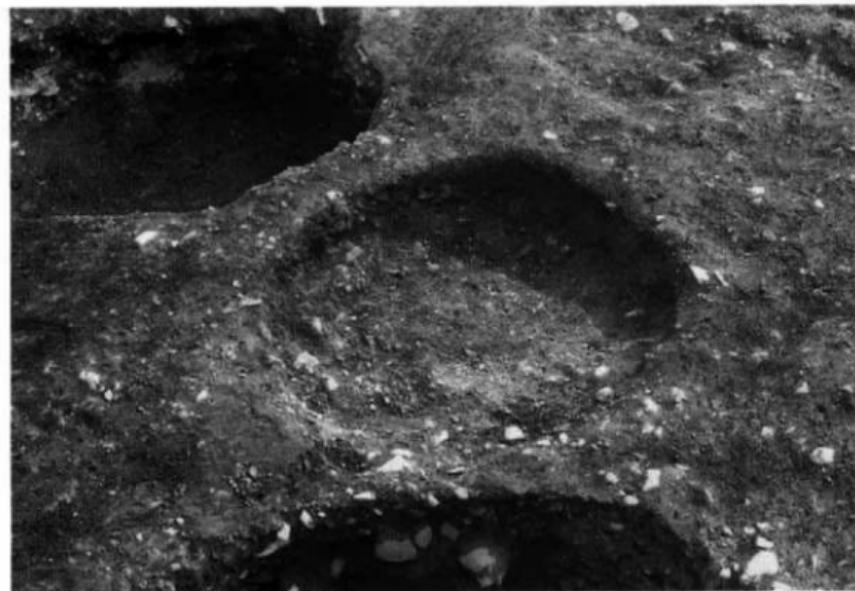


2 13~20号貯蔵穴群（北から）

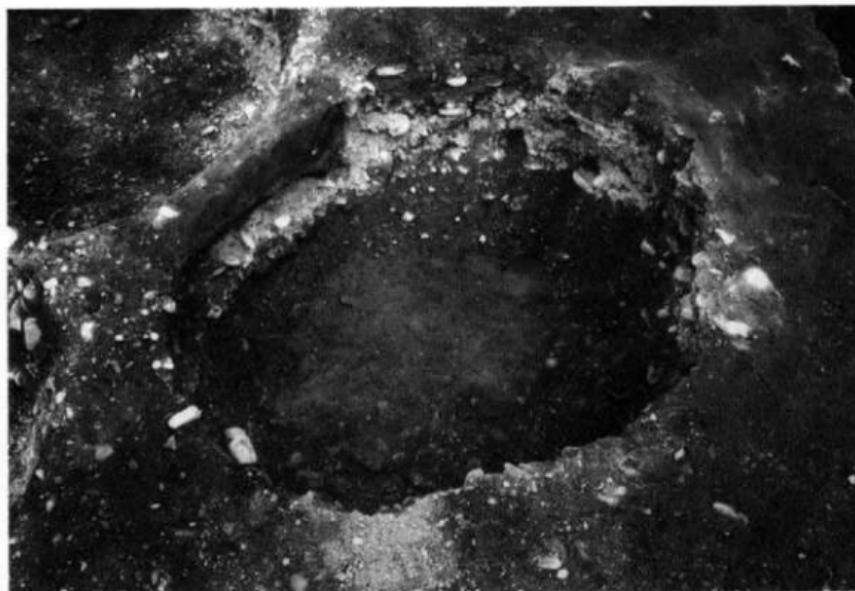
図版 6



1 13号貯蔵穴（北から）



2 14号貯蔵穴（北から）

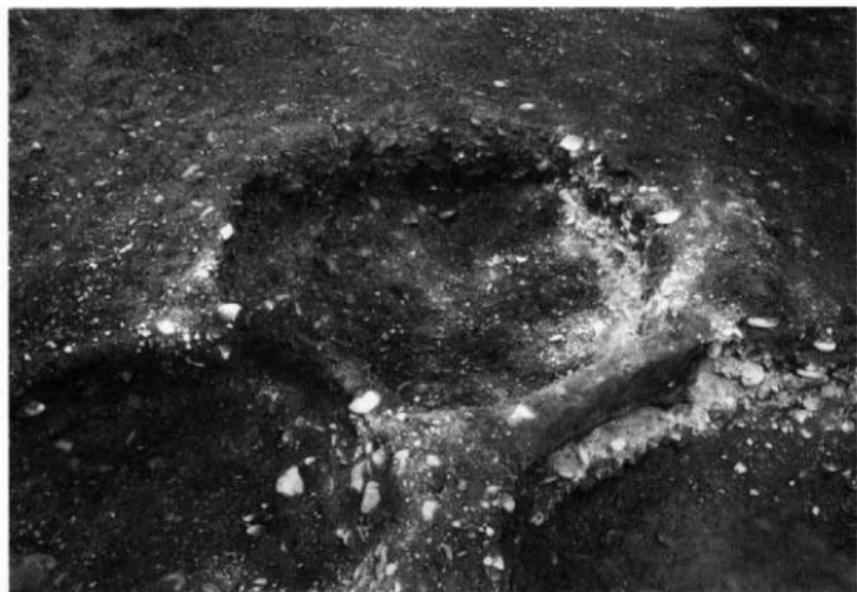


1 17号貯蔵穴（東から）



2 14~20号貯蔵穴群（北から）

図版 8



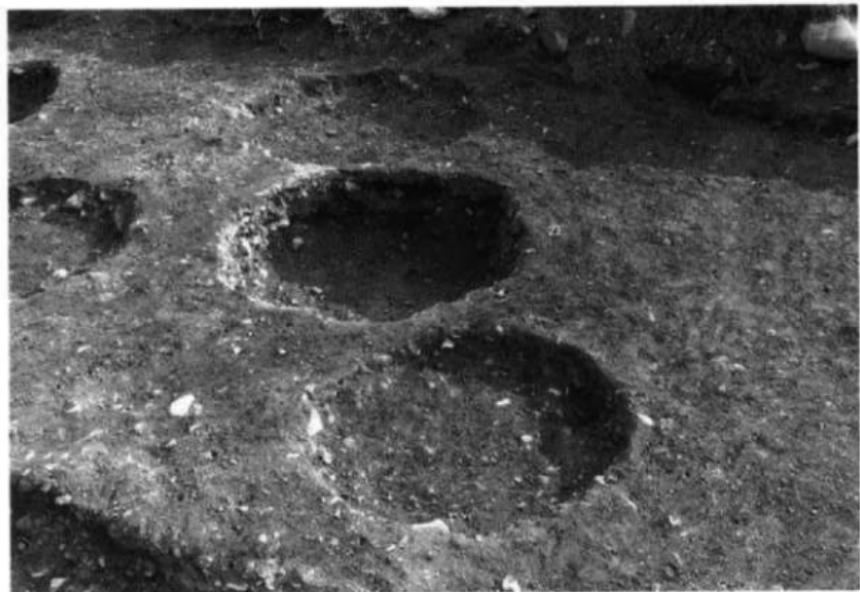
1 19号貯藏穴（東から）



2 20-24号貯藏穴群（北東から）

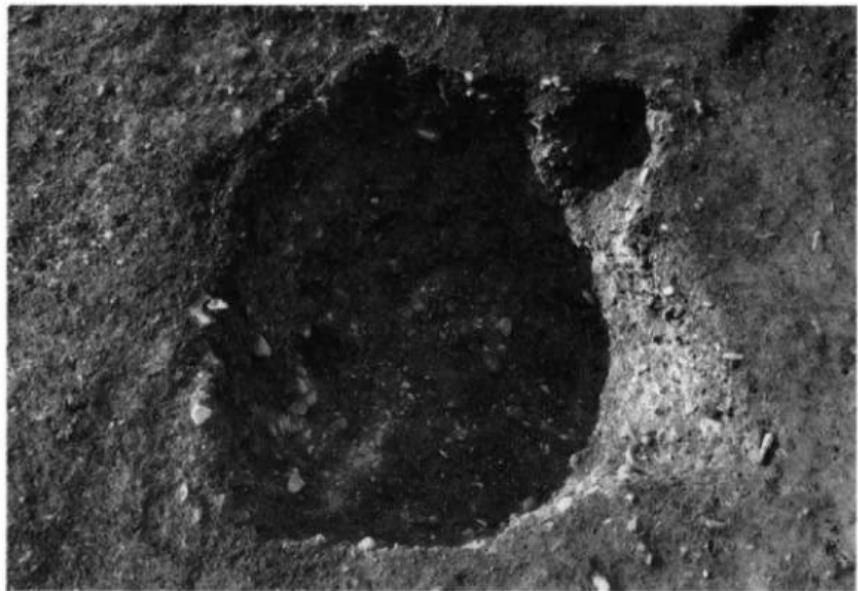


1 21号貯蔵穴（西から）

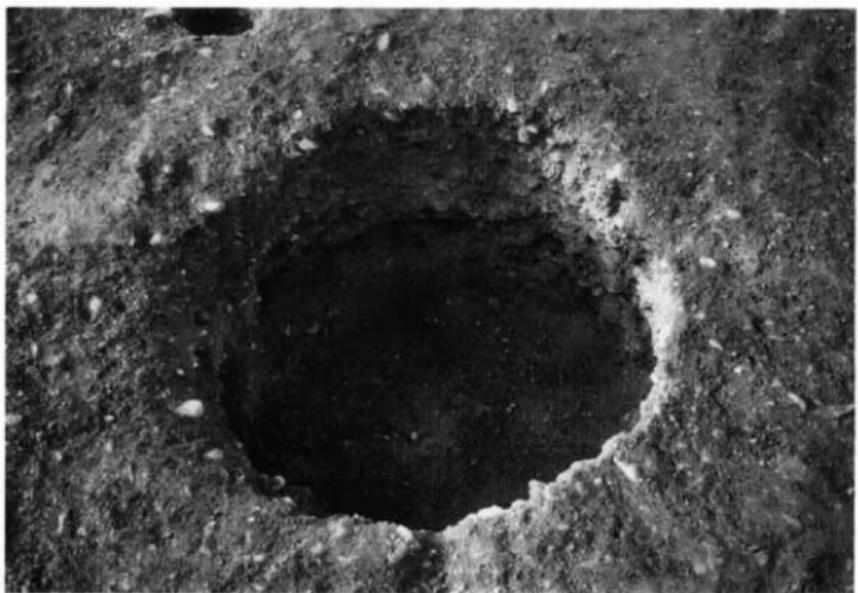


2 22~24号貯蔵穴群（北から）

図版 10



1 26号貯藏穴（北から）



2 27号貯藏穴（北から）

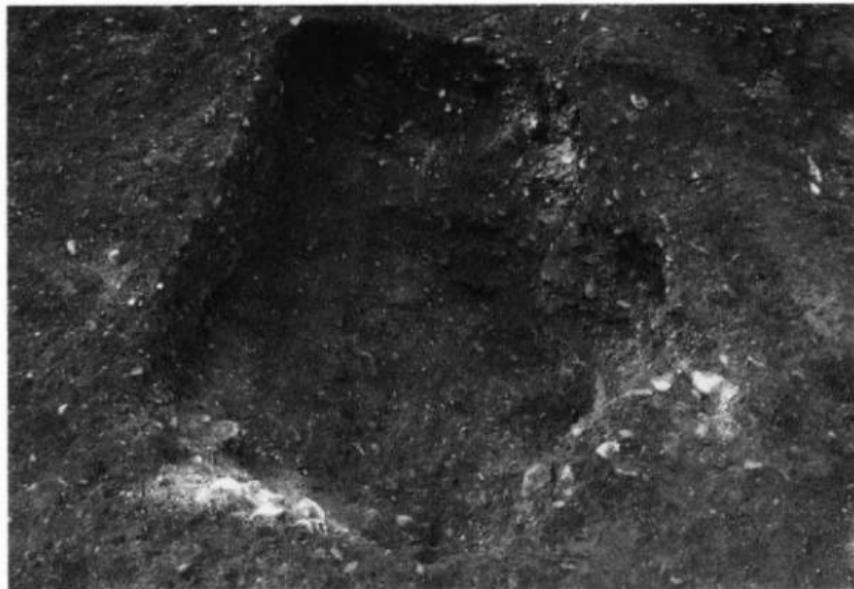


1 28号貯蔵穴（南東から）

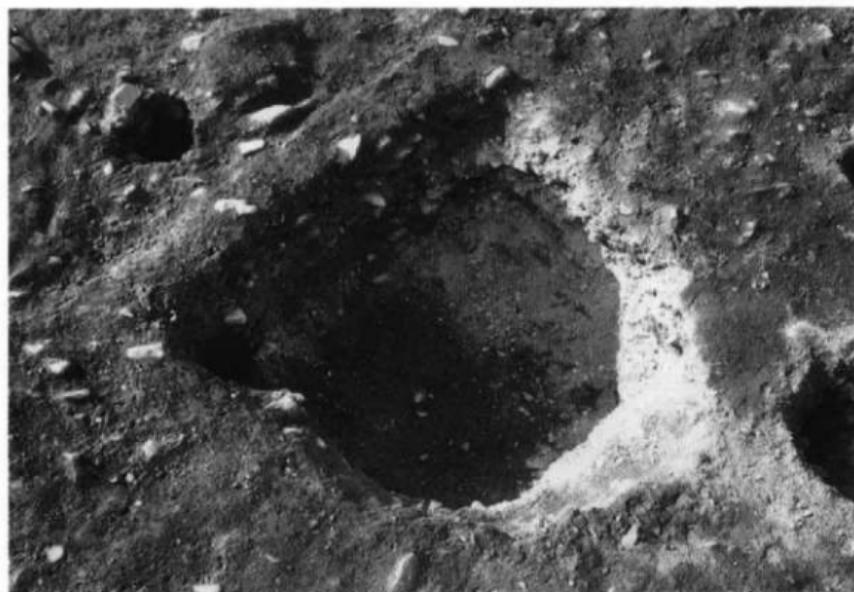


2 28号貯蔵穴内土器出土状態（北から）

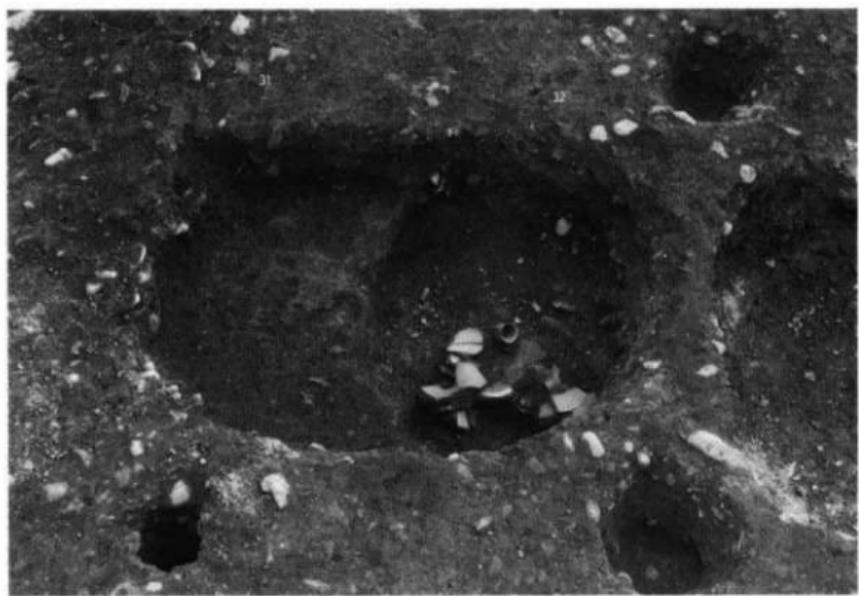
図版 12



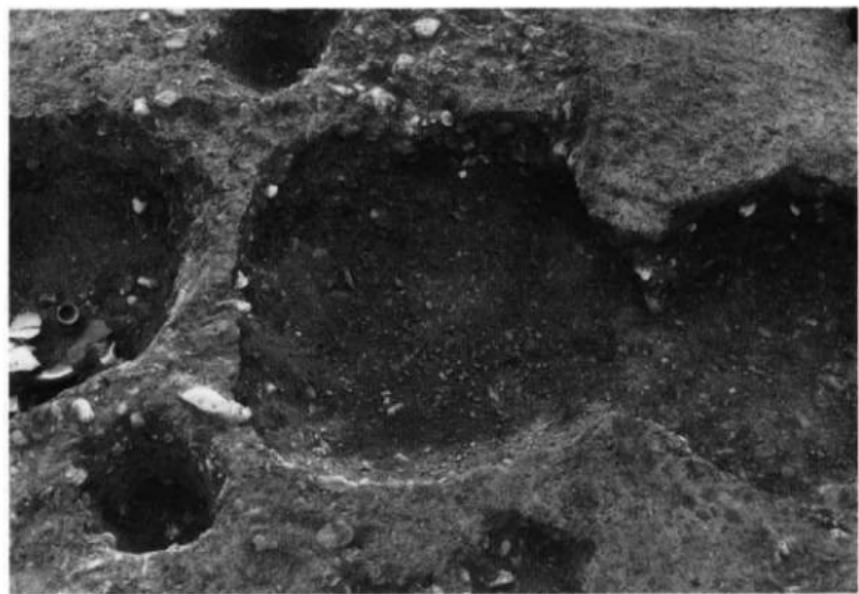
1 29号貯蔵穴（北から）



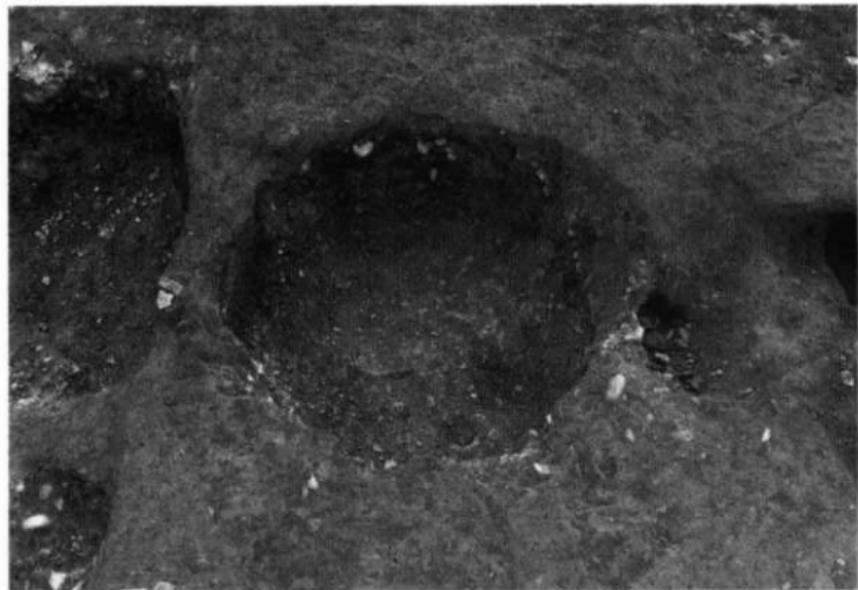
2 30号貯蔵穴（南から）



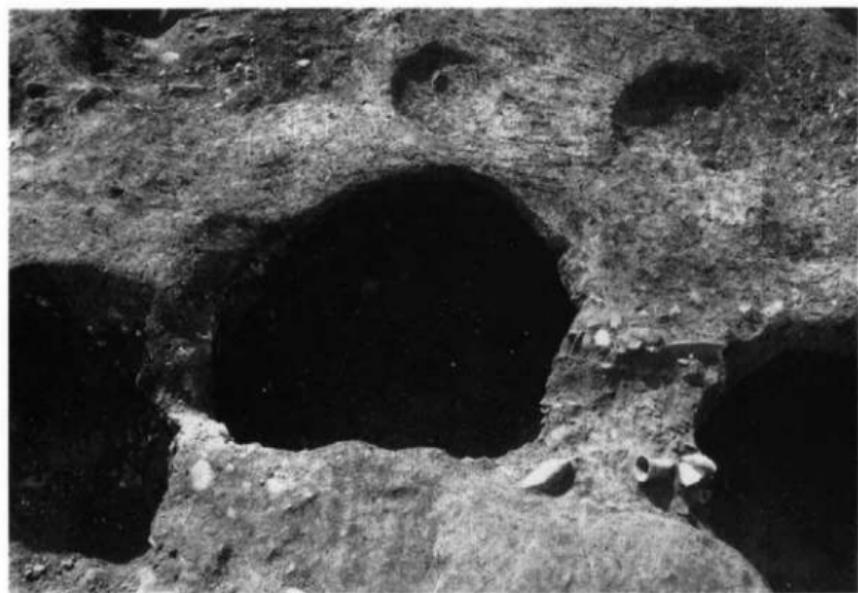
1 31・32号貯蔵穴（北から）



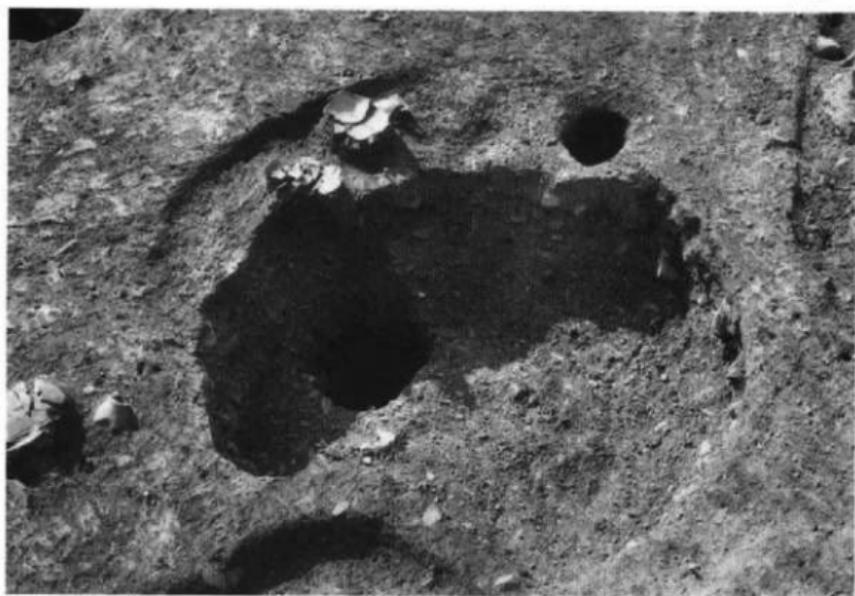
2 33号貯蔵穴（北から）



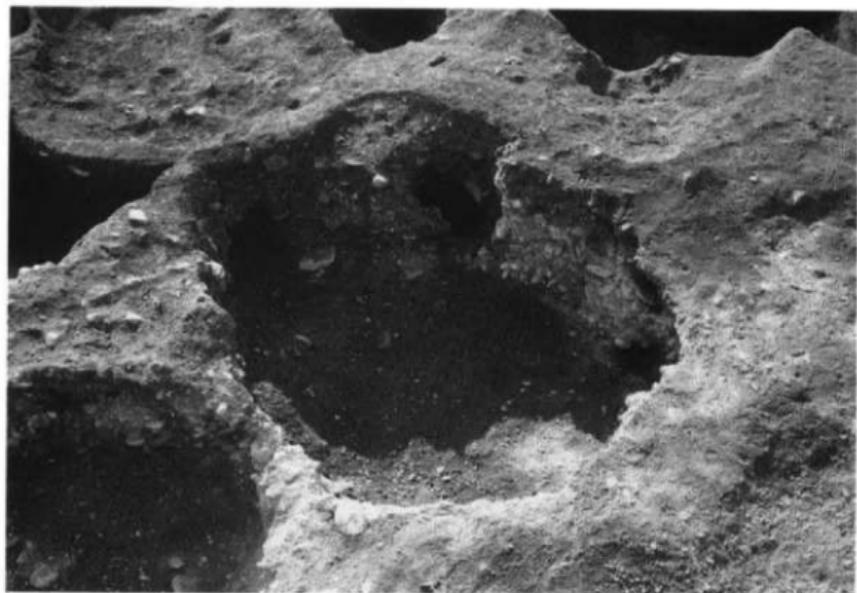
1 35号貯藏穴（南から）



2 36号貯藏穴（北から）



1 37号防藏穴（東から）

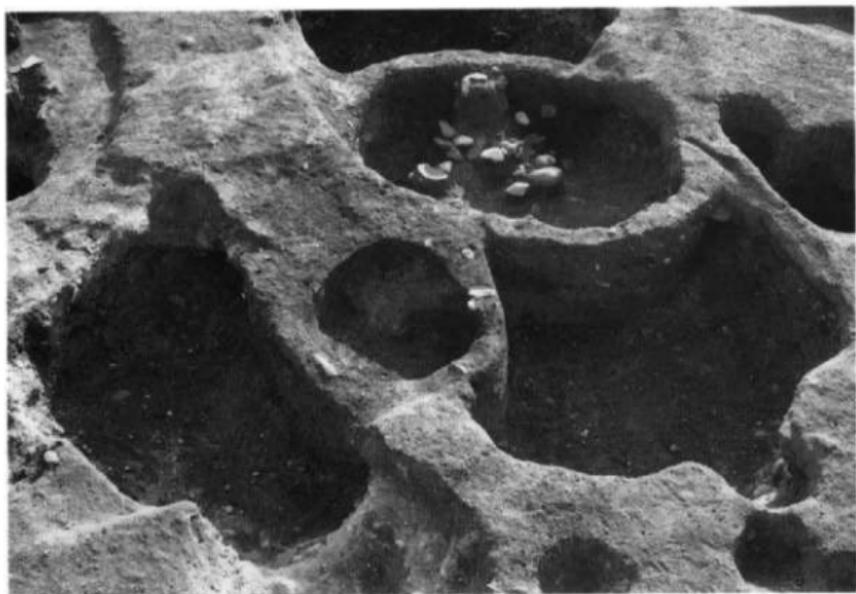


2 40号防藏穴（北東から）

図版 16



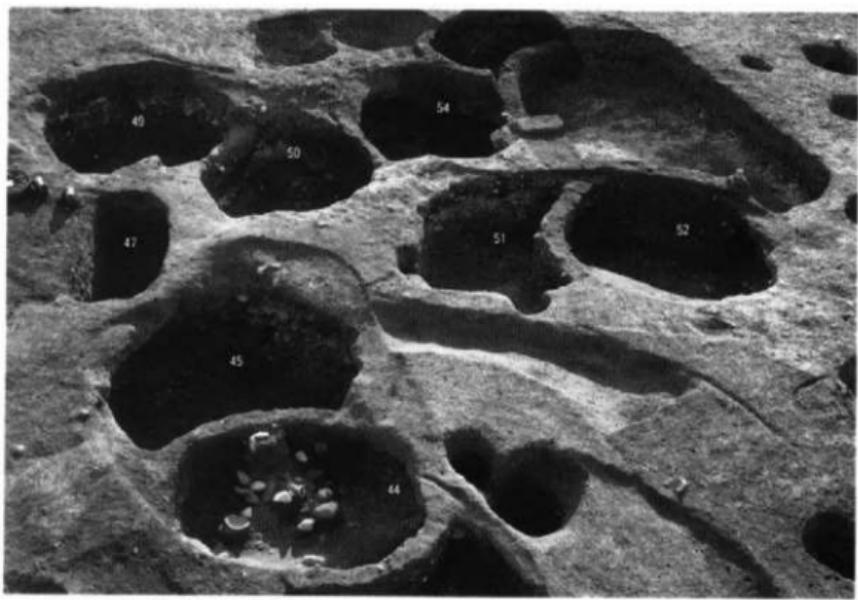
1 42~55号貯蔵穴群（北東から）



2 42~44号貯蔵穴群（北から）

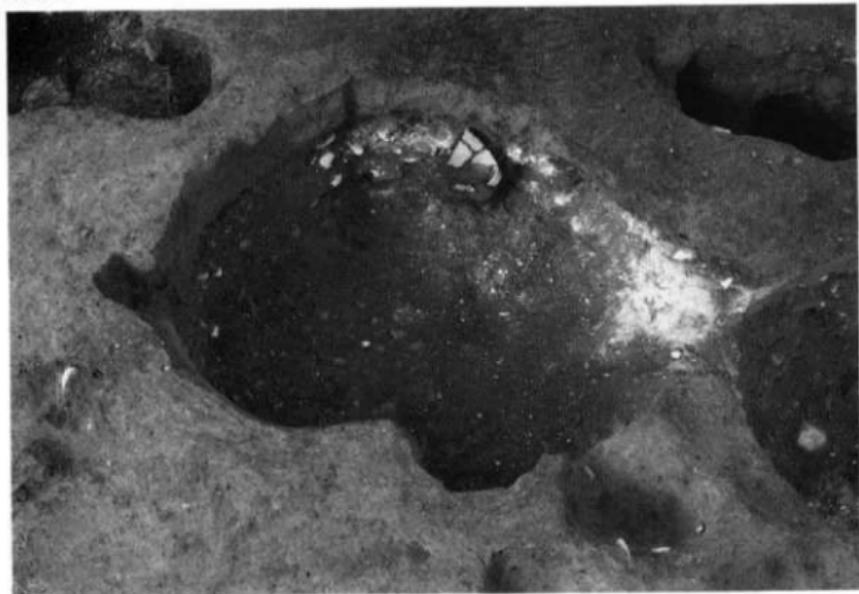


1 44号貯藏穴（北東から）



2 44-55号貯藏穴群（北東から）

図版 18



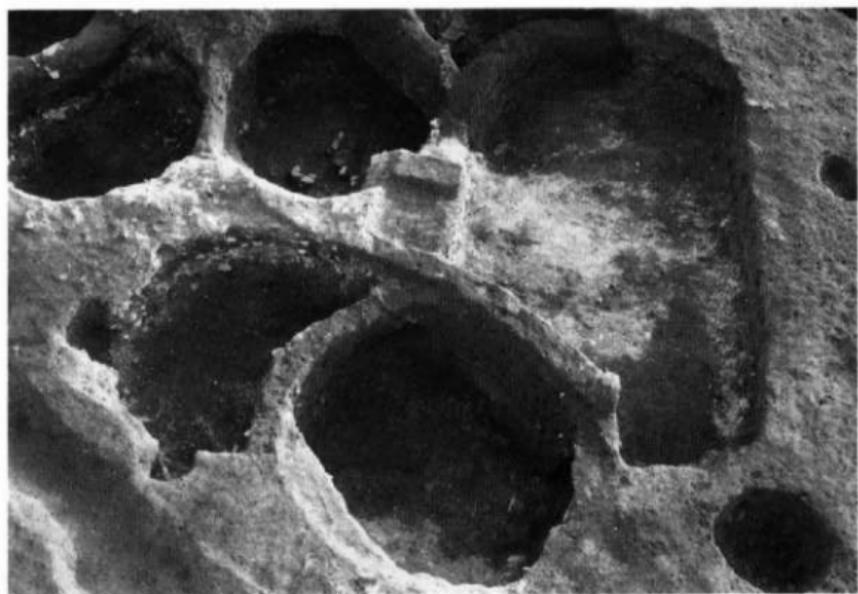
1 46号貯藏穴（東から）



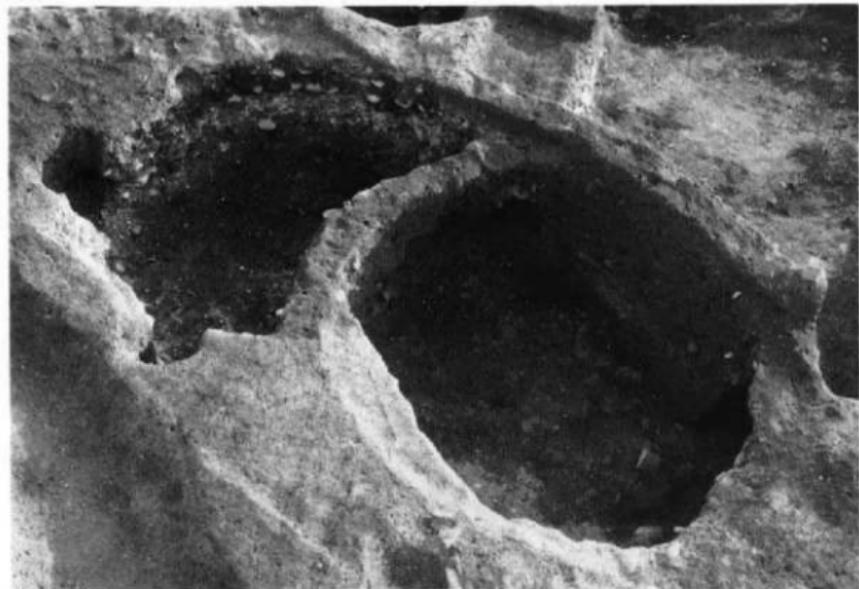
2 47号貯藏穴（東から）



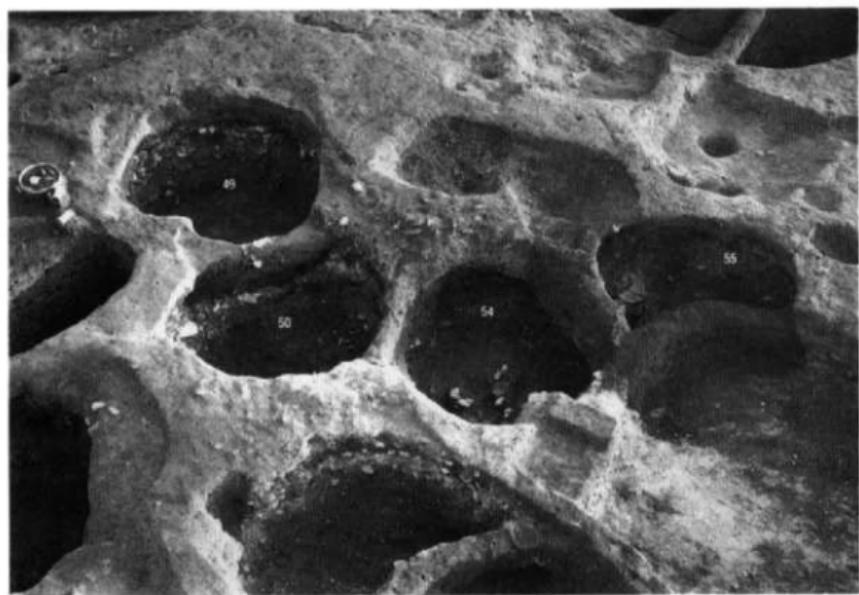
1 49・50号貯蔵穴（北東から）



2 51・52・54号貯蔵穴群（北東から）



1 51・52号貯藏穴（北から）



2 49~51・54・55号貯藏穴群（北から）

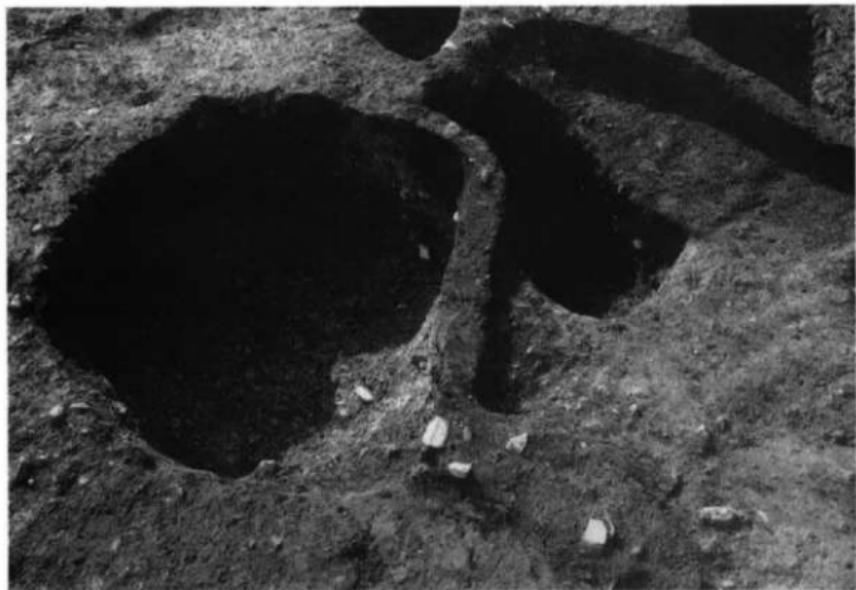


1 54号貯蔵穴（北から）

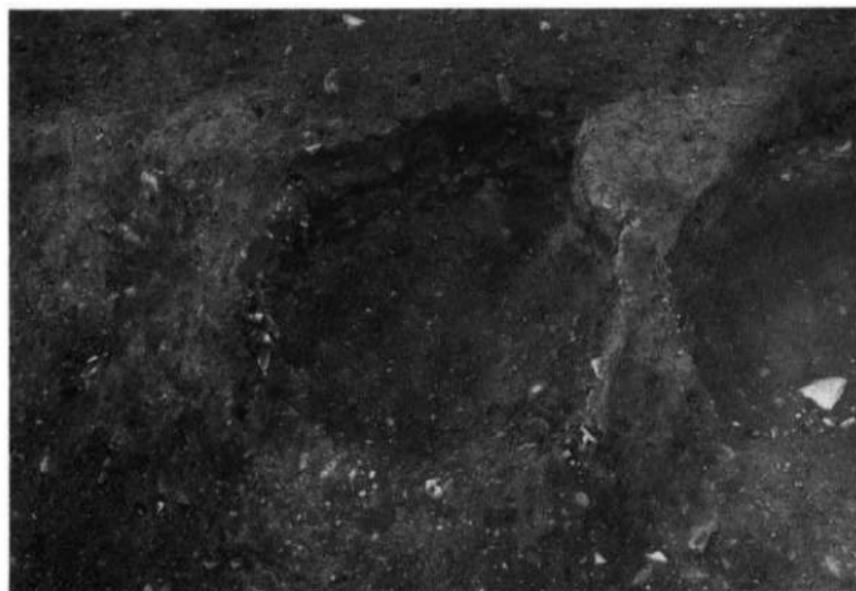


2 50—57号貯蔵穴群（北から）

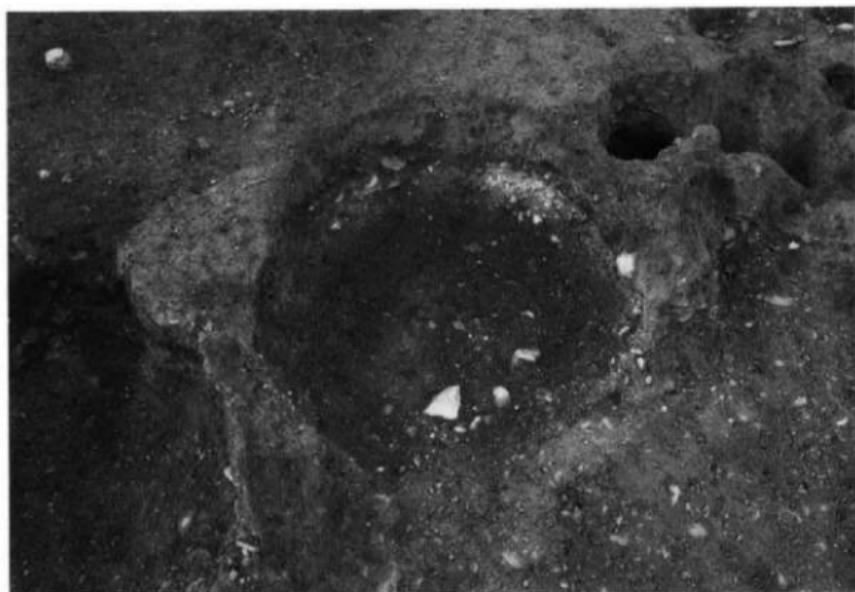
図版 22



1 56・57号貯藏穴（北東から）



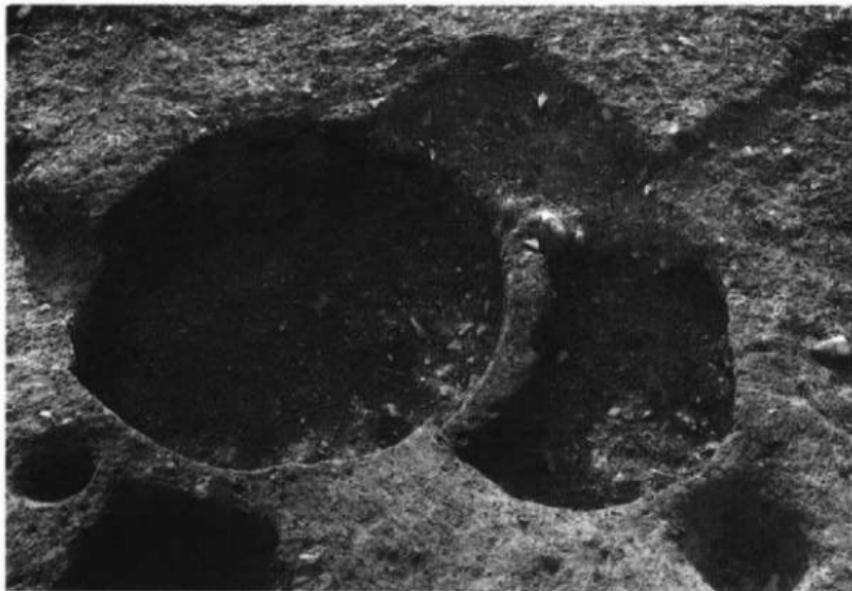
2 62号貯藏穴（東から）



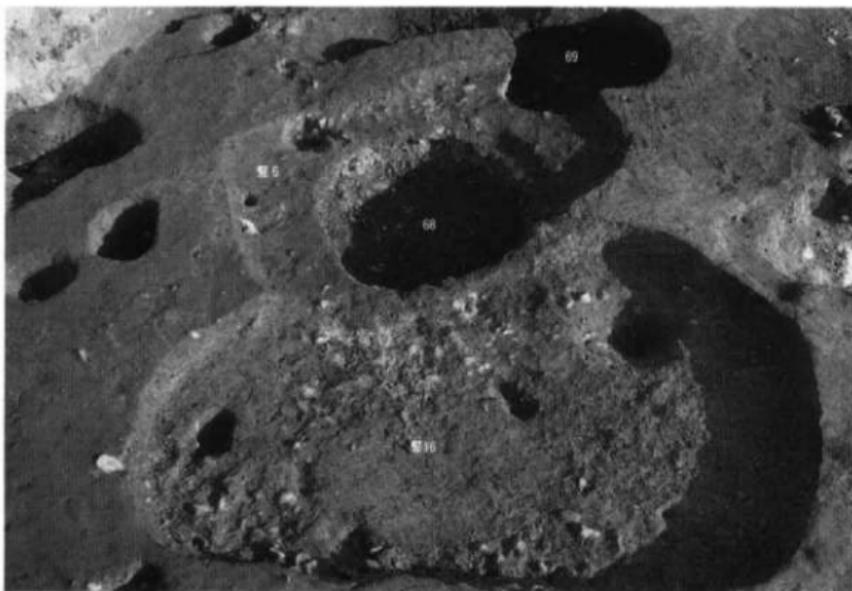
1 63号貯藏穴（東から）



2 65号貯藏穴（北から）



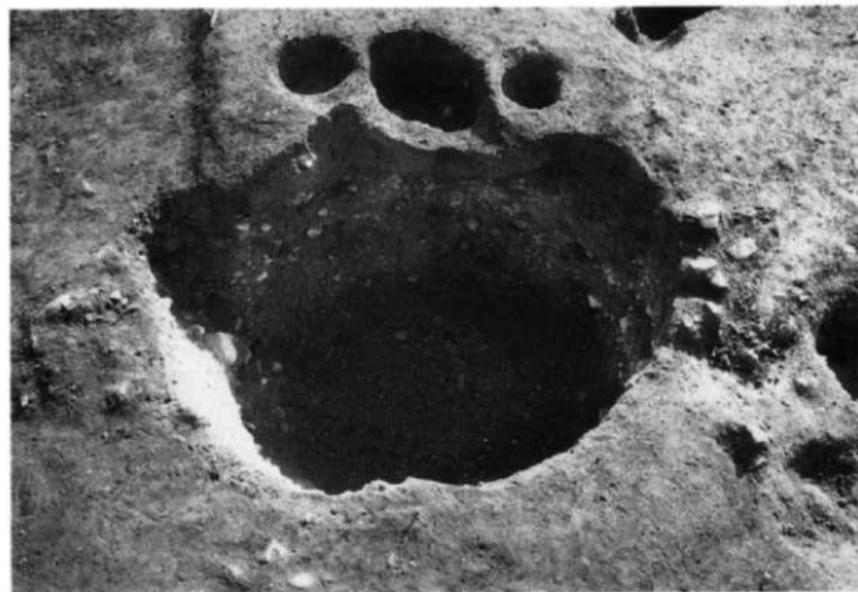
1 66・67号貯藏穴（東から）



2 68・69号貯藏穴と6・16号竪穴（西から）



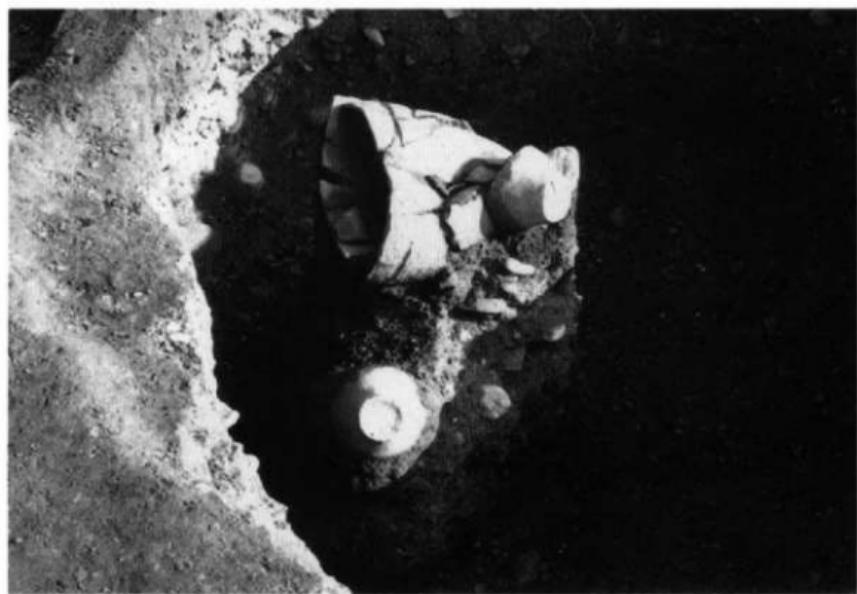
1 70号貯蔵穴（北から）



2 71号貯蔵穴（北から）



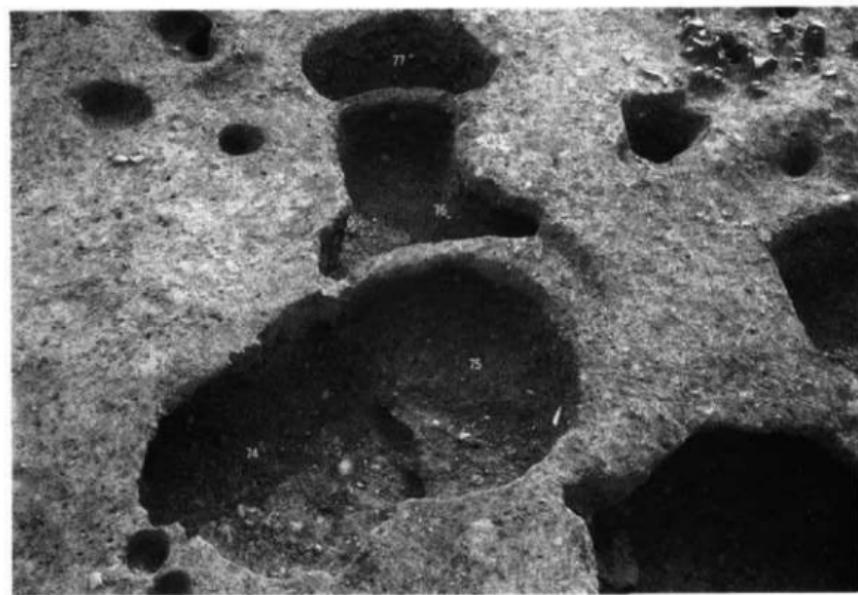
1 72号貯藏穴（北東から）



2 72号貯藏穴内土器出土状態（西から）

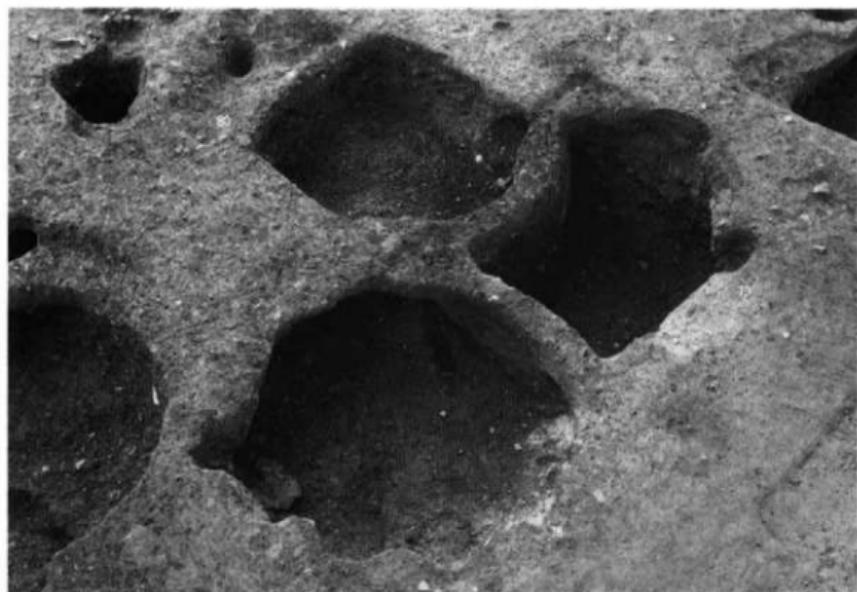


1 73号貯蔵穴（北から）

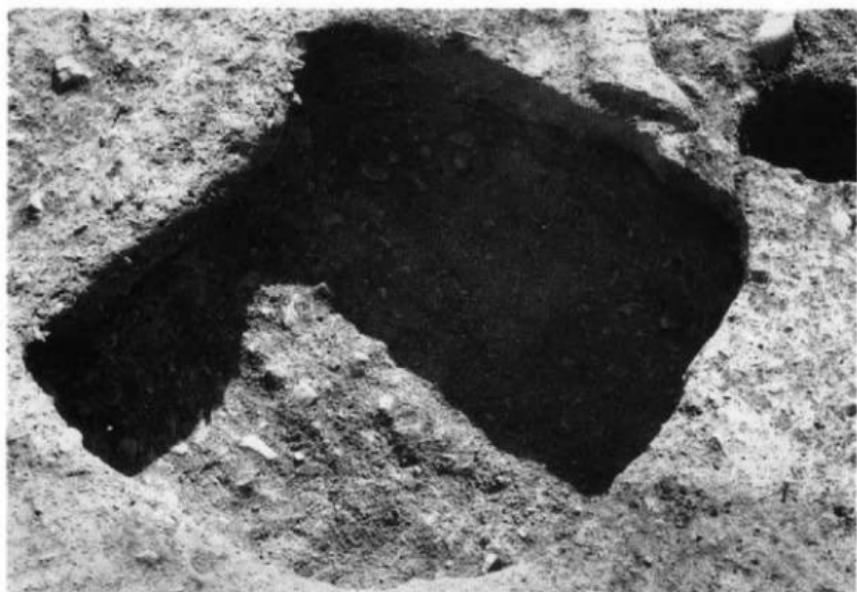


2 74-77号貯蔵穴群（北から）

図版 28



1 78~80号貯蔵穴群（北東から）



2 81号貯蔵穴（北東から）



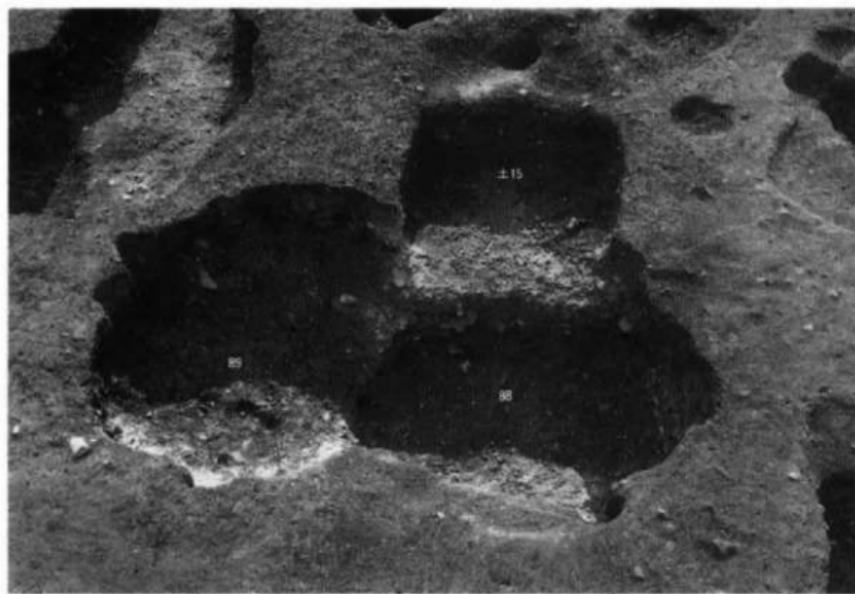
1 84号貯蔵穴（東から）



2 84号貯蔵穴内土器出土状態（北から）



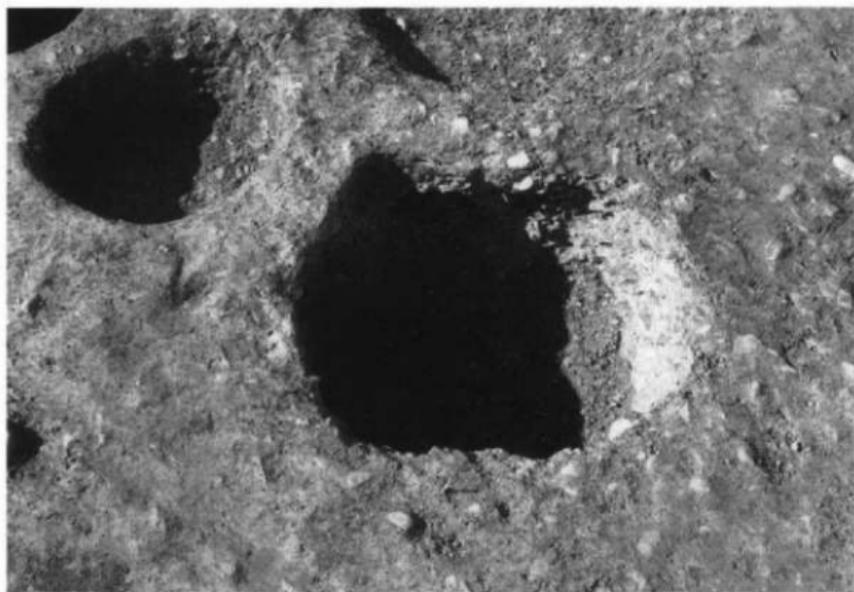
1 85号貯蔵穴（北西から）



2 88, 89号貯蔵穴・15号土壙（南から）

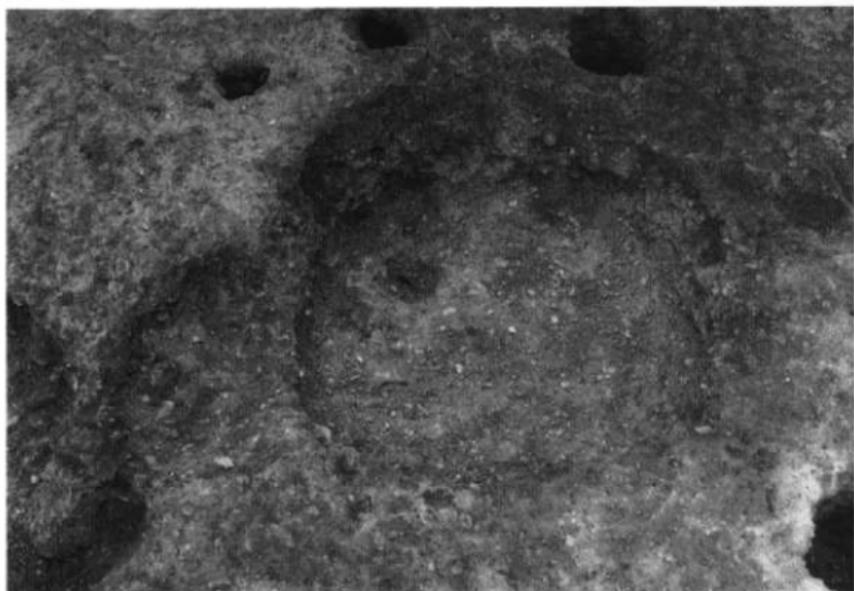


1 90号貯蔵穴（東から）



2 91号貯蔵穴（東から）

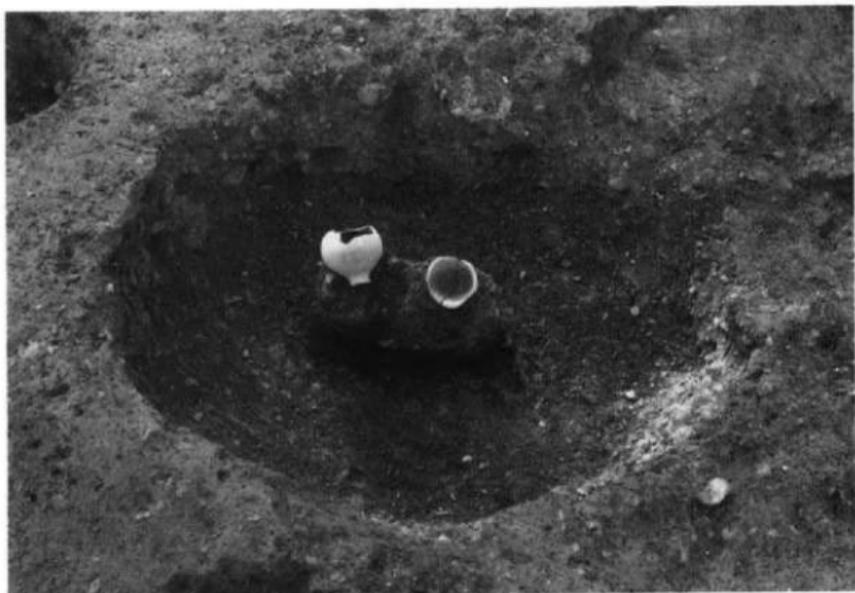
図版 32



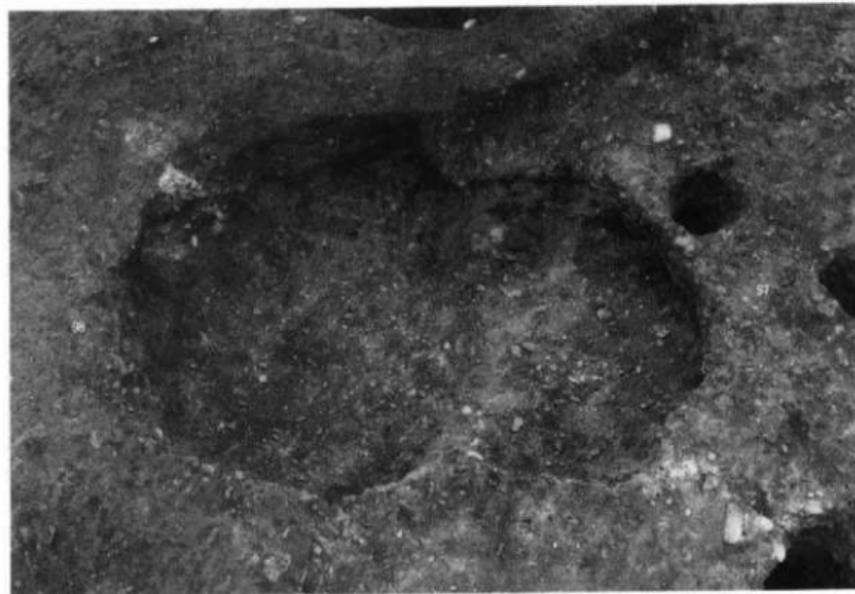
1 93号貯藏穴（東から）



2 94・95号貯藏穴（北から）



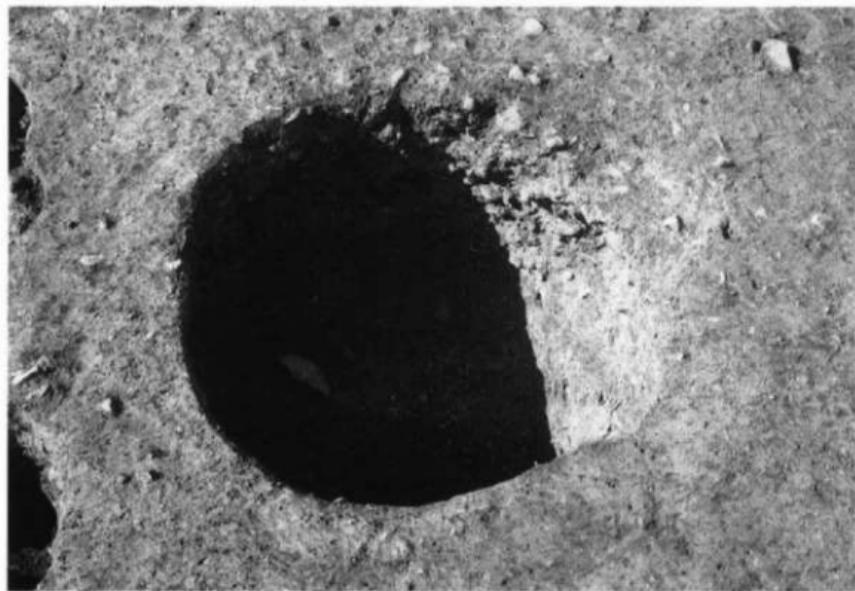
1 96号貯蔵穴（北から）



2 97・98号貯蔵穴（北から）



1 99号貯蔵穴（北から）



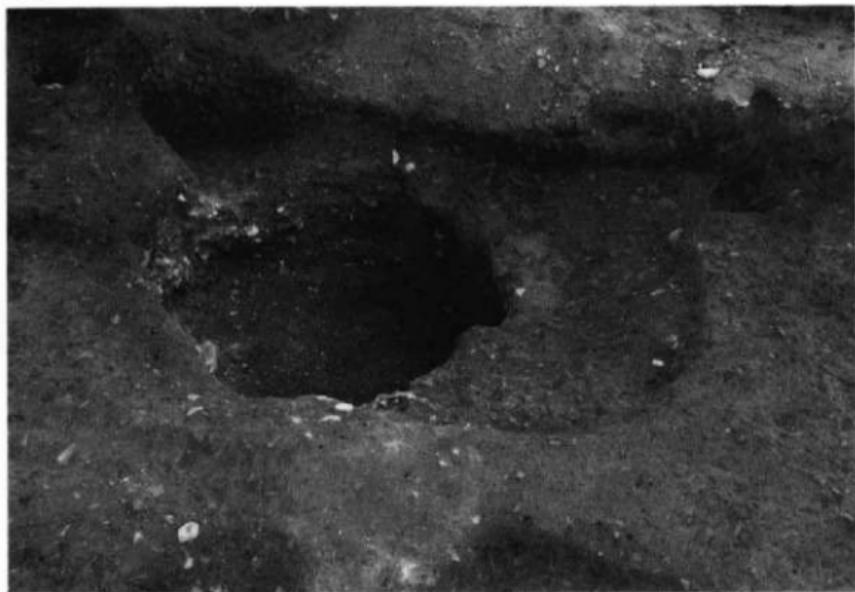
2 100号貯蔵穴（東から）



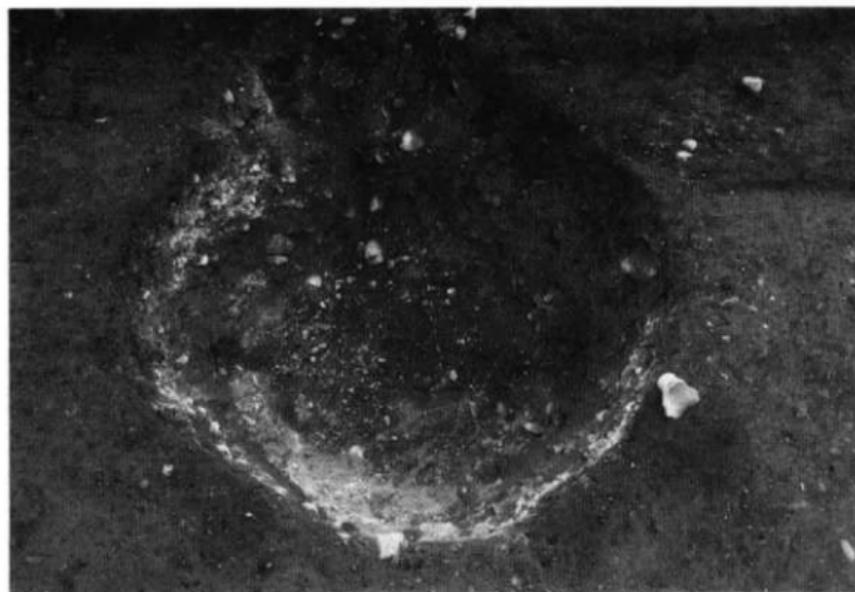
1 101~104号貯蔵穴群（東から）



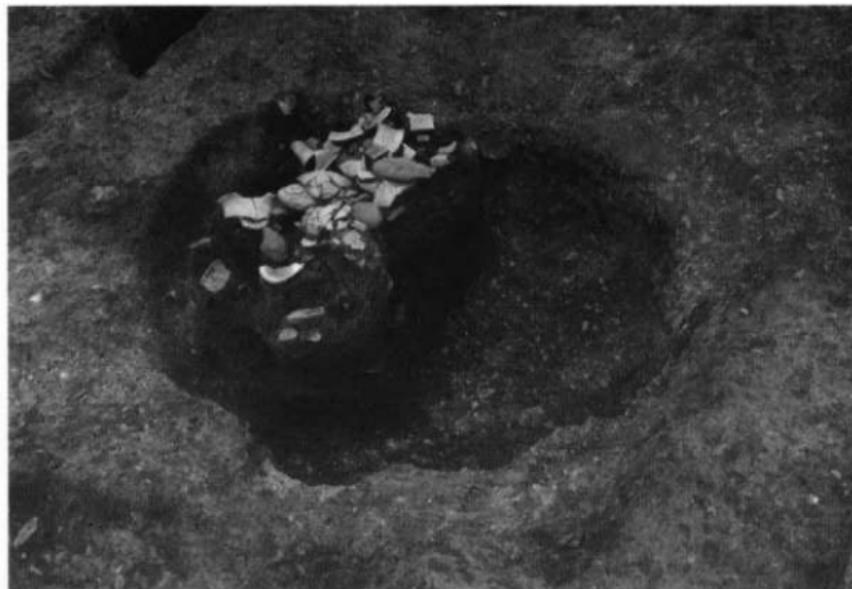
2 101号貯蔵穴（南から）



1 106号貯藏穴（北東から）



2 107号貯藏穴（北東から）



1 108号貯藏穴（北から）



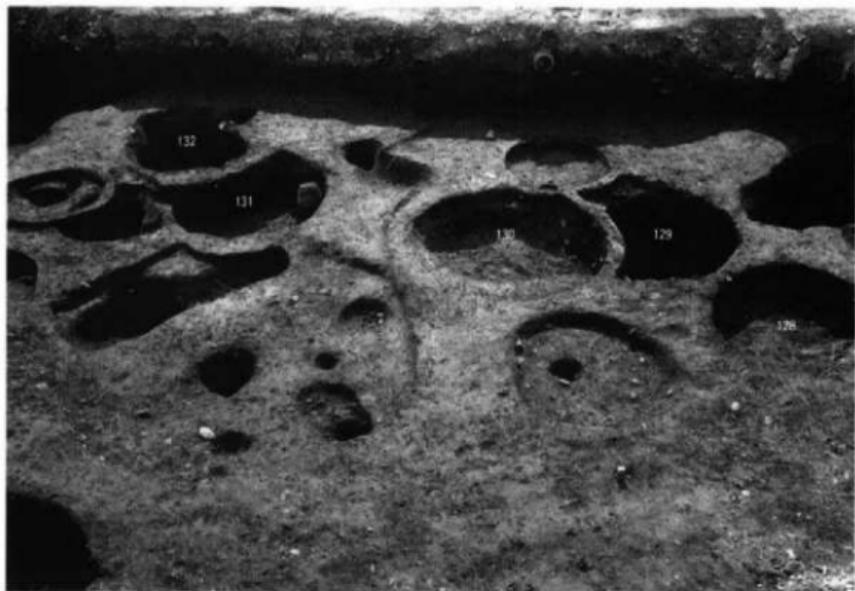
2 113号貯藏穴（北から）



110～133号貯蔵穴群全景（北西から）



1 123～125号貯藏穴群と190号住居跡（東から）



2 128～132号貯藏穴群（北東から）



1 138号貯藏穴（南から）



2 139号貯藏穴（北から）



13



14



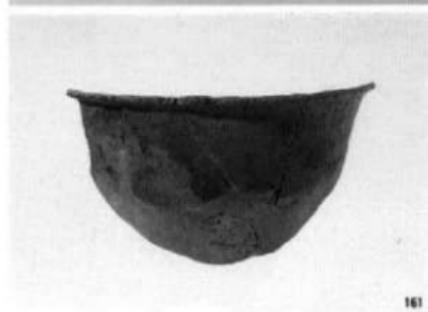
15



50



87



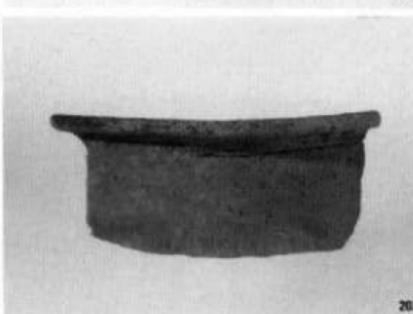
161



163



176



203



327



350



351



372



440



450



457



461



462



471



472



504



505



509



510



530



556



567



557



568



558



569



559



622



623



644



633



665



634



669



642



685

图版 46



686



703



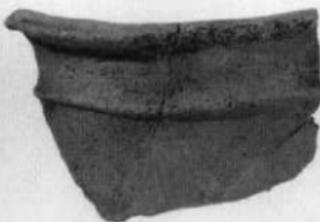
687



704



688



709



736



740



741



817



771



825



779



831



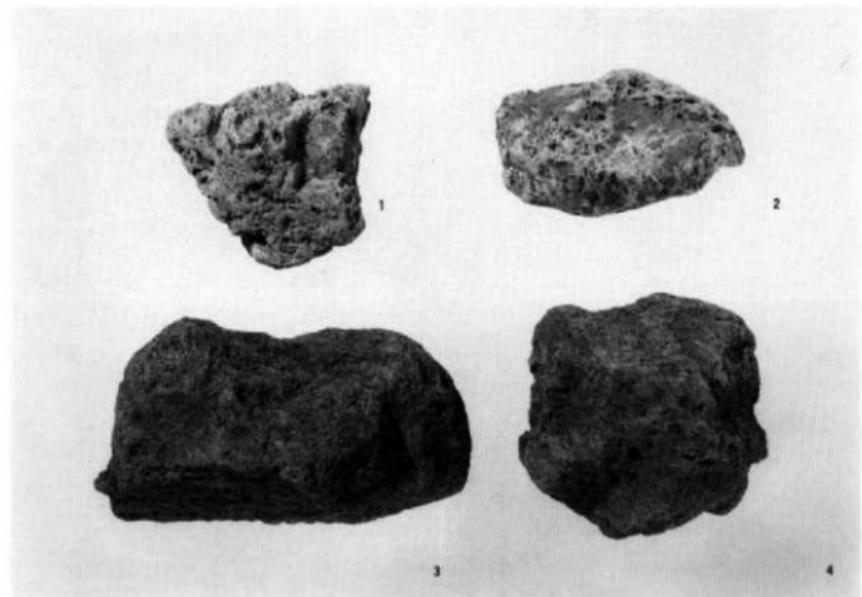
798



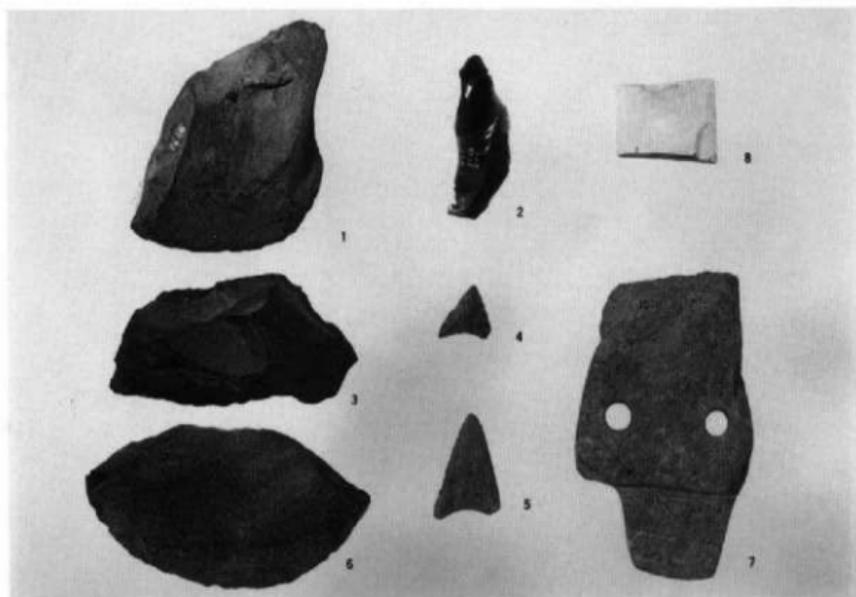
832



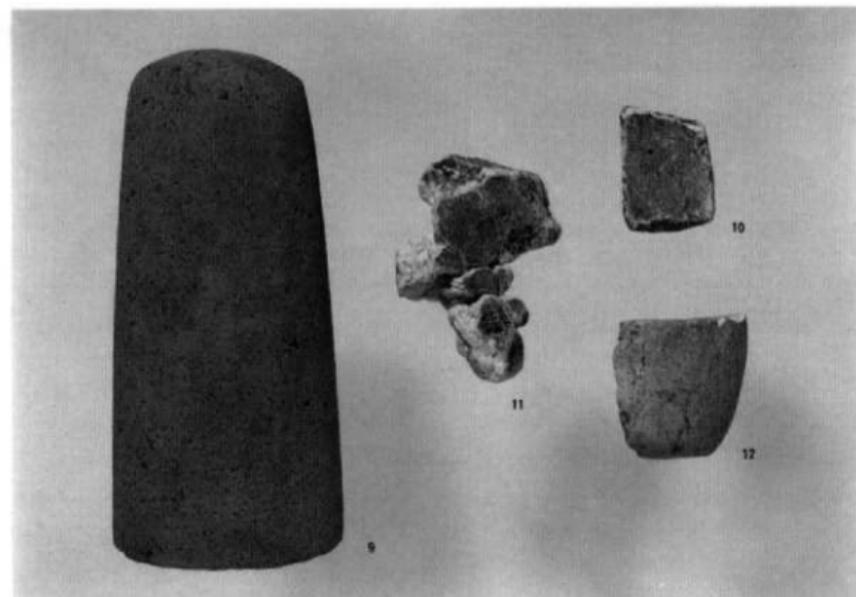
1 贯藏穴出土土器(8)



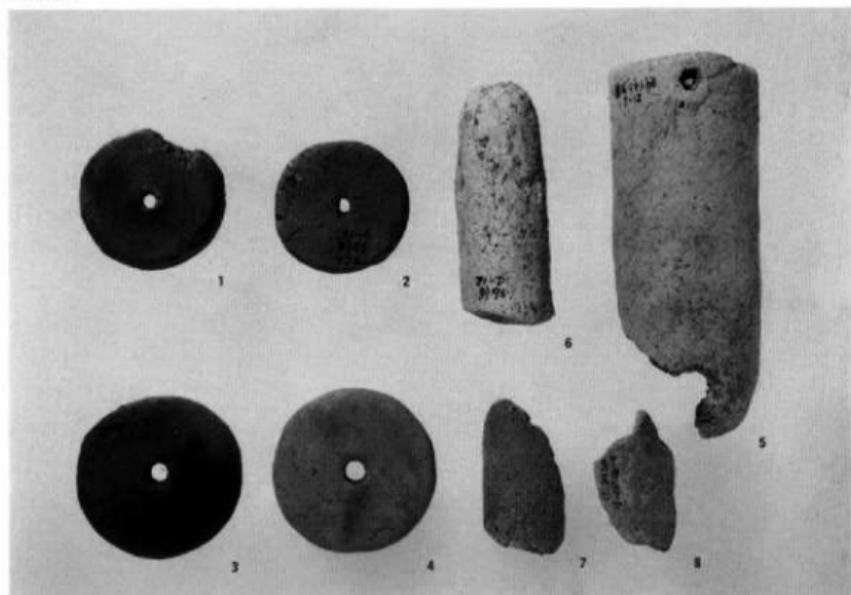
2 贯藏穴出土燧石



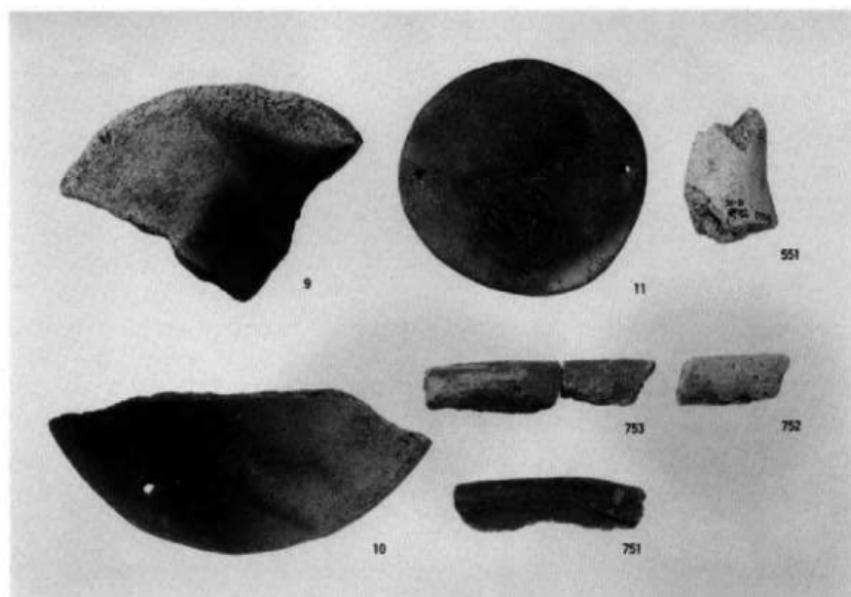
1 周口店出土石器(1)



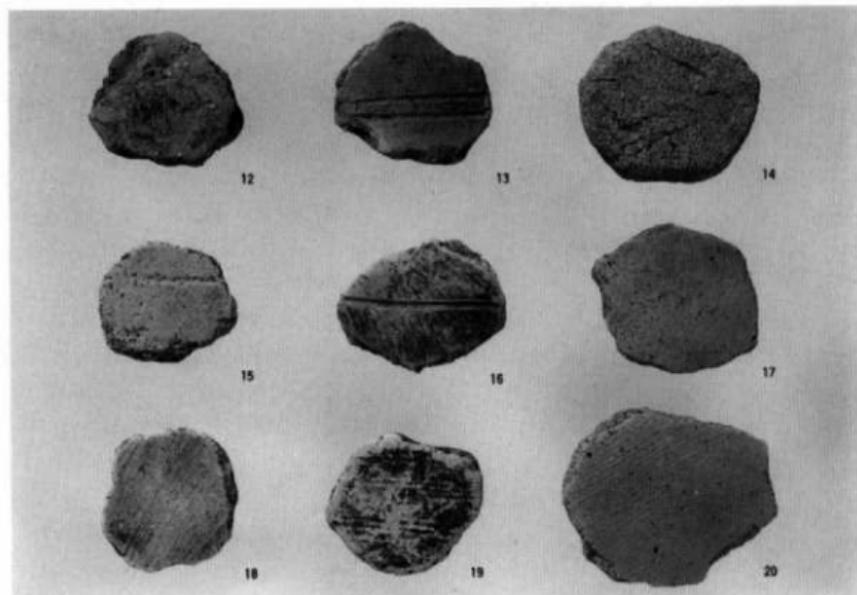
2 周口店出土石器(2)



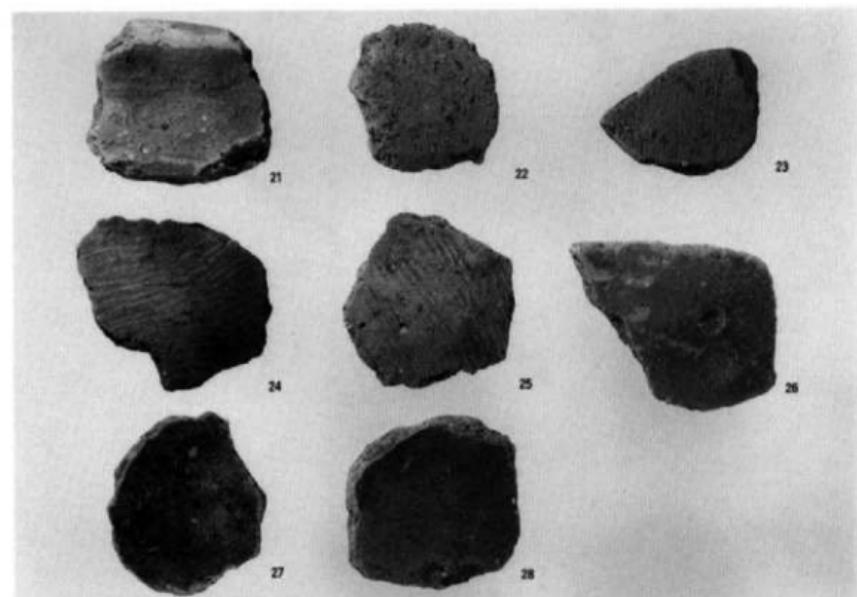
1 貯藏穴出土土製品(1)



2 貯藏穴出土土器(2)

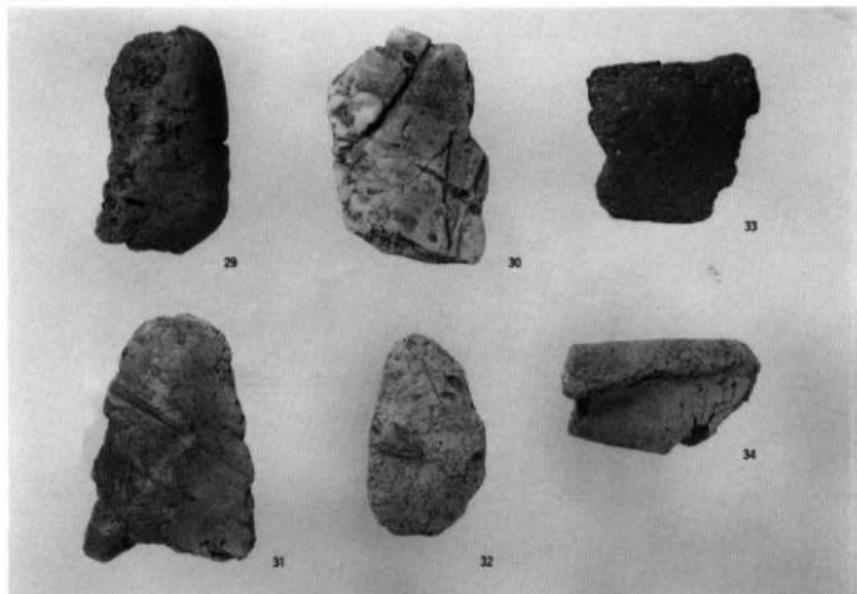


1 貯藏穴出土土製品(2)

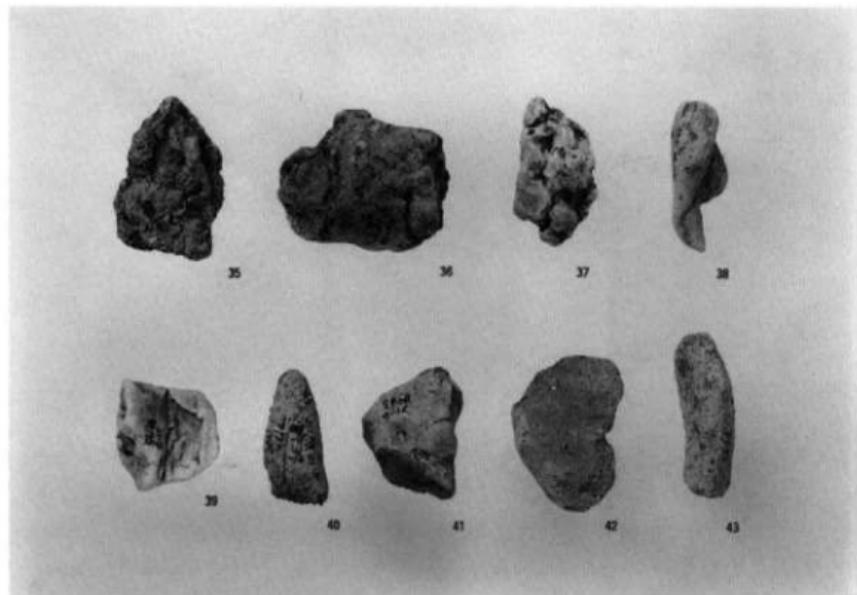


2 貯藏穴出土土製品(3)

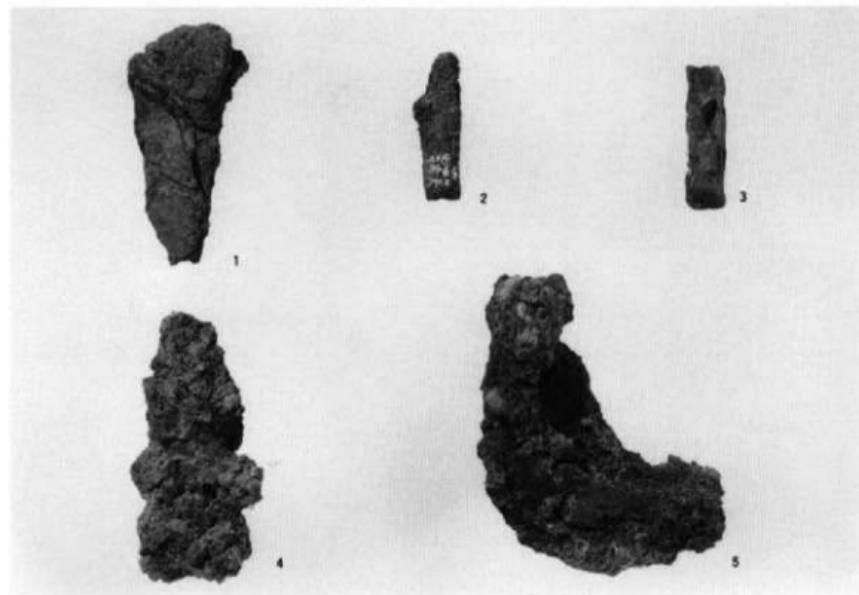
圖版 52



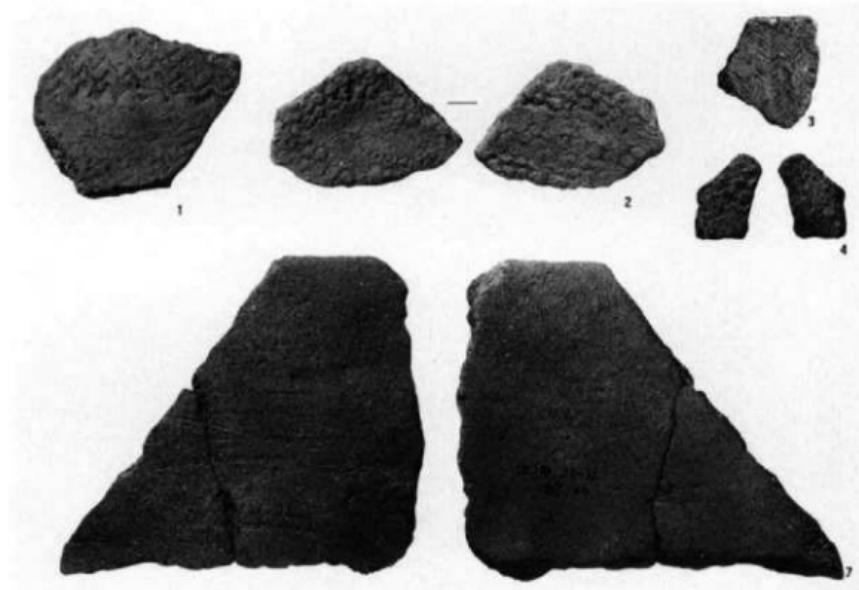
1 貯藏穴出土土製品(4)



2 貯藏穴出土土製品(5)



1 烧成穴出土铁器



2 横文土器

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2133051
登録年度 2	登録番号 6

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—18—

平成2年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 正光印刷株式会社

福岡市西区船橋寺3丁目28-1

**九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告書**

— 18 —

付 図

1 9 9 0

福岡県教育委員会

